

マイ・フェア・ソード  
ド！

鳩と飲むコーラ

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

見知らぬ土地で目覚めた男は、自分の傍で泣きじやくる剣という意味不明の存在と出会おう。

しかも喋りだしたそいつは、かつて男が使っていた武器だと語る。

さらに若返っているうえに、生きていた時代から五百年の時が流れた未来であると言われ――

未来で目覚めた男と、過去から現在まで主を求め続けた親愛なる剣が紡ぐ物語、ここに開幕！

7 / 17 あらすじ変更しました

8 / 26

一章、改稿しました。

# 目次

## 第一章

10.	原因は	170
152	9. 理に潜む理 (フアントム)	
8.	樽と三角巾にうろたえる	129
7.	隠し部屋	113
6.	技術流用	102
5.	今昔ツギハギ話	77
4.	遅れた自己紹介	59
3.	丸出し	46
2.	未来の宿から	15
1.	何だこの剣	1

362	21.	スピリット・カウンター	
	20.	その力は誰が為に	346
	19.	きな臭い話	335
	18.	ダルメンの秘密	320
	17.	技術の扱い	303
	16.	折れた理由	283
	15.	町長への挨拶	268
	14.	その後の一幕	254
	13.	尋問	236
	えてく		204
	12.	ナツキとの特訓くダルメンを添	
	11.	ナツキとの特訓	189

22. これからの目的 ————— 392

## 第二章

23. 美人さん ————— 399

24. 意外と乙女なアーリイ ————— 412

25. ナツキとの特訓く上手な剣の付

き合い方 ————— 421

26. 欠片文字（ピース・サイン）

444

27. 訪れた男 ————— 458

28. ツギハギ少女の異変 ————— 477

29. 月下双刃 ————— 489





目の前にあったのは、柄から何か液体を滴らせる……剣？ だったのだ。

剣の影が顔に差し、傾くようになっていてのを見ると横になった俺の頭上の地面に刺さっているのだろう。

聞き違えがなければ声は目の前の剣から発され、柄やら鐔やら色んな場所から滴る涙？ のようなものを俺に垂らしているという異様すぎる光景である。

おかしい。

俺は涙月《るいげつ》との決戦に赴くべく動いていたはずだ。

月から溢れた涙が大地に落ちたその時、世界を混乱に陥れた涙月と呼ばれた災厄。俺はその一大決戦に参加していただったはずだ。

決してこんな草の上という、自然のある環境で寝ているべきではない。

いや、戦いはどうなった？

仮に俺が涙月に倒されたとしても、こんな空気の穏やかな場所なんて涙月に侵された大地にあったか……？

「どうなったんだ……」

現状を把握出来ず、そうつぶやく他ない。

しかもよくよく聞いてみれば、自分の声にしては少し音が高い気がする。

まるで故郷を出た頃の、十代の少年時代に戻ったような……



わからない。どうしてこんなことになっていいのか、まるでわからない。

(なんだこれ……なんだこれ……どうするこれ……どうしようこれ……)

頭が現状を認めない。認めたくないのか、何の行動を起こすこともなく俺は剣からの落涙を受け続ける。

無視することは俺の顔面体その他もろもろへの被害拡大に繋がる。ややあつて意を決し、目の前の剣に話しかけた。

「えーつと、もしもしっ！」

状況がさっぱり理解出来ないものの、当然の行動として目の前の剣に話しかける。返事が来るとは期待していなかったが、そうせざるを得ない現状だ。

最初の声に無反応だったので、二、三続けて話しかける。何度目かできるようやく声に反応したのか、滝のような涙は溢れたままだが剣からあふれる声が止まった。

『あうあうあう……う……んぐあああああああああああああああああ！』

けれど声にならない声を上げ、カタカタと刀身を震わせたかと思えば再び泣き始めた。

滂沱の涙を流す剣という存在に理解が追いつかず、どうしたものかと考える。

目覚めて見れば剣が縋って泣いていた、と言葉にすれば簡単だが流れと内容が全くの意味不明である。

体を動かかそうとするが、痺れのような感覚が体に走り上手く力が入らない。時間が経てば元に戻るだろうが、今は無理だった。

辛うじて動かせた首を回すと、周囲に花が咲いている、くらいにしか見渡すことが出来なかった。

『わあああああああああああああああああああああああああああ〜ん!』

「ある意味で泣きたいのはこつち……………ん?」

そんな俺の顔に影が差さる。

目を向けると、そこに居たのは手の平程度の大きさを持った人形が宙に浮かんでいる。ますます意味がわからないと眉間に皺を刻む俺に驚くように、その人形が表情を変えた。

(人形じゃない?)

じつと人形? を観察してみると、それは女性に見える。人間が小さくなって人形サイズにまで縮んだ小人、と言えればいいか。

海色の髪と同色の瞳。

身につけた羽衣のような長い布は、薄い生地 of 衣を大きく押し上げる胸元を隠し、足首まで覆われたロングスカートという衣装だ。

女としての魅力に溢れるスタイルに反して、間の抜けた表情から感じるあどけなさが

服装に反して大人びた少女、あるいは童顔の大人という印象を他者に与える。

(本の中で見た天女みたいだ……)

空に浮く人形、いや彼女がその小さな小さな手で頬をつついてくる。

肌越しの感触が、彼女の体が人形のそれではなく柔らかな肌を持つ存在だということ  
を教えてください。

「君は？」

「え？」

声を発しているのだが、どうも言葉が通じない。

言語の違いなのか、それとも小さすぎて聞き取れないのか。どちらにせよ、彼女と言  
葉を交わすことができないということがわかった。

小首を傾げる彼女を観察していると、加工によって穴抜きされて二の腕部分から除く  
肌に紋様のようなものが刻まれていた。

紋様は腕だけでなく体にもあるのか、服の中からうつすらと淡い光が漏れて不思議と  
目を引き寄せられる。

自然、彼女の豊満な肢体が目に入るがそもそも人間サイズではないことと、彼女の放

つ子供のような雰囲気が出世話な感情を湧かせない。

言葉がわからない以上、俺のするべきことは一つ。

なのだが。

「……おーい、そろそろ泣き止んでくれないか？ 聞いてて気分良いものじゃないし」

全てが意味不明な場を動かすには、会話が出来そうな剣にかかっていた。しかし話しかけても泣き声がそれをかき消し、言葉が届いているかも怪しい。

さてどうするか、と悩む俺と宙に浮く小さい彼女の目線が合う。

願掛けるように頭上の剣を顎で指し、それを二、三回繰り返す。

どうにかしてくれというジェスチャーだったのだが、幸いにも彼女は俺の意図を汲みとってくれたようでふわふわと空を飛びながら剣の柄を揺らした。

懸命そうな表情の彼女の様子を見ると、柄だけといえ体格的に全身で抱きつくようにならないといけないので、結構な労働なのだろう。少し申し訳なく思う。

『ぶぎゅ……うあ？』

「えーっと、会話出来る？ っていうか、言葉わかる？」

『あ、あ、う……ん。わかる、言葉、わかる』

彼女が頑張った甲斐もあり、剣はようやく呼びかけに気づく。

片言ではあるが、ちゃんと意思疎通は出来そうだ。そのことに顔を綻ばせると、釣ら

れたのか柄頭に腰を下ろした彼女も口元を緩めた。

そんな彼女はドレスのポケットから小さな白い布を取り出した。汚れ一つない清潔な布である。

それを俺にあてがい、剣の涙で濡れた体を拭き始めた。……感謝すべきなのだが、突然でびっくりする。あと小さすぎてあんまり効果がない、というのは言わない優しさだ。

見知らぬ俺にそんなことが出来る世話焼きな彼女に礼を言いながら「ここでようやく、俺は剣の姿をしつかりと認める。

……ん？ こいつ、どこかで見たことあるような……？」

「それで、お前は一体何なんだ？」

『え………？』

浮かんだ疑問をひとまず置いておき、至極真つ当な質問への答えは絶句と言わんばかりの悲しみ。

『嘘、よね？ 私のことわからないの？』

「いや、そんなこと言われても……」

『なんで、どうして!?!』

「知らん！ そもそも、俺がここに居るのはお前のせいじゃないのか？ 俺はこんな平

穏な所で倒れているはずないんだよ！ 早く涙月のところに行かないと……」

立ち上がろうとするが、体に力が入らず倒れ込んでしまう。

小さな小さな少女は咄嗟に避けてくれたので押しつぶすことがなかったのは幸いだ。なんだけか、頭が妙に重い。

首を動かそうとしてみると、はらりと流れるように髪がかかる。……髪？

はつとして、その髪を持ち上げる。

王侯貴族や商人御用達の銀系のように、艶やかな輝きを持つ髪が手に乗る。

かきあげて見れば、それは紛れもなく俺の頭から生えて背中に流れていた。

……待て、俺の髪は黒髪でそこまで長くなかったはずだ。

なのに、どうしてこんなに伸びている上に変色しているんだ——!?

心なし視界も低くなっているような……子供というほどではないが、大人にもなっていない少年の時期の肉体のような気がする。

「一体全体どうなってるんだ！ 俺の体はどうなっちゃった!？」

思わず叫んでしまうのを止められない。

現状、一番怪しい剣に目を向けてみれば、そいつはさつきからカタカタ震えて俺には聞き取れない小さな言葉を発し続けていた。

手を伸ばそうとするが、思うように力が入らない。くそつ、脱力極まってる。

時間をかけて這いずるように剣に近寄り、やっとその柄を掴む。

剣はひときわびくりと震え、発言もなくなっていた。

「おい、俺はどうしてここにいる。お前は何か知っているのか？」

『……？ 記憶が混濁してるの？』

「やっぱり何か知ってるのか？ だったら教えてくれ、俺は一刻も早く戻って涙月を倒しに行かないと——」

『待つて、待つて！ 置いてかないで！』

「置いてくも何も俺はお前のことなんて」

『私を置いていくっていうなら、貴方を刺して縫い付けてでも止める。大丈夫、血は出ないようにするから』

「剣が刺さって血が出ないわけあるかあ！」

ぐあつ、叫んだせいでバランス崩した！

べしやりと仰向けで倒れ込む俺の額に、小さな少女がそつと乗ってくる。

悪戯つ子をたしなめるように頭を撫でてくる彼女に、妙な気恥ずかしさが湧いてきた。

『ちよつとそこまでよ。土地の主だからってそれ以上のおさわりは禁止だからね』

「土地の主？」

『この場所を使う時に邪魔だったからどいてもらった後に、せつかくだから力も分けてもらったのよ。そのせいか体も小さくなったけど、無害になったからいいことよ』

「力を分けてもらうってそれ、絶対無理やりってつくだろ！」

この剣の言うことが事実なら、この草原っぽい場所に住んでいた彼女は無法者……無  
法剣に乱入されたあげくに力を奪われ、こんな姿になってしまったということになる。

まるで通り魔の如き所業に同情を禁じ得ない。

当の本人はきよとんとした顔で俺を見下ろしている辺り、本当に不憫な子である。

『だって、そうしないと貴方を呼べなかつたんだもん』

『……………俺を、呼ぶ？』

ここにきて、ようやく核心とも言える情報が出た。

俺が涙月の所でなく、こんな場所に居るのにこいつが関わっていることは間違いない。  
い。

「っ。俺は一刻も早く涙月倒して、国に帰りたいんだよ！ さっさと元の場所に戻せ！」

『……………無理よ』

「なんでだ！」

『———この世界に涙月はもういないの』

『……………は？』



いま、なんて？

『五百年』

「……………え？」

『貴方（．．）一が（．）涙月（．．）一を（．）討伐（．．）一してから（．．．）世界は五百年の時間が流れている。もう貴方が帰らなかった国は存在していないし、仲間もない。場所はあるけど、場所しか残っていないの』

俺が、倒した？ 涙月を？

「待て、俺はそんな覚え全くない」

『真実はともかく、事実として涙月は五百年前に消えた。同時に、貴方も。世界はこれを、貴方が命と引き換えに涙月を打ち倒したと認識している』

「……………さつきから一方的になんだよ！ そんな覚えないって言ってるだろー！」

喚き散らすように痲癩を起こす。

目が覚めてからわけがわからないことだらけで、自分の体すら変化している状況。

本当に自分は自分なのかとすら疑ってしまう現状で、ただ感情のままに喚くしかなかった。

「誰かと勘違いしてるんじゃないのか？ 俺は元々黒髪だし、髪は銀でもこんな長くもない。加えて大人だ。年齢も違う」

『そうね。私も再会してからびつくりしたけど、魂は他ならぬ貴方だった。外見なんて、私にとって何ら意味ないことだわ』

「お前は一体なんなんだ！ 俺のことを知らないくせに、何を語っている！

『貴方のことはよく知ってる。流石に生まれた頃から一緒ではないけど、獣に食べられた私を取り出してくれた後のことはよく知ってるわ』

「は？ 獣？」

『獣から助けてもらって、そのまま武器にしてもらったことはよく覚えてる。その後仲間となる彼女を加えて都へ行くために船に乗った矢先、謎の嵐に遭遇して未開の土地へと流れ着いた。そこで仲間を作って国を興したことも、昨日のように覚えてる』

その台詞に、俺は言葉を失った。

それは紛れもない俺の半生。

故郷を飛び出した先で起きた行動の全てが、この剣によって語られている。

震える声で、俺は剣に向かってつぶやいた。

「お前は、一体、誰だ？」

『……………ここまで言ってもわからな——あ、ああ、そつか。今の外見じゃわからないか』

「どづいうことだ？」

『何度も言うけど、私と貴方は知り合いなのよ。ううん知り合い以上で、唯一無二のパートナーを努めていたの』

「お前みたいに印象の強い相手は、そうそう忘れないものだが………」  
言われて、記憶を探る。

そう長く生きてきたわけではないが、初見でこんな奇抜なことをされたら記憶喪失にでもならない限り忘れることはないはずだ。

喋る剣が珍しいかもしれないが、俺は一応他にも喋る剣というものを知っている。が、流石に涙を流す剣は例外とさせて欲しい。

でもいきなり自分が相棒だと言われても疑問と警戒しか浮かばない。そもそも俺が使っていた武器は目の前の剣ではない。

そのことは相手も察したのか、首を横に振るう。

『ええ、私と会うのは初めて。けど——』

剣が彼女と同じく宙に浮き、俺の手に収まる。

途端、剣から光が灯る。

粒子状の光が剣から溢れる光景に何事だ、と傍にいた彼女と一緒に目を見開く俺の手  
に、急に心地よい重さが加わった。

そこにあつたのは、刀身が半分近く折れた剣だった。元はもつと長さがあつたはずの

それを、俺は見たことがある。いや、覚えがありすぎた。

何せ握り慣れたそれは――

「お前まさか……ひよつとしてサウザナ、なのか？」

『……！　そう、サウザナ！　貴方のサウザナよ！』

俺がかつて愛用していた、剣の姿であつたのだから。

## 2. 未来の宿から

衝撃的な出会いを経た俺達は、とりあえず現状の確認ということで落ち着いた場所です話をすることにした。

いつの間にか俺の頭に乗っていた小さな彼女が居たのも驚いたが、それ以上に俺が居た場所がどこかの山頂というのも目を見開く。

「つと、目覚めたてで下山はなかなか厳しそうだな」

『そう？ それじゃあ——』

俺のぼやきに、サウザナがふわりと浮かび上がったかと思えば、その刃を一振るう。

一瞬遅れて、山頂を斬り割る破碎音が耳を木霊する。

山頂からふもとまで、一刀の下に駆け巡った風は木々や岩山を裂き斬線上に遮るものを邪魔だと言わんばかりに斬り進んでいく。

目下百ビヨンはあろう高さの山を切り裂いた本人、もとい本剣が再び剣を振ると、均等に地面が隆起する。

さらに土の上は歩きやすいように小石などが取り除かれ、ちよつとした足場となつて目の前に作られた。

『さ、これに乗って行きましょう。自動でふもとまで到着するように操作するから』

「ちよつと」

『え、何?』

「ちよつと」

『だから何』

「さつきから驚きすぎて何言えばいいかわからねーんだよ!」

怒号を飛ばしてみるものの、サウザナは我関せずどころか『声だあ。声が聞こえる、怒鳴られてるう』と身悶え気持ち悪い声を上げている。

さらに怒鳴り声にびびったのか、小さな少女が涙目で震えていた。

ごめん。落ち着こう。

小さな小さな少女をおっかなびつくり掴んで撫でる俺に、妄想から復帰したサウザナが指摘する。

『その子も連れてきたの?』

「元々この山の主なんだから? それがお前のせいであんなったんだから、持ち主である俺が養わないと駄目だろ。少なくとも元に戻るまでは俺が保護する」

『えー、せつかくの水入らずの二人暮らしが……』

「えーじゃねーっつーの」

ため息をつきながら土の足場に乗ってみると、すーっと勝手に移動を開始する。

歩かずとも流れ続ける景色に思わず感心の声を上げた。

「サウザナ、これはツギハギ、だよな？」

『そーよ。私が覚えたの。細かい操作は苦手だけど、これは足場を作って動かすだけだから簡単』

「その前にやったのは簡単じゃないけどな。あれ、しばらく禁止してくれ。心臓に悪い」  
『えー？』

「目の前で山を両断されたシヨックを少しは考えてくれ。何より、他に人とか生き物が居たらどうするんだ」

『え、そんなの貴方の移動に比べたら別に』

「大事だよお!! 歩くのが辛そうって言っただけで遮る全てを虐殺とか悪政を敷く王様じゃないんだから、そういうのやめてくれ。本当」

『私からすればそんなのと貴方の価値を比べるまでもないんだけど』

「俺がそう思うの。だからやめてくれ。俺はもうここに居るんだから、周りに迷惑かけないように」

しょうがないなあ、などと言っているが犠牲はなかったのか、ただそれだけが心配だ。俺の肩に乗って足をぶらぶらさせている小さな小さな少女は、この惨状に驚いてはい

るようだが、それ以上にすることはなかった。

びつくりしたが、それだけ。

この山の主という彼女は、力と共に記憶や理性も奪われてしまったのだろうか。

『ほら、いわゆる子供に戻っただけで複雑な生命の定義とかわからないのよ』

「誰のせいだよ……」

うちの駄剣が本当にごめん。

「人がいないのは不幸中の幸いだったな……」

『ここは一応秘境みたいなところでね。一見するとただの美味しい水や山菜のある山でしかなくて、さっきの場所は誰にも知られてない場所なの』

自然、大事に。

『ところで、服の着心地はどう？』

言われて、手を伸ばしたり首を曲げて服のズレがないかを確認する。

デザインも妙に洗練されているようで、かつて着ていた服の生地と着心地が段違いだ。

よほどの高級品なのだろうとあたりをつけ、少し緊張してしまう。

長かった髪もうなじの辺りで止めているので、多少は楽になった。

切ってしまうかとも思ったが、サウザナが綺麗な髪だからもつたいないと言ったし



小さな小さな彼女もなんだか気に入ったように髪を弄っているので、しばらくはこのままにしておこう。

「いや、悪くない。良い具合だよ」

『それは良かった』

この服も適当にサウザナが用意してくれた。何も無い空間から服が出てきたのを見ると、空間操作系のツギハギを所有していると見ていい。いつ素材を手に入れたのやら。

それ以上にただの剣であったはずのサウザナがツギハギを使うことについて、詳しい説明が欲しいところだ。

土の足場が止まる。

ふもとに降り立った俺達は、人に手が入って整備された道を目指すべく何も無い平野を歩くこととなる。

次に歩くのが辛いとか言ったら何をするかわからないので、我慢して歩くことにする。

「ところで、今はどこに向かっているんだ？」

『南にあるアンネっていう、水の綺麗な所。さっきいたところから川が流れてるから、水も美味しくてお風呂も充実してる。まず湯浴みして、色々落としていきましよう』

「さっきのあれ、水に影響ないだろうな……」

『川に届かない場所だったし、問題ないわよ』

「そりやお前はな……」

そうやってひよこひよここと歩いていると、何かがちちらを叩いてくるような音が響く。

怪訝そうにする俺を察したのか、肩に乗っていたあの子が急にサウザナの柄に乗った。

「どうした?」

『あれ見てよ』

柄頭に乗る小さな小さな彼女からサウザナに示された先は、南西にある特に変哲もない森だ。

しいて言えばその近くに馬車が止まっているだけで、何か大穴があるとか森の一部が剥けているといった変化は見受けられない。

観察しているうちに馬車の近くに人、それも小さな女の子が近寄っていた。どうも森から出てきたようだが……

『声かけてみる?』

「何を聞くんだ。街の場所は把握してるんだろ?」

『案外、馬車の中で思わぬ出会いがあるかも』

馬車に入っていったのはあの子供しかおらず、それ以外は御者しかいないように見えた。

サウザナが言う出会いとは、あの女の子のことだろう。

だが言われる側としては何を突然、と言いたくもなる。

「あの女の子のこと、知ってるのか？」

『んーん。まったく知らない』

「ならいきなりどうしたんだ」

『……昔を思い出しちゃって。私が拾われてから馬車引いてる御者さんに声かけて……う……ぐう……ひつく……』

再び涙という名の水滴を垂れ流すサウザナ。小さな彼女は体が濡れてしまったのか、俺の肩の上に座りため息をついていた。

「あー泣くな泣くな、懐かしいよなそうだよな。じゃあ少し、馬車に声かけてみるか」

『はい。お金はあるから、もし料金発生しても心配しないでね』

一瞬で泣き止むって嘘泣きか、と思ったがお金のことを持ち出された俺は、特に指摘することなく馬車へと向かっていく。

五百年後経とうが人が居る以上、お金は大事なのだ。

「あの、すみません」

「ん？」

今まさに発車しようとしていた御者に声をかける。

急いでいるわけでもないのか、初老と伺える男は声に合わせて律儀に止まってくれた。

「自分達はアンネへ向かおうとしてるんですが、こちらの馬車はどこへ向かわれますか？ もし目的地が同じなら、同行させていただけないかな、と。もちろん料金は相応に」  
「あー、すまんな兄ちゃん。普段なら構わないって言ってやるんだが、今日は個人で貸し切ってるんだ。しかも、その子は今疲れたのか寝入っちゃっていてな。流石に起こす気にはなれん」

「そうでしたか……」

申し訳なさそうに渋面を作る御者。

なら仕方ない、と無理に乗る理由もない俺は引き止めてすみませんと頭を下げながら馬車から離れる。

「断つちまつた俺が言うのもなんだが、早く離れたほうがいい。ついさつき山から凄まじい音が聞こえてきた。アンネの水源を盗もうとした馬鹿が、山の主を怒らせて手痛い目を見たのかもしれない」

「あー、そ、そうですね、ははは。そうします」

すみません、騒動の元は俺の剣で山の主とやらは小さくなつて俺の肩に乗ってます。馬車を見送りながら気落ちしているであろうサウザナを慰める。

貸し切つてるといふことは金持ちだろうし、中に乗っていたのは子供といふことは貴族の子が森で遊んでいて疲れたのかもしれない。

だつたら無理に割り込んで邪魔するのは気が引ける。

気を取り直してアンネへ移動しようと俺に、柄を撫でられていたサウザナが勝手に動き、地面に鞘をめり込ませた。

疑問に思うより早く、サウザナがその答えをくれた。

『突然にごめんね。ちよつと虫が居たから』

「汚すなら靴でいいだろ」

『どつちも変わらないと思うけど』

「お前を入れる鞆なんだ。綺麗なほうがいいだろ？」

『やーん嬉しくい〜』

媚びるような気色悪い声音を流しながら、改めて足を動かす。

そうして時間をかけてアンネの街へやってきた俺達は、夜も更けて来たといふことでさつそく宿を取ることにした。

湖の街とも呼ばれるここは、事前に聞いていた通り水が豊富だった。

街並みも綺麗だし、人の流れは多いがその表情に陰りといったものは伺えない。住民が不備なく暮らしている証左だろう。

街に流れる川は清流で排水処理も完備しており、宿の個室に風呂が備え付けられている進んだ街のようだ。

当然とばかりに風呂付きの個室で宿を取ったので後で入らせてもらおう。

選んだ場所は宿舎にしては小さい、どちらかと言えば民家を改造した施設だ。

宿泊できる人数が多くない代わりに、一般解放された食堂という専用の区画を作り分けることで繁盛を続けている。どちらかと言えば食事がメインで、宿がおまけのように思う。

年若い従業員に金を（サウザナ持ち）払い、案内してもらった部屋に備え付けられた清潔なベッドに腰掛ける。

そこでようやく、俺は今の状況について落ち着いて考えることが出来た。

「しかし、目覚めたら五百年後とはな……本当に涙月は倒せたのか？」

『正確にはわからないけど、涙月は大地に溶けて消えていったし、あの時から今にかけて今も現れてない。それがひとまずの答えでいいと思う』

「そっか……なら、良かった。けど涙月との戦いに行ったはずの俺が、どうしてあそこに



サウザナのいう国、それは俺が治めていた国でもある。

小さいながらも一国の王だった俺だが、それはあくまで代理の話。お飾りの王だ。

サウザナから話されたそれは、俺にとつてなんとも言えない感情を残す。

別れを告げることも、告げられることもなく。ただこうして事実のみを伝えられた心は大きく乱れていく。

『……………めんね』

「何を謝るんだ」

『あの時、貴方は私に俺達に戻る場所を守っていてくれて言ったのに……………私は貴方を探すために国を出て行ってしまった』

手元にある折れた剣が、心なし湿っていく。

また泣いているのか、と思った俺は気にするなと告げる。

『私は耐えられなかった。直接貴方を知る世代がいなくなつたと同時に、だんだん国は変わっていった。私という存在もおざなりにされていて、徐々に居場所がなくなつていったのを感じたわ。当然よね、知らない人間からすれば国の舵を取っているのが喋る鉄の塊なんだもの。……………それで、色々あつて出奔したの』

「俺が帰れなかつた時点で、そんなの破つても構わないさ。謝るとすれば俺のほうだ。帰るって言ったのに結局行方知れずになつちまつたみたいだしな。……………寂しくさせて。



帰れなくて、ごめん」

『……………うっ』

「うん？」

『うわああああああああああああああああん！』

「うおっ!!? だから泣くな、濡れる！」

『ご、ごべん、ざいがいがうれじすぎで涙せん、もろく、なつぢやつで』

それでも止まらない涙に顔をしかめながら立ち上がる。ベッドに腰掛けていたせいで体とシーツがびしょ濡れだ。

宿の人に謝らないとな、と考えながらも俺は真っ先に気になることを聞いた。

「ってどうかサウザナ、お前一体何があった？」

『へう?』

「少なくともあの頃は涙を流すなんてこともなく、ただの喋る剣だったろ?」

喋る剣がただの、というのもおかしいかもしれないが、出会った時からこいつは喋っていたのだから仕方ない。

出身が周りにツギハギ使いのいない田舎だった俺からしたら、外の世界の剣は喋るんだと勘違いしていたくらいだ。

『修行したってこともあるけど……』

剣って修行すると涙出せるのか。

『一番は世界融合ね』

「世界融合？」

『うん。話を戻すけど、当時ゲイズが消えたと同時に、呪紋世界と名付けられた異世界がこの世界と一体化したのよ』

「会話そのものが異世界に行っただぞ」

『だって事実だし』

「そも、なんで世界が一体化してるなんてわかるんだ」

サウザナは続ける。

『世界が一体化したってわかったのは今から三百年くらい前かな。突如としてゲイズの眷属が蘇ったのよ。それを阻止した人達が居て、その時に知ったって感じね』

「それがサウザナの涙と関係あるのか？」

『おおあります。世界融合ってことは、異世界のものがこちらへやってくるってことだったの。かつては乏しく、今は世界に満ち満ちた不可思議な力。それがタンクルで——私の同族である識世、っていう新たな種族が誕生した』

識世《しきせ》。

世界融合後に誕生した種族の一つで、主に無機物から生まれる存在らしい。世界の一

体化による影響で変質した変化の最たる例と言えよう。

ようは世界と世界が合体した結果、無機物に意志が宿った存在が識世、つとサウザナは語る。

「でもサウザナは前から喋ってたろ？」

『うん。当時から多少なりとも呪紋世界の影響はあつたみたい。そういう意味では私は識世としては古参だから馴染むのも早かつたわね。それで識世になり、色々と種族としての機能が追加された、って感じかしら。流星に元が剣だから子供は作れないけど』

「剣と致すってどんな変態だよ」

刺すのか？ 刺されるのか？ だったら武器を使う奴ら全員変態になつてしまふぞ。

『あー……まあ色々あるけど種族の違いってやつで。ってそんなのどうでもよくて、本格的に識世化して色んなことが出来るようになったのよ。ツギハギを覚えられたのもそのおかげ』

世界融合という出来事のせいで、世界は随分様変わりしているようだ。

剣が、いや識世であるならその辺の石がツギハギを使えるということになる。俺の知る世界が過去といえ、未来の今はどれだけの変化が起きているのやら。

『ツギハギが使えるようになったって気づいた私は、国から出奔あとに世界中を巡りながら情報を求めたり、強くなつてあいつに負けない力と貴方を呼び出すツギハギを身に

つけた。貴方の死体が見つかっていなかったから、きつとどこかに居るって信じて、その一心で修行していた』

でも、とサウザナは重々しく言葉を残す。

『本当は貴方の生存じゃなくて、死体を見て納得したかった。生きてるなんて都合の良いことは言わないから、その亡骸だけでも、なんて思ってた』

慟哭《どうこく》は止まらない。

俺が逆の立場であつたなら、自分を納得させるための、希望ではなく虚無の願いを抱いたかもしれない。

『死体だったら、私を刺して自分ごと永久封印して劍生《けんせい》を終えようと思つた。貴方だけを知りながら眠りたかつた。死体と一体化すれば貴方の夢を見れるかもしれないし、幸せな夢を抱いてその後を過ごしたかつた』

台詞が不穏になつてきた。

墓標とするのはともかく、色々とやばそうな雰囲気と言葉の端々からにじみ出ている。

何、もし目覚めなかつたらサウザナは俺に刺さつてそのまま永眠しようとしたつてことか?……怖いんですけど。

五百年という時間のせい、色々と拗らせてしまった愛剣に恐怖を覚えながら、それ

以上言わせないようにする。

『そんな風に色々頑張った甲斐はあって……あって……うう』

「はいストツプ。おーよしよし良い子だから泣くなよー? 間違っても俺を刺さないでくれよー?……でも俺が消えて五百年経ってるなら、なんで俺はまだ生きてるんだ?」  
死んでなかったとしても、それは最早人間として形を持たない何かになっているだろう。

でも俺の体はそんなこともなく、むしろ当時より若返っている気がする。大体、故郷を飛び出した十五歳くらいの時かな?

より正確に言えばサウザナと出会った頃でもある。流石に銀に染まってしまった上に長髪ではなかったが。

『世界中を探し回って死体が見つからなかった時点で、貴方は境界領域へきようかいりよいういき』——融合しきれず、はみ出してしまった世界の裏側にいるんじゃないかって思ったの。そこは時間という概念がなくて、取り込まれた時点で肉体は不変だから、会っただけならチャンスはあると思っていたんだけど……生きてる上に若返ってるわね。でも私としては初めての出会いを思い出すから、ずっとこのままでいいのよ?』

戯れ言はさておき、こればかりの理屈はわからないそうさ。

他にも気になることはあるが、現状も知れたしこのくらいにしておこう。一気に詰め

込んでも頭に入らない。何より、

「サウザナの涙で色々ぐちゃぐちゃだ。風呂入って汚れ落としてくる」

『大丈夫、私の涙はあの山の水やこの街の水より綺麗だから！』

「知らん」

にべもなくサウザナを振り払い（用意されていた鞆に収めるとも言う）、俺は個室に備え付けられた風呂に入ることにする。

温泉や大浴場、貴族の私邸ならともかくこういったただの街の宿で風呂にありつけるとは思わなかった。色々としたものを洗い流させてもらおう。

「――」

「つと」

肩に重みを感じたと思えば、彼女が乗ったせいか。

どこから用意したのか、彼女サイズの小さな風呂桶の中に白く柔らかなタオルを詰め合わせて意気揚々としている。

そう言えばこの子も世界融合後の種族ってことだろうか？

「サウザナ。山の主とは言ってたけど、この子ってどんな種族なんだ？」

『んー、一応識世になるのかしら。世界融合以降に山頂に咲いてた花が識世化して、牛耳っていたんでしょね。邪魔だからふっ飛ばしておいたけど』

本当にすまない、小さな小さな女の子よ。

「それにしちやあ人型だし、識世って無機物から生まれるものなんじゃ？」

『正確には意志のないもの、ね。世界を識《し》った者、自我を持つに至った存在。それが識世の由来。だから正確には無機物だけが識世ってわけじゃないのよ。人の形を取れるってことはタンクルとの親和性が高いのだけど……あまり強そうには見えないわね』

「別に強い弱いはどうでもいいよ。というかお前ちゃんこの子に謝れよな」

『なんで？』

「勝手に人の家に土足で踏み入って押し入り強盗したんだろうが……」

『でも貴方を呼ぶのに適した土地はあそこだったんだもん。それに私はちゃんと理由説明したのよ？ でもそんなの知らないって感じで襲い掛かってきたから正当防衛よ』

「正当防衛って言っているのはこの子だろうが……」

そうだ。サウザナならこの子の言葉わかるかもしれない。そう思っただけで見れば、サウザナは肯定した。

『言葉はわからないけど、感覚で理解できるわ。この辺は識世特有なのかも』

「ならちようどいい。この子、名前なんて言うんだ？」

『ちよつと待つてね。———』

「何やら会話を行っているようだが、全く理解出来ない。意味のわからない単語の羅列を聞いているような気分になってくる。」

国や大陸の違う人種との会話、ならまだ勉強の余地もあるがここまで来ると動物とコミュニケーションを取るようなものと判断したほうがいいかもしれない。

彼女は俺の正面へ飛び上がり、人間サイズで比較すれば豊かな胸に手を当てながら小さな小さな唇を動かした。

「わかる?」

「わかるか」

口パクにしか見えん。

実はサウザナからの所業を覚えていてそっけないのかとも思ったが、きよとんとする彼女の表情からは悪意とか害意は一切感じない。純粹に俺がわからないだけだ。

まあいい、コミュニケーションの基本は体当たり、ジェスチャーである。

話せない人ともこれ一つで会話が出来て努力次第で万能になれる力だ。これで彼女と話していけばいい。

『名前はないって。そもそも呼ばれることがなかったそうよ』



「植物なら名前をつける習慣なさそうだしな。なんて呼ぼう」

「あ、これは流れでわかるぞ。俺の名前は、って聞いてるんだな？ もしくは名前つけて、とか」

『ううん。お風呂行こう、だって』

仕方ないと言えば仕方ないが、違っていたことが無性に恥ずかしい。

でも花の識世なのに風呂のことを知ってるのか？　そして良さがわかるのか？　水浴びと同じ感覚なんだろうか。

山を支配していた知性とも言うべきものが、残滓のように残っているのかもな。

返事をしない俺に首をかき上げて見上げてくる彼女。可愛い。

違う、どうしたものか。

『名前、付けてあげたら？　誰かに名前を呼んでもらうってのは、とっても嬉しいもん。言われなきゃ、忘れられちゃうよ』

「俺が付けていいのかな」

『名前が必要なのはこっちの都合だし、本人は気にしないんじゃない？』

「それもそうか。とりあえず風呂にでも入ってゆっくり考える」

『その子も一緒に？』

「別に拒否する理由はないからな」

『人形ほどに小さいってだけで、造形自体は人間ときほど変わらないのにー』

サウザナの言いたいことを察し、無視する。向こうも軽口だとわかつていたのか、追求はしてこなかった。こんな掌に乗る小さな子にそれはない。

備え付けられた浴槽は足を伸ばせるほどの大きさではなかったが、それくらいは足を丸めるか浴槽の外に伸ばせば問題ない。いち宿屋の個室に風呂を備えている時点で贅沢というものだ。

ここで、浴槽に入れる水がないことに気付く。そういえば旅人であると言つて宿を取つたさい、風呂に関しての説明があつた気がする。

サウザナが知っているからいい、と流したのであいつなら知っているはずだ。

「サウザナ、ここの風呂ってどうやって入るんだ？」

『おっと、そう言えば説明してなかつたつけ。備え付けてある浴槽の近くに、少し大きめで色違いの球が三つあるのはわかる？』

言われて周囲に首を巡らせると、設置された小さな棚の上に白と赤、青の球があつた。こぼれることのないよう、台座に置かれて固定されたその一つを手取る。

『まず赤い球を、浴槽に描かれた呪紋の中心に入れて』

見れば、浴槽の中には円を描くような呪紋——タンクルで描かれた模様らしい——が

描かれている。中心部に窪みがあったので、指示に従いそこに赤い球を置く。すると、赤い球に変な突起物が生えた。

「なんだこれ、変身したぞ?」

『害はないから大丈夫。それで、球にある小さいスイッチをポチつとして』  
「ポチつとな」

カチ、と小気味良い音が響くが、何も起こらない。

小さな彼女共々首を傾げていると、サウザナから注釈が入った。

『あ、顔を浴槽に入れないでね。下手すると溺れちゃうから』  
「それはどういう——」

元よりしていないが、理由がわからないでいると浴槽の中で変化が起こる。

赤い球がカタカタと揺れ、数秒後に爆ぜた。すると球の中から溢れる透明な液体……熱された湯が浴槽を満たし、俺はその光景に大きく目を見開いた。

『赤い球はお湯。青い球は水が出る仕組みよ』

「なんだこれ、すごいな」

『これは湖の街の小さな賢者が開発した即席風呂でね。呪紋の上に専用の道具——紋具《メダリオン》を置くことで効果を発揮する、つてわけ』

「文明も大きく進んでるな」

ツギハギの力が込められた道具であつた紋具は、今も変わらぬ名称として存在しているようだ。

俺が過ごした過去、五百年前にも紋具は存在したが、こんな細かな効果を持つたものは一般的に普及していなかつた。

仮に同じ性能のものがあつたとしても、もつと大きく仕上がっているだろう。大雑把なものも多かつた。

なのにこの小ささで同じ効果というのは、随分と簡略化が進んでいる。

一部に尋常ではない力を持った紋具もあつたが、あれは例外だろう。

『スイツチだけで水を出したり熱湯にしたりしたんだけど、それで子供が火傷しちやつて、事故防止のために色々試行錯誤した結果がこれみたい。呪紋の上に置かなければ、スイツチを押ししても起動しないよう設計されてるとか』

「でも赤か青を先に入れたら、他のは呪紋の上に置けないぞ?」

『水が呪紋に反応して、水自体が呪紋としての効果もあるそうよ』

ちなみに白い球は風呂に入りながら健康にも良い入浴剤らしい。

追加料金扱いだから、使わなかつたらその分宿代は安くなるサービスのようなもののこと。

「随分詳しいな」

『貴方を呼ぶ場所は前々から決めてたからね。そこで一番近い街がここだったから、仮の拠点として少し滞在してたのよ』

剣が滞在してどうやるんだ……

いや、サウザナのことだし上手くやったのだろう。

「金に余裕はあるのか？」

『当然。それに持つてなくても稼いで来るわよ。使えるものは色々あるしね』

そこまでする必要はないが、路銀に余裕があるなら使わせてもらおう。

剣が財産管理をしているなんて、というツツコミは五百年遅い。こいつは出会った頃から俺の財布の紐を握っていたのだから。

白い球を取り上げようとするが、小さな小さな彼女が興味深そうにこれを眺めていることに気付き、使ってみるか？ というジェスチャーをする。

意図に気づいたのか、花の咲くような笑み（花の識世らしいから正しいが）を浮かべ、彼女はえっちらおっちらと全身を使って白い球を持ち上げ、浴槽の中へ落とす。

そして浮かんだスイッチをえいっ、と言わんばかりの表情で押し込んだ。

数秒後、満たされた湯から良い香りが漂ってくる。風呂に薬草や果実を使う入浴法は知っていたが、時間が経てばあり方も変わるものだな。

風呂の湯気を感じながら服を脱ぎ、暖かな湯に足を沈める。

体感する温度の違いによる軽い痺れを感じながら、体を丸めて肩まで浸かっていく。少し熱めのお湯が全身を包み、温まっていくのを感じた。

小さな小さな彼女もまた服を脱ぎ、頭と体にタオルを巻いて入って来ようとしたのだが、手で制して一旦その動きを止める。

「君は、こう」

備え付けの風呂桶に湯を入れてやる。

彼女は嬉しそうに湯の中へ入っていく。だらしなく顔を緩める様子を見れば、満足しているようだ。

「名前、名前……ねえ」

いつまでも彼女と呼ぶのも、大事な命名を変なものにするわけにもいかない。

「ん、俺の名前はって聞いているのか？」

返事はない。ただ、なんとなくそう感じたただけだ。

俺の名前。かつて過ぎ、生きていた時代から五百年が経っていると言われた今、俺は一体どんな風に語り継がれているのだろう。

ふと疑問に思いサウザナに聞こうとするが、何故かあいつは自力で鞘から抜け出し折

れた刀身をこつちに寄せてきた。無言で浴室の扉を開ける剣というのはちよつとした恐怖である。

「いきなり開けんな、ビビる」

『肝が小さいわねえ』

「外見考えろよ」

『扉型の識世だつて居るのよ？ 今の世の中だとそう驚かれないつて』

「世界は変わったな……で、なんで来た」

『雨が降つて来たから、寒くつてねー一緒にあつたためて』

「満員です」

『詰めます』

「無理です」

『入ります』

「洗うからそれで我慢しろ」

そう言つてやると、ぴたりとおとなしくなる。未来に目覚めてからすることが剣の洗濯だなんて思わなかった。そもそも剣の手入れつてこういうことじゃないだろ……

『まあまあ、この状態でやつてもらつてのが良いんじゃない』

「サウザナが問題ないなら良いけどさ……どう洗つてやりやいい？」

『あー、これ使つて』

何も無い空間より放りだされる品々。スポンジという雑巾よりも柔らかいそれらからかの薬を塗りこみ、刃で切れないよう気をつけながらサウザナを洗っていく。

「お客さん、気持ちいいですかー？」

『あーん、いいわあー、そこそこー』

「そりや何より。そりや俺らの国つて今どうなつてる？」

『んー？』

「いや、代理といえ一応一国を治めていたわけで。気になるのは当然だろ」

『私は途中で居なくなつたからな』

それは遠回しに語りたくない、と言うことだろうか。

後を託された自分が、国に留まらずこの場に居ることに罪悪感を覚えているのか？  
気にすることはないんだが。

サウザナがこう言っている以上、追求すべきことなのではないのだろう。元より居なくなつてしまつた自分には関係のないことか。

未練がないと言えば嘘になるが、あいつらもいないと言われた以上ここに居るサウザナのほうが大事だ。

「識世つてどれくらい寿命があるんだ？」



『突然ね。ま、原型によるかな。私が折れちゃった時から今まで放置していたとしても、錆はあっても残ってたと思う』

「そうか」

小さくつぶやきぼんやりとこれからのことを考えていると、彼女が俺を不思議そうな顔で見上げてくる。心を読んでいるというわけではないだろうが、変な顔でもしていたかな？

「名前、早く決めないとな。んー、サウザナはなんか良さげな案あるか？」

『考えろって言われたら考えるけど、その子も一緒に連れてくの？』

「なんとなく着いて来ちゃったみたいだけど、これも縁ってやつだろう。別に文句はないだろ？」

『そりゃないけど。そだね、あの場所に居たしユカリス、つてのはどう？』

「ユカリス？」

『うん。あの場所にあったのを元に、ね。再会って意味もあるの』

「お前それ、俺とサウザナのことでユカリス関係ないだろ」

『あくまで意味も、だってば。出会いとか他にも色々あるわよ』

「出会い、か。それならいいけど」

『よし、決定！ 貴女はこれからユカリスよ。よろしく！』

「よろしくな、ユカリス」

小さな彼女——ユカリスは俺達の会話に目を瞬かせていたが、やがてその顔を笑みへと変えていく。

意味がわかっているかはわからないが、こつちが嬉しそうにしている感情に習って笑っているのかもしれない。今はそれでいい。

「せっかくだし、俺も新しい名前を名乗ることにするよ」

『えっ? なんで?』

「俺は基本的にもういない人間で、今この世界からすれば死者みたいなもんだ。これから新しく人生を続けるならそれに相応しい名前を付けないとダメだろ」

『んー、そっかー。識世とか人間よりずっと寿命が長い存在もいるし気にしなくてもいいと思うけどなあ。貴方が私と一緒に居るなら構わないけど』

「悪いな、呼びたくなったら前の名前で言っただいいぞ」

『んーん。主が決めたのならそれに従うのが剣の努めです』

どことなく得意気に聞こえる声に苦笑し、専用の湯船の中からこちらを見上げるユカリスを人差し指でつつくと、指を両手で懸命に掴み、ぶんぶん上下させている。

握手のつもりなのかもしれない。

『それで、なんて名乗るの?』

「ああ、俺の名前は――」

### 3. 丸出し

名付けた言葉を言おうとするよりも早く、俺の肌に訴えるものがあつた。

肌を冷やす殺気のようなものではなく、上から圧倒的な重量を持って押しつぶしてくるような圧迫感。

同時に、耳に届くものがあつた。

「きやああああああああああああああああああああああああああああああ！」

「なんだ!？」

この声、従業員の子か？

民宿のような施設のため声がよく通る。つと、考えてる暇はないな!

『うわっ、なんかすごいタンクルの持ち主が宿に居るみたいよ? リアクター大丈夫か

なあ』

「何が起きてるか知らんが、放っておくわけにもいかんだろう。今晚の宿に何かあつたら大変だしな。行くぞサウザナ!」

『お、よっしやあ!』

抜身のままの歓喜の雄叫びを上げるサウザナを抱え、適当なタオルで大事なところを

隠しながら部屋の外へ飛び出す。

風呂あがりのため走る合間に水滴が垂れまくるが、そこは一秒でも早い駆けつけのために従業員には我慢して欲しい。

そうして走り寄った先。果たして、そいつは居た。

背丈で言えば俺より頭一つは高い、長身で体格も良い男だ。

一見では男に見える。先程サウザナが言っていた雨に打たれたのか、息を荒げながら濡れた服を煩わしそうに動かしていた。

けど従業員の子が悲鳴を上げた理由はまた違うだろう。

頭に樽を被るといふ奇妙という他ない外見から荒い息遣いが届き、少女との身長の違いを考えれば壁とも言える。

夜闇の中、雨音に紛れてこれを見てしまえば従業員の子——年若く、茶色い髪をサイドテールに結った十代前半程度の多感な年頃の少女——が驚くのは無理もないだろう。

先ほど感じた圧こそ残っているが幸いにして、まだ何も起きていない様子。俺は従業員の少女の傍に近づき、いつでも樽男から割り込めるようにしながらゆっくり話しかける。

「一体何があつた？」

「ええつと、おきやくさ——ん!？」

少女の視線が俺の顔から徐々に下へ向かっていく。悲鳴こそ押し殺したものの、怪しい男のすぐ後に半裸の男が出て来てしまったことに絶句しているのか。

俺を突き飛ばそうとして差し出した手を取るが、声がさらに大きくなるだけだ。一旦手を離し、落ちていてもらうよう呼びかけようとして——背後から感じる気配に、咄嗟に体を横に動かした。

「うおっ!？」

回りこむように俺の眼前に現れたのは、鞆に入れた細身の剣を携えた少女だった。

背中まで伸びる波打つ艶やかな黒髪からは湯気が立ち、動きやすそうな部屋着に身を包んでいる。

おそらく俺と同じ宿に止まっていた宿泊客なのだろうと予測する。しかも同じように風呂まで入っていたようだ。

少女の目から注がれる熱い視線という名の嫌悪感。

つまり見てしまったのだらう。少女の手を掴み、片手に武器を持った俺の姿を。立場が逆なら、俺だってどうしていたか。

「ま、待ってくれ。確かに誤解させる構図だったが、俺は——」

返答はすくい上げるような膝よりも下からの一閃。

予想以上に鋭い攻撃を、俺はサウザナで受けようとして——突如蛇のようにうねり曲

がる変化に首を倒した。

咄嗟の判断によって刃を包んだ鞘が体を打つことがなかったが、細剣少女の攻撃は終わらない。

剣の軽さを活かした疾風のように迫り来る一撃をサウザナの折れた刃先を突き出して受け止め、柄を離す。

上方からの衝撃に宙を回転させるサウザナ。

柄を手放した俺は細剣少女の懐へ飛び込み、回転するサウザナの柄を掴み勢いのままに切り上げる。普通の剣なら弾かれたそれは、サウザナの意志によって宙に留まっていたのだ。

だが細剣少女もさることながら、その一撃をあえて踏み込むことでこちらに肩を押し付けてくる。空振ったサウザナを反転、刺突に切り替えるもすでに細剣少女はこちらと間合いを空けていた。

さらにツギハギで追撃しようと左手を上げただけなのに、彼女は野生の獣じみた直感で跳ねて射線から脱出している。

こちらの攻防と思惑を巧みにすり抜ける技量に、内心で賞賛の声を上げた。

(見たところ年下っぽいのにこれか？ 未来の子はたままないな)

周囲のテーブルや椅子を転ばした十合ほどの打ち合いと攻防の後、埒が明かないと判

断したのか細剣少女が距離を取る。ちょうど従業員の子とマスクの男に背を向けるような立ち位置だった。

「おい、怪しいのはそつちの樽被ってる奴だろ」

言った後で気付く。

男は圧倒的すぎるタンクルこそ発しているものの、最初に感じた気配を霧散させており、顔を隠しただけの男といったように見えなくもない。

タンクルを感じできない相手の目にはむしろ俺のほうが不審者に見えるだろう。

従業員の少女の悲鳴のせいか、それとも俺に驚いているためか。どちらにせよ、乱入した少女の誤解を継続させるには十分な下地が出来上がっていた。

「折れた剣なんて使う不審者の癖に意外とや、る……………」

何故か尻窄みになっていく言葉に眉を潜めながら、俺は細剣少女の武器を取り上げんと攻める。こういう話を聞かない手合は、大人しくさせるに限るからだ。

何より、サウザナのことを侮辱するのは許さない。

細剣少女も大きく目を見開きながらサウザナを受ける。そのまま力任せに剣を弾いてやろうとする俺だったが、何故かサウザナは俺の意志とは違いそのまま剣戟へと移行した。

『はっは！ 久々、本当に久々に一緒に戦える！ たまらん！』





宙に浮かんだ剣に手を伸ばすのだが、それより早く細剣少女の足が仕返しとばかりに伸びてきた。

細く、しなやかな白い足が腹に向かって放たれるも、サウザナでそれをガード。剣だけでなく体術もいける口か。

再び距離を取る。

すでに細剣少女の手には獲物が戻っており、このままではさっきの繰り返しになりそうだ。

となれば、次の一手はツギハギを——使おうとした所で、展開しようとした規模以上のタンクルが手元に集まってくる。

違う。タンクルはすでに部屋の中に充満していた。

発生源はあの樽男。理由はわからないが、その体からタンクルが溢れ出している。

俺が行った行為はタンクルという名の油の中で火種を作ってしまったかのように、生み出した力が一気にその勢力を増して暴風域となつて室内を荒れ狂う。

渦巻いた食堂はテーブルや椅子など、あらゆる家具などを部屋中に浮かせ粉碎しながらなおもその暴威を増していく。

（使おうとしたツギハギが、勝手に変えられた？）

「んなっ！ この街リアクター機能してないの？」

(また訳わけらん単語が……)

細剣少女が咄嗟に従業員の少女の盾になるように動く。けど守りのために盾や壁のツギハギを使う様子もなく、己の肉体で庇う状況だろう。

『大丈夫、私が高んとかするから。——抜剣《ブレイド》・ウインズノア』  
宣言と同時に、サウザナの姿が変化する。

折れた刃、いや剣身を包み込むようにサウザナがタンクルによる外装をまとつていく。

灰色の刀身は白と緑を基調とした、どこか儀式剣にも似た優美な装飾が施されたものへと変わっていった。

口を開けて惚ける俺に、サウザナは優しげな声ですべきことを告げた。

『説明は後、あれを抑えるわよ』

「お、おうー」

俺がやったのは単純明快、ウインズノアと呼ばれた剣を樽男に向けて振るだけだ。

それだけで途端に嵐は止み、宙を舞う家具達は次々と床に落ちてくる。同時にサウザナは元の折れた剣に戻り、樽男も床に倒れ伏した。

『ふっふっふ、風を支配下に置く剣の前じゃこんなのそよ風にもならないわ。褒めて褒めて』

表情があればきつとドヤ顔をしているであろう得意気なサウザナ。やり遂げたことに代わりないので、俺はその柄を撫でながらサウザナを労う。

「ああ、よくわからんが、お前が頑張ってくれたことは理解したよ。ありがよな」

『んふふー♪』

「収まった、の？」

「う、ううん……………」

『原因はその子だね。ちよつと失礼』

目を回しているのか、意識を朦朧とさせている樽男。その顔を、勝手に動いたサウザナが折れた剣で刺そうとして…………

「おい、何する気だ」

『え？ 迷惑かけたんだしその分のお返しでも…………』

「いいから、俺に被害ないから、もつと安全に！」

『はーい』

いちいち注意しないと怖い剣である。周囲全てが敵にでも見えているんだろうか。

…………いや、なんだかんだ責任感があつたサウザナが国を出奔する時点で察せるかもしれない。

改めてサウザナは剣の面で樽男をこつんと叩く。

そこから樽全身にタンクルの模様、呪紋が広がっていく。

封印……いや、抑制や制限の効果があるツギハギが叩きこまれるのを見やり、一安心するように息をつく。

処置を終えたと思いきや、サウザナの刀身にはいまだ呪紋が浮かび、明滅を繰り返している。樽男も同様だった。

樽男が何か言った気がした。疑問を口にするより前に、ふと耳が何かを捉える。

目を向ければユカリスがこちらへ飛び寄ってきた。

バスタオル姿なのと髪から水滴が垂れていることから、風呂の中に落ちてしまいがらも俺の後を追って来たのか？ 悪いことをした。

慌てて来なくても良かったぞ、と安心させるように笑みを向けながら手を差し出し、彼女の足場を用意してやる。

「ね、ねえ……………」

「うん？」

ユカリスを手の上から肩に乗せながら、話しかけてきた細剣少女に振り返る。

何やら彼女はちらちらと目線を上げては落とすし、泳ぐように動かししている。ここにきてようやく俺は細剣少女の顔をゆっくり眺めた。

今の俺よりも少し下と思わしき細剣少女の可愛らしい顔立ちに朱が混じるのを見て、今ならいけるかとサウザナを手放し両手を上げた。

その行動に、細剣少女だけでなく従業員の子も悲鳴にも似た声を上げた。

「ちよ!?!」

「な、何を……」

「誤解してると思ったからな。こうすれば話を聞く気は出ただろう?」

「……………」

「俺は悲鳴を聞いて駆けつけて来た。君もそうだと思うんだが、それなら俺達が戦う理由はない。剣を引いてくれないか? アクシデントはあったが、何があったのかを聞くべきはそっちだ」

言いながら従業員の少女に目を向ける。話を振られたことに動揺しているのか、口をまごつかせるだけで説明をしてくれそうにない。やむなく、少し語尾を強めて言う。

「従業員の子! どうして悲鳴を上げた?」

「あ、ひゃい! え、と。暗い中から雨に濡れた大きな樽の人と、なんか怖い雰囲気を感じて見てびびくりしちやっただけです!」

「聞いたな? つまり、俺は不審者なんかじゃ——」

「たった今変質者にランクアップしてるでしょう!」

顔を赤くした細剣少女の剣が示す先は俺の下半身。……どうやらさっきまでの戦闘で腰に巻いていたタオルが落ちてしまったらしい。

慌てず騒がず、サウザナを引き寄せ見えないように隠す。

こういう時は慌てて弁明した結果、より被害が大きくなると俺は痛みを伴って知っている。だから逆に堂々と行動したほうがスムーズに行くのだ。

盛大に尻を晒してはいるが、逆になるよりはマシだ。

『待って、私に位置が危ないことになってる。こういうのは人前じゃなくて、二人きりならやぶさかでも……』

「黙ってる。そういう趣味に思われる」

『私はそういう趣味でも』

「お願いします、沈黙してください」

切実に。

「とりあえず、着替えてきていいか？」

「……そうして。今、謝るに謝れない」

いきなり襲いかかってきた割に、案外良識のある子であるようで何より。

『あ、もうちよつと待って。まだ——』

背中に突き刺さる視線を無視して踵を返し、割り当てられた部屋に戻ろうとした、そ

の矢先だった。

サウザナの静止と同時に、硝子が碎けるような破砕音が室内に響く。

音源に目を向けてみると、その眼に映るのはさつきまで倒れていた樽男が宙に浮かぶ姿だった。

男自身、気を失ったようにぐったりとしている。なのに可視化した紫紺のタンクルが頭を持ち上げるかのように浮かんでいた。

いや、あれは樽が体を引っ張っているのか？ 頭を持ち上げられているようにも、別々に機能しているかのように見える。

「ちよつと、一体どうなってるの!？」

「サウザナ、説明!」

『体に悪いタンクルを発散させてるの』

「さつきの封印を打ち破ってるのか!」

「そうなるよ、どうなっちゃうの!？」

『爆発します』

「え?」

光が食堂内を包み込む。

直後、店ごと吹き飛ばすかのような熱波と衝撃が周囲一面に広がっていった。



## 4. 遅れた自己紹介

「…………ふはあー！」

崩れたテーブルの中から這い上がる。途端、冷たい雨が体を打った。

周囲を見回してみれば、室内部分は全壊し天井の一部がなくなっていた。雨雲のせいで夜を照らす瞳月《どうげつ》の光も届いていないが、松明とは違う白い明かりが代わりに視界を確保していた。

崩落に巻き込まれる覚悟もしていたのだが、店の奥である宿の部分に被害はあまりなく存外被害が浅かった。

『みんな無事みたいね』

「店以外は、な。けどそんな小さい威力じゃなかったはずだけど……」

店どころか周囲一体を吹き飛ばしても余りあった。

咄嗟のツギハギで爆発に指向性を持たせて空に打ち上げられたのは幸いだが、それにして二次災害が小さい。

食堂は壊れても、奥に配置された調理場や宿舎には被害が届いていない。いくら爆発に指向性を持たせたと言っても、余波による衝撃は生まれるはずだ。

なのに、ツギハギの行使がスムーズで進むべき道に誘導されたような気がする。まるで見えない境界でもあるようだ。

『へー、ここはリアクターもかなり上質みたいね』

「リアクター？ それは……つくしゆ」

ただでさえ服を着ていない全裸であることに加えて雨に打たれた体が冷える。我慢できずにくしやみをした俺に、かけられた声があった。

「お見事。まさかあの規模のタンクルの発露をここまで抑えるとは」

雨が止んだ。

目を向けてみれば、細剣少女よりもさらに年下に見える銀髪の少女が俺を傘の中に入る姿が目に入る。止んだのではなく、遮ってくれていたようだ。

少女達やユカリスもむくりと起き上がって来る中、俺は傘を代わりに持つてやりながら立ち上がる。

「君は？」

「いや失礼、名乗りが申し遅れました。私はアーリイという名を頂く者です」

アーリイと名乗る、子供にしては流麗な口調の少女が白いスカートをつまみ、優雅に一礼する。ご丁寧に、と頭を下げるものの胸中は疑問でいっぱいだ。

「問いを抱くのは当然のこと。ですがその前に、お着替えしてきては？ そのままでは

風邪を引いてしまわれる」

口調への疑問は一瞬で吹き飛んだ。今俺は、子供の前に全裸で立っている。教育上非常によくはない光景を認めながら、傘をアーリーに返す。

周囲を探ってみるが大事な部分を隠していたタオルは傍になく、無言で踵を返した。大きな被害があつたのは食堂だけで、宿部分である奥側にそう被害はない。今はそれだけが俺を慰めてくれる。

無事だった部屋へ戻る中、いつの間にか隣に並びこちらを心配そうに伺うユカリスの姿。小さな小さな手を俺の頭に伸ばし、撫でるように動かした。慰めてくれてるらしい。

何が起きたのかを説明してはいないのだが、察してくれたのだろうか。

その行動に涙腺が大いに刺激される。サウザナを握る手が緩み、涙と落としてしまっ  
そうだった。

「やばい、涙出そう」

『それ、私の台詞よ』

「一緒に泣こうか？」

『貴方の泣き顔を他の誰かに見られたくない』

「ユカリスには見られそうだけど」

『あの子はノーカン』

頷き、顔を俯かせる。

(頑張った、頑張ったよ俺……)

与えられた短い時間の中で出した結末に、頬を伝うものがとめどなく溢れていた。

色々込み上がる抑えながら着替えて食堂へ戻ると、そこには元通りになった食堂が出迎えた。

そう、元通りになった食堂だ。

「え？」

「ああ、お帰りになりましたか。片付けはしておきましたので、適当な場所へ座るのがよろしいでしょう」

爆心地となった現場には傷跡一つ残されておらず、完璧な修復が行われていた。片付けたとアーリイと名乗った少女は言うが、そんなレベルではないと思う。

体を拭いて着替える時間なんて、十分もなかったぞ？

口をあぐりさせながらも、用意された椅子へ座る。テーブルには、先程の面々が集まっていた。

「幸い閉店時間かつこちらの店主は所要で出かけておられたようで、あの被害には巻き込まれておりません。実質的な被害はゼロではありますが、私は騒ぎで戻られた店主と

話があるので、奥に籠もります。しばしご歓談を」

「あ、待った。店主が居るなら俺も謝罪に——」

「では後ほどに。今は他に説明すべき方もおりましょう」

そう言つて店の奥へ入つていくアーリイ。

彼女がいなくなり、沈黙が場を支配する。打破したのは、細剣少女だった。

「初めまして、ナツキと申します。さつきはごめんなさい。悲鳴の先に、手を掴んで動きを止めてる上に武器を持った全裸の奴が居たから反射的に……」

開口一番に頭を下げるナツキ。

落ち着いて話を聞いたり考えてみれば、自分と同様に悲鳴を聞いて駆けつけたのだと理解したらしい。

聞きたいこともあつたが、ひとまず俺はナツキの謝罪を受け入れた。

「こつちこそ急ぎだったといえせめて下くらい履くべきだった、すまない。店の子も、なんかこつちが暴れちやつたみたいで……」

「あ、いえ、誤解を広げてしまった私が悪いので。あとアーリイさん、お店のこともありがとうございました！ 夕飯、豪勢なの用意して持つて来るので少々お待ちください！」

「……………」

騒ぎが収まった後、従業員の少女が夕飯を奢ってくれろということになり、俺達は相席でテーブルを囲んでいた。

建物が壊れ雨によつて水浸しになっていた床も綺麗になっている。まるで時間が巻き戻ったかの如く、最初に訪れた時のような姿がそこにあった。

粉碎したはずのテーブルや椅子を直したということだが、アーリイにとつては人間の傷を治すよりは簡単ならしい、と従業員の子が言っていた。

詳しくは知らないが、壊れても元に戻るツギハギがこの食堂で利用されているらしい。

しかも従業員の子が不満を言うでもなく、説明を受けているであろう店主や周囲の家屋からの文句がないのはひとえにアーリイへの信頼とのこと。

つまり彼女は鶴の一声を持つ人物というわけだ。……慣れているのか？

従業員の子は人数分のコップに注がれた水を置いて、厨房へと戻っていった。

その後ろ姿を眺めながらコップの水で喉を潤し、サウザナにこつそり尋ねる。

(サウザナ。そういうツギハギってあるのか?)

(オリジナルでツギハギを作る子もいるから数も多岐に渡るし、その一環だと思う。どちらにせよ、不思議ではないわ)

(だとしても、壊れた建物が一瞬で直ったのはすごいな)

(それは建物自体がタンクルで補強されてるせいね)

(建物が?)

(材料の中に仮想設計図を仕込んでるからよ。簡単に言ってしまうえば、材料に直接呪紋を刻んでおけば即座に修復が可能なツギハギ。その代わり何かあつてタンクルが消えたら普通の建物になつちやうけど)

ツギハギも進化したもんだ。気になつてきたから調べてみるとしよう。

俺は椅子から立ち上がり、この現象を構成するツギハギの起点を探る。別に隠されているわけでもなかったそれは、食堂内の中心部に作られていた。

それに手を触れて構成を調べる。

〈変化〉〈設計〉〈固定〉〈復元〉〈再生〉〈流動〉……他にも色々あるけど、簡単に設置している割に扱えるのはそう多くなさそうだ。

何せ、起動のために大量のタンクルを使う。気軽においそれと使える量ではないはずだが、設置者であるアーリーという少女にとってはいち食堂に置ける程度のものでしかないというわけだ。

疑問が済んだ俺は席に視線を向ける。次に気になるのは当然樽男。彼もこのテーブルに鎮座していた。

二対四つの視線にさらされた樽男は、その視線を鷹揚に受け止め自己紹介をする。

「わたしはダルメンと名乗る旅の者。そして、わたしも謝罪を。本当に申し訳なかった。何の関係もない店と君たちを巻き込んでしまつて……」

『手つ取り早さを重視して、こつちも力任せにやつちやつたからおあいこよ』

張りのある声音には力があり、謝られてゐるのに自然と体に力が入つてしまう。

思わぬ圧を感じながらも、ナツキと同じくもう気にしてないと謝罪を受け入れる。

俺達は場に駆けつけただけで、流れのままにここにいる。ケガもしてないし、あまり被害を受けた実感がないとも言えた。

が、それ以上に聞くべきこともある。

「その……貴方はどうして樽なんて被つてゐるんですか？」

「敬語は結構。ありのまま、自然のまままで接していただきたい。樽に関しては、これがわたし、わたしは樽を被る者だから、とお返事しよう」

「えつと、宗教上の理由で、か？」

「特に信仰はしていない」

「そ、そうか」

これ以上突つ込むのは野暮な気がする。

妙な空気が蔓延し、気を紛らわせるように水を飲む。……あ、なくなつた。

「えつと、さっきの声……識世だつたんですね」



話題を変えようと、ナツキがサウザナに反応する。さつきも喋っていたのだが、聞こえてなかったのか。

俺は腰に吊るした鞆を掴み、二人の前に見せる。この反応、剣が喋るのは識世という種族がいるため珍しがられてはいないようだ。

「ああ、俺の愛剣。サウザナだ」

「さつき使っていたものですね。折れた剣とか言っちゃって、重ねてごめんなさい」

『……………』

「サウザナ、挨拶」

『よろしく』

ナツキはきちんと謝れる良い子だ。

サウザナは挨拶を欠かす悪い子だ。

ナツキの発言については、同じことを繰り返さなければ安心だ、と考えたが俺も全裸の武器持ち男が悲鳴を上げた女の子の前に居たら同じことをしたかもしれない。

いけない。これ以上考えるのはやめよう。

『いいわよ、折れてるのは事実だし。こちらこそ女の子に粗末なものを見せてごめんなさいね』

「それ俺か？ 俺のことか？ 勝手に人のモン粗末扱いにするな。ともかく、こっちは

同じ識世のユカリス。言葉が通じないけど、表情が結構豊かだから意思疎通は出来ると思う」

俺の紹介で、肩に乗っていたユカリスがテーブルに降りて何かを話している。

ナツキは首を傾げていたが、ダルメンが何度か理解するように頷いていた。が、そのダルメンを見たユカリスが体を震わせながら俺の手を握る。

ダルメンは怯えられたのが応えたのか、心なししょんぼりしているように見えた。思ったより愉快な奴なのかもな。一番愉快なのは顔を樽で隠していることだが。

一通り自己紹介を終えた所で、それじゃあ早速、とサウザナが切り出す。

『ダルメン、貴方はこの店に入るなり強いタンクルを発したのよ。そこに関しては覚えある?』

「簡単だ、貴方に怯えていた」

「サウザナに?」

「数時間ほど前、強大なタンクルに身を竦めた。元凶を探しながらもあの場では見つからず、街に入って店に入った瞬間にその痕跡を覚えてね。反射的に構えてしまった」

数時間前ねえ。

覚えがあるかを訪ねる前に、ナツキが気になることをつぶやいた。

「リアクターは大丈夫でしょうか」

『さっきの事故で周囲に何事も無いのは、この街のリアクターが優秀な証でしょ』

俺の知らぬ話題が進む。知らないばかりではついていけないので、素直にサウザナを頼る。

(さっきナツキも言ってたけど、リアクターってなんだ?)

(今の世界の常識の一つよ。今聞くとややこしくなるから簡潔に言うけど、街の中で安全にツギハギを使うために必須のもの、とでも思って。詳しいことは後で説明してあげるから、流しておきなさい)

(わかった)

お互いにしか聞こえないやり取りで、サウザナの忠告を受ける。今の世界の常識はわからないので、サウザナに従っておくのが良いだろう。

「それにしても、サウザナさんってそんなに強いんですか?」

会話が進む中、ナツキがそんなことを言い出した。じろじろと観察するようにサウザナを眺めるナツキ。割と戦闘好きなどころがあるのかもしれない。

「ナツキは戦うのが好きなのか」

「別に戦い自体が好きってわけではありませんが、剣術を上達させるには手っ取り早い方法なので」

「その年なら十分強いと思うけどな」

いやほんと。

外見こそ何故か若返っているが、経験という意味では俺とナツキの間にはおそらく十年近い差がある。そうすることで得た強さを思えば、当時の年齢と比較すれば圧倒的にナツキが上だ。

そうやって感心するが、ナツキは不満の声をあげる。

「到達点にはまだまだだとして。貴方も倒せなかったし、風とかも斬れなかった。爆発の時なんて何も出来ませんでした」

「やわな鍛え方はしてないさ。でも爆発に関してはどうしようもないと思う。それに、ツギハギも使わず斬って無効化しようとしたのか」

「世の中広いですよ？ だってそれを出来る人を知っているのです」

「俺もそういう事が出来る奴を知らないわけじゃないが」

「なんだ、だったら別に変なことを言っていないじゃないですか。それにサウザナさんも上手く使ってた。その信頼も一朝一夕には身につかないはずですよ」

「おいおい、そんなにおだてて俺達をその気にして何をさせたいんだ？」

「素直に褒めてるだけなのに」

「てつきり改まって戦って言われると思つてな、すまなんだ、そしてありがとな」

「あ、そういう持って行き方もありましたね」

本当に気づいていなかったようで、ナツキがぼんと両の手の平を合わせ納得したように頷き、キラキラとした目を向けてくる。藪蛇だった。

「ナツキ君はどちらかと言えば競い合いを重視していると見える。少しは構ってあげてもいいのではないかね？」

「考えとく。けどダルメン、いくら警戒していたからって人が居る場所であの爆発はま  
ずい。どんな相手を想定していたんだ」

『アクターを常時展開しているもの。よほど気が抜けてないんじゃない？』  
「アクター……？」

ダルメンは樽の下部へ手を当てる。おそらく口元へ手を持っていつているのだろうが、やはり樽の印象が強くて困る。

俺のつぶやきを質問と思ったのか、サウザナが説明をしてくれる。

『アクターは決まった形にタンクルを流して、それに合わせて効果を発揮する形式のツギハギ。細かい制御とかしなくても扱えちやうのよ』

いわゆる外装《アクター》というものであり、決められたことしか出来ない代わりに出力も高いタイプのツギハギ使用のようだ。

『ちなみに内装《アバター》の場合はアクターほどの出力は出せないけど、決められた形がなくて自由度が優れているわ』

「ふうん。なら俺はアバターに分類されるのか」

指先に軽く炎を灯す。そこから炎の色を緑にしたり青に変えて遊び、最後にそれを氷漬けにして炎の形をした氷を作ってみせる。

それをコップの中に入れ、カラカラと音を鳴らすように回す。

氷の一角から溶け出るように漏れる水が適量溜まらせると、軽い風を起こして水だけを浮かび上がらせ、口の中を含む。制御に支障なし、と。

氷と水を用意するだけで済んだにも関わらず、わざと遠回しする工程を一瞬のうちに行ったツギハギに二人は目を大きく見開いていた。

「どうした？ 今のご時世、ツギハギ使えるのはさして珍しくないだろう？」

空になったコップに、備え付けの水瓶に入った水をそそぎ、飲み干す。

さつき飲んだ時もあったが、質が良いのか冷やさずとも美味しく感じる。湖の街と呼ばれているだけあって、水に関しては上質なものが流れているのだろう。

少なくともツギハギの氷から作った水よりはずつといい。

ナツキが目を開閉させながらコップを見やる。

「ツギハギを行使する速さに驚いたんです」

「そんなもんかあ？」

褒められて悪い気はしないが、体の調子を整える一環でのツギハギ行使だったので少

し照れる。

気分を良くした俺は、今度は一塊ではなく微細に砕いたものと分けてナヅキとダルメンのコップに入れてやる。余計な世話かもしれないが、いらなければ俺が代わりに飲んで追加で水を頼めばいい。

二人からの視線をくすぐったく感じていると、そこに拍手の音が割り込んだ。アーリイが戻ってきたようだ。

「若さに見合わぬ精細なコントロール。お見事です」

すみません、なんか若返っちゃったので見た目より大人です。

でも子供に若さって言われても説得力はまるでない。

「アーリイ、だっけ。用事は済んだのか？」

「はい。今回のことは私の実験の失敗、ということ通していただきました。ですので補修のためのお金の請求や宿を追い出される、といったことはないのご安心ください」

「む、それはそれでわたしの挟持が揺さぶられる。迷惑をかけたことに違いはないし、何かしたいところだが」

洗面を作っていると思われるダルメンは、腕を組みながらアーリイへと視線を向ける。今更だが樽を被った男に対してみんな冷静すぎではなからうか。

「話を聞けば、誰が悪いというわけではなりません。さ、今は全てを料理と共に飲み込んでください」

しつかりした子だなあ。

アーリイは料理も一緒に運んで来てくれたようで、従業員の少女と一緒にテーブルの上に配膳していく。

ここまで世話になった以上、恩返しをしないと気がすまない。ナツキ達も同意見のようで、アーリイに何か出来ることはないかと詰め寄っている。

当のアーリイは考えこむような素振りをみせなら、ダルメンに目を向けていた。やっぱり一番気になるのはこいつだよな。

今は食事をこゆつくり、と言ってアーリイは去ろうとするのだが、その背をダルメンがじつと見据えている。何か言いたげだが、言葉が出ることはなかった。

「アーリイだっけ。ダルメンに用事があるんじゃないのか？」

樽越しに俺を見るダルメン。アーリイは歩みを止め、俺に振り返った。

「部外者である私が団欒の場に入るわけにはいかないでしょ？」

「いや、俺達はつきさつき出会ったばかりだからある意味アーリイと変わらない初対面同士だよ。それに君は恩人でもあるし」

「色々あって、ちよつと相席してただけなのよ。どうせならアーリイもどう？」



ナツキがそう言つてアーリイを誘う。

しばし考えこむように綺麗な形をした顎に手を当て、眉根を寄せる。見かけが子供のアーリイがそうすると口調も忘れて微笑ましくなってしまう。

「では、お言葉に甘えます。見たところ皆様旅人のご様子。私で良ければ、その足跡を休める場となりましょう」

その辺から適当な椅子を借りてアーリイの分を用意する。俺達しか客がないし、これくらいいいだろう。

「そう言えば、名をお聞きしておりませんでしたな。どう呼べばよろしいでしょう?」

「ああ、そう言えばそうか。右回りにナツキで、ダルメン。こっちがサウザナでポケットに居るのがユカリスだ」

「自分で言いたかつたんですけどー?」

「流れだ、許せ」

「許します!」

にっこりと許すナツキとの掛け合いに目を細めながら上品な笑みをこぼし、アーリイは改めて俺に目を向ける。

「なるほど。それで、貴方のお名前は?」

その質問を待つていましたと言うように、俺はあの時サウザナに告げられなかった名

前を明かした。

「俺はネムレス。ネムレス・ノーバデイだ」

名を告げてアーリイにも同じように氷入りの水を用意する。互いの自己紹介が終わり、自然と俺達四人はコップを打ち鳴らした。

## 5. 今昔ツギハギ話

『ノーバディってどういうことですかー。サウザナさんという超絶優秀素敵最強剣で頼もしすぎるバディがいるのにノーバディってどーうーいーうーこーとーでーすーかー!』

「あーうっせうっせ。お前は相棒なんて枠を超えてるから、バディなんて言葉じゃ表しきれないんだよ」

『えー? ほんとにー?』

「本当本当」

名乗った俺に対してねちねちと文句を言うサウザナをあしらいつつ、焼きたてのグラタンへスプーンを差し込む。

香ばしく焼色のついたチーズやホワイトクリームと鶏肉の匂いを堪能しながら、口に運ぶ。うん、熱さも相まって、良い味だ。

「それにしても、アーリイが街で有名な小さな賢者だったとはね。小さな、つてのが文字通りとは思わなかったわ」

野菜を巻いた鳥の唐揚げを頬張りながら、ナツキがアーリイに目を瞬かせている。年

下のせいかな、アーリイには敬語を外しているのを見るとこの口調が素なのだろう。

別に俺は年下から敬語を使われなくても気にしないが、本人がしない以上はそれを強いることはやめたほうがいいか。

それに小さな賢者と言えば先程使っていた即席風呂の製作者であり、他にも湖の街にある入浴に関連する紋具《メダリオン》を開発したとして有名のようだ。

元はこの宿を利用する中、世話になつていいる店主達へのサービスとして施したものが徐々に知られることになり今では街全体に広まつていたと言う。

それが三年前のこと。

十歳にも満たぬ年齢でその技術を持つ彼女は、類まれな紋具職人《マイスター》という証明であろう。

「でも、なんで風呂？」

「この街の水の質が良かったのと、私の好みです」

「あーわかる。お風呂、とても良かったわ」

「ふふ、そう言っていただけのなら骨を折った甲斐もあります。それに作る紋具は風呂のものだけではありませんので」

三年前で十歳にも満たないってことは、今だと十歳前後か？

こういうのを天才……と言えればいいのだろうか。もつと世間が注目してもいいよう

な気はする。

と言つても注目という意味では、この場では圧倒的に一人に絞られてしまうのだが。「ダルメン。えっと、上手く食べられてるか?」

「うむ、気になされるなネムレス君。これは美味いぞ。立ち寄る予定はなかったが、こんな出会いがあるのならはその縁に感謝しなければな」

ダルメンである。

食事を口があると思われる樽部分へと持つていくだけで、阻まれるはずの壁を置き去りにして料理が消えるのだ。

ゆらゆらと樽が揺れているのを見れば咀嚼、味を楽しんでいるのはわかるのだが、異様としか言いようがないので反応に困る。

でもナツキもアーリイも気にした様子はない。未来つてなんだ?

(なあサウザナ。今はああいうのが奇妙に映らない世界なのか?)

(この世界の種族も色々増えたしねー。外見で判断するのは悪くないけど、旅をしていたり人と多く接しているのなら野暮なことに感じると思う)

限度があると思うのは俺が過去の人間だからだろうか。

樽を被つてるだけで、ダルメンは食事のマナーも悪くないし食い散らかすということもしない。

時折ユカリスが毎度通じない言葉でちよこちよこ何か話しかけたり、果実を刺したスプーンを抱えてダルメンに差し出したりしているのにも、朗らかに対応している。

彼に問題はない。ただ、食事の取り方が俺の常識と違っているだけだ。

俺は古い人間、古い人間と自分を納得させる。今はそういう細かいことは忘れて、食事を堪能するでしょう。

「ナツキはその年で一人旅か」

「はい。一人旅をしたのは大体一ヶ月くらい前からで、旅自体はおじいちゃんと定期的にはやっています。おじいちゃんっていうのは私に剣を教えてくれた人で、今はおばあちゃんと家族団欒させたいから、無理言って家に戻ってもらっています」

「家族思いなんだな、良いことだ。旅が定期的ってのは？」

「ちよつと長期な旅行って感じです。一年の大半で世界を巡って、時折家に帰っています。累計して三ヶ月くらいは実家に居ますかね。でもやっぱり家を離れる期間のほうが多いから、二人にはちゃんと夫婦の時間を過ごして欲しくて」

お爺ちゃんお婆ちゃんつ子ってことか。微笑ましい。

「それでもその年で旅なんて色々大変だろ」

「最初はやっぱり大変だったけど、三年も経てば流石に慣れてくるものですよ。まあ、おじいちゃんが居ないから面倒なこともあります」

「その外見だと妙な奴らを引き寄せそうだしな。旅自体を始めたのはいつなんだ？」

「確か十歳の誕生日に、おじいちゃんの旅に連れてつてもらったのが最初だったかなー」

「そんな小さい頃から………三年前に十歳？　じゃあ今十三歳なのか？」

「何かおかしいですか？」

信じられない思いで隣に座るナツキを見る。  
波を打つ艶やかな黒髪に瞳月の輝きの夜を思わせる瞳。十二分な可愛らしさを引き立てるところと表情の変わる愛嬌のある容姿。

今しがた聞いた年の割に、胸元を押し上げる膨らみは豊満。かつスリットのあるスカートから覗く脚線美。服が弛み以外で不規則に盛り上がっていないなら体も引き締まっているだろうし、全体的に十代前半の少女とは思えない体格だ。

言ってはあれだが、同年代と思われる従業員の少女と比べるとその差がよくわかる。彼女の名誉のために言えば決して貧相というわけではなく、歳相応というやつでありナツキの発育が他と比べて良いだけだ。

肉付きも良く、成長を阻害しない程度に鍛えられた結果仕上がった肉体というわけか。

「現代って、飽食の時代なんだな」

「女性を前にその感想を抱くなどは申しませんが、視線は取り下げたほうがよろしいか

と。女性というのは男性が思う以上に視線に敏感でありますので」

『うわー、ネムレスさんひつくわー』

「そういう感情で見てないっつーの。ほら、ナツキだつて不快に思つてないだろ?」

ナツキは俺の言葉の意味がわからないようだ。そのままの君でいて。

実際俺はちゃんとナツキの目を見て話している。それでも視界の中にはナツキの体の線を感じてしまうのだから、俯瞰の視点から見えてしまうのは仕方ないのだ。

逆にナツキから俺についても質問されたので、当時のことを振り返り故郷の村から出てサウザナの言葉に従つてこの街にやってきた、と適当に話を弾ませる。

あまり深く突っ込まれると困るが、会話をしながらも『今の俺』の立場を会話の中で作り上げていく。

流石に五百年前から時間を超えてやってきました、なんて言うほど緩くはない。

そうこうしているうちに料理もあらかた平らげ、食事はお開きとなる。満腹で満足だ。

『そういえばアーリイ、この街のリアクターは貴女が用意したの?』

最後にアーリイに質問をしようとした矢先、また気になる単語がサウザナの口から漏れる。



「はい。私が賢者と呼ばれたのも、それが一番の理由でありましょう。本場である五領国《ごりようこく》謹製とまでは行きませんが、生活を送る上では十分ツギハギの使用に耐えられるものかと」

『謙遜ねえ。ダルメンのあのタンクルを散らせるリアクターなんて、五領国にだって多くないわ。ねえダルメン、貴方今日明日にはこの街を出て行く？ それとも留まる？』

「借りを返すアテを持たぬまま出ていくのは、わたしの主義ではないよ」

「先に言われたけどアーリイ、俺達に出来ることってないか？ 流石に何もしいって  
いうのは不義理だからな」

「私としては見返りを求めたわけではないのですが……そうですね。それでは明日。着いて来て欲しいところがあるので、ご一緒に向かってくれませんか？」

「護衛ってことね。わかった、じゃあ明日ここで待つてるわね。……それじゃあ一旦ここで。おやすみなさい」

「ああ、おやすみナツキ」

ナツキが一足早くその場を去っていく。

出会って一日も経っていないというのに、まるで気心知れた仲のように挨拶を  
しまつたが、これもナツキという少女の人徳というやつか。

『行きましょう、ネムレス、ユカリス』

「ああ。ダルメン、また明日な」

サウザナに急かされるように俺はその場を後にする。アーリイはこの街の住人でありナツキもまた同じ宿だからともかく、ダルメンもここに泊まるのだろうか。

後ろ髪を引かれながらも、俺は店主の元へまず向かう。

すでに来ていたナツキや後から来たダルメンと一緒に店主に謝罪し、受け入れてくれたことに感謝しながらそれぞれの自室へと戻っていく。

ユカリス用のベッドは謝罪と合わせて店主に頼んで用意してもらったので、彼女もぐっすり安眠がとれた。

◇

翌日、俺達はアーリイが御者を務める馬車の中で揺られていた。昨日の恩返しをするべく、彼女の外出に護衛をして付き合っているためだ。

元々アーリイは隣町へ行く商人の馬車に乗ってその場所へ行くのが基本だそうだが、今回は俺達というイレギュラーが居るので何か起こるんじゃないか、という期待から馬車をレンタルしたらしい。何か大きいものを持ち帰る、ってことだろうか。

一緒に付いて行ったナツキ曰くタダで貸してくれたとのことなので、街にとつてのアーリイの重要度、というか存在感がわかる。

みんな仲良く責任取りましょう、と語るナツキに好感を抱き共に連れ添っているが、

道中賑やかになるのは悪くはない。

ナツギがアーリーの隣でユカリスを交えたガールズトークをする中、俺はダルメンの隣に座る。

昨日のダルメンは料理を堪能する美食家みたいになっていたので、個人を知る会話はあまりできなかった。

樽を被ることにについてはスルーして、他の色んなことを聞いてみるとしよう。

「ダルメンはどうして旅をしてるんだ？」

「少し、捜しものを。ただ、雲を掴むような難解な話でもあるのだけど」

「どんな奴だ？ こいつは割と顔広いし、案外知ってるかもしれないぞ」

寝ているのか、会話に参加せずに俺の腰で黙っているサウザナを指しながらダルメンに提案する。

人生……剣生経験という意味ではこの場の誰よりもサウザナが積んでいるはずだ。

「おお！ 君からそう言ってもらえるのはありがたい。どう頼もうかと思案していたところだ」

「そんな考えなくても、気軽に言ってくればいいのに」

「ネムレス君はそう言うのか」

「なんだ、意味深に」

「恐縮……いや違うな、恐れ多い。私は彼女のことをそう思っている」

「確かに、剣がツギハギ使うなんて珍しいとは思うけど、そんな距離開けるほどのものじゃないと思うぞ」

「ふふ、君たちはとても近い距離なのだね。羨ましいというべきか、ご愁傷様と……いや、これは天罰ものだな。すまないがあの方に言うのはどうか止めて欲しい」

本当に恐縮している様子のダルメンに、逆にサウザナの一体どこにそんなものを感じるのかが気になった。

そこをついても答えてくれるとは思わないし、別の話にしたほうがいいのか。

「そういやダルメンはアクターを使うって言ってたな。俺は……アバターばかりだから、あんまり詳しくないんだ。少し教えちゃくれないか？ サウザナへの仲介の対価ってことで」

「それくらいなら喜んで。ちなみに、ネムレス君はどうツギハギを使っている？」

「俺の使い方になるけど、こうだな」

突然の申し出に軽く眉をひそめるが、特に断る理由もない俺は承諾してツギハギを使う。

中空に向けて右手を伸ばし、指先に灯る光の軌跡が虚空に線を刻み凶形となって描かれる。同時に左手に似たような円球を作って浮かせた。

「術の核を円の構成で作るのは基本だね。古くから伝わるやり方だが、自己流のほうが多い昨今では逆に珍しい気がするよ」

「師匠が古いからな」

『古娘でーす』

「起きてたのかよ。紛れてこないで、大人しくしとけ」

「あ、それツギハギですか？」

突然割り込んできたサウザナをあしらっていると、ナツキが食いついてきた。

規模はちっちゃいですけど、大丈夫かなあ？ と何か言っているが、アーリイが大丈夫ですと返していた。今の世の常識を知らない俺はそれに言及せず答える。

「ああ。アクターを少し教えてもらおうと思ってるな。代わりに俺のアバターを紹介するところだ」

「なら私も聞いていいですか？ 一応ツギハギこそ使いますが、剣術に比例すると自己流なのできちんとした人に見て欲しくて」

「大丈夫だ。ダルメンもいいか？」

「わたしに断る権利などないさ。ネムレス君の好きにするといい」

俺は口元を緩めながら説明を続ける。

「昨日やったように、炎とか氷にしたり、色をつけたりしたろ？ そうやって変化させる

ための力の元になるものを素材って呼んでる」

「タンクルとは違うんですか？」

「タンクルはあくまで動力。その動力を望むものに変える力、って言えばわかるか？」

頷くナツキ。

ダルメンはすでに知っているし、ナツキへの講義風にしたほうがいいな。

次に中心部に光、という文字を刻む。同時に左手に浮かぶツギハギ球が白く染まり、純白の輝きを放ち始めた。

本来は無色透明の球が浮かぶのだが、ここはわかりやすく視覚化させている。

その光に誘われたのか、ユカリスが興味深そうにしながらこちらへ飛んでくる。アーリイを放っておくのもあれなので、サウザナに彼女を見ておくよう頼んでおく。

「明るくしてるけど、基本的にこれがタンクルだけの状態。ここに変化を入れると……」

円の図形の中心に線を引き、半円を作る。分類は〈変化〉だ。

すると光球がその形を変え、一本の花を描いた。造形自体は適当に記憶の底から掘り出した、ユカリスと出会った場所にあったものだ。

ぱつと花咲く笑みを浮かべるユカリスにそれを渡しながら、説明を続ける。

「決まった形はないから、変化させるものは自由自在だ。想像力次第でどんなものにもなるぞ。もちろん〈変化：花〉といったふうに特化した素材を持つてれば、より精密な

ものに仕上がる」

次いで半円を消し、今度は円が三つに分かれるように線を作る。

内容は〈変化〉〈付与〉だ。するとユカリスの持つタンクルの花に彩りが加わり、色鮮やかな輝きを放つ花へと変化した。

「ちなみに〈付与〉って書いてるけど〈色彩〉とかでも代用は出来るな。打ち込む素材に關しては使い手次第だから、結果が同じでも過程が違うってこともある」

「いちいち文字を書いていては、戦闘中邪魔になりませんか？」

「いやいや、今回はわかりやすいようにしているだけさ。戦闘中とかに使うなら、文字なんか刻まなくても使えるよ。あくまで説明のためだから、内容だつて人によって違うし」

わかりやすく〈変化〉とかにしているが、中には〈チェンジ〉とか〈パワー〉とかも見たことがある。意味合いが同じなら字面が変わろうと問題ない。

「そうなんですか！ わざわざわかりやすくしてくれたのにすみません」

「いいさ、俺も事前の説明が足りなかった。んで、今わからないことはあるか？」

「はい。素材、というのはどうやって手に入れるんでしょう？」

「自分の中にあるタンクルと違う、世界に満ちるタンクルつて言えばいいのかな。まずそれを理解することが前提だ。素材はその中のそこらかしこに散らばってる。時折、自

分で素材を生み出す奴も居るけど、それは特殊な事例だから今は頭の片隅に置いておけ」

「己のタンクルと世界のタンクルを繋げて、引き出すってことですか？」

「正確には読み取る、だな。引き出すなんて真似したら膨大な供給過多で受け止めきれずに構成も体も壊れる。だから読み取って自分の中で同じものを作り上げるんだ。そうして初めてツギハギを生み出す素材になる」

「なるほど」

「でも物分りが良くてよろしい。読み取ったタンクルの中から素材を見つけられるかどうかはそいつの才能次第だけど……かなり苦労するぞ」

「ふむ、ネムレス殿は古式体系のアバターですな」

ふと、馬車が止まっていることに気づく。

すると、いつの間にかアーリイが俺達の会話に注視していた。

「おいおい、馬車いいののか？」

「それより気になったもので」

「割といい加減だな。サウザナ、悪いけど馬車頼む。講義している間、ずっと止まってるのも時間がもったいないし」

「剣が馬車の御者をするとか、流石の私もあんまり見たことありません……」



「だろ。サウザナ、出来るよな？」

『ネムレスの頼みなら断る理由はないわね。それに掴む原理を別の事象で補えば簡単。せいで、御者がいないのに走ってるなんておかしいねって思われるくらいよ』

「怪しきで声をかけられるのに十分な理由だよ」

「大丈夫、今進んでいる道はそんなに人が通る場所ではありません。その心配は無用でしょう」

どこかズレた回答をするアーリーの天然ぶりに口を閉ざしながら、諦めて講義を続ける。

しかしツギハギに古式なんてあるのか、と思つたがそういえば今は未来だったなど思い直す。

「俺はツギハギをサウザナに教わってね。古式っていうのならそういうことなんだろう。みんなは違うのか？」

アーリーの指摘を俺はサウザナを使ってごまかす。

流星に自分が過去の人間で、サウザナに召喚されて現代にやってきました、と言つても信じられないだろうし、言う気もない。そもそも俺自身死んだと思つたら未来に呼びだされてびっくりなのだ。

サウザナ自身ツギハギを使えるし、ちょうど良い言い訳だ。サウザナなら後で口裏も

合わせてくれる。

「いえ、私もまたどちらかと言えば古式でしょう。あれは多少人を選びますが、使い慣れると出来ることは多いものです。ただ、新式の場合わざわざ読み取らずとも、入手することも可能です」

「え、そんな簡単に!?!」

「はい。言ってしまうえば古式は先ほどネムレス殿が申された通り、膨大な砂漠の中から砂金を見つけるどころか、海の中に垂らした雫を探すようなものです。あと、アクターを利用したタイプも、古式ツギハギであることが多いですな」

今まで素材入手のために頑張っていたかつての俺の苦労は一体……  
やっぱ時間が経てば色々と進化するものだな。

今までわざわざ式を解明して答えを探していたのに、丸写しで済む上にちゃんと成果が身につく勉強みたいなものじゃないか。俺の時にも欲しかったなあ。

「テンション落ちたからこの辺で。ダルメン、アクターについてお願いできるか?」  
「構わない、と言いたいところだが、わたしは割と感覚派でね。ネムレス君のように細かな説明は少し苦手なんだ」

それならサウザナ……よりはアーリイに聞くとしよう。なんとなく安心感がある。

『今ひっしょーに不本意な思念を感じただけど?』

「気のせい気のせい」

気のせいだつて。

「では僭越ながら教鞭を取らせていただきましょう」

「その前に質問いいか？ 古式と新式の見分け方つてのは？ サウザナからの説明だけじゃ多分足りないと思うんだ」

「ツギハギを使えるサウザナ殿のような経験豊富な識世に教わるというのは、ある意味貴重な体験なのですが、それでもすり合わせは大事ですな。かしこまりました、それは説明を致しましょう」

「こほん、と息を一つ漏らしたアーリイがその小さな口から説明を始めた。

「古式と新式。それは世界融合以前と以後、が大まかな区別になります。ここからアクターの説明に繋がりますね。世界に満ちるタンクルとネムレス殿は申されましたが、世界融合以後はアルフューレラインと呼ばれています。アルフューレライン、つまり呪紋世界の力から素材を読み取るので、呪紋世界の住人の力……それらを鎧のように身につけ、行使することから外装《アクター》というツギハギが生まれました。もちろん、それがアクターの全てというわけでもありませんが」

アルフューレというのは、俺達の時代でもその名は存在した。

全能なる力アルフューレ。その奇跡が幾重にも細分化した欠片の力、それがツギハ

ギ。

未来では、異世界の力もまたツギハギとして組み込まれているようだ。

「異世界の住人の力を使う?」

「はい。呪紋世界の住人には『幻獣《スベルゴースト》』と呼ばれる存在がおり、アクターとは彼らを使う力をその身に宿し、模倣することを元来の意味とします。ツギハギが様々な進化を遂げる昨今では、最も自分に合う形に具現化させるものとして機能しております」

「じゃあ、俺がもし呪紋世界の住人でアーリイがそれを使おうとしたら、アーリイは俺の力が使えるようになるってわけか」

「お察しの通りです。故にそれしか行使出来ない、という縛りも加算されるのですが」

「そこは仕方ない。ようはその存在になりきることがアクターってわけだな。ダルメンみたいに持て余すほどのタンクルがあれば、より再現が完璧になる、と」  
「簡潔に申しますと、そういうことです」

なるほど、決められた力、ね。

「ナツキ、今の説明でわからないところはあるか?」

「特には。けど、ダルメンさんのタンクルが持て余すというのは?」

「おつとすまん。アクターがなりきりってことは、多分ダルメンの器より読み取ってる

ものが大きいってことだな。許容量の大きさとも言える」

「許容量？」

「自分の中に入るタンクルの器の大きさってことだ。こいつを上げるためには自然成長や例外を除けば、どんどんツギハギを使つて鍛える他ない。〈幻獣〉の大きさに合わせるために、器を広げるってことだからな。簡単に言えば、〈幻獣〉がダルメンつて浴槽の中に入つたら水の量が多くて溢れちゃうから改造して底を広げようってことだ」

「なんで風呂に例えるか知らないけど、そうなんだ……ですか。ちよつと、考えてみま  
す。ありがとうございます、ネムレスさん」

「そこはほら、アーリイから聞いたから」

「恐縮です」

「ふふ、ネムレス君は一を聞いて十を知る……いや、分析力が高いのかな？ アクターに  
ついてもわたしが補足を入れるまでもなく、十分に理解している」

ダルメンに目を向ければ、樽の模様が視界いっぱいに広がる。

目を合わせてくれているのだと思うが、やはり一瞬虚を突かれるのは許して欲しい。

「先生が良かったのさ」

「流石はサウザナ様だ」

「この謎の尊敬は一体なんだろうか。」

サウザナとダルメンの面識なんて、あの食堂での一件しかないというのに。剣と樽で不可思議な共鳴でもあったんだろうか。サウザナは渡さんぞつ。

「素材の受け渡しってどうするんだ？　せつかくだからダルメンにいくつか教授しようと思うんだが。あーでも、アバターとアクターって併用できるのか？」

「従来であればリソースをアクターに取られるので使えません、ダルメン殿のタンクがあれば多少のツギハギも使えましょう。いやはや、未恐ろしいものです。普通、アクターを使うということは才能の大半をそれに持つていかれるはずなのですが……」

アーリイから見てもやっぱりダルメンのタンクは圧倒的のようだ。

量の面で見ても、色々ぶつ飛びすぎたかつての仲間と比較しても負けない辺り相当である。

「わたしとしても、ネムレス君が使うツギハギは大いに気になるからこちらから頼みたいほどだが、この場での受け渡しは無理ではないかね？」

「では、私が中継点となりましょう。本来はもう少しちゃんとした下準備が必要なのですが、負担を私が担えば効果としては機能しますのです」

「ほー。ならあとでそいつを教えてくださいよ」

「構いませんが、素材を受け渡しただけでツギハギが使えるとは限りませんよ？　ちゃんと自分の身の丈にあったものでなければ、ツギハギが安定しませんので」

「大丈夫、これでも制御には自信あるから。ダルメンくらいのタンクルなら、多少構成が崩れても問題ないやつを見繕う。ダルメン、それでいいか？」

「……………ひよつとして、サウザン様のツギハギは彼のものなのか？」

何か唸るような声を出していたダルメンは、アーリイが差し出した手を取るのを躊躇っている。何か問題があるのか？

「厄介なものを押し付けられる、とか考えてるのか？ まあ、出会って二日と経ってないしその警戒心もわかるが」

「ああいや、特にそんなことは考えていない。気を悪くしないで欲しい」

「……………直接触れるのが駄目だったりするのでしょうかね、そういうことでしたらこういたしましょう」

アーリイは繋げていない左手をダルメンに掲げると、そこから淡い燐光が灯る深緑のタンクルがダルメンの手に絡みつく。

物理的に掴めない幻想の手を前にダルメンは咄嗟に引つ込めようとしたが、危険物に触れるかのように指先で何度かつつき、やがて納得したように握り返した。

「中継点の中継点を作ったのか」

「これならばダルメン殿も手を触れずに行えます」

俺もまた彼女の手を握ると、アーリイの周囲から展開した呪紋が俺とダルメンを取り

囲む。サウザナが『ヘー』と軽い驚きを発している辺り、こいつから見ても賞賛に値するものようだ。

「ネムレス殿。渡したい素材……いえ、覚えさせたいツギハギの構成を浮かべてください。それを、ダルメン殿に渡します」

中々良いツギハギだぞ、とダルメンを見ながらそれを頭に浮かべる。

「あの、ネムレスさん。そんな簡単に自分のツギハギを教えて良いんですか？」

「元々教えられたものだし、秘密にする理由もない。むしろダルメンのほうが上手く扱えるかもしれないから、それを見てみたいって気持ちもある」

ナヅキの問いももつともだが、本当に問題はない。

元々は仲間が使っていたツギハギだが、質を下げた劣化版であっても十二分に俺の助けとなってくれた。

巨大なタンクルを持っているダルメンなら、仲間達とそう変わりない威力をもたらしてくれるのではなからうか。

アクターに関しての講義は結局アーレイがしてくれたが、ダルメンが話を聞いてくれたからこそその情報だ。対価が釣り合っていないのかもしれないが、そこは初回サービスということにすればいい。

「ん……」



アーリイが片眉を潜める。

「負担あるか？ それなら送るのは一つくらいにしようと思うけど」

「いえ、お構いなく。初めて見る構成だったので、驚いただけです。ツギハギの違いはあれど、基本となる根幹は皆似たようなものですが、ネムレス殿のそれは別物に思えます」  
昔のツギハギだし、この構成は珍しかった——って、仲介役のアーリイには俺が渡すツギハギ全部知れるのか。

やり取りを書物に例えるなら、貸し出した本をアーリイが翻訳してダルメンに渡すようなものなのか、あるいはその本の中身を流し見程度にアーリイも知ることが出来るのかも知れない。

理解すると、俺は意地悪い顔をアーリイに向けた。

「やけに親切な理由はそれか。昨日から狙ってたのか？」

「流石にそこまでは。良いタイミングだったので思いついたまででございませす。……お嫌いになりましたかな？」

「見た感じアーリイ自身が素材を受け取るわけじゃないだろうし……でも、知ることは出来る。説明はお手の物ってか。良い性格してるよ」

「ふふ、そう言われて悪い気がしないのは、ネムレス殿の人柄でありましょうか。貴方自身、私への嫌悪を微塵も覚えていない」

「嫌いになる理由がないからな」

一本取られたらというべきか、抜け目がないと言うべきか。

感心こそすれど俺がアーリイを怒る理由はない。そもそもこれで怒るなら最初からダルメンへ素材の譲渡をしなければいいだけの話だ。

アーリイのそれは、言つてしまえば仲介料と判断したまでのことである。

「なら、今後は好きでいて欲しい。貴方とは良好な関係を築きたいものです」

意味深な笑顔を浮かべる俺たちに、放っておかれたダルメンが声をかける。

「そんなに珍しい素材なのかな？」

「ああ、申し訳ありません。すぐにダルメン殿へお渡しします」

素材の受け渡しが終わったのか、幻想の手が消える。ダルメンは樽の角度を変えて自分の手を凝視したかと思えば、今度は俺へと樽を向けた。

「単純ながら、使い勝手の良いツギハギだ。本当にいいのかい？」

「もちろん。性能は保証するから、上手く使ってくれ」

俺にはわからないが、受け渡しは上手く行つたらしい。

なのに、予想と違うと言いたげにダルメンの視線は俺に固定されたままだ。不意打ちで驚かされるでも思つたのか？ 一体何を不思議がつているのやら。

『そろそろ森につくわ。ここが目的地でいいの？』

「はい。どうやら到着のようだ。皆様、降りる準備をお願いします」

サウザナが目的地への到着を告げる。

俺達は体を解しながら、サウザナに礼を言つて馬車から降りていく。

ちなみにナツキはすでに降りており、俺の作つた花を見ながらユカリスと遊んでいた。

## 6. 技術流用

「ここが目的地？」

「はい。正確にはこの中にあるもの、ですが」

ナヅキが白い帽子（サウザナ曰くキャスケットと呼ぶそうだ）の位置を調整しながら、アーリイに確認を取っている。

それというのも、アーリイの言う目的地とは一種の洞窟であつたからだ。

整備された街道から外れ、それなりに茂みのある森の中を抜けた先にそれはあつた。馬車ごと入れそうな洞窟ではあるが、流石にここまで来てもらうわけにもいかないの外で待機してもらっている。

（ここ、まさか昨日の？）

（馬車の中に居た子供って、今思えばアーリイだったのかもね）

寝入っていたとのことだが、昨日と今日でアーリイがただの子供ではないことは承知している。

そんな子が力尽きて寝てしまほほどに、時間や力を費やすものか。

「洞窟探索ってことなら言ってくればいいのに。何をあてにしているのかわからない

けど、リアクターもない所じや危ないわよ？」

「いえ、すでに設置されていますのでツギハギを使うのは問題ありません。ほら、中を見てください」

言われて、俺達は洞窟の入口へと寄っていく。

天然のものと思われたそこには、どうやら人の手が入ったもののように暗闇を照らす明かりがいくつも設置されていた。

「これは、アーリーが？」

「はい。と言つても私は後付ですが」

「後付って？」

「元よりここには、何者かの手が入っているようなのです。私はそれを調べるためにここを度々訪れているのですが………」

「進展はない、と」

「恥ずかしながら。ですがネムレス殿達が共に調べてくれれば、何か新たな発見があるのではと思いいしだ次第です」

ペコーリと頭を下げるアーリー。別にそこまで畏まらなくてもいいと思う。

「でも、アーリーって小さな賢者なんでしよう？ そんな子が調べられない場所を私達が調べても何かあるとは思えないけど」

「多分、期待してるのはサウザナにしろ」

「サウザナさん？」

サウザナの柄を叩き、その存在を強調させる。

かつての俺が生きていた頃よりずっと以前から存在していた剣——識世だ。

知識も豊富で、俺も知らないツギハギの中に探索する上で役に立つものがあるのかもしれないとアーリイは期待しているのだろう。

「サウザナさんってそんなにすごいんですか？」

『ネムレスの前でだけです。』

「それだけじゃよくわかりません」

ナヅキに同意しながらも、アーリイとしては藁をも掴む思いなのだろう。

逆に彼女がそこまでして入れ込む探しもののほうが俺には気になる。

「とりあえず入ろうか。探しものの詳細は、後で聞けばいい」

頷きあい、俺達は洞窟の中へと入っていく。

薄暗い洞窟と思つたのは最初だけで、アーリイが壁に手をかざせば一定の距離ごとに設置された明かりが点灯し、すぐに外とそう変わらぬ明るさが視界に広がった。

分岐路もあつたがアーリイの案内もありやすい奥へと進んでいく。

特に何の障害もなく移動を続けると、行き止まりへとたどり着いた。

そこはちよつとした広場のように向けた空間ではあるが、それだけだ。奥へ続く道や何らかの部屋、地下へ続く階段といったものは何一つ見当たらない。

「アーリイ、もう行き止まりなんだけど？」

ナヅキによる当然の質問。アーリイも当然言われるだろうと思つていたのだろう、ここからです、と前置きをする。

「はい、通常であればただの洞窟。雨風をしのぐか単に洞窟好きな方しか訪れないような場所です。しかし……」

「……蓋されてるな」

「……まさか見ただけで判断出来るとは。このアーリイ、感服する他ありません」

何気ない指摘に、尊敬の眼差しを向けてくるアーリイ。

コレに関しては知つていた知識だから当然とも言えるので、その勘違いの目に気恥ずかしくなつてしまう。

『他にもあるわ。幻を見せるタイプに、施錠のタイプ。解錠だけじゃどこに扉があるかわからず、幻影を解いても扉がわからなくなる。加えて一つだけでも解除されるとこのツギハギの使い手にバレるわね』

「なんと、そこまで把握されるとは。私には最後のことはわかりませんでした」

「もう片方の解除をネムレスさん……ううん、サウザンさんに頼みたいってこと？」

「気にはなっております」

曖昧な答え。どうやら目的はこれ以外にもありそうだ、と予想する。

けど、それ以上に気になるのはどうしてこのツギハギ——正確には一対二つの紋具による鍵がここで使われているのか、だ。

そう、この仕掛けはかつて、俺達の国の保管庫に掛けられていたものと同じなのだ。正確に言えばとある場所から持ち込んだ技術である。

例え第三者が正当でない開け方で解除しても、現れるのは何もない部屋に繋がる扉だけ。

だから仮に二つのツギハギを解除したとしても扉は開かず幻影も晴れず、使い手に俺達の存在を知らせるだけ。

該当する鍵を持ってなくても、俺とサウザナからすればそれすら必要のない。

マスターキーに等しい解除法を知っているので、やろうと思えばこの洞窟に隠されたものを暴くことも出来る。出来るが、今はそれを実行に移せずにいた。

(なんで、俺達の国のものがここに?)

(考えられるのは当時の生き残りかしら。私が国を出る直前に色々あったから、そのどさくさで国の遺産の一つや二つ流出してもおかしくはない、かな? それとも残したあのせいかな? 制限かけなかったのかな)



サウザナも正確にはわからないようで、答えられるのはお互いに予想でしかない。

この依頼、アーリイへの恩返しとしか考えてなかったが、放っておけなくなってきた。ならば、選択は一つしかない。

「じゃあ開けちまうか」

「え？」

俺は紋具の力が作動する起点に向けてサウザナを差す。

同時にツギハギの解除と正当な鍵の上位コマンドが打ち込まれ、だだっ広いだけの空間だった場所の一部が徐々に揺らいでいく。

視覚を誤認させていた幻が晴れた先には、地下への階段が現れていた。

「おおー！」

「隠し階段？ 盛り上がって来ますね！」

「今のもツギハギ……？」

三者三様に驚く俺の頭の上でユカリスも盛大な拍手を鳴らす。褒められるのはちよつと気分が良い。

「まさか……踏み入れてすぐ悩みが解消されるとは思いませんでした。この縁には感謝せねばなりませんまい」

「俺もアーリイみたいな子と知りあえて嬉しいよ」

「ちら、ちら」

「はいはい、ナツキもそうだよ。言葉に出さなくてもわかってるって」

「ちらちらり」

「ノリ良いなダルメン。はいはい、全員と知り合えて良かったよ」

ナツキとはまだそう詰めて話してないが、ユカリスが躊躇なく近づいたり馬車の中で共に遊んでいるのを見れば、悪い奴ではないだろう。

ダルメンは割と真顔でジョークを言うタイプだな。

「それじゃ、行きましよう！」

我先にとナツキが突貫し、その後をダルメンとアーリイが追いかけていく。自然とアーリイを守るような陣形になっていることを微笑ましく思いながら、俺も最後尾で着いて行く。もちろん、さつき解除したツギハギを再起動させておくことも忘れない。

隠し階段の先に明かりはなかったが、アーリイが手に光球を生み出し、先導するようにナツキの前に浮かせていく。

俺もそれに習い、アーリイの周辺と背後に光球を飛ばして視覚を確保する。

「うわ、これ明らかに人の手が入ってますよ。ほら、あれ」

偵察も兼ねて少し先を歩いていたナツキが正面を差す。目を凝らしてみると、そこには明らかに自然の洞窟に似つかわしくない、金属製の扉が道を塞いでいる。

「二重で鍵をかけてるなんて。これを作った奴は、よっぽど中を見られたくないようですよ」

ナヅキはそう言うが、施錠した側から見れば不法侵入は俺達のほうである。

ただその施錠方法が俺達のもので、こちらには入る権利がある、と暴論を言いながら進んでいく。

「罨はないようです。それにしてもこれは紋具の一種……？ いや、それにしてはタンクルがあまり感じられない。金属のようですが、強度はその辺のものを遥かに凌駕。鍵らしい鍵がない。こんなものが存在するとは、世の中は広い」

アーリイがぶつぶつとひとりごち、軽く撫でたり叩いたりしてその感触を調べている。

学者肌なのか、歳相応とは言えないが常に余裕のある態度しか見ていなかった俺からするとそんなアーリイの姿は貴重だ。

「単に意地悪のつもりで、ただの硬い金属の塊を置いてあるだけ、ってことはないんです？ それなら斬っちゃいますか」

「いや、それはないかな。この先に色々なものがあるってのは感知できる。紛れも無く、これは扉としての役割を果たしてる……っていうか斬れるのか？」

「ええ、これくらいなら平気です」

そう言つてナツキが剣を抜く。

昨日は観察する余裕がなかったが、ナツキの剣はかつての俺の仲間が持つていた刀と  
いう武器に似ている。

それと一般的に普及しているブレードを掛けあわせたような、反りのある細身の刃。  
グリッブ部分の握りが加工されているのを見ると、ただの購入品というわけではなく専  
用に加工されているように見えた。

「凶らずとも実感したナツキの剣技なら、あるいは……？」

「ナツキ、それなら試してみればいい。ただ、念には念を、と」

俺はツギハギをナツキの剣に与える。薄い膜のようなものが剣を包み、タンクルの光  
が刃をコーティングして刀身に広がっていく。

構成は〈付与〉〈耐久〉。この二つを合わせることで剣を折れにくくする。後はナツキ  
の剣技がものをいう。

〈威力〉も付与して剣の切れ味を上げる手もあったが、まずはナツキの剣技だけ試しても  
らおう。ツギハギの補強は、ナツキの技量に剣が負けないための処置に過ぎない。

「わあ……………」

ナツキが感嘆する。ツギハギによる強化を受けるのは初めてだったか？

剣の放つ光よりも目を輝かせたナツキが剣を構える。俺達は邪魔にならぬよう、彼女

の後ろへ移動した。

俺達が劍の射程外に移動したことを確認したナツキは、静かに金属製の扉を見ながら目を伏せた。

一瞬の空白。途端、音を立てて扉は両断された。

「——ほほう？」

ダルメンの感心したつぶやき。

呼応するように、切り裂かれた扉が音を立てて崩れていく。

『おおー。あれ、ギガンティアとまではいかないけど、タンクルプレートくらい硬いはずなんだけどね』

サウザナの賞賛に、ナツキは得意気にどや顔を作る。鼻も伸びそうな勢いだ。

あれ自体が名劍かはわからないが、ただの鉄ならともかくタンクルプレート——タンクルを含んだ金属のことらしい——の扉をただの切れ味だけで斬れるほどの名劍とは思えない。

つまり両断を可能にしたのは、ナツキの剣技。より正確には、速さ。うっすらと感じた俺以外のタンクルは、扉から漏れたものだろうか。

厚さ一ピヨンもないが、それがタンクルプレート製であるだけで下手な扉よりもずつと硬度がある。

それを余裕で両断する技量を持つているうえに、彼女は未だ成長を感じさせる十代の少女。未恐ろしい子である。

「剣が折れる心配ないから全力で出来ました。ネムレスさんありがとうございます」

「いやいや、それをしれつとするナツキのほうがすげえよ」

「お褒めの言葉は嬉しいですが、私からすると例えこれ使っても貴方を斬れるイメージ湧きませんよ」

「斬ろうとすんな」

物騒なことをほざきながら、へへへと苦笑いするナツキ。どうやらからかわれたようだ。

アーリイはナツキの剣に驚きつつも、何か言おうとして口には出さない微妙な表情で両断された扉を見ている。

「中へ入ろう。さて、何が出迎えてくれるかな」

## 7. 隠し部屋

まず俺が率先して前に出る。

突然襲われたとしても対応出来る、というのもあるが一番は俺達の国の技術を使った奴が居るかもしれないからだ。

仮にそうだとしたら、色々と聞きたいこともある。俺はサウザナの柄を力強く握りしめながら、扉の中へと入っていく。

その先の部屋にあったのは、予想に反した書庫であった。

半径五ビヨン程度の部屋には大量の本棚が置かれ、テーブルには乱雑に置かれた紙やその束、ペンなどが散らばっている。

簡易ベッドなどを見ると仮眠も取れるようだが、どちらかと言えば資料室の印象を受けた。

ただ、埃などが積もっていたり長い間使われていない様子が見てとれる。

生活の後もあるので、部屋の主が出ていつてからずっと放置されていたのかもしれない。

「……は一体……」

後に続いて入ってきたダルメンとユカリスはきよきよと周囲に忙しく首を向け、ナヅキは一秒と同じ位置に留まることなく動き回っていた。

アーリイは目についた本を一心不乱に読み耽っている。声をかけても後で聞きますとだけ言われ、以降は本に没頭してしまった。これは梃子でも動きそうにないな。

「ダルメン、アーリイの護衛頼んだ。俺も色々調べてみる」

「うむ、任せよう」

二人と走り回る一人を残し、ユカリスを肩に乗せながら周囲に首を向ける。

「こういう時はタンクルを持つてのを探るのが定番……」

する前に、俺は部屋の中でも一際目を引く道具を見つけた。

ユカリスはそんな俺の視線に気づいたのか、先んじてその道具の元へ飛び、えっちらおっちらと抱えて俺の元へ運んでくる。

時折埃でむせているのはご愛嬌。ありがとう、と道具を受け取り力の加減しながらユカリスの頭を撫でながら汚れを取る。くすぐったそうにするユカリスに和みながら、俺は手の中にある小さな棒のようなものを眺めた。

「サウザナ、こいつを知ってるか？」

『これは至光剣キラビヤカ。ネーミングの割にすごく使える万能武器よ。懐かしいわね』



キラビヤカ……綺羅びやか、か。確かにネーミングはド直球といふかなんというか。

『正直、これだけでもここに来た価値大ありよ。ネムレス、もらっておきましょう』

「おいおい、勝手に持ち出す気か？」

『これは元々私、ひいてはネムレスのものなんだから本来の持ち主に戻って来ただけよ』  
「お前のもの？」

『以前、ツギハギを覚えていく過程で知り合いと協力して作ったもので、タンクル次第で使い方を千差万別できる武器なのよ。性能を全て発揮できれば、アルフューレラインによつてタンクルが満ちているこの世界では、上から数えたほうが早いくらいに強いわ』  
「そんなものがなんでこんな所にボンと置かれてるんだよ……」

『さあ？ 求めてる性能じゃなかったから、私が作った分は知り合いにあげたけど、それも結構昔のことだから流れていてもおかしくない。それに、これは使い手を限定するべく調整を施したもの。製作者である私達の許可がない限り、ただの棒で無価値なものしか見えない』

「それでもタンクルが秘められている以上、何らかの紋具であることは確か。だから研究素材として置いてあった、か？」

『根幹基盤に干渉した痕があるし、そうかも。これなら基本性能だけは発揮できそうだけれど……ええいこんなの消して、と。よしネムレス、ちよつとそれにタンクル流してみ

て』

言われた通り俺はその小さな棒、キラビヤカヘタンクルを流し込む。

すると棒の先から光が伸びた。長さおおよそ一ビヨンのそれは、鏢のない剣をイメージする。つまりこの棒は柄か。

剣をイメージしたせいか、光の切っ先が徐々に尖っていく。今度は棒を意識すると、切っ先が丸みを帯びていき、柄頭からも光が伸びた。

さらに弓をイメージすると、柄から弓の弦が光によつて描かれる。それを引いてみると、同じく光の矢が番えられた。

これは、武器の種類も変化出来るのか。軽さもほとんどないし、これ一つで色々な戦況に対応できそうだ。千差万別とは頷ける。

タンクルを流すだけで形状が変化するなら、属性のあるツギハギを流せば多分——  
「ネムレスさん、何か見つけたんですか？」

部屋を歩き回っていたナツキがキラビヤカの光に気づいて寄ってくる。

一旦思考を中断してこれがどういう代物かを説明すると、ナツキは食い入るようにキラビヤカへ目を近づけてくる。

「興味あるのか？」

「そうですね、すごくてわけじゃないですが実物があれば調べたい程度には。おじい

ちゃんもすごい武器持ってたから自然と」

そうしてナツキは世の中にその名を残す名剣や紋具を語る。

魔導剣《まどうけん》ミドウルアゴトフユ。焦熱《しょうねつ》の剣リヴァンティン。

天剣《てんけん》ルシフェヴ。孤<sup>エターナルシグル</sup>独な剣。幻獣剣《シユクルム》。五<sup>ウエ</sup>つの儀式<sup>テシツ</sup>。復讐者

《リヴェンジ・ラン》などなど、例にあげたもの以外にも数多くの名を教えてくれた。

剣の名が知れ渡るといふのは大抵英雄譚が付属されており、ナツキもそういった勇者に憧れているのかと聞けばそれは違いと答えた。ナツキは単に、祖父の影響でそれらに詳しいだけのようなのだ。

「話を聞いたり、実際にそういうのを見た時に憧れがなかったとは言わないものですか  
ら」

ナツキの剣術に性能の良い武器が加われれば、強さも大幅に上がるだろう。

キラビヤカがどれほどの切れ味を秘めているかわからないが、ナツキ相手に武器による受けが出来ないなんてことになったら大抵の相手は対応できず、彼女の独壇場になるはずだ。

「欲しけりややるぞ」

「くれるんですか？」

「俺にはサウザナがいるからな」

「うーん………今はいいです。コレもあるし。あまり強い武器に頼ったら、私じゃなくて武器が強いつて思われちゃいますし。あ、それを否定するわけじゃないですよ？強い武器持つてたら卑怯、とかそういうのは考えてません。本当に強い人は、武器も強くないと使えるものがないから」

名残惜しげな顔をしつつも、ナツキは腰に帯びた剣の柄を叩く。

同時に俺は感心する。

性能の良い武器が手に入ると聞けばすぐに飛びつくものだが、彼女はそれを自制している。ナツキに剣を教えたお爺ちゃんという人の指導の賜物か、彼女自身による心の強さか。

どちらにせよ、安易に武器に頼らず自分の腕を磨く選択が取れるのは良いことだ。

そう思っていると、サウザナが俺にしか聞こえない声でつぶやく。

『ちなみにナツキが言つてた色んな剣、ほぼ全部私だから』

「はっ。」

『剣を換装出来るでしょ私。本物じゃないけど、それになりきつて色々してた結果名前が売れちゃつて』

「じゃあなんだ、ナツキが言つてた英雄譚の主人公つて全部お前なのか？」

『まーねー。あ、キラビヤカの機能も当然使えるから安心して』

とてもそうは見えない英雄様である。

「な、なあナツキ。さつき言ってた剣の所有者って今はどこにいるんだ？」

「流石に本人は生きてないと思いますよ。詳しく調べたいなら、子孫とか譲渡された国のお偉いさんに聞けば、運が良ければ実物を見せてくれるかもしれませんが」

実物？ サウザナはここに居るのに？

（おい、武器残ってるのか？）

（うん。残ってるのはガワだけの抜け殻よ）

「脱皮できんのかよ!？」

『脱皮って言うな！ 分裂とか分身って言って!』

「え?」

「ああいや、なんでもない。武器を見てみたいって思ったけど、一筋縄じゃいかなそうだから諦めておくよ」

「そうですか？ 私もそんなに詳しいわけじゃないですが、聞きたくなったら言ってください。知ってる限りは話しますので」

「ああ、その時はよろしく頼むよ」

なんとかナツキ相手に誤魔化しながら話を打ち切る。ナツキは俺の様子に首を傾げていたが、追求することはなかった。良い子。

『まーともかく、今の私はそれが出来るだけの頼もしい識世になったのでございます、うふふ』

何キャラだ。

世界に名を残す剣は大体サウザナ、という事について色々追求したいのは山々だが、今は探索優先だ。

「とりあえずキラビヤカは俺が持つておくよ。アーリイが調べたら、類似品でも作つてくれるかもしれないし」

「アーリイってお風呂とかの紋具職人ですよ？ 武器も作れるのかな」

「そりゃあ聞いてみればわかることだら」

「そうなんですが、今はあれだし」

ナヅキが示すのは、今も高速で本のページをめくつて速読するアーリイ。

ダルメンは背後からアーリイが持つ本を見ようととしていたが、読むのが早すぎて追いついていないように見えた。樽の中ではきつと苦々しい顔をしていると思う。

「依頼人はアーリイだし、待つ他なさそうだ。ほら、キラビヤカみたいに探せば他にも出てくるかも——」

言いかけた俺の言葉が、それ以上出ることにはなかつた。

ダルメンが突如入口へと振り返り、最初に出会った時のような獣の気配を漂わせ始め

たのだ。

『ネムレス、へマツピングへ使って。大丈夫、こっちの動きは消すから安心してタブ付けして』

その反応に、俺は〈音波〉と〈反響〉に〈印字〉と〈射程〉の素材を持ち込んだ洞窟の入り口からこの部屋までを音で索敵し、反応があるものをチェックするツギハギを地面に打ち込んだ。

本来は未確認の場所を探索するために作られたツギハギだが、対象の相手にツギハギが自分に使われているということを知られるデメリットもあった。

だがサウザナが問題ないと言った以上、それを相手に知られず一方的に知ることが出来る。五百年も放置したのにこうして慕ってくれる愛剣を疑う理由はなかった。

獣のような野生の勘というよりは、経験から裏打ちされた反射と言える。同時にそれに呼応するナツキ。すでに抜剣し、静かに入口へ歩み寄っていた。

俺はそんなナツキの肩を叩いて止める。

「待てナツキ。まず何が起きてるのを知るのが先だ。ダルメン、一体何が起きた」

「洞窟の中に、覚えのあるタンクルが現れた。昨日、わたしを襲った連中だ」

「襲われた？」

「ああ。倒れた男達が居たので関わらないよう去ろうとしたのだが、運悪くその仲間で

あろう集団に気付かれてしまい、突然に」

ダルメンが嘘をついているようにも思えない。

樽で表情が見えないものの、馬車の中の僅かなひと時の合間に見たダルメンに俺達を陥れるような悪感情を覚えられなかった。なら、嘘と判断はしない。

「そいつら何です？ 顔とかわかります？」

「残念ながら。姿が見えなかったものでね」

「姿が見えない敵から襲われて、無傷なのか？ 随分頑丈だな」

「それは、この、アクターのおかげだよ」

説明しようとする、ダルメンから膨大なタンクルが溢れようとしていた。それがアクターを展開しようとした動きだと予想した俺はそれを止めるよう言った。

するとタンクルはなりをひそめ、出力として展開することなく消える。思ったより素直に言うこと聞いてくれたな、と思いながら俺はダルメンを止めた理由を話す。

「今そいつらが居るかもしれないんだろう？ 下手に使えばダルメンのタンクルはこっちの場所を知らせるようなものだ。だからアクターを使うのは少し待っててくれ。それと、そいつらは本当に敵なのか？ ただここに来ただけとか、間違いはないか？」

ダルメンにとっての敵が俺達の敵であるとは限らない。

仮にどんなものであってもすることは変わらないが、一応そこは区別をしたかった。



「嘘はついていないよ」

『そこは私も保証するわよネムレス。ダルメンは嘘ついてない』

「……お前、何知ってる？」

『まあまあ、少なくともこいつらはダルメンにとつてもネムレス達にとつても敵つてこれとに違いはないわ』

「後で話してもらうぞ。悪かったなダルメン、けどもう少し待ってくれ。今、こつちから向こうを探っているから」

「微塵も気にはしていないさ。しかし、そんなこと出来るのか」

「昔とつた杵柄つてやつさ。……お、きたきた」

〈マツピング〉によって反響する振動が目的の相手へ到達する。

タブ付けされたその数は五つ。

サウザナの宣言通り、相手の動きに変化はない。〈マツピング〉によるタンクルの動きに気付かれていないという証左である。

同時に、誰よりも早く気づいたダルメンの感覚に掛け値なしの賞賛を送る。

「よし、サウザナよくやった」

『ほっほっほ。出来ることは増えまくったから、もつと頼りなさい』

「そうしよう」

「ちよつとちよつと、二人で納得しないで説明してくださいよ！」

「おつと悪い。ナヅキ、お前にツギハギ使うけどいいか？」

「私の剣を強化したようなやつですよ、構いませんがどうして確認するんですか？」

『貴女に触らせてくださいって言ってるようなものだから』

「違う違う違う、何言ってるんだお前！ 出会って一日しか経ってない、しかも子供相手に

そんなこと言うか！」

『そんな子供相手に全裸晒してたけどね』

愛剣って言ったの前言撤回したくなってきた。

軽口を叩くのは問題ないが、俺の品位を陥れる発言はやめろ。

そんなサウザナの発言に、ナヅキは少し引いたように顔をしかめた。

「私が大人だったら言ったんですか？」

「何信じかけてんの？ ツギハギだからな？ 体じゃないからな？ 誤解すんなよ？」

子供相手ってのは言葉のあやだ、忘れろ。……とにかく！ 俺が探った相手の位置情報を共有させるツギハギを使いたいから、やっていいかってことだよ」

「メリットしかないなら許可なんていらないうじゃないですか。ますます問題ないですよ」

「見知らぬ他人にツギハギを使われるってのは、何も有利なことだけってわけじゃない

「え？」

「え？………あー、あー」

言葉にはしなかったが、ナツキも気づいたようだ。

俺達の傍には、突然ツギハギが使われたダルメンが居るということに。

「気配り屋さんだったのですね」

「こう見えて人生経験豊富ですね」

「私とそんな変わらないですか」

ナツキに年齢は言っていないが、一、二歳くらい上と予想しているのだろう。肉体年齢としては正解でも、実際はさらに十年ちよつと加算されるけどな。

「ま、どちらにせよ問題ないです。ネムレスさん、お願いしますね」

「………つたく、サウザナのせいで時間かかる」

ナツキの即決っぷりに苦笑を漏らしながら、ユカリスの手に収まりそうなくらい小さな光球を指先に浮かべ、それをナツキの目に当てる。

〈共有〉と〈射程〉に〈付与〉を使った〈クロツシング〉。この効果は、俺にかかつているツギハギを共有させるものだ。

「うわ、なにこれすごい！ ほえー、ツギハギってすごい。隠し扉の先って今こんな風になってるんですね」

はしやぐナツキの目には、俺の脳内に浮かんでいる〈マツピング〉によるイメージ図が映しだされている。それによれば、相手はまだ隠し扉の存在に気づいていないようだ。

なら、ありがたく利用させてもらおう。

何故か私にも！ と全力で自分を指すユカリスが頬にひつついてきたので、彼女にも〈マツピング〉を共有させる。多分ナツキが喜んでいるのを見て自分にもやって欲しくなったのかな。

両手両足を投げ出して驚く様は子供がおもちやを手に入れたような仕草で微笑ましい。

「ダルメンはどうだ？」

「いや、わたしは遠慮しておこう。君はナツキ君の面倒を見てあげるといい」

「言外に足手まといって言われてる？」

「疑心暗鬼疑心暗鬼。ダルメンが誰よりも早く敵に気づいたってことは、独自に相手を探れる力を持つてるってことだ。だからこっちのフォローは必要ないってことだよ」

「言われてみれば……すみません、先走りしました」

ぺこりと頭を下げるナツキに軽く手を振って受け入れるダルメン。

これくらいの年頃で旅をしているってことは、自立心というか侮られることを一番嫌

うのかも知れない。

「じゃあアーリーのことは任せるぞ。その子はあの街の住人、旅をしていたダルメンを襲う可能性の低い現地人だ。だから代わりに——」

「いや、ネムレス君がアーリー君の護衛をすればいいだろう。外の連中は元々私の相手、のようなものだ。なら、わたしが行くのが当然だろう」

「アーリー目当てつて可能性は？」

「だからネムレス君に頼んでいるのさ」

「わかった。それじゃあ——」

俺とナツキで対応する、と伝えようとした矢先、当のナツキから罵声が飛んでくる。

「戦力を遊ばせておくなんて二人とも何馬鹿言ってるんですか。ここは洞窟の最奥で隠し部屋。加えて相手はこつちのことを気づいてない。奇襲かけるなら多いほうがいいし、二人してあっちが敵つてことなら黙らせてから話し合えばいいはずです。護衛つていうなら、隠し扉がその役目を果たしています」

「む」

「う」

「二人して考えすぎです。もつとシンプルに行きましよう？」

ちよつと考えが固執していたか？

最悪、俺とサウザナでなんとかしようと思っていた傲慢さを見ぬかれたのか、ナツキが冷静な意見を述べる。

彼女の強さは体験したはずなのに、子供だからと遠ざけておこうという判断を見抜かれたのかもしれない。

『ふふ、一本取られたかな?』

「かもな。悪いなナツキ」

「受け入れます。ダルメンさんも、それでいい」

「ああ、君の意見に従うとしよう」

「よろしい」

となれば、後は作戦会議だな。

俺は二人の出来ることを簡潔に説明してもらい、それを元に作戦を立てる。

〈マツピング〉によると襲撃者はまだ部屋の手前でウロウロしている。おそらく洞窟に入ったにも関わらず消えた俺達を探しているのだろう。留まっているのならチャンスだ。

「よし、それじゃあ準備するぞ」

そう言って、俺はサウザナを鞘から抜き放った。

## 8. 樽と三角巾にうろたえる

サウザナを地面に刺す。同時に展開するのは、ダルメンを中心に俺達を包み込むような円形に広がる呪紋。

それが作られると同時に、ダルメンはどこからともなく彼の腰まである大きな樽を取り出した。いや、ほんとどっから出した？

蓋のない樽の中から溢れる酸っぱい香り。これ、ワイン？

「わたしの武器はこれだ。ほぼ無尽蔵で球切れはないから安心してくれたまえ」  
「どこに安心しろと!？」

ナツキからのツツコミも最も。

戦場になるかもしれないというのに、一気に気が抜けていく。

「アクター使いなんだろう？ それのどこがアクターなんだ」

「見ればわかるだろう、樽のアクターだ」

「そのどこが〈幻獣《スペルゴースト》!？」

「呪紋世界の力を利用出来るのは、住人だけではない、ということさ。あちらの物からだって力を借りることはできる。逆説的に、あちらの世界にも樽を使うという生活感が

伺えるね」

もつともらしいことを言っているが、中身が無茶苦茶すぎる。

「ちなみにわたしは自分がマーキングした樽なら、壊れてない限り世界中のどこにあつてもマイ樽と繋げて取り出すことが出来る」

「何言つてんの？　ねえ何言つてんの？」

ナツキが狼狽えるのも最も。

つまり世界中の樽と中身を共有つてことだろ？　さらりと言っているが、ダルメンの言うことが真実ならとんでもないことだ。

こころユカリス、飲もうとしちや駄目だぞ。

「ああ、もちろん他人の家の樽を勝手にマーキングしたりはしない。きちんと——」  
「わかつたわかつた、お前の力はすごい。狙われる理由、わかりそうなものだな」

いかに樽限定とはいえ、使い道なんて色々ある。

案外、ダルメンという男は有名な人物なのかもしれないな。

落ち着いたらサウザナに聞いてみよう。

「ユカリス、お前はアーリイと一緒にここに居てくれ。いざとなったら守つてやつてくれよ？」

ダルメンのワイン樽？　興味津々なユカリスだったが、俺の言葉にぐっと拳を握りこ



くこくと首を上下させる。頼もしい限り。

気を取り直し、先程展開した呪紋は、その範囲内におけるタンクルの感知を無効化させるものだ。

たとえタンクルを探って来ようとも、これで対処できる。

「では、先手必勝と行こうか」

ダルメンが腰だめに担いだ樽を構える。

零れそうで溢れないワインっぽい中身を洞窟の壁に向けて照準を合わせている。

……まさか。

「ドリンコォー！」

脳裏によぎった予想をなぞるように、謎の掛け声に合わせてダルメンの樽から凄まじい勢いでワインのような何かが射出される。

鉄砲水を直接ぶつけるかの如き勢いで放たれたそれを調べてみれば、洞窟にワインの香りを充満させながらもきちんと〈射程〉と〈威力〉、加えて〈酒精〉が付与されていた。

つまりワインにしか見えないそれは紛れもなくワインであり、同時に彼なりのツギハギによる攻撃なわけだ。

アバターやアクターならば誰しもが使える基本のツギハギ。

タンクルに〈射程〉と〈威力〉の素材を込めただけのタンクル砲は、ツギハギを使う

者からすればスタンダードな攻撃だ。

ただダルメンの場合タンクルの量が尋常でないほど多い。下手をすればダルメンのタンクルに耐えきれずに構成が自壊してしまうほどに。

下手に構築されたツギハギよりよほど強力なそれは、ふざけた外見に反して直撃すればこの洞窟程度容易く崩壊させる威力を秘めていた。

「これ、お、酒？」

咄嗟にへクロツシングへ經由でナツキにへ酒精へへのへ耐性へを与える。子供相手に酒というのもけしからんし、これで動きが鈍ったら元も子もない。

目を丸くするするナツキと同じことをしたいと思いつつ、頭を戦闘へ切り替える。大分遅れたが、まだ間に合う。

呪紋の規模を縮小し、部屋全体からダルメンが放ったツギハギのみに集中して囲う。そっちの制御はサウザナに任せ、俺自身は遠隔でツギハギを付与させる。

暴威が通路を塞ぐ隠し扉へと着弾する寸前、俺は叫ぶ。

「サウザナ、解除！」

『おーらいー！』

サウザナの操作によって隠し扉と呪紋が音もなく消えていく。

その先に見えるのはへマツピングへによって映る襲撃者。それらに向けて撃ち出され

たワイン砲が襲いかかる。

だが相手もさるもの。

ツギハギでも仕込んでいたのか、当たる直前で隆起した地面によってワイン砲がせき止められている。

「なんだこれ、酒?！」

「ワインだ!」

「ワインが飛ぶか、バカー!」

見知らぬ人々よ、悪いがこれ飛ばしてるんだ。——敵は複数、と。

ふざけた外見に反してワイン砲はただの地面で防げるほど軽くない。

そこらの奴では防げない威力を持つているはずだが、つまり相手はそこらの奴ではないということだ。少なくともこの状態が続けば反撃を許す可能性がある。

だが、甘い。

ここで活きるのは俺が使ったツギハギだ。〈付与〉〈拡散〉〈支配〉〈気絶〉。これら四つの素材を入れたツギハギを付与し、ダルメンのワイン砲のコントロールを俺が行う。

それにより、放出された巨大なワイン砲の残りが幾重にも枝分かれ壁のように盛り上がる土を避けて敵対者へ殺到する。土煙が上がり、相手の視界を奪うおまけつきだ。

さらに素材を〈威力〉から〈気絶〉に差し替える事でどんな殺傷力の高いツギハギで

も非殺傷となるため、相手を捕縛するにはうつつけだ。

「ぶえっ！ げほ、口の中に入れて、ん？」

「あ、これ美味しい」

「のんき言ってる——がぼぼぼぼ」

奇襲を受け混乱する戦場。さらに仕掛けた側であり、相手の情報をリアルタイムで受け取っており、混乱から立ち直ったナツキがワイン砲の後に駆け抜ける。

拡散したワイン砲によって守りはすでに崩れ、防御の合間を縫って走るナツキの攻撃は防げない。

はずだった。

〈支配〉によってワイン砲の操作をしている俺だからこそ気づいた違和感。拡散し、荒れ狂うワイン砲の一部が消える。いや、消された。

(……いや、消えていない。今の感覚は——)

瞬間、ダルメンのワイン砲に混ざってナツキの背後《・・》から突如発生した別のツギハギに危機感を覚え、叫んだ。

「ナツキ、上に跳べ！」

突然の指示にも素直に従い、ナツキが跳躍する。

刹那、今までナツキが占めていた空間に一筋の光条が走る。その閃きは鋭さを持ち、



今の俺と同年代か少し上に見える年若い赤髪の少年の姿が見える。服装にこれといった特徴はなく、武装しているという点を除けばただの少年にも見える。

もう一人、ナツキの急襲を見抜き逆撃を仕掛けられる程度の実力者。

すでに姿を消すと予測されたツギハギは解除され、俺の一挙一動を見逃さないとばかりにこちらへ目を向けている。

そいつは一見すれば町娘にも見えそうな、今の俺よりも年上の女性だった。

紺色の長い髪を三角巾の中にまとめた、少年と同じく武器を帯びていなければこの洞窟に居るのは不釣り合いなくらいだ。

一応、森の中にある洞窟なので森に何かを採集しに来たという理由付けも出来なくはないが、一見何もないはずの洞窟まで入ってきた以上そう考えるのは無理がある。

けどそう感じたのは外見だけで、不意打ちで恐慌状態に陥っているうろたえ少年が傍に居るのに冷静に観察を怠っていない。明らかに一歩抜きん出た実力者だ。

ワインの波が引けば、倒れる男達が三人。〈マッピング〉で調べた相手の数が五だったことを考えれば、数は合う。

ただ、倒れた相手の全てが樽の中に居た。

樽の中に沈められる者。樽に入れられて転がされる者、立ったまま樽を被せられて気絶する者と色々だが、格好を考えなければ狭さを利用した拘束と考えると意外な優位性

が伺えた。

「まずいぞ！ 位置がバレて……」

「ナツキ、そつち頼んだ！」

「了解！」

ナツキが三角巾娘に斬りかかる。外見通りであればそれだけで怖気づく行為であるが、ただの町娘はツギハギを駆使して不意打ちを防いだりはしない。何者かは知らないが、只者ではない。

三角巾娘へ意識を配りつつ、弱腰のうろたえ少年に向かって疾走する。うろたえ少年はこちらに気づくと、思ったより素早く復帰して俺を迎え撃つ。

「そんなくたびれた剣で僕を倒す気か？ くそう、舐めるなよ！」

牽制の一振りを避けた動きや、腰から抜き放ったナイフの鋭さも中々のもの。どこか規則性のある動きにも見えるが、そんなことより愛剣を馬鹿にされては俺も黙っちゃいられない。

〈威力〉〈射程〉〈分裂〉の素材を用いたタンクル弾を周囲に配置。拳大の光球をまず相手に殺到させて体勢を……

「おわああああああああああああああああ!! そ、そんなツギハギを使うなんてちくしょうこの畜生が！」

崩すより先に狼狽するうろたえ少年。俺は無言で動きを制限させるようにタンクル弾を放射してうろたえ少年を混乱させた。

面白いようにたたらを踏む少年に向けてサウザナを振るう。

「おぎゅー」

当然のように命中。剣の腹で殴ったから斬れていないが、折れているといえ重量のある鉄塊を叩きこまれたうろたえ少年は地面にたたきつけられ、何度も転がつてようやく止まる。

痙攣を起こしているがまだ息はあるのを見計らい、撃たなかった残りのタンクル弾に〈設置〉の素材を追加し、うろたえ少年の周囲に配置させる。

何かしようとしても、牢獄のように囲う光球の群れの前ではそう安々とは動けない。

(念のためもう一つ追加して、と。こいつはこれで問題なし。ナツキは——)

振り向くより先に飛び込んで来たのは、ナツキの背後からナイフで強襲を仕掛けている三角巾娘の姿。

即座に〈付与〉〈強化〉のツギハギをナツキの髪《》にかける。同時に首へ迫る三角巾娘の刃。

ナツキは咄嗟に首へ剣を掲げて防ぐが、三角巾娘はもう片方の手にナイフと同じ大きさの武器、タンクルブレードを生み出して背中へと切りつけた。実物のナイフを防いだ



ナツキには、ツギハギのナイフを捌けない。

だがナツキの髪は今、俺のツギハギによって鋼以上の強度を誇っている。よってその長く綺麗な髪と体を斬られることはなかったが、衝撃を殺せず俺のほうへ飛ばされるナツキ。

咄嗟に受け止める俺に、三角巾娘の追撃がナツキに迫る。俺はうろたえ少年に使ったものと同様のタンクル弾を展開して発射。追撃を止めこちらから遠ざけるように誘導する。

三角巾娘は俺を警戒しているのか、タンクル弾の牽制に足を止めて迂闊に近づく様子はなく距離を取っている。

冷静だな、とこちらも警戒しながら腕の中のナツキが声を漏らす。

「あいたたた」

「ナツキ、平気か？」

「だいじよぶ、です、ありがとうございます。でも、斬り合いは私が勝ってましたから」「さつき背中斬りつけられてただろ」

「一応は片手犠牲にして防ごうとしました。……悔しいなあ」

片腕を犠牲にしなくて何よりだ。

タンクル砲を止めた動きから、アクターかアバターかはわからないが三角巾娘がツギ

ハギを使うことは察している。うろたえ少年には悪いが、彼がああも見事なツギハギを使えるとは思えないので三角巾娘があれを使ったのだろう。

さらに近接戦闘における技量はナツキを押しきれぬほど。

立ち上がるナツキに〈治療〉〈威力〉の素材で作られた傷を治すツギハギをかけて怪我の具合を見る。

ナツキが負つたのは火傷のようなものと軽い裂傷。裂傷はナイフかタンクルブレードの切り傷だろうが、火傷がどこから来ているのかわからない。少なくとも複数のツギハギ持ちということか。

俺が考察している間に、三角巾娘に迫る影があつた。

「隙なしいー」

それはアクターを展開したダルメンだった。

風を切つて飛ぶ鳥のように疾駆するダルメンはその手に携えた樽を振りかぶり、加速された一撃を持って三角巾娘へ打ち下ろす。うん、確かに隙はないけど気合の入れようはよくわかる。

三角巾娘はうろたえ少年のように腰にナイフと柄のある何かを帯びているが、それを使う様子はまるで見せない。ならばツギハギか？

予想に答えるように、三角巾娘がその手にタンクルを集束させて解き放つ。

見知らぬ構成から発揮されたのは赤い煙。それがダルメンの一撃を止める。いや、ダルメンが攻撃を止めた？

ダルメンの服が焼け焦げる様子にナツキの火傷の理由を察する。同時にあの煙は物理的な干渉が可能ということ。

赤煙のツギハギを隠れ蓑に少年へ向かおうとする三角巾娘。その姿を認め、俺は叫ぶ。

『サウザナ！』

「わかつてるって。道は封鎖済み」

「よくやった！」

アーリイが居る隠し部屋への道もすでに塞いだのなら、多少派手にしても問題ない。

サウザナを煙に向けて突き刺すと、刃と煙を構成するタンクルと干渉し合い、紫電を迸らせて互いの構成をぶつけ合う。

〈素材〉がなくとも、サウザナ自身が持つツギハギの力によりそれは多数の素材を含むであろう煙のツギハギを切り崩す。

「ダルメン風！」

「起こそうっ！」

サウザナの介入によって煙が少しブレる。ツギハギの構成に乱れが生じ、存在を保て

なくなっているのだ。むしろ一撃を受けてまだ構成を保っているのは三角巾娘の技量の高さを示している。

そこへ俺の指示が飛ぶ。従ってくれるか不明だったが、ダルメンは存外素直に風のツギハギを使ってくれた。

昨夜のあれを思い返すと、ダルメンのアクターは風を操ることに長けているかと思つたが予想通りで何よりだ。

思惑通り吹き荒ぶ風が不安定な煙を一斉に吹き飛ばす。

同時に走るナツキ。お返しとばかりにフェイント混じりの一撃で剣に意識を集中させ、本命の足で三角巾娘を蹴り抜く。今度はあちらを吹っ飛ばすという意趣返しをする。辺りナツキも良い性格をしている。

意趣返しを優先したため思つたよりダメージはないのか、三角巾娘は即座に起き上がりこちらを睨めつける。

そこへ攻撃を仕掛けようとするダルメンとナツキだったが、俺は声をかけて止めた。「二人共、止まれ。そのまま進んだら痛い目に合うぞ」

疑惑の目を向ける二人に見せ付けるように、配置していたタンクル弾を二つ三角巾娘へ放つ。

するとその途中で地面から壁が隆起し、タンクル弾を受け止めた。もう一つをその直

下へ落とすと、隆起した壁ごとその周囲が爆発した。

二つの煙が晴れた先、そこで初めて三角巾娘は表情を不愉快そうに歪めて俺を睨む。

「吹き飛ばされながらも罨を忘れない辺り、良い腕してるな」

「……挑発？ 全部見透かされているなら、意味がないのに」

会話に付き合ってくれることに口元を緩める。

その唇から漏れた声は力強い意志を持ちながら、苛立ちに包まれていた。

お互い相手に探られぬようツギハギを準備しながら、主導権を取るべく舌を滑らせる。

「さて、一応聞くがお前らは何者だ？ どうしてダルメンを狙う？ あ、ダルメンっての

はこっちの樽被ってる奴」

「ネムレス君？」

「自己紹介くらいは構わんだろ。情報欲しいし」

疑問を浮かべたるダルメンは口で、うずうずするナツキは直に止めながら俺は三角巾娘の返答を待つ。その間、俺はダルメンにだけ見えるように、指先をぐるぐると回した。

見せ付けるように三角巾娘が赤い煙を再び発生させる。

だがこれは罨、本命は別にあると予測する。何故なら先ほど防がれたばかりのそれを愚直に繰り返すほど、目の前の相手は下手じゃないと思う。

つまり別の何かが来るはずであり、それを準備するためには時間が必要。〈マツピング〉にも引つかからないツギハギを使って、不意打ちの可能性だつてある。

なら軽口でもなんでも会話という延長時間に乗ってくるはずだ。

「……こちらに敵対の意志はない。襲撃を仕掛けたのはそちらであり、振りかかる火の粉を払っているにすぎない」

「昨日、こいつはお前らに襲われてるんだよ。部下の躰は出来ないのに見捨てられないタイプか？ 苦勞を一人で背負つてるといわずれ倒れるぞ」

「……答えは同じだ。私達は被害を受けた側であり、その襲撃者はお前達に他ならない」  
「じゃあ質問を変えようか。わざわざ寄り道しなきゃ来れないここに、なんで来ている？ 先に入っていた俺達の後を追うようにやってきたのはどうしてだ？ 俺達に復讐したいなら馬車で移動する道中にも狙えばいい。それをせずにここを調べていたのは何故？ 答えは簡単、最初からここに目的があったんだろう？ ダルメンの件は多分偶然で、こつちが本命」

「こいつら、あの部屋が目的つてことですか？」

「ナツキ」

「んう？」

「……………」

三角巾娘に表情などの変化は見受けられない。

口では咎めたものの、こうなるのを見据えてあえて二人には緘口令を敷かなかつたのだが……予想以上に三角巾娘はこういったやりとりの経験が多そうだ。

うろたえ少年は例外として、彼女自身はおそらく三対一でも切り抜ける、あるいは勝つビジョンがあるのだろう。俺もサウザナを持たず何の考えもなく無策で挑めば遅れを取るかもしれないと感じている。

ナツキのつぶやきによって隠し部屋の存在に確信を覚えたのなら、探りあいは終わるだ。

「二人共、付き合ってもらって悪かったな。——もう自由に動いていいぞ」

「ビートクラウド 踊る炎雲」

ナツキの肩から手を離すと同時、三角巾娘のツギハギが解き放たれる。

広がっていく赤い雲は洞窟の広場全てを包むように拡散していく。視界の制限と火傷による小さな傷を負わせていくツギハギは、攪乱のために他ならない。なら本命は――

「ツインゲル 穿つ羽」

ダルメンが三角巾娘に手をかざす。その豊満なタンクルから生まれ出た一对の竜巻が赤い煙を押し潰すように空間を蹂躪する。先ほどの指回しの意図、理解してくれたよ

うだ。

そうして放たれたまともなツギハギは、つい先程ダルメンへ渡した素材から生み出されるツギハギの一つ。

効果は強烈な風を吹かせるものだったが、ダルメンは初めて使うにも関わらず倍の威力かつ彼なりのアレンジで現代風へと進化させていた。

その風は、全てを巻き込み吹き飛ばす問答無用の暴風域。多少制御は甘く不規則に動くようだが、俺はそれに当たるほど鈍感ではない。

同様の彼女も身を危ぶむ風の恩恵を受けながら、ナツキが走る。

三角巾娘はナイフとタンクルで作ったブレードの二刀流でナツキの攻撃に対処する。そのナイフ捌きは二刀であるにも関わらず、小器用に使いこなしている。

しかしナツキの剣術は俺も太鼓判を押す。小器用程度では対処など無理な話だ。

俺に使ったのと似たような、防御をすり抜ける謎の剣技や二刀に負けない手数ของ多さで押し切り、細かな、けれど無視できない傷を三角巾娘につけていく。

徐々にナツキの剣を捌ききれなくなっている証明だ。剣だけなら三角巾娘を上回るナツキはその年で未恐ろしい。

けどおそらくこれはさっきの繰り返し。それだけならナツキが不覚を取ることはない、その理由が彼女の傍に這い寄っていた。



「ナツキ君！」

それを察知したのか、ダルメンが二人の戦いに乱入する。それらを横目にしながら、俺は地道にサウザナを適当に地面に刺すことを繰り返していた。

ダルメンが加わったことで、戦闘に変化が訪れる。

ナツキの攻撃を防ぐだけでも重労働だった三角巾娘だったが、ダルメンの攻撃も合わせることで少しずつ均衡を保ち始めた。

近接戦闘の連携は息を合わせることが重要だが、それでも二人は前後や左右に囲むなど互いの邪魔にならない程度の動きを見せている。しかし全力での攻撃は相手への妨害になると判断したのか、先ほどに比べれば攻撃の手数は増えたが精度が緩い。

三角巾娘はそんな二人の間に生まれる僅かな隙をかくぐつている。それでいて俺への警戒も怠っていない。敵ながら天晴だが、今の膠着が続けば徐々に連携の誤差を少なくさせていく二人がやがて押し切るだろう。

「へ伝アムベアう大地」

——足元から伸びる、タンクルの影がなければ。

「ほほうっ！」

「うえっ!?!」

ナツキとダルメンが同時に三角巾娘へ踏み込んだ瞬間、その足場が崩れた。体勢を崩

された二人は、つんのめるように動きを制限される。

先ほどあつた地面を隆起させる現象から察していたが、やはり大地を操作するツギハギを持っているらしい。煙で目を、大地で足を封じる搦め手の多い相手だ。

そして今までの攻撃を耐えて待ちに待った逆撃の機会。仕掛けて来るならここしかない。

「〈リンクヒリング  
へ連なる雷〉」

(来た！)

赤い煙、そして崩れた足場から溢れるタンクルが雷へと変化していく。

おそらく単独ならば雷を放つツギハギであろうそれは、搦め手だと思っていた二つのツギハギを飲み込んで膨らんでいく。あれら自体が三つ目のツギハギへの燃料というわけか。

性質の悪いことに、ダルメンの竜巻まで飲み込んでやがる。

出力自体はダルメンのほうが上のはずだが、それでも取り込めるのは構成とレアな素材、何よりも技量による結果だろう。

煙はダルメンのツギハギによって大部分が晴れたが、完全に消えたわけではない。そして二人は未だなお離れることなく地に足をつけている。

結果、注ぎ込まれたタンクルに応じた雷撃がナツキとダルメンへと襲いかかった。

このままでは二人とも大やけど、最悪炭になつて死んでしまう。当然、それをさせないために俺が居る。——今！

雷撃が今まさにナツキとダルメンへその牙を喰らいつこうと瞬間、二人は俺の手に収まっていた。

「無事か、二人共」

「うひー、危なっ」

「ああ、助かった」

呆然と俺を見上げる二人。三角巾娘もまた目を見開いてこつちを凝視している。

「いいのか、よそ見して？」

「こいつ——」

二人を引き寄せたツギハギが三角巾娘の足を止める。

それは先程うろたえ少年を倒したさいに仕込んだツギハギヘストレットンにより、糸のように伸ばしたタンクルを二人に貼つてこちらに引き寄せたのだ。

その糸は当然のように三角巾娘の足元を徘徊させていた。地中へ潜ることで相手のツギハギを吸収するあの雷の範囲外に逃れ、使用するタンクルの少なさから相手の感知にも引つかからなかったのだ。

「ダルメン、もつかいだ。今度は遠慮すんな、全力で使ってくれ」

「従おう。〈穿つ羽〉！」

「〈連なる雷〉——！」

「甘いよ」

〈ストレッド〉に〈分裂〉〈相殺〉〈拡散〉を追加。糸が蜘蛛の巣を貼るように幾重にも分裂していく。それらに触れるたびに、タンクルを飲み込んで肥大化する雷は俺のストレッドに干渉されて分散し、その範囲を広げる代わりに威力を減衰させていた。

自分のツギハギを吸収して拡大する雷。逆に言えば、こつちから巻き込んでやること出来る。洞窟の外に糸を伸ばしてやればタンクルの尽きる限り伸ばすことも可能だ。

「私のツギハギを逆手に……！」

「ここから先は制御力勝負だな。俺は割と我慢強いぞ」

加えて、ダルメンが新たに生み出した〈穿つ羽〉にも対応しなければならぬ。

徐々に追い詰められる三角巾娘だが、ただではやられない。

〈ストレッド〉を通じて俺に雷撃を届かせようとしてくるが、雷が糸を伝った端から俺はそれを切り離していた。トカゲの尻尾きりと似たようなものである。

つまり三角巾娘の雷は無意味であり、弱まったツギハギがダルメンの〈穿つ羽〉を跳ね除ける力はなく——結果、一对の竜巻が三角巾娘の全身を押し潰すように飲み込んだ。

視界一面を覆う煙に包まれる中、かろうじて見える足元には崩れた地面が見える。

ダルメンの〈穿つ羽〉は洞窟の地面を抉り取る穴を作り出したのだ。穴の中心で横たわる三角巾娘を予想しながら、崩落しなくて良かったと感じる俺だった。

## 9. 理に潜む理（ファントム）

『追撃する？』

「殺す気かよ。あの子が一番情報持ってそうだし、この辺でいいよ」

息をつくくと、ナツキが慌てたように声を荒げた。

「倒したのはいいけど、こんな所で派手にツギハギ使って大丈夫だったんでしようか。遅れてスピリット・カウンターが発生したりしませんかね」

『だいたいよぶだいたいよぶ。そもそもこつち側でスピリット・カウンターを発生させたいなら、最低でも何百人規模のタンクルが欲しいもの』

「そうなんですか？ 一人のツギハギで起きたって話も旅先で聞きますが」

『よほどタンクル濃度が高かったか、使ったツギハギの問題だったんでしょね。例えばアルフューレラインに穴を空けるような〈召喚〉系の奴とか』

「呪紋世界に穴を開けてあつちの住人を呼び出すっていうツギハギでしたっけ。見たことないけど、存在するんですかね」

生きた証人が目の前に居るんだよ、ナツキ。俺は呪紋世界にはいなかったらしいけどね。

しかしさっきのタンクル量で不安になるのか。ナツキは過去、その事例に遭遇したことがあるのかもしれない。

「ダルメン。とりあえず、こいつらどうする?」

腕を組むダルメン。樽の模様の一部が怪しく光り、赤い双眸にも見えるそれはダルメンの視線代わりに怪しく輝く。

「どうしてわたしに?」

「襲われたのはダルメンだろう? もつと痛めつけたいとか、自警団か派遣か知らんけど街で警備してる人に押し付けるとか、ここに放置するとか。俺はどっちでもいいし、ダルメンが決めるべきだろ」

「そうだね……………」

押し黙るダルメン。そもそもこの後のことなど考えていなかったのかもしれない。

ならナツキはどうだ、と見てみれば彼女は彼女で〈穿つ羽〉によって潰れた跡を見据えている。と言つても破壊による煙で覆われて穴が空いている、くらいにしかわからないが。

「あいつが気になるか?」

「はい。ネムレスさんの援護がなきやられてたし、悔しいからリベンジはしたいかな」

「色々と上手い奴だったから、剣術で追い詰められただけナツキはすごいよ」

「むう。褒められるのは嬉しいけど悔しさも倍になる」  
「難儀なやつだ」

逆に言えば向上心が高いということ。お爺ちゃんやらに褒めてもらいたいから、というのが一番なのだろうが、本人の気質も高そうだ。

「ネムレスさんは明日以降も街にいますか?」

「ああ、今のところまだ居る予定だけど……」

「ちよつと対ツギハギ戦闘の修行をしたいから、付き合ってもらえませんか? もしア  
ンネを出ても、旅先が同じなら一緒にどうか、と」

「努力家で積極的だな。いいぜ、旅はまだ決めあぐねてるけど、街に居る間は構ってや  
る」

「言い方いい方」

「違うないだろ?」

からかうと素直に拗ねるナツキに苦笑する。和やかな雰囲気に含まれる中、俺はダル  
メンの返事を待とうとした瞬間、サウザナの叫びが洞窟に響いた。

『ネムレス!』

「っ?! ダルメン、全力で防御!」

サウザナを通してへクロツシングへに正体不明の攻撃が照準される。



すぐさまダルメンに指示を出し、傍に居たナツキを突き飛ばす。ナツキとは反対の方向に飛んだが、間に合わない——が、それをフォローするのが我が剣。

折れた剣の刀身が我が身を盾にして迫っていた何かを防いでいた。

だがダルメンの防御が間に合わなかった。いや、防御した上で吹き飛ばされていた。

強靱の一言に尽きるタンクルで作られた障壁を貫く一撃であったが、それでも威力の減衰は避けられなかったのかダルメンは顔を……樽を振って無事なことをアピールしてくる。

襲撃者——〈穿つ羽〉によつて倒したはずの三角巾娘を睨もうとするが、向けた視線の先に彼女はいなかった。

無音にして無感。静寂の殺意が俺達を襲う。

ぞつとする展開にも、俺はサウザナのおかげで平常心を保っていた。

「助かったよサウザナ。それより何を撃たれた？」

『強めのタンクル弾。直前まで〈理に潜む理〉<sup>ファントム</sup>で感知を遮断させてた。ついでにあの子、不利を悟って死んだふりしてたみたい』

「〈理に潜む理〉？」

『ある国で開発された、国家技法のツギハギ。その国を象徴するような技術つてやつね。と言つても〈理に潜む理〉はすでに滅んだ国家のツギハギだけど』

サウザナの声が沈んでいる。

三角巾娘の使うタンクルを取り込んで攻撃するのを逆手に取られたくなかったから、追撃控えたこっちのミスだ。

おかげでサウザナ本体にダメージを……負ってないな。ダルメンでも無事を免れなかったのに、どんだけ頑丈に鍛えたんだ？

『あー、殺すつもりでやったほうが良かったわね』

サウザナの冷静さの下で蠢く怒りの声に、俺の油断だと宥める。

ダルメンの〈穿つ羽〉の威力から考えて無傷というわけではないだろう。それでいてなお〈理に潜む理〉を駆使し動くことができている。

国家技法という国の特色を示すツギハギ。その使い手となれば、どこかの軍人や組織という可能性がありそうだ。

「ナツキ、ダルメン。気をつけろ。あいつ、姿だけじゃなくてタンクルも消せるみたいだ」

「なるほど、それでネムレスさん〈ハマップピング〉越しにも見えなかったんですね」

『さっきの攻撃は内包するタンクルが強すぎるから、撃つたらいかに隠してもその漏れを防げない。私には通じないって理解されただろうから、狙われるとしたら貴方達二人ね』

「一撃ももらったのは久しぶりだ、が。次は完璧に防いでみせよう」

「その自信が頼もしい!」

ダルメンの言葉にナツキが笑う。

でも、姿とタンクルを消すということは、攻撃に気付くことが出来ないと宣言されたも同然だ。足音といった五感に関する全ても欺けるのだろう。

加えて不意打ちの確殺であろう一撃を防ぐサウザナを見た以上、次はこれまで以上の慎重さを持たれる。

必然的に対処法は限られる。〈理に潜む理〉を知るサウザナは別だが、今は省く。

選択肢は二つ。逃げるか、この広場全てを巻き込むような広範囲のツギハギ。

前者はアーリイを置いていくわけにはいかないので不可能。後者は同じくアーリイを巻き込む可能性がある上に、下手なものでは三角巾娘のタンクル吸収の餌食。

となればどうするか。

「ダルメンさん、ダルメンさん。ちよつと……」

「……承った。〈穿つ羽〉!」

考えをよそに、ナツキから何か耳打ちされたダルメンが再び竜巻を繰り出す。

その範囲は広場全体を覆うような広範囲に迫るものだった。ただしその動きには何かの規則性があり、一定のルートを辿るように空間内を駆け巡っている。……なるほ

ど、道を制限してあぶり出す作戦か。

普通なら成功したかもしれないが、相手が悪い。何故なら……

「うひゃつ、ダルメンさんちよつと出力上げすぎ!」

「いや、風が飲み込まれている。洞窟の倒壊を狙っているのか?」

「下手にタンクル使わないほうがいいぞ。あの子、相手のタンクルを取り込んで自分のもの出来るみたいだからな」

「知ってたならすぐ教えてくださいよ!」

「倒したと思ってたし起きても俺とサウザナならすぐに対処できるって油断してたんだよ、ごめんなさい!」

「それ言ったらかばわれた私の立つ瀬がないじゃないですか、ごめんなさい!」

「ちなみに追撃するって言ったサウザナの意見断ったの俺だから! サウザナ悪くないから! むしろ感謝するところだから! 俺がごめんだから!」

『うつわーなんかうちの主がごめん、流れ弾ですごい恥ずかしい!』

「……ネムレス君は頼れる男と思っていたが、気のせいかもしれないな」

謝罪会が行われダルメンの一言に一番傷つきながら、俺は三角巾娘が今まで見せたツギハギ、その効果を全て教える。まだ手札を隠し持っている可能性はある、という助言も添えて。

作戦会議をしているうちに、周囲に赤い煙が押し寄せてくる。だが俺達を包み込もうとはせず、まるで包囲するように一定の位置から動かず鎮座していた。

俺は念のため、地中へストレッドを伸ばし、一番近くに居たあのうろたえ少年の体をこちらへ引き寄せる。

妨害してくるかと思つたが、三角巾娘は俺のツギハギには何もしてこない。逆手に取られたことから、位置を知られるのかもと警戒しているのか？ それならそれでうろたえ少年をたぐり寄せるとしよう。

「ネムレスさん、一体何を？」

「交渉材料になるかなーって」

「ネムレスさん……不利になつたからって人質とか……」

「万が一相手が逃げた時の、情報の確保のためだよ」

まあ普通にこいつを利用する予定だけど。

「うーん、相手が見えない察知出来ないってなるとジリ貧ですね」

「とりあえず、守りを固めよう」

ダルメンがそう言つて樽を俺達に……

「いらんいらん。せめてツギハギで守つてくれ」

「守りには定評があるが？」

「動くのに邪魔です」

「残念」

心底残念そうにしながらも、ダルメンは俺達を包み込むようにツギハギによる障壁を張る。形が樽っぽいのはこのさい言及すまい。

宣言の通り、先程よりもさらなるタンクルが込められている。さつきと同じ一撃ならば防げそうだが……

「でもあいつってタンクル吸収するんでしょう？ ツギハギで守ったら突破されませんか？」

「吸いきれるものなら吸い取ってみるがいいさ」

「自信たっぷりですね。っても、自信過剰ってわけでもなさそうですが」

吸収したタンクルによる攻撃もかなり強いだろうに、それを物ともしないのはアクターやアバターという枠を超えたツギハギ使いとしての潜在能力の違いか。

だからと言って油断するつもりはないし、結末をひっくり返すために色々策を練るとしようか。

「ナツキ、こいつ渡しとく。それなら多分、あの三角巾娘にタンクルを吸収されずに戦えるはずだ」

懐から取り出したキラビヤカをナツキに渡す。

柄にツギハギを仕込んだことで刃を展開した時に〈相殺〉が〈付与〉されるから、一方的にタンクルを吸収されることなく斬撃を通せるはずだ。

「サウザナ。あのツギハギの消耗って多いか？」

『改造されてたらわからないけど、消耗は多い』

「よし、作戦決定。二人とも従う気はあるか？」

「あいつに一発かましたのですごく聞きます」

「わたしだけの突破は少々難しいかもしれない」

「よく言った。ナツキ、お前を要にするからな」

口元を歪ませながら、俺はその作戦を伝える。

ぐったりするうろたえ少年を抱えながら、俺はダルメンへ指示を出した。

「熱いワインも乙なもの。〈サンオブザオーラ〉！」

前口上はさておき、ダルメンの使うツギハギが新たに展開される。これまた俺の教えたツギハギだ。

生み出されたのは赤いタンクル。昨日のダルメンと同じように垂れ流すそれがじわじわと洞窟内へ広がっていく。

一見して殺傷力はなさそうに見えるが、これはあの赤い煙と同質のもの。つまり触れると危険、それでいて広範囲、である。

三角巾娘は姿もタンクル感知も隠しているが、これに触れてしまえばダメージは免れない。無傷でいたいならこのツギハギを吸収するほかなく、それを行うということは自分の位置を知らせるということにもなる。

無論そんなのは三角巾娘とてわかっているだろう。だが相手をするのは圧倒的なタンクルを持つダルメン。

〈理に潜む理〉は確かに脅威のツギハギだ。でも、サウザナからの情報が確かなら性能の高さは消費の多さに比例する。常時消費に加え相手のタンクルまで消すとなればその消耗は半端ない。

その状態が続けば、ほんの一欠片程度の綻びが生まれるだろう。

俺が狙うのはその一瞬。〈付与〉〈支配〉〈感知〉で〈サンオブザオーラ〉を俺が操作し、ダルメンのタンクルが続く限りその攻防は続く。

攻撃の察知はサウザナが。加えてダルメンをフォローすればただでさえ高い防御力を突破出来ないはず。

ならば後は我慢比べ。未だなお猛威を振るう竜巻といい、ダルメンの圧倒的なタンクルによるゴリ押し。それでも押し通せば勝ちだ。

そして狙い目の時が来る。

相手がツギハギを吸収した場所を特定し、同時にあるツギハギを使う。



それを即座に察知し、うろたえ少年を前に付き出したままその場所へ駆けた。

背後で人質だー！ というナツキの声が聞こえるが無視。

「おい、こつちを見ろよ！ お前の部下——があつ！」

うろたえ少年を抱えた俺の体が予測した方向とは逆から攻撃が仕掛けられる。当然手を離し、うろたえ少年は何も見えない感じない位置でふよふよと浮くように抱えられていた。

「無事か？ 全く度し難い連中……いや、厄介者と言ったほうがいいか。これからのことを考えると、面倒極まりない」

「ああ、全くな」

声を返したのはうろたえ少年——の姿をまとった俺だ。

ダルメンの陽動の中、俺は自分とうろたえ少年の姿をツギハギで変えていたのだ。

つまりぐったりしていたのは俺で、それを抱えていたのはうろたえ少年だったわけだ。タンクルを纏えるのは、アクターだけではないのである。

俺の姿をしたうろたえ少年の操作もまた、サウザナが担当していた。

識世かつ武器でありながらもツギハギを覚えた頼もしい愛剣あつてのコンビネーションに、流石の三角巾娘も騙される。

さらに三角巾娘はうろたえ少年に偽装した俺に〈理に潜む理〉を使った。隠せるのは

相手からではあるが、その力を共有した相手にはその位置は丸わかりだ。

部下思いの良い上司だったようだけど、この場合に限っては失敗したな。

「……？ 貴様は——!?!」

「流石。だけど——」

三角巾娘は即座に俺へかけた〈へ理に潜む理〉を解除し、攻撃のためにツギハギを展開する。用事は済んだ。この先どうなるにせよ、こいつはもう怖くない。

「もう遅い」

そのタンクル弾を手元に飛んできたサウザナが受け止め、俺は〈色彩〉を〈付与〉させたタンクル弾を三角巾娘以上の速さで繰り出した。

こいつはあくまで姿とタンクルを消すだけで、速さそのものが突出しているわけじゃない。

それでも防御だけなら可能だっただろう。けどタンクル弾は三角巾娘のツギハギに防がれるより早く、その手前で飛散させた。

狙いは、飛沫による着色だ。

それは広範囲に渡って中空を光るように白く染める。だが一部分だけが元の空間の色のまま在った。

つまり〈へ理に潜む理〉の衣に着弾した証明。

その空白の場こそ、三角巾娘の居場所。

〈マツピング〉を欺く〈理に潜む理〉では〈クロッシング〉による指示は不可能。タンクルを使っていた俺やダルメンはともかく、それを使えないナツキに三角巾娘の位置を教えるためにこんな回りくどいことをしたが、成果はあったようだ。

特定した三角巾娘に迫るのは、キラビヤカを全力でなぎ払うナツキ。

ダルメンと俺によってあらゆる間を外され、硬直したこの一瞬。

突然目の前に現れたナツキの一撃は、それでもなお反応する三角巾娘のツギハギとかち合い、それを飲み込み進むという予想通りに三角巾娘を切り裂く。

一瞬遅れて、中空に線が刻まれる。〈理に潜む理〉の効果も消えたのか、景色という衣が徐々に剥がれていき、やがてその姿を現した。

そこにナツキが元々持っていた細身の剣の柄が三角巾娘に頭を痛打する。連続のタンクル消費、ミスの許されない緊張の連続からの不意打ちへの対処。そんな怒濤の勢いに負担がかかっていた頭に物理的な一撃を受けた三角巾娘は、今度こそ完全に気を失った。

気絶した三角巾娘を抱えて着地し、その様子を確認したナツキが俺達に向けてピースサインを送る。俺達は勝利したのだと確信し、ナツキに向けて親指を立てた。

——瞬間、世界が揺れる。

ひゆういん、と聞きなれぬ音がした。

音源へ目を向ければ、かつての仲間が使っていた銃という武器に似た白い何か宇宙に浮かび、その小さな発射口からタンクルを撃ち出した。

洞窟の地面に着弾したそれは、奇しくも俺が三角巾娘に使った〈色彩〉弾のように様々な色と模様を描く。

それは呪紋だった。タンクルによつて描かれた、ツギハギの準備段階を成す構成。円形の扉を思わせるそれが、二つに割れる。

現れ出たのは、爬虫類を思わせる皮膚で覆われた人間の数倍はあろう三本爪の腕。

咄嗟に攻撃を仕掛けようとした俺の目に、呆然と浮くユカリスの姿を捉えた。

あの巨腕の射程範囲内。そう察知した俺は攻撃を中断してユカリスの回収を急ぐ。すでにナツキは三角巾娘を、ダルメンは捕獲した敵とうろたえ少年を抱えて離れていた。

やがて巨腕はその四肢と頭が扉の先から抜けてくる。その腕に等しい体軀を見せつけながら、そいつはこの世界に姿を現した。

「ス、スピリット・カウンター……?」

『ううん。こいつはカケラオチじゃなくてあの中に入ってた〈幻獣《スペルゴースト》〉。これが燃料だからタンクル弾があんな強かったのね』

ナツキの疑問に答えるサウザナの声が遠く聞こえる。

頭部に刃を象るような角を持つ〈幻獣〉と呼ばれた異形の存在は、世界全てに嫌悪を轟かせるように、絶叫を上げた。

怯えすくむ二人をよそに、〈幻獣〉は身をかがめて頭にある一刀を突き刺すように突進してくる。

「ダルメン、アーリイを！ ナツキはその後ろに隠れてろ！」

咄嗟の指示をしてサウザナを構えたと同時に、〈幻獣〉の一刺しが折れた刀身に直撃する。

鋼と鋼が噛み合う重々しい音が立つ中、俺はどうにもならない重量差を前にサウザナを弾き飛ばされ串刺しになる……はずだった。

『抜剣《ブレイド》・ラシン』

〈幻獣〉の角が止まる。止められる。他ならぬ、サウザナによって。

背後から驚く声がする。

それもそうだろう。即死しないほうがおかしい突進だった。

なのに、サウザナは〈幻獣〉からすれば取るに足りない小さな刃を持って巨躯の切っ先を受け止めているのだ。

その理由は、変化した剣にあった。

劍が鎧をまとつている、と言えはいいのだろうか。

分厚い刃というものではなく、紫銀に彩られた装甲のようなものが柄や鐔、刃を覆っている。

さらに一瞬だけ幻視した、鎧をまとつた巨人の騎士。おそらくこの劍自体はそいつを動かす鍵のようなものだと思つた。

〈幻獣〉もサウザナを脅威と認識したのか、一度距離を置いて頭を大きくのけぞらせる。

ちらりと見える口元からは、溢れ出るタンクルが触れる物全てを融解せんとする熱量を伴つてその口蓋に充填されている。

それでもなお、サウザナに動揺はない。

放たれる熱光線。

洞窟全てを破壊してなお余るそのエネルギーを前に、サウザナを握つた俺の右手が勝手に動く。

下から上への、劍を掲げるかのように軽い動作。

人と洞窟、果ては周辺的环境を等しく溶かすであろう一撃はただそれだけで上空へと反らされた。

力を上に逃したことで洞窟が崩れることはなく、収束された一撃は他に亀裂を与える

ことなく、ぼつかりと巨大な穴が天に作られていた。

差し込んだ光が俺を、サウザナを照らす。

その光景をナツキも、ダルメンも、ユカリスも、俺も理解が追いついていない。

ただの一振り。事はそれで終わった。

その巨体を両断された〈幻獣〉の亡骸が、これ以上ないほど示していた。

〈幻獣〉の体からぼろぼろと何かが剥がれていく。

それは呪紋のようにも見えるし、〈素材〉が抜け落ちるツギハギにも思えた。

やがて〈幻獣〉はその色を空気に溶け込ませて消失する。呪紋の扉も同じく消える中、白い銃身だけがそこに残っている。

『これでよしと。それじゃアーリーのところに戻ろっか』

サウザナののんきな声が響く。

突然の遭遇は突如として消え去り、奇妙な後味を残しながら終わりを告げるのだった。

## 10. 原因は

「……私が資料を読んでる間にそんなことがあったのですか」

戦闘を終え、謎の襲撃者達を捕縛した俺達はアーリイに事の次第を報告していた。

割と派手に戦っていたと思うのだが、俺達が報告するまで洞窟の状況を理解していなかったようだ。大物である。

「というか〈幻獣〉と判断したのもそうですし、それを一刀両断したサウザナさんに色々聞きたいことがあるんですけど！　なんですかあれ、すごすぎます！」

鞆に収めたサウザナに向かってナツキが絶叫する。うるさい。

『そう言われてもね。〈幻獣〉を知ってて、それを斬っただけとしか言えないんだけど』『いやだから、なんでそんな強さを持つてるのってことです！』

『鍛えた結果』

「ぬうぐぐぐぐぐ」

「ナツキ、隠してるわけじゃなくて本音だぞこれ。こう見えてサウザナは何百年と昔から存在してる識世なんだ。それでいて自分を鍛えてれば強くなるのは当然……じゃないか？」



「言い切れないあたり、ネムレス君の動揺がわかるよ」

「納得できないかもしれないけれど、サウザナのほうが強かった、で理解してくれ」

ナツキが聞きたいのは、どうやったたらそんな強さを得たのか、ということだろうが、それこそサウザナが費やした時間と努力の結晶としか。

ちなみに待ち疲れたのかユカリスはすやすやと寝息を立ててテーブルの上に積んだ紙束を背に寝入っていた。こちらにも小さいのに大物だ。

そこで寝ると体を痛めそうなので、起こさないようにそっと抱えて内ポケットの中へ入れてやる。

そうしている間に、ナツキがアーリイにこの集団について訪ねていた。

「アーリイ、こいつらの顔に見覚えは？」

「特には。アンネの街に来て三年ほど経ちますが、その中でも出会った記憶はありません」

「こいつらは姿を消せるし変装の可能性も考えたほうがいい。というか、明らかに街から慌てて来ました、みたいな格好だしな。顔を隠して潜伏してた可能性が高い」

「やはりアーリイ君が目当てということか。いや、正確にはこの部屋の資料だと思う」

「そのボロボロの様子からして、かなりの実力者であったのでしょうか」

「少なくともどっかの軍人じゃないか、って睨んでる。理由は格好の割に合わない強さ。」

国家技法のツギハギ、タンクルを消す〈理に潜む理〉を使えること。あと、ダルメンを襲った連中と繋がってる……つまり複数の面子が同じ行動をしていたこと。何より、〈幻獣〉なんてのを使役してるのが普通の奴とは思えない」

「国が欲しているものがここにあるってことですか？」

「小さな賢者と呼ばれるアーリイ君が目の色を変える資料だ。おそらくは」

ダルメンに促され、今まで資料を解析していたであろうアーリイに中身の詳細を聞く。

「アーリイ。ここにあるのは一体なんなんだ？」

「確認出来る限り、世界で見たことのない資料です。あの剣都ルオでも見られない遺失技術かもしれません。私と似た発想で、さらに先を行く方が他にもいたとは。やはり世界というものは広い」

剣都ルオ？

そのことを聞こうとするより早く、サウザナが俺だけにイメージを送ってくる。

『世界一強くて有名な国、って思えばいいわ。詳しい話はまたいずれ。それより、その資料私にも見せてくれない？』

わかった、と素直に頷きながら俺は適当な資料を取る。〈クロツシング〉によって視界も共有しているので俺の見たものは鞆に入ったサウザナも理解できる。

「ええ、ルオでも!? それじゃあ歴史的大発見つてやつじゃないの!」

「隠していなければ、ですが。少なくとも、新技術としての歴史には刻めそうです。ここに資料があるということなら全部持つて帰つて研究しましょうそういたしましょう。幸いにして現在受けている依頼はないので今後全て断れば時間はたっぷりある」

さらりとすごいこと言つてんな。

それだけ職人から見たら垂涎の一品ということか。

「はー、もしそれで技術開拓したらアーリイつてば小さな賢者どころの騒ぎじゃないわ。

アーリイつてばこれに目をつけていたのね」

「……………隠されているのがここまでとは考えが至つておりませんでした」

「その辺を考えるのは持ち帰つてからにしよう。今は他にやることがある」

そう言つてダルメンが用意した樽の中に入れられる三角巾娘達を見る。蓋こそしているが、首だけによつきり出ているので奇妙な光景だ。

こいつらが気絶から覚めるまでの時間は誰にもわからないし、その間にどうするか決めなくてはならない。

「ダルメンはこいつらをどうしたい?」

「どうしてわたしに?」

「襲われたんだろ? 報復するなり許すなり、処遇を決める権利はあると思うぞ」

「正直どうでもいいというのが本音だね。それより気になるものがある」

「ふうん。ならナツキは？」

「こいつにリベンジしたいです！」

そう言つて三角巾娘を指すナツキ。

気持ちはわかるが三角巾娘だけ釈放、というわけにはいかない。この子にはある意味一番残つてもらいたいのだ。

「そういうネムレス殿には何かお考えが？」

「リアクション待ち、つて言いたいんだけどこいつらの背景が本当に国なら、アンネの街に置くのは危険だと思う」

あの場を出したのはダルメンの名前だけだ。アーリイが居ることは知らないはずだが、この場所を元々調べていたとしたら高確率でアーリイのことは知られているだろう。何せ彼女もまた独自にこの場所を調査していたのだから。

『アーリイのことならこいつら絶対知つてると思うわよ？』

と、ここで資料を読んでいたサウザナがヘイメージボイスを使い、声なき声で頭に直接会話を送ってくる。どういうことだ？

「なんでわかる」

「ネムレス殿？」

突然すつとんきようなことを言い出した俺に眉をひそめるアーリイ。俺はアーリイに許可を取つて少しその場から離れた。

「すまん、ちよつと失礼。……おい、何を知ってる」

『目覚めた当日、馬車とすれ違つたじゃない?』

「そうだな。わざわざお前足止めたな」

『あの時止めた理由の半分に、私達を見ていた奴がいたの。そいつらはへ理に潜む理を使つて……』

「それが原因じゃねーか! 目え付けられた理由まさにそれじゃねーか!」

怒号を発してサウザナを叱る。突然の絶叫に全員の視線が俺に向くが、今は気にしていられない。

三角巾娘は言っていた。

彼女らに敵対の意志はなく、襲撃を仕掛られた側であり、振りかかる火の粉を払っているにすぎないと。

その襲撃者をあちらはダルメンと勘違いしたようだが、サウザナの話が本当なら真実は異なる。

照らし合わせれば、虫を払うとか言つてた時に連中の一部をふつ飛ばし、たまたまその後を通つたダルメンが襲撃者と勘違いされて襲われ、さっきの戦闘へと繋がつたの



がっちり顔を掴まれながら事の詳細を話す。もちろん、俺の情報は明かさずに、だが。

「うう……悪いすまない」

「いやー、ネムレスさんが責任感じることはないと思うんだけど……」

「わたしは気にしてないよ」

「けど、襲われたのは俺達が大いに関係してるし」

『せっかくの良い気分を刺されちゃってぶんぶん、だわ』

「だから事前に言えってんだよ！ このタイミングで言うかあ!? おかげで俺だけで済むところを無駄に巻き込んだらダメだろ？」

『三人共ごめんね？ ほら、私もネムレスも謝れる大人だから素直に許して……』

「許してもらおうって態度じゃない！」

年を取ってもちゃんと謝れる存在に、俺はなる。

「特にダルメンは本当にすまない。サ……この駄剣のせいで巻き込んでしまった」

『なんで言い直したの？ あと犬じゃないけど？』

「駄目な剣と書いて駄剣だよ、察しろよ」

『やだー！ やだー！ 察したくない！ せめて賢い剣って言ってー！』

いかん話が進まん。

「とりあえずあいつらの処遇は俺が……」

「いえ、どの道この部屋を調べようとしていたというのでしたら私も無関係ではいられなかったでしょう。貴方にだけ責任を貸すわけには参りません」

天使がいた……

「そうですそうです。今更な話でもありませんし、私としては気にしてないです。むしろやる事が出来て嬉しいくらい」

「ダルメンからすれば俺もあいつらと似たようなもんだしな。何か出来る事があれば言ってくれよ？ 出来る限りで何か謝罪する。一番の被害者はダルメンだから」

「さっきも言ったが、わたしは君に怒りなど抱いてないよネムレス君」

しかも三人……

思わず頬から熱いものが流れそうになるが、今は我慢だ。やらなければいけないことをしよう。

「気にしてないのだが、そこまで言うのなら後で一つお願いでも聞いてもらおうか」

「ああ。俺にできる範囲でなら」

借りは即返さないと気がすまない。

「では早速資料の運び出しと参りましょう」

「穩便に済ませるのならこの場所にある資料全て置いて……わかったわかった、その選択肢はなしなんだな。〈幻獣〉の攻撃のせいで、洞窟も崩れるかもしれない。持ち主には



悪いが、保管つて意味も込めて持ち帰るつてことにしよう」

アーリーののしよぼりするような顔に罪悪感を刺激され、置いていくという判断への口をつぐむ。

こつちで出来ることに限界がある以上、後は三角巾娘達次第か……となればやることは決まりだ。

とりあえずアンネの街へ戻ることにした俺達は、サウザナがダルメンにも使つた封印のツギハギを全員にかけて馬車へと積み込んでいく。

念の為に、と言つてどこからともかく取り出した手錠のようなものを渡されたので、それも一緒にかける。呪紋が刻まれているのを見ると、何らかの紋具のようだ。

アーリーはツギハギの封印術を使うサウザナに驚いていたが、そんなに上等なのか？ 昔の俺でも使えたくらいなのに、未来世界は何がすぐくて何が普通なのかわからん。

俺は三角巾娘を横に置き、他の監視をナツキとダルメンに任せて馬車の適当な位置へ座る。万一目覚めた時、いの一番に対処するためだ。

気絶して眠っている三角巾娘をふと見る。

穏やかに眠るその寝顔は、俺達三人を相手に立ちまわるほどの強さを持っていると思えないあどけないものだった。軍人っぽいと推測してはいるが、本当にただツギハギが使える町娘だったら笑うに笑えない。

「罪状的には、アーリイを狙っていた不審人物ってことで通るかな」

『当然じゃない。姿を消してるあいつらが悪いんだもん』

「やる前に言ってくれたら良かったんだけど」

『何さー。じゃあネムレスは姿を消した大人の集団がアーリイみたいな子供をこそこそ付けてる場面に遭遇したら成敗しないで見てみぬフリするの?』

「そう言われると何も出ない」

この件に関しては相手からの情報次第だな。

アーリイ狙いなら俺も罪悪感が薄れる。そうじゃなかったら謝る。

「あ、そう言えばネムレスさん。あいつから何を盗ったんです?」

「お、よく気づいたな」

ナツキの言葉に、俺は三角巾娘から取り上げたものを見せる。

使い手を選ばず、引き金を引くだけで凄まじい速度を秘めた鉄塊が射出され、敵を撃ち殺せる恐ろしい武器。

当時貴重な武装だったというそれを、三角巾娘が普通に携帯しているのを見るとやはり未来なんだと納得する。

でも、気になるのはそれだけじゃない。

「サウザナ。あの子が使ってたタンクル弾はあの〈幻獣〉を燃料にしてるって言ってたけ

ど、これの詳細知ってるか？」

『うん。その武器はね、剣獣（ゴレム）っていうの』

「ゴレム？」

俺のつぶやきにナツキが答える。

「聞いたことがあります。剣獣っていうのは〈幻獣〉が封じられた武器のことで、力を解放すると、一時的にその幻獣の力を使える、と。ようは簡易アクターですね。あれはあの〈幻獣〉の力をそのまま撃ち出していたんでしょ？」

「アバター使いがこれを使えば、アクターとしての力も両用出来るってことか」

「はい。最初に発掘されたのが剣だったからそう呼ばれてるだけで、造形の全てが剣つてわけじゃないそうですが」

「発掘？」

「スピリット・カウンターの残骸の中に埋もれていたそうです。制限がある代わりに、強力な兵器として運用できる武器つてのが通例ですね。形が違いましたが、旅をしている時にお偉さんの所で見たことがあります。でも有名になったのは、発掘したのを改良して量産に成功した国があるからだと思えますが……」

またスピリット・カウンターか。

落ち着いたらサウザナにちゃんと意味を聞いておかないと。

『リアクターがないからカケラオチと勘違いしてたみたいだけど、あれはもつと広範囲で派手よ。仮に一体だけ出てくるなんてことがあれば、それだけの密を『持つてる』存在だからあんな弱くない』

それなりに広かった洞窟を一撃で倒壊させる存在が弱いですかそうですか。

「剣獣って貴重なのか？」

「結構お高めです。王侯貴族や一部の有力な権力者なら所有しているものですが、少なくても街で暮らしているような女の人が手に入れるものじゃないですね」

「つまりそんなシロモノを持つているあの子は」

「割と扱い良い所に所属してることですよ」

でしようね、というサウザナの声。

本命はどこかの国の関係者だったが、貴族の私兵という説も出てくるな。

むしろそっちが濃厚か？ 一団を取り込んだのか逃亡兵を貴族がかくまったとか

……いや、考えるのは話を聞いてからにしよう。

「何やら気になるお話をされておりますね。見せていただいてもよろしいですか？」

「ああ。それじゃあその間、御者は俺がやるよ」

「感謝を。何かわかったらお教えしますね。……ナツキさんもどうも」

「いえいえ。あ、そうだとダルメンさん。さっきのアクターだけ——」

「わたしを模したものだ」

「あーはいあーはい樽です、ね樽です。聞きたいのはそつちじゃなくて——」

御者席へ移動した俺は、アーリイに劍獣を渡し入れ替わるように馬車の手綱を握る。こようやって馬を駆るのも久々だ。初心を思い出すようでもちよつとワクワクしてくる。

気持ち体が伝つたのか、内ポケットで寝ていたはずのユカリスがあくびをしながら俺の服を這い上がってきた。

「おつと、起こしたか？ 悪いな、もうしばらくのんびりするから、寝てもいいぞ」

眠気は覚めてしまったのか、ユカリスは首を振って俺の肩に止まる。どうやら景色を堪能することにしたようだ。なら一緒に見ようか。

久々の御者の視点に興奮していたからなのか。俺は隣で真剣な顔で劍獣を凝視する。アーリイに気づかず、アンネの街まで楽しそうに馬を走らせていた。

その夜、うろたえ少年と三角中娘達を連れ俺達はアーリイの家へとやってきていた。

アンネは川を隔てて家屋が点在するが、その北部には巨大な滝壺がある。その滝を作るものが街の代名詞でもある湖であり、豊富な栄養を含む万能の水として親しまれている。

アーリイは街から少し離れた所で一人暮らしをしているようで、実験や色々なことか

らやや遠い位置に自宅を構えているそうだ。

「もうすぐ私の家です。小島の上にあるのでわかりやすいかと」

「ん、小島？」

「ええ。ほら、あれです」

アーリーの発言に眉をひそめながら滝の傍にあつた山道を登りきり、湖を一望出来る俺の目に飛び込んできたのは、青く澄んだ巨大な湖とその上に浮かぶ小島と、そこに建てられた屋敷だった。

橋などは一切なく、湖の上にある小島まで歩く道は一切存在していない。

「ほあー、あそこまでどうやって行くの？ 水の上を走ればいいの？」

「するなよ？ 沈むから」

「おじいちゃんは走れますが？」

「色んな意味でその人見てみたくなつた。……アーリー、ツギハギで足場作って行けば良いのか？ それ以前に、なんであんな場所に家建てた」

「色々と立地条件的にここが一番良かったのです。それに、ちよつと街の人を巻き込まない場合などには便利なものでして」

まさに今役立つているので、アーリーのそれは慧眼というべきか。

ナツキは何の準備もなく湖に足をつけようとしていたので、襟を引っ張って止める。

どうして止めるのと文句を垂れていたが、今は無視して四角形の適当な大きさの足場をタンクルで作っていくつか撒いていく。

簡易の足場を作って屋敷までの道のりは問題なくなったが、ツギハギ使えない誰かが訪ねてきたらどうするつもりやら。

家屋自体は貴族の住むような屋敷という感じで、昨日泊まっていた宿を置いてもなお余裕のある広さを誇っている。

家に入った俺達は、同じくアーリーの手によって作られた地下室へと歩みを進めていた。

紋具を作る製作の場以外に、色々と音なども漏れるのでなるべく目立たない場所に居を構えた理由の一つらしい。音ってなんだよ、なんか不安になってきた。

そうしてやってきた地下室の一室。その一部に、どう見ても牢屋にしか見えない空間が建造されていた。……アーリーさん？

俺の懸念を察したのか、アーリーはこの場所が作られた理由を明かす。

「今は誰もいませんが、街の自警団で対処出来ない凶悪犯罪者などをここに収容しているのですよ。閉じ込めてしまえば、出ることは大体不可能ですからね。と言っても今回に関しては逃げられない自信はありませんが……そこは皆様のお力で絶対と致しまししょう」

マジで何者だこの子。

湧いた疑問は胸にしまい、俺は一番奥に三角巾娘を。その隣にうろたえ少年を移動させる。ユカリス、お前は無理しなくていいぞ。

何故か甲冑騎士の人形が置いてあったり、薪で燃やすタイプの燭台も置いてある、喋り方同様に趣を重視しているのかもしれない。

「起きたら尋問するんですよね？ 色々聞きたいことが」

「いや、それは明日以降に控えてくれ。それと、尋問は俺がするから、何か聞きたかったらそれが終わってからにしてくれ」

「えー、一緒にいちゃ駄目なんですか」

「ナツキの場合自分の欲望を優先させて、聞きたいことも聞けなくなりそうだしな」

その物言いに鼻を白ませて文句を言いかけるナツキだったが、自分でもわかっていたのかすぐに感情を鎮静させる。よしよし、良い子良い子。

「話をさせないってわけじゃないんだ、少しの我慢だよ。さ、今日はもうメシ喰って寝ようぜ。誰か料理作れるか？ いなけりや買い出しに行くが」

「私はおばあちゃんに教えてもらったから、それなりに出来ます」

「わたしは食べる専門でね」

「私は食事を作ったりはしません。作ってもらうほうが好きなので」



ちよつと意外だ。アーリイなら料理もそつなくこなすと思つていたが。

同じように意外なのはナツキだ。この子は食べ専かと思つていた。

ダルメンは言わなくていいよ、知つてたから。

「ですが食材はあります。たまにエイン殿——昨日皆様も会つた従業員の女性がたまに食事を作りに来てくださるので、それに甘えておりますな」

「あの子、ツギハギ使えるのか?」

「いえ、来る時は私も一緒に居るだけです。事前に伝えたり、たまに来て欲しい時に訪ねて作りに来てもらつております」

「それなりに離れてるのによく来てくれるな。今日は来てくれる予定だったのか?」

「それが彼女の優しさでもありますので。空振りであつたなら来ていただく予定でした。ですが彼らを回収した以上、しばらくここに近づかぬよう言わねばなりませんまい」

「だな。ダルメン、伝言いいか?」

「ああ、任せておきたまえ。その代わり美味しいものを頼むよ」

「えらそーに。ナツキはメシを頼む」

「それは構いませんけど、ネムレスさんはどうするんです?」

「話を聞くのは明日と言つたが仕込みはする。それをちよつとな」

ニヤリをあえて悪い顔を作つてナツキに見せつける。ナツキは呆れたような、苦笑す

るような表情で乾いた声を漏らす。

「うわ、あつくど」

「普通に話してくれない相手に語らせるための小技さ」

「後で話せるなら別にいいですけど。じゃあアーリイ、食材つてどこ？」

「こちらです。料理はしないと云いましたが簡単な手伝い程度は出来ますので、共に参りましょう」

「そうなんだ。調理だけ出来ないって感じ？　って、ユカリスあんたも手伝ってくれるの？　ええ、ありがとう。一緒に美味しいご飯を作りましょう」

「では、わたしは早速エイン君のところへ行つてこよう」

「もう驚かせんなよ」

「大丈夫。わたしも宿泊客だから見慣れたはずだ」

一日で見慣れるかな、それ。

肩に止まっていたユカリスも和気あいあいな少女達と合流し、表情が見えなくても意気揚々と伺えるダルメンが街へと降りていく。

全員を見送った後、俺はサウザナを鞆から引き抜いた。

## 11. ナツキとの特訓

蛇のようにうねる斬撃が首に迫る。

何度か受けてわかったが、防御をかくぐるナツキの剣技は事前に剣を揺らすフェイントから目に残る残像のようなものだ。

言葉にすれば単純だが、スピードの乗った剣を残像に残らせるほど切り返すその技量は感嘆の一言に尽きる。

単純な剣技に優れたナツキだからこそ可能なものだが、俺は剣技で対抗する気なんてさらさらしない。

ナツキが使うのは木刀と呼ばれる、彼女の武器に似た片刃を模した剣だ。対して俺は普通の木剣を使用している。どちらもアリーイから借り受けたものだ。

「ふっ！」

「ちっ！」

首筋に木刀による擦過傷が刻まれる。防御は上手いほうだと自負していた心が揺らぐなこれ。

彼女の剣を年齢で見るのはとつくにやめている。

一秒足りとも同じ場所に居ないほどの高速歩法を駆使し、縦横無尽に全身へ斬りかかるナツキをそんな目で見るのはむしろ失礼だからだ。

それでもサウザナを振るってきたり今までの経験がナツキの木刀を受け続ける。

時に膝よりも下からの強襲に肝を冷やしたり、ツギハギを解禁していなければ勝負はついていると思う程度に真つ向勝負での武は圧倒的に彼女が上だった。

けれどそれは剣、ないし接近戦に限った話だ。持ちえる術を使うのなら強さは逆転する。

ナツキの木刀を受けに専念して防ぐ。その合間にツギハギによるタンクル弾を仕掛けようとしますが、手を向ける先にナツキはいない。視線だけで俺の手を予想しているのか、凄まじい危機察知能力である。

ならば、と木剣を受けると同時に〈支配〉を〈付与〉させる。

ナツキはツギハギを使わないので、これだけで正直勝てる。何故なら……

「んなっ!？」

俺が指を折ると、ナツキの手に握られていた木刀がこちらへ寄ってくる。正確には手繰り寄せたのだが、ナツキからすれば武器を奪われたようなものだ。

〈プログラムギアス〉。

それがこのツギハギの名であり、無機物を俺の命令に応じて操作することの出来る

いうものだ。応用として昨日のダルメンのワイン砲を操作したような使い方も出来る優れものである。

多少躊躇はすると思つたが、ナツキは構わず突つ込んで来た。木剣が奪われても素手で戦う気のようにだ。

実に勇ましい。実戦でなく修行だから問題ないが、それでは無理だ。

「今ナツキの武器をへ支配」したから、この一戦じやもう使えないと思え。こんな風に剣技で負けてても武器を奪つたり、こうしてやれば——」

威力のないタンクルの光球を生み出し、へ分裂へ射程へを与えて周囲に浮かばせる。数を十ほど超えたところでナツキに発射。

四つくらいまでは避けて俺に攻撃するまで出来たが、さっきの俺の言葉を反芻しているのか服にさえ当たらぬようにしているその動きは、五つを超えると攻撃の暇はなく回避に専念せざるを得ない。こうなれば後は時間の問題だ。

俺はおまけとしてへ色彩へのタンクル弾を射出。ナツキの顔に当たった。

「うわぷっ」

妙なうめき声を上げながらナツキが尻もちをつく。その顔は一部が髪と同じ黒に染まり、白い肌と合わせて白黒の動物を連想させた。

加えて昨日降った雨の影響で地面がぬかるんでいるため、服が泥まみれになつてい

る。

運動用に、とアーリイが用意してくれた服に着替えて正解だった。ナツキは転ばないですよあつはつはなどとほざいていたが、無理やり着替えさせた甲斐があつたというもののだ。

三角巾娘達を撃退し、アーリイの家の地下へ放り込んだ翌日。

彼女らの監視をサウザナに任せた俺達は、ナツキの申し出により対人戦の訓練を行っていた。

アーリイの家の周囲にはアンネへと流れる滝と湖、そしてただっ広い土地がある。

リアクターとやらもここにあるのでタンクルも存分に使えるし、街とも少し距離が離れているため、派手に動いても誰に迷惑をかけることなく特訓できる。

そのため、洞窟から持ち帰った資料の解説に没頭するアーリイから許可を得た俺達は家の周囲で訓練を行っているというわけだ。

顔の汚れを拭っているナツキに木刀を返しながら、反省点を伝える。

「こんな風になるわけだ。武器を奪わなくても、分裂したタンクル弾にへプログラムギアス」をへ付与」させたら、それを木刀で受けたら同じ結果になる。そうでなくても数を増やされた終わる。今のが色付き弾じゃなかったら顔潰れるぞ？」

「うー。こんなあつさりやられるなんて。自信なくします」

「割と頑張ってたぞ。大抵の奴はうねる剣で倒せるだろうし、実際他のツギハギ使うは問題なく倒してたんだろう?」

「でも倒せなかった。ネムレスさんは上手いのね。私に間合いを取らせてくれない」「お褒めいただき恐悦至極。ナツキの剣を受けられるレベルのツギハギ使いだときついな。攻撃手段が今回みたいなのじゃなくても、ツギハギを合わせられたら負ける」

仮に三角巾娘とタイムマンしたとしても、ツギハギを使われたら十中八九ナツキの負けだ。〈理に潜む理〉を使われたり、あの搦め手なツギハギを撃たれたらナツキには対処する手段がないからだ。

「例えば——」

俺は〈射程〉〈変化〉〈浮遊〉を素材にしたタンクル弾を手の中に作り、それを握ったまま空に打ち上げる。

結果、ナツキではどうあがいても届かない空中へと浮かんだ。合わせてもう一つツギハギを展開する。

さらに手に持ったそれを起点に体を反らして回し、〈拡大〉を与えその面積を広げて上に立つ。〈威力〉を素材に入れないタンクル弾に殺傷力はない。そのため単純に足場としたりと、目眩ましにしたりと中々に汎用性が高い。

「空を、飛んだ?」

「正確には浮く、だけどな。けど戦場で上を取るつてのはかなりのアドバンテージだ」  
その言葉に息を呑むナツキ。不安そうな表情を浮かべたがそれも一瞬のこと、ナツキは周囲を見渡し、一つ頷いて木刀を構えた。

俺は次にしようとしていたことを準備だけに留め、ナツキを観察することにした。

(……何をやる気だ?)

ナツキは基本的に諦めの姿勢を見せないが、それでもこれは足掻きというより確かな勝利への道筋があつての行動だろうと予測する。

予感はずしく、ナツキの周囲にタンクルが漏れる。それは彼女の前に道を作るように路を作り、まっすぐ一直線に俺へ向かって伸びている。

「はいっは——」

刹那、ナツキの姿がブレる。

踏み込みの動作すら見せない、空に作られた道が自動でナツキを動かしているような一瞬の移動。ナツキは砲弾の如く地面から放たれ、上空の俺に飛来する。

俺の思考がツギハギの行使を認めた時、眼前に居たのは木刀を突き出すナツキ。一秒も経てば、木刀は俺を打ち据えることだろう。

「だが、甘い」

ナツキの目論見ではこちらを打ち据えるはずの木刀は、俺の作る〈射程〉〈変化〉の素



材によって速度を緩める。正確にはナツキを加速させている空間の道を継ぎ足し、ナツキが作った道の終わりから進行方向をずらしたのだ。

突然変えられた軌道をナツキは無理矢理修正しようとするが、すでに木刀を振る速度は減衰されている。

小気味良い音を立ててかち合う木の刀剣。

このように、俺が木剣を掲げて防ぐことは容易いことだった。

「うぬあ……」

よほど自信の一撃だったのか、防がれたナツキが妙ちきりんなうめき声をあげて顔を歪める。

空に浮く手段もないナツキは重力に従って地面へ落ちるが、猫のように身を丸めて軽やかな着地を決めた。足を泥に突っ込んで顔をしかめているのは愛嬌か。

俺は木剣を首に挟み、賞賛を持って拍手を鳴らす。

「単純な身体能力の強化じゃなくて、道自体を加速させるってアイデアはいいと思うぞ」「おじいちゃんが、まだ成長しきってない体に負担をかけるのはダメだって教えてくれたんですよ」

（まだ成長するのか？）

年齢にしては発育の良いナツキに思わずそう思ってしまったが、すぐに意識を切り替

えるべく木剣を持ち直しアドバイスを続ける。

「うん、良い師匠みたいなナツキのお爺さんは。でも、ただまっすぐ突っ込んでくるだけならいくらでも防げる。限定された道の上なら一瞬でどこでも移動可能、とか緩急つけたほうがいいな」

「そんな複雑なこと無理ですー」

ぬかるんだ足場に何の崩れがないのを見ると、対象との間に特殊な空間を作ってそこを通ったものを加速させるというツギハギだろう。

今回はナツキ自身が対象だったが、適当な石をその空間内に入れて相手へ向ければお手軽な高速投石器の完成だ。方向を逆にしてしまえば、遠距離攻撃を遅めて回避を容易くすることもできるし、色々用途は浮かぶ。

汎用性高そうで良いな、と褒めながら俺はさつき中断した行動——タンクルの分裂弾を周囲に展開。今度は数を増やしたので十以上は作った。その数に圧倒されたのか、ナツキは大きく目と口を開く。

「加速技は通用しない。その上でここから雨みたいに縦横無尽に撃たれたら、どうする？」

「武器投げます！」

「避けられたら？」

「逃げ続けますー！」

「体力尽きたら？」

「やられます!!」

うん、素直でよろしい。

俺はツギハギを解除し、地面へ降りた。

「これでも空を自在に動かないだけマシだぞ」

「つていうかネムレスさん手札多すぎるよ……」

「旅の中、そういう奴と戦わなかったのか？ アバターつて自由度の高さが売りだろ」

「一応アクターやアバターと戦ったこともあるけど、ネムレスみたいに戦いにくくなかったです」

「俺つて戦いにくいのか？」

「こつちの攻撃手段全部封殺してくるんだもん。私、さっきのへ雷道（らいどう）でおいちちゃん以外に攻撃当てられなかったの初めてなんですよ？」

「雷の道、ねえ」

名前負け、というより目指すべくが雷の速さという意味だろう。

瞬時に間合いをなくし、ツギハギを使う間を与えずに倒しきる。なるほど、この速さが今までアクターやアバターを倒してきた理由か。

あの洞窟でタンクプレートを斬った速さの秘密も、このツギハギにあるのだろうかと予想する。

「良いツギハギだけど、構成が甘いぞ。だからあんな風に利用されて防がれるんだ」

ナツキはツギハギの制御は剣に比べてそう得意ではないようで、だから俺にあっさり介入されてしまったのだ。

「剣術って意味ならナツキは非凡なものがある。ツギハギはその分不得手かもしれないけど、伸ばさない理由にはならないぞ。さっきの〈雷道〉を剣術くらい鍛えてたら俺だって防げたかわからん」

「うっそだあ、対処すごく早かったじゃないですか。さっきだって、もう当たる直前だったのに。多少鍛えた所でまた同じような気がします」

「俺が誇れるのはツギハギの発動の速さと制御力だからな。火力に恵まれなかったから、そっちを重点的に鍛えたんだよ。でも〈雷道〉は成長性のあるツギハギだと思う。今度ナツキにもツギハギの事色々教えてやろうか？ そうすれば〈雷道〉の使い方も広がる」

「んーツギハギかあ。ネムレスさんの提案は嬉しいけど、私に上手く扱えるかな。〈雷道〉の時も結構時間取られちゃったから……」

ナツキとしては剣術を鍛えるほうに比重を置いているのか、あまり乗り気ではないよ

うだ。

「なら俺と一緒に教えてやるさ。言っておくけど、このツギハギ汎用性高いからな？移動以外にも剣を振る時に〈雷道〉で補強すれば速さの分だけ威力や高まる。体を動かす感覚で同じように出来れば、単純計算二倍……いや、もつと素早く動けるようになる」  
速さは力にもなる。

すでにタンクフルプレートと呼ばれる扉を両断する速さを持ったナツキ。それはもちろん〈雷道〉を使ったからこそなのだろうが、それを無駄なく全ての動きに与えることが出来ればさらなる強さとなつてナツキの力になるはずだ。

そして俺は、ダメ押しの一言を放つ。

「ナツキが目指す強さは、選り好みで届くものなのか？ だつたら強要しないが」

「うぐぐ。い、言つてくれますね。……私、ツギハギ覚える要領悪いんだけど、それでも大丈夫かな……？」

おずおずと、不安を隠しながら尋ねるナツキに苦笑し、途中で投げ出したりはしなさと言つてやればややあつてお手柔らかにね、と前向きに返事をしてくれた。

「ちなみにさつきはしなかつたけど、本来の戦闘なら木刀を支配した時点でナツキは武器なしで戦うことになってたぞ。あるいは木刀を返したとしても、当たる直前にすつぽ抜かしたり、ナツキ自身の体を操作だつて出来た」

「うわーやらしいやらしいえげつない。それに抗えない私はしょんぼり、せめて剣の戦いに持ち込めれば……」

「相手の土俵を避けるのは基本だしな。ツギハギ使いを相手にするなら速攻が一番。何されるかわかったもんじやない」

「今まさに身に染みてる。ええい、もう一戦!」

「よし、胸貸してやるからどんどん来い。俺の拳動に注意してろよ?」

言った瞬間、ナツキはそれを狙ったかのようにこちらへ疾走する。良い動きだ、と零しながら左手をかざす。

その手に集うタンクルを見たのか、ナツキはそこから横つ飛びに跳ねる。

が、無意味だ。そこも射程内なのだから。

「んがっ!」

ナツキは急に何かに躓くように体を倒す。慌てて受け身を取ったことで怪我を負うことはなかったが、そこから先に立ち上がれない。

何故なら〈ハストレッド〉がナツキの足に絡み、引き倒していたからだ。タンクルの糸は徐々に足以外を縛り、ナツキの両手を背中へ回して拘束する。ほい、一丁上がり。

「い、いつの間……」

「浮いた時」

「マジカー」

「マジダー」

文句を言わないどころか感心するナツキに、俺は一つ頷く。

よほどお爺ちゃんの腕が良いのか、戦闘に対する結果への幼さがなくやられた理由を素直に受け入れる。普通、こういうことをされたら卑怯だーとか言ってくるのが通例だったので、新鮮な気分だ。

「いつ使ってたのか全然わかんなかった」

「まあ、バレないようにはしてたからな」

「うーちくしよー、やられっぱなしで悔しい」

「木刀を使わなくてもへストレットで巻き付いて取ることも出来たぞ。さらに――」

それでも悔しいことには変わらないのか、敬語が少し抜けて素が出ているように見える。アーリイには普通に接していたし、年上相手だからって気にすることは無いと思うが……おそらくそういう教育を受けてきたのだろう。

蓑虫状態のナツキに見せつけるように、足裏にナイフ程度の刃渡りを持ったタンクルブレードを作り出す。

「これでぶすりとされたら、それで終わりだ」

「わー！ わー！ 刺しちや駄目ですって！」





「アバターは威力がアクターに比べて低いからあまり見たことなかったんだけど、対人戦って意味では無類の力を発揮しますね」

「ツギハギ取得の自由性ってやつだな。アクターは固定……って聞く割に、ダルメンにはそんな気がしないけど。少し素材を渡しただけでやることが大幅に増えてる」

「あー、わかります。結構出来ること豊富ですよねあれ」

そう言つて、俺達は訓練の場から少し離れた所に座るダルメンへ目を向ける。

樽のどこかに極小の穴でも空いてるのか、こいつはこいつで本を片手に今までじつと俺達の訓練を眺めていた。

## 12. ナツキとの特訓くダルメンを添えてく

「おや、どうかしたのかね？」

「いや、ダルメンって捜し物してるんだろ？ そっちに目を向けなくていいのかって」

「ヒントになりそうなものがあってね。あては出来たから、心配せずとも大丈夫さ。その心配りに感謝を」

「ならダルメンも来いよ。俺が渡した〈素材〉の検証も出来るだろ」

「ダルメンさん！ 私の代わりにぶつとばして！ でも色々やらしいから気をつけて  
！」

「好き放題言うな、こんにやろ」

「うひゃあ」

拘束したナツキを抱えるようにして肩に担ぐ。両手は無理だが、腰に手を当て落とさぬようしつかり抱える。

背筋によって脱出を試みるナツキだが、〈ストレッド〉の糸で俺ごと縛ってしまえば反り返るのは無理だ。

それでもじたばたと暴れるナツキをよそに、俺はダルメンへ向き直る。

「ほら、ご自慢のツギハギ使ってみろよ。下手すると、ナツキに当たっちゃうけどな！」  
「な、このやろー！ 私をどうする気ですかー！」

「ナツキはナツキで、今でも抜け出す手段はあるよ。事前に渡したキラビヤカを使うんだ」

くつくつと笑っているのかゆらゆらと樽を揺らすダルメンをよそに、俺はナツキの腰に付けられたキラビヤカの柄を叩く。

武器に頼らないとは言ったが、使いこなさなくていい、とは違う。

頼るべき時に使えるよう訓練する必要もある。その上で使い分けをすればいいのだ。

ナツキが求めるのは地力の底上げであるが、昨日のようにそれでは済まない相手だつて世界には居る。その相手に打ち勝つないし逃げ延びるために、選択肢は多いほうがいい。

そしてキラビヤカさえあれば例え相手がどんなツギハギを使つてきても対処は可能、と言つて渡したのだが、まだナツキはその真価を理解していない。

だから今は、基本の使い方を教えることを優先する。

「て、手足縛られてるんですけど？」

「キラビヤカは使い手の意志でどんな形にも変わる側面がある。〈雷道〉を使うのとそんな変わらないよ。ツギハギと同じだ、そのことを念頭に置いて考えてみな。もしくは

もつとシンプルに、だ」

すぐ教えても考える力は身につかないので、ヒントを与えて答えを促す。

そんな風にナツキへ指導しながら、俺は未だにこちらへ来ないダルメンへタンクル弾を射つ。

流石に攻撃には反応したのか、一瞬で昨日も見たアクターである樽を模したタンクルの壁が展開する。

そして三角巾娘のツギハギを尽く防ぎきった防御力を前に、俺のタンクル弾は壁に当たった小石のように弾かれた。

「することないなら、特訓に付き合ってくれないか？」

「随分と乱暴なお誘いだ」

「防ぐって確信してたしな」

「どうやらサウザナ様の持ち主は、わりと自由のようだ」

表情はおろか顔の造形すらわからない謎の人物であるダルメンだが、その感情はナツキのようにわかりやすい。

加えて初見は不審人物であるのは間違いないが、慣れてしまえばそうは思わない不思議な雰囲気にはあった。

「嫌なら俺に止める権利はない。けど、個人的にはダルメンにも参加して欲しいな。ダ

ルメンにとつてもナツキにとつても、何より俺のためにも」

過去から召喚された経緯で何故か肉体が若返り、それによって鍛えた力も劣化している。使える素材やツギハギこそ変わりないのは幸いだが、それでも完全に力を取り戻すためには体とタンクルを鍛えるしかない。

言つてはあれだがツギハギを使わない近接戦闘ではナツキ、タンクル量のみならダルメンのほうに分があると俺は判断している。

だからナツキの剣もダルメンの圧倒的タンクルも、今の状態で凌ぎ研鑽を積むのが現状では近道になる。

「だからダルメンも俺を利用しろよ。サウザナの好感度稼ぎたいなら、まず俺と仲良くしといて損はないぜ」

とは言うが俺自身二人と仲良くしたいというのも本音だ。成長と友好、一石二鳥を求めるのは自然なことであり、当然の意見である。

「面倒なこと考えてますねえ。ダルメンさんダルメンさん、ネムレスさんってなんか色々余裕ぶつてて実際余裕でム力つくでしょう？ 私のことは気にせず、そのもやもやしたの思い切りぶつけちゃってください！」

「おい待て。何を言ってるんだお前」

「何って、一方的にやられるのって悔しいからなんとか出来そうな人になんとかかしても

らおうとしてるだけですよ?」

「自分で反撃しようって考えは?」

「ありますけど、何一つやり返せないほうが悔しいです! 私も頑張りますけどね!」

「こいつ前向きたガールすぎる」

それと噛み付きたガール。

十代前半でその精神を持つナツキに感心していると、爆発するように膨らむタンクルを感知。即座に横へ飛んだ。

今しがた占めていた空間を、芳醇な酒の香りを匂わせ……ない、酒精の〈素材〉が抜かれたワイン砲が貫いていく。

どうやら、タンクル砲に〈色彩〉を使って外見だけを似せているだけのようだ。無駄に凝ってるな。

「やる気になったようで何より。つてか俺よりナツキの言葉に反応するってどうよ。それに、ワインは使わないのか」

「いたいけな少女の願いを聞き届けるのは大人の役目ではないかな? 酒は基本的に人に振る舞うものだ、訓練で使うなんてもつたいたいじゃないか」

「洞窟を酒浸しにしたのはもつたなくないのか」

「敵対相手だし、ワインは自家製だから誰の懐も痛まないよ。それに、今日はナツキ君が

傍にいろしね。子供を無理に酔わせるなんて大人のすることではないだろう？ だから、酒精耐性を〈付与〉させる手間はいらぬい」

「おさけのめますー」

「ちやんとしたところで飲もうな。酔って動きまくると、女の子がしちやいけない行動を強制させられるぞ」

「おじいちゃんとの特訓で色んなもの吐いてるし今更……」

「俺が見たくないの」

特訓でそういうことなら俺も文句はない。

けど、年頃の女の子が酒によって嘔吐というのは色々とよろしくないと思うのだ。

人それぞれだろうけど、未来ある若い子供が女を捨ててる光景など見たくない。

「それには同意しよう。女性には大小あれど夢を持っているのは男の共通だ」

「女性も女性で男に夢持っていないわけじゃないんですけど」

「〈貫く羽〉！」

「流れ無視!？」

食い気味に叫ばれたダルメンのツギハギが地面を抉り、蹂躪せんと吹き荒れる。身動きの取れないナツキは女の子がしてはいけない顔と声で叫んでいるが、自業自得だ。

「それじゃ、俺も遠慮なくやらせてもらおうか」

唸る竜巻の数は四。前後左右、俺を囲うように回る竜巻は徐々に距離を詰めて近寄ってくる。昨日の倍で俺の四倍とかこのやろう使いこなしで嬉しくて嬉しいぞ。

制御がまだ甘いのか、地面を挟りながら進む風の刃は鉄の甲冑すらボロボロのように容易く引き裂くだろう。

三角巾娘は〈貫く羽〉に使われたタンクルを吸収することで防いだ。でも俺はタンクル吸収なんて真似は出来ない。

だから、こうする。

「へプログラムギアス」

「それは先程見たー」

あえて事前にツギハギの名前を言うことで行動を宣言する。

前方の竜巻に近づき、それを支配する。昨日はダルメンが受け入れてくれたので何の問題もなく操作することが出来たが、本来相手のツギハギに干渉しようとすれば相応の抵抗を受ける。

ダルメンのようにタンクル豊富な相手だと、その抵抗は流れる海の流れを変えようとするかのような難行だ。

けどそれはあくまでダルメンが全力全開でツギハギを行使すればの話。

訓練に加えてナツキに当たるかもしれない、なんて配慮した紳士の構成は俺にとって



何ら問題なく支配できる。

前方の竜巻を右に寄せて、その方向へ作られた竜巻を巻き込み、さらにそれを背後から左の竜巻へ。まるでドミノ倒しのように竜巻同士が巻き込まれ、打ち消され合う光景にダルメンの樽が大きく揺れる。動揺しているようだ。

続いて撃ち出すのはナツキに使ったのと同じ分裂したタンクル弾。数にして二十はあるそれを全てダルメンへ放射する。

だがダルメンは俺のタンクル弾など気に留めず、俺に向かって突っ込んでくる。

樽で相手を拘束する、なんてバカらしいと感じるかもしれないが、狭い場所に一方的に拘束する武器と考えれば鎮圧用として優秀だと思う。

タンクル弾の全てがダルメンに着弾するが、彼は微塵も揺るがない。俺のタンクル弾は全てそのアクターの防御を突破することが叶わず、弾かれているのだ。

「知ってはいたけどやっぱ硬いな」

「そんな弾では、この身を傷つけ——んっ？」

自信に満ちながら突進してきたダルメンの樽が跳ね上がる。それでも外れないのは、固定化されているせいだ。

痛みはないようだが、一瞬押されたことで足を止めるダルメンに俺はニヤニヤと笑みを向けた。

「傷つけ、なんだって?」

返事はない。ただ、油断なく俺を見据えるダルメン。

「教えてやるよ、ほれ」

見えないように工夫したツギハギを、ダルメンにもわかりやすいように可視化させ、そのツギハギを見せる。

そこにはタンクル弾の軌跡を空に描く道が生まれていた。

「これは、先程ナツキ君が使っていた……」

「〈雷道〉。ナツキより狭めたこれにタンクル弾を乗せてダルメンへ飛ばしたんだよ」

速さとは力でもある。

〈射程〉〈空間〉〈加速〉の三つしか使っていない単純なものであるが、〈雷道〉と似た効果となる。オリジナルであるナツキ……いや多分お爺ちゃんやらのオリジナルには素材も違いさらにいくつか加えられ、こんなものと比較にならないスピードを生み出すだろう。

けど、模擬戦ならこれで十分。

分裂のほうは囿で、本命である〈雷道〉のタンクル弾は寸分違わずダルメンの頭へ命中した。欲を言えばその樽を吹き飛ばして仮面に隠された顔も見たかった気がするが、流石にそこまでは至らない。

俺の目論見に気づいたのか、ダルメンの気配が静かに変わる。

特訓、ではなく悪戯を仕掛けた俺への制裁、あるいは秘密を暴こうとする輩への怒りか。

紡がれるのは、ダルメンのアクターとしてのツギハギだった。

「揺れる空籠」

十字を切るような光の線が走る。それは一定の距離を進んだ後に止まり、時計回りとその反対に進路を変えて円を、呪紋による陣形である紋陣を描いた。

紋陣が完成すると同時、何のツギハギも使っていないのに俺の体が空へ浮かぶ。ナツキはわーわーからおーおーへと悲鳴を切り替えた。

慌てて「浮遊」を用いようとするが、体が異様に鈍く押し潰すかのような重圧を感じる。

重力を与えているのかとも思ったが、ナツキが変わらず悲鳴を上げているので重さを変えているわけではないようだ。

にも関わらずタンクルを行使しようとするたびに体が軋み、ツギハギの構成が崩れそうになっていく。つまり個々のタンクル自体を押し潰すような、精神的な攻撃か？

「どちらにしろ、特訓で使う規模じゃないよなこれ」

思考している合間にも俺の体には付加がかりつつける。ナツキは軽度のようなのだが、

それでも長時間受けては後遺症が残るかもしれない。

下へ目を向ければ、アーリーの家やアンネの街を含んだ景色が見える。

まるで世界が切り取られたようなツギハギだ。

そんな錯覚を覚えるほどに、目の前の光景はあまりにも場違いだった。

「俺としては細かな制御力を覚えてもらうためにナツキを拘束したんだけど、もう意味ないなこれ」

ナツキに当てないために手加減くらいするだろう。そう思っていたのだが、他ならぬナツキが手加減という枷を最初から取り外してしまった。

ならこうなるのは必然だったのかもしれない。

「ね、ねえダルメンさん！ 遠慮無くとは言っただりアクターのこと考えてるのよね!? ここでスピリット・カウンターなんて起こされたら私ら捕まっちゃいますよー！」

「いやー、大丈夫だろ。よくわからんが、本当にやばい事態になつたらサウザナかアーリーがすつ飛んでくるよ」

「そ、そうですかあ？ サウザナさんが今何してるのかわかりませんが、アーリーつて地震とか来ても無視して本に没頭するタイプのような。というか、随分余裕ですな？」

「もつとやばいの相手にしたことあるからな。そういうナツキも、悲鳴は上げても怖さから来るものじゃなくて、感心みたいなものだろ？」

そう。ナツキがさつきから声を上げていてもまるで暴れる様子を見せない。

つまりそれは、劇やら音楽やら本やら、何らかの感動に対する声なのだろうと当たりをつける。

「はい、これくらいなんとか出来そうな人知ってるから……」

「俺もそうだよ」

「でも同じことが出来るとは限らないです。ネムレスさんはなんとか出来るんですか？」

「出来るよ。というか、お前はまず自分の体をなんとかしなさい。このままだと、本当にただの荷物だぞ」

「うぐぐ」

「随分、余裕そうだね」

ナツキへの指導の傍ら、ダルメンのツギハギの圧力が増す。

実際余裕だしな、と俺は挑発する。

「これだけじゃないんだろう？ ナツキが居るから抑えているんだろうけど、このツギハギはここから二転三転は変わるはずだ」

「……………」

「する気がないなら、破らせてもらおうぞ？」

俺の取った行動は簡単だ。

ナツキの腰からキラビヤカを取り、構えた。

こいつの使い方はサウザナから教わっている。その性能通りなら、出来るはずだ。

「ついでにナツキ、答え合わせだ！」

キラビヤカはタンクルを元に自在に形を変える。基本的にそのタンクルは自分のものを流し込み、武器などに変えるわけだ。

だが、そのタンクルを相手から持つてくればどうだ？

理屈は三角巾娘が使ったツギハギと同じだ。

吸収し、取り込む。

そうすることで〈揺れる空籠〉の能力を持ったキラビヤカが生まれるわけだ。

キラビヤカの筒口が開く。

俺からタンクルは送らない。何故なら、周囲には俺が送るまでもなくタンクルに満ちあふれているからだ。

俺がするのは、刃を構成するタンクルの確保を自分から周囲へ対象を切り替えただけ。キラビヤカは展開する刃の材料を補うべく〈揺れる空籠〉からタンクルの吸収を開始する。

「吸われ……！」

三角巾娘との経験を活かしているのか、ダルメンはキラビヤカの刃を作る構成に抵抗を始めた。良いぞ良いぞ。

と思ったのもつかの間、その抵抗があまりに力技過ぎてツギハギの構成がごちゃごちゃに崩れていく。

判りやすく言えば、俺達を浮かせて拘束するツギハギ空間に亀裂が走った。

硝子の碎けるような音と共に、切り取られた世界が割れていく。

普通、これほどの規模のツギハギを維持する構成なら多少の介入ではへこたれもしない。だが幸か不幸か、俺にはキラビヤカという十分な制御による介入手段があるわけ。

結果、俺達を閉じ込める檻はその形を維持することが出来ず、崩壊する。

その瞬間を見計らい俺は中途半端に吸ったキラビヤカのタンクルブレードへ素材を送り、解放する。

〈威力〉〈減衰〉〈分離〉〈射程〉そして——〈起爆〉。

筒口から分離した剣はバネ仕掛けのように切り離されてダルメンへ向かって飛んで行く。

つまり、ダルメンから吸収したツギハギでダルメンのツギハギを壊し、その上で取り込んだツギハギをダルメンに返したのである。

それは避けられることなくダルメンのアクターが展開した樽の壁に直撃した。「つとおー」

着弾による衝撃の余波を素直に受ける俺ではない。

吸収したツギハギを切り離した瞬間、元に戻ったキラビヤカに触れてタンクルを送り、俺達を包み込むような球場の盾を貼る。

元よりキラビヤカは形のない武器だ。だが武器を防御に使えない理屈はなく、加えてこいつはサウザナによれば世界に満ちるタンクルも利用できる。

どれだけダルメンのタンクルが凄かろうが、世界に比べたら小さいものだ。相手の規模が悪いというか、比べるほうが馬鹿というか。

とはいえ威力を半減されたはずなのだが、ダルメンのタンクルに応じて重圧を感じさせるだけとは思えない威力を秘めていた。

具体的には、地形の一部が変わるほどの威力で周囲に穴が空いていた。

「〈起爆〉でこれとは恐ろしい。あーでも、これはアリーイに怒られるかな」  
キラビヤカの盾を解除しながら、俺は地形を穿つ大穴を見る。

〈起爆〉とはタンクルを爆発させるための素材の一つだが、より高い威力として放つ素材も俺は持ち合わせている。ただ、それを使うと大穴どころか周囲一体は吹き飛ばす規模になってしまう。



よって控えめのつもりで使ったのだが、元のタンクルが大きすぎるためか迂闊に利用できそうにないな。

もくもくと上がる煙の下、底が見えないというほどではないが、ちよつとした家屋程度ならずっぽりと入るくらいに空いている。後でツギハギ使つて直せるかな……

「ん……ネムレスさん、貴方……」

あ、やべ、気付かれたか。

キラビヤカをナツキの腰に戻し、咄嗟に全身へ薄いタンクルの膜を貼る。ごまかせるかな？

「おーいダルメン、無事だろ？ ちよつと——」

言葉が途切れる。いや、強制的に中断される。

未だ昇る煙の中、アクターをまとうダルメンが拳を構えて突っ込んできたのだ。樽じゃないところを見ると、結構お冠なのかもしれない。

俺は木剣で受けるのは不可能と判断し、得物を投げ捨てながら〈耐久〉〈変化〉によつて生み出したタンクルブレードを三本生成する。

人差し指と中指の間に一本。中指と薬指の間に一つ。そして薬指と小指の間の計三本。三本爪のように展開したそれでダルメンの拳を受ける。

重い。タンクルを使わない一撃でも十分な威力。

さらにタンクルブレードに亀裂が走る。銃槍自体が紋具なのか、アクターの効果なのか。どっちにしろ受けに回るのはまずい。

即座にタンクルを送って亀裂を修復。さらに〈雷道〉で距離を離し、後退に使った〈雷道〉を方向転換。ダルメンへ向けての加速空間となったそこへ〈射程〉を付け足したタンクルブレードを放る。

さつきは足を止める成果を出した、命名〈雷道弾〉《らいどうだん》であったが、ダルメンは揺らぐことなく己のタンクルにものを言わせて弾いた。

さらに一本立てた指をこちらに向ける。俺は咄嗟に首を横に倒した。

深緑光のタンクルをまとう光線が通りすぎ、その熱量の余波が体を撫でる。そのせいで少し体勢を崩すが、問題なく立て直す。

だが、追撃がないのが不思議だった。

「ダルメン、タンクル制御のためなんだからタンクルバンバン使っていいんだぞ？」

「使った先から無効化するか壊しまくる君には、あまり効果がないだろうに」  
「だってそうしないと痛いし」

飛ばしたタンクルブレードを補充して三本に戻し、ダルメンに反論する。訓練と言っても一方的に俺がなぶられるわけじゃないからな？

「ナツキー、お前のせいだぞー。鬱憤を力に変えろなんて言うから、ダルメンが派手なの

しか使わん」

「それ防いだ人の言う台詞ですか？」

「防がなかったらナツキも巻き込まれてたぞ？」

「そこはお礼を言おうと思っただけ、私をふんじばってるのはネムレスさんだからお礼言っ方がいいのかな……」

そこで悩む辺り良い子である。

「ならしやうがない。その樽、暴れん坊になつてもらおうぞ」

〈雷道〉で瞬時に近寄り、タンクルブレードを振り下ろす。

それは野生の獣のような反応を見せたダルメンに受けられるが、本命は違う。タンクルブレードの一つに〈付与〉〈支配〉〈振動〉を混ぜ、〈プログラムギアス〉を行使。

すると、顔を隠す樽がダルメンから離れるように暴れだす。当然ダルメンはそれを止めるために両手で頭を抑え、盛大な隙をさらす。

でも俺は攻撃しない。何故なら、そいつを抑えこむことこそダルメンにしてもらいたい事なのだから。……頭以外に腰も抑えてるけど、ベルトも効果範囲内だったか？

だったら悪いことしたな。

「そいつを意図的に抑えてみるよー。多少なりとも制御の特訓になる」

「ぬう、なんと性根の悪い……！」

さて、後はナツキのほうだが……

「あの、さっきのどういうことですか？」

「わからなかったのか？ 俺がお前を縛ってる（ヘストレッド）を燃料にすれば、ツギハギが解除される上にキラビヤカの刃を作る燃料に」

「それはわかります。私が聞いてるのは、ダルメンさんのことです」

「ダルメンの？」

「暴れる樽を抑えるのが、どうしてタンクルの制御に繋がるんですか？」

「ああ。あれにはナツキの木刀を奪ったツギハギを仕込んだんだよ。んで、その支配を解くにはツギハギの細かな構成を編む制御力が必要になる。そこから（ヘプログラムギアス）を構成する素材を抜き取っていけば、自然とあれは自壊する。素材を抜き取れるくらい制御力に長ければ、無意識にタンクルを垂れ流すことはないだろ」

「え、ツギハギを壊すのってネムレスさんのオリジナルなんじゃ？」

「違うよ、突き詰めれば誰でも出来ることさ」

ナツキは誤解しているようだが、ツギハギの構成を崩して壊す、という手段は誰でも出来る。ツギハギを作るのなら、壊すのだって出来るのだから。

ただ、それを自分ではなく他者のツギハギで行うというのが面倒なところであり、技量の見せ所でもある。

ダルメンのように強引な力任せで壊す方法が一番手っ取り早いですが、今回その対象は己の顔を隠す樽。だから壊すわけには行かず、少しずつその構成を崩して大人しくさせる必要があるのだ。

そう説明してやると、ナツキが新たな疑問を発する。

「なんで最初からそうしてあげなかつたんですか？　こんな大規模なツギハギ使われることもなかつたし」

「ナツキと一緒だよ。特訓の一環」

「ネムレスさんも強くなりたいの？」

「サウザナを満足に使ってやりたいからな」

思い出すのは、洞窟で〈幻獣〉を一刀の元に切り伏せた力。

五百年という時を経て、サウザナは識世としての自分を高め、ツギハギを覚え抜剣という名の換装でさらなる剣の高みに至った。

武器がそこまで尽くしてくれるなら、応えてやりたいと思うのは担い手として当然のことだ。

だからこそ、何百年も寂しい想いをさせてしまったのが心残りである。

「さつきもキラビヤカで対処したけど、サウザナなら同じことも出来ると思う」

「すごい信頼」

「……一度手放したからな」

「それは、サウザナさんが折れてることと関係が？」

無言で頷く。

まだ鮮明に残る、サウザナが砕ける瞬間。

一拍の間を置いて、ナツキに答える。

「これ以上壊れる所を見たくなくて、安全な場所に置いておいたはずなんだけど……あいつ、わざわざ追いかけて来たんだ。しかも、折れた時よりずっと強くなって。折れる心配はもうないからって。笑っちゃまうだろ？ そんなの、今度は手放さないって思っちゃおうよ」

「愛されてることじゃないですか。羨ましいぞ、このこの」

「そこは否定しないな。俺にはもつたいない、なんて言いたくないからこつちも頑張らないと」

「ほむほむ。そういうことなら、このナツキさんも盛大に協力しましょう！」

「そういう台詞は、まず拘束を解いてから言おうな？」

「……ほどこいてください」

「ヒントも答えも出した、後はナツキ次第だよ。俺がやった足元からタンクルブレードを生やす手段だってキラビヤカを使いこなせば出来るようになる。……んじゃ、一足

先にアーリーの家に戻ってるから、二人とも事が済んだら戻って来いよ」

「だって吸収とかよくわかんないし……」

「(ストレッド)が崩れて、キラビヤカに流れ込むイメージしてみろんだ。それか、タンクルを出すんじゃないやなくて入れる感覚だ。(雷道)を使うのと同じさ。ツギハギが使えるなら、そう難しいことじゃない。後は自分で頑張れ」

ダルメンを前に担架を切ったあの前向きメンタルはどこへやら。

ある意味、これは年上への甘えというやつか？ 心の距離を詰めるのが上手いやつめ。

ナツキに声援を送り、俺はその場から去っていく。

背後から恨めしそうな声が二つ途切れることなく続いていたが、やがてナツキがダルメンへ応援とアドバイスを求めて話しかけていた。最も、ダルメンはそれに応じる暇もないようだが。

俺はそれに構うことなくアーリーの家へ戻っていきこうとして——暴れタンクルを制御下においていたダルメンが投擲した樽によって、後頭部を痛打するのであった。

◇

アーリーの家に戻った俺を待っていたのは、ユカリスからの熱い抱擁だった。

これが人間サイズなら色々嬉しいが、あいにく人形サイズの彼女からの抱擁は頬を

つままれているような錯覚に陥る。

出会って間もない俺に懐く理由はよくわからないが、ユカリスはナツキ達にも良くしてもらっていたし人好きのする性格なのだろうか。それでも出迎えてくれることは嬉しい。

「ユカリス、アーリイは？」

問いに答えず、ユカリスはぱつと距離を離れた。え、ちよつとショック。

そう思ったのもつかの間、ユカリスはじつと俺を凝視している。どうした、と声をかけると颯爽とその場から飛び去っていつてしまふ。

気にはなつたが、それよりまずは着替えだ着替え。

与えられた自室に戻って、備え付けのベッドに腰を下ろす。

俺はツギハギでまとつた薄い膜を外すと、途端に滝のような汗が体中から滴つた。

「あー、しんど」

うつむいて乱れる息を整える。

ナツキやダルメンに色々教える側としては、見栄えのために常に余裕を持った態度で接したい。そうすることであいつらの向上心が上がるなら嬉しいし、俺としてもそう簡単に追いつかれたくない。ようは男のプライドというやつである。

二人の前では余裕ぶっていたが、割といっぱいいっぱいだ。



特にダルメン。屋敷に戻るまで解除されないと思っていたのに、制御力に関してもかなり高いレベルで焦る。

昨日はサウザナが居たおかげで心身余裕だったが、さつきは俺単独での修行だ。必死になるのはやむなしである。

息を荒げていると、頭の上に急に何かが乗ってくる。それが何かを確認するより早く、俺にかけられた声があった。

「お疲れ様です。随分と盛り上がっていたようで」

その何かが勝手に動き、やがて視界が開かれる。

俺に声をかけたのはアーリイで、顔にかかっていたのは白く清潔なタオルだった。

その持手はユカリス。その小さな体を全身で使い、どうやら俺の汗を拭ってくれているようだ。なんと甲斐甲斐しい。

「おっと、先を越されてしまいましたか。ネムレス殿、上着を脱いでください。体を拭きますので」

「いやいいよ、俺が自分で拭くから」

今の俺はお偉いさんじゃないし、そもそも子供にそんなことさせるほど図太い精神はしていない。それが世話になった相手なら尚更だ。

だがアーリイは一步も引いてくれない。

「いえいえ、させてください。ネムレス殿達にはここに残っていただきたくないので、ちよつと媚を売っておきたいのですよ」

「媚い？」

「ええ。あの資料、私は三年前から目をつけておりました」

「情報源はどこなんだ？」

「とある知り合いから、とだけ。しかし一向にあの隠し部屋へ至つたことがないのほすでにお分かりでしょう？　それが、ただ貴方がた……おそらくネムレス殿とサウザナ殿に出会つたことで即座にその悩みが消えてしまつたのです」

使われていたのが俺達の国の技術だつたからな。まだ現役で残つていたのは驚きだ  
けど。

でも三年前つてことは、アンネの街に住んでる理由もひよつとして……

「そしてあの資料の中身、完全な解説には残念ながら至りません。しかし、私が元々考えていた技術に近いのはわかります。それらを照らし合わせ、ネムレス殿やサウザナ殿に手伝つていただけたら、私の目的にも近づくのではないかと」

「それで媚びねえ。アーリイは紋具職人だろう？　そつち方面で……つてこら、服を脱がすな。自分で脱ぐ。タオルもこつちによこ」

「では、拭かせていただきますね」

「んあー……まあいいか、頼んだ」

タオルを取り上げようとするも、軽く避けられて懐へ飛び込まれる。

汗で気持ち悪いぞ、と言っても満面に、嫺やかに微笑むだけで少女達は離れてくれない。

観念し、アーリイとユカリスに体を拭いてもらうことになった。誰かに見られたらなんて言われるか。

しかしユカリスはともかく、アーリイは予想以上に体を拭くのが上手い。出会いのやり取りからして、世話を焼くタイプだとは思っていたが技量もそれに相応しいものがあるようだ。

口笛を吹きながら俺の汗をタオルで拭くアーリイ。ユカリスも真似をして口笛を吹き、ちよつとした音楽会となる。

少女達の演奏会とされていることへのギャップに瞳を伏せつつ、俺はアーリイを忠告する。

「いくら媚びつて言ってもこれはないだろ。気軽に体に触れるなんて、俺がそういう趣味の奴だったらどうするんだ」

「それはそれで、そのことをネタに協力してもらおうかと」

「想定済みかよ。思ったより良い性格してんなアーリイは」

「こういうのはお嫌いですか？」

「いや、わかりやすくもいい」

それでもこういうのは勘弁して欲しいけど、とげんなりしながら嘆息する。

「媚びを売るなら自分の技術にしたほうがいいんじゃないか？ そっちのほうがよっぽど健全だ」

「これも私の技術ですよ。気持ち良くありませんか？」

「言い方言い方」

「ふふ、そう切り返す辺りネムレス殿もそういうことをよぎっておられるようで」

「わざとか」

渋面する俺の顔に、優しくタオルが当てられる。ちよつと慣れてきたユカリスが、俺を心配そうに覗きこんでいた。

もう俺の癒やしはユカリスだけかもしれない。

「紋具職人として媚びたいのは山々であります、サウザナ殿という規格外な識世を持つておられるネムレス殿に渡せるようなものなど……」

「ナツキとダルメンはどうだよ。あいつらだつてセンスつて意味なら俺より抜群だぞ」

「ネムレス殿を釣ればお二方も共に来られると思えますので」

「まだ出会つて二日だよ」

「ですが、その二日はただの二日ではないでしょうか？」

それにはぐうの音も出なかった。

初日と昨日、出会いから共に行動をしたただけなのにちよつと密度が普通ではない。

俺なんか目覚めた当日にこれだ。スケジュール調整を申し出たいところである。

「それと、渡せるのはあるだろう？ 持ち帰った資料から新しい紋具作れるんじゃないのか？」

「あれは紋具とは少々違いまして。とても強力なことに変わりはありませんが。……はい、終わりです」

「ああ、なんだかんだで汗も引いた。ありがとうな」

「タオルに〈消臭〉も使っておいたので汗臭さも消えているはずですよ。あとは——」

「下も、とかそれ以上なんか言ったらアンネから出ていく」

何のことでしようとして上品に笑うアーリィ。絶対すつとぼけてるだろ。下半身は流石に自分でやらないとまずいだろ。

言わなかったらそのまま続けそうなのが怖い。今時の女の子ってこの年からこういうこと言えるのか？ 女の子は早熟とはよく言ったもんだ。

「では、次はお風呂に入られますか？」

「魅力的だけど後だな。先にすることがある」

「彼女達ですか」

「ああ。ずっとここに置いておくわけにはいかないだろ？」

「ふむ。ではこれからの話し合い、私も共に参りましょう」

「アーリイも？」

「はい。おそらく本来の目的は私だと思うので。彼女らからすれば、あの隠し部屋はその副産物かと思われます」

「知らないって言ってなかったか？」

「彼女達のことには確かに知りませんでした、私を狙う何者かが居るといふのは存じておりました」

アーリイ曰く、自分の行動が見張られているような感覚をずっと覚えていたらしい。

それが始まったのはここ一ヶ月。警戒はしていたがまるで手を出してくる様子はなく、ただ見られていただけのようだ。

三角巾娘達が町娘のような格好をしていた所から、すでに街に仮住居でも見つけて紛れていたのだろう。

それにただ、とは言うが一ヶ月近く生活を監視されるって相当危ないぞ。これだけで三角巾娘の襲われたという言い分を封殺出来る。

どちらにせよ、俺の推測は正解でこつちが謝る理由も消えたわけか。あのひき逃げも

子供を監視していた罰つてことにすればいい。

「なら、弱味になるかわからんけどアーリイもついて来てくれ。引き出せる情報は多ければ多いほどいい」

「お供致します」

そう告げるアーリイに笑みをこぼすと、重そうにタオルを抱えたユカリスも自分をアピールするように俺の目の前に浮いてくる。

「わかった、ユカリスも一緒に来てくれ」

そう言うと、ユカリスは花咲くような笑みを向けてくる。この子もこの子で不思議だが、識世の生態に詳しくないので、これが普通なのかそうでないのかの判断がつかない。

俺が考える識世は道具が喋ることだと思っていたのだが、ユカリスは花の識世だと言うし機会があれば識世の生態について調べてみるのも面白そうだ。

でも、そんな中でもわかっていことは一つある。

ユカリスは、とつても良い子だということだ。

だからこそ愛剣がやらかした責任は取らなくてはならない。

「ああ、俺はとりあえず着替え直すけど風呂自体は用意しておいてくれ。ナヅキ達が入ると思うから」

「承りました。では私は先に……」

一礼し、部屋から退出するアーリー。

どこまで本気かはわからないが、彼女が俺達の協力を求めていることに違いはない。アーリーという紋具職人との縁を強められるのなら、多少の手伝いは問題ない。

思案しながら、俺は〈エイメージボイス〉でサウザナに連絡を取る。

「……サウザナ、そつちはどうだ？」

『男の子のほうが愚痴多めで、女の子のほうは私の封印解こうと頑張ってる。他の子達は駄弁ってる。のんきなものよ』

「脱出計画とかは立ててないのか？」

「今はその気はないみたい。あと、声に出さないやり取りもいくつか確認済み」

「調べられるか？」

『把握済み。履歴も取ってるから安心して。必要ならすぐ送るけど』

「いや、とりあえず知らないで行く。サウザナはそのまま監視頼んだ」

『頼まりました』

〈エイメージボイス〉越しの念話を終える。

今サウザナは三角巾娘達の居る牢屋に置かれた甲冑の持つ武器——に模倣して彼らの動向を見守っている。

サウザナの話を聞く限りでは今は大人しくしているようだが、胸の内ではここから逃



げ出す機会を伺っていることだろう。

条件次第では解放の手も考えながら、俺は服を着替えた。

## 13. 尋問

地下牢へやってきた俺は、両拳を握つてやる気を見せるユカリスをなだめながら、目的の場所へと歩く。

屋敷の地下は区分分けされているようで、階段を降りた先の十字路を左に行つたところが地下牢である。正面は実験や研究のための施設で、右は色々なものを保管してある倉庫らしい。

いくら媚びを売ると言つても、仮にも紋具職人の作業場やその成果に他人を案内して良いのだろうか。ちよつと無防備すぎないこの子？

そんな疑問を浮かべながらも、石造りの道を進んでさらなる地下へ降りていく。やがてその先に見える扉をくぐると、俺の耳に絶叫じみた声が聞こえてくる。

「いらい、出せー！　僕達を誰だと思つていやがるー！」

出会つた時と変わらず今日も元気なうろたえ少年である。

訓練の時間とサウザナをよこした時間と合わせてが結構経つていると思つたが、割と元気なようだ。

正面から並んで三つの牢屋にそれぞれ三角巾娘、うろたえ少年、その他……ダルメン

によつて捕獲されたためか、右の牢屋だけ三つの樽が所狭しと置かれており、開いた蓋の中から足だけをひよっこりと覗かせている。

俺の足音に気づいたのか、樽の一つが足の位置を変えた。何故か、視線が合っているような気がした。が、今は真面目な話をしたかったので、努めて無視した。

「へえ、聞けば教えてくれるのか?」

「なつ、お前は!」

それに割り込んだ俺達を見やり、うろたえ少年は動揺しながらも寄ってくる。

鉄格子のせいで体を阻まれ、それ以上近づくことはなかったがそれでも眼光鋭く俺達を睨んでくる。それを意に介さず、まず自己紹介をした。

「名乗つてなかつたな。俺はネムレス・ノーバデイで、この小さいのがユカリス。そしてこつちが」

「アーリイと申します。すでに見知つておられるかと思いますが、改めて」

アーリイの皮肉を感じているのか、歯ぎしりして俺達を睨むうろたえ少年。

ユカリスが対抗するように口を広げていっつ! と歯をむき出しにして威嚇すると、うろたえ少年は少しビクついた様子だった。ユカリスにビビるなよ。

「二応前口上として言つておく。素直に知つていること全て話して、今後一切アーリイやこの街に手を出さないって誓う気はあるか?」

「ど、洞窟ではちあっただけだろ。そっちの子は関係——」

「ちなみに、こっちはお前らがアーリイを一ヶ月前から監視していたことを知ってる。そんな相手にこれだけの恩情見せてる子を蔑ろにする、ってんなら俺は容赦しない」

「……ネムレス殿」

アーリイの恩情というのは俺が勝手に言っていることだ。アーリイも突然そんなことを言い出した俺に驚いたようだが、名を呼ぶだけでそれ以上は何も言わない。

「殺しはしない。でも、お前ら軍人にとっちゃ死ぬより辛い目に合うぞ」

「な!?!」

うろたえ少年が盛大に反応するが、三角巾娘やこちらを見ている他の面々に表面上変化はない。三角巾娘はともかく、樽に変化は求めても無理だとは思うが。

心の中を読めるツギハギでもあれば簡単だが、似たようなものはあれどそんな便利なものはないので、己の予測を信じながら話を続ける。

「信じる信じないかはそっちの自由だ。じゃあ最初に。お前らの背後には誰がいる? 〈理に潜む理〉を使っている上に部下持ち、個人での動きってことはまずないだろ」

「な、なんでその名前を知ってるんだお前!。ただの護衛じゃなかったのか?」

打てば響くなこいつ。畏かと思うくらいだ。

どこの軍人とは確定出来ないが、指示を出す上が居る確率が高い。持つてる情報は

少なそうだが、取っ掛かりさえあれば十分だ。

思考を横目に三角巾娘と三つの樽——イツタル、ニタル、サンタル——の反応を伺う。彼女は口を引き結んで俺を見ているが、何か行動を起こすことはしていない。イツタル達は微動だにせず、俺を凝視しているような気がした。

さっきの反応も踏まえれば、つつくのはうろたえ少年だ。

「さてな。情報つてのはどれだけ隠しても漏れるとだけ言っておく」

実際サウザナが知っている理由は知らないが、五百年も放浪して己を磨いたのなら案外へ理に潜む理の原型誕生に立ち会っている可能性もありそうだ。

「ま、話したくなければ話さないでいいぞ。代わりに、こう聞こう。お前らをここに残しておくことで何が起ころう？」

一番知りたいのはこれだ。

仮にこの二人を留めないし解放することで生まれる不利益というものが知りたい。奪還のために事を起こすのならアンネの街が戦場になる可能性があるし、解放した後で改めて監視者ないし刺客がやってくるならイタチごっこにしかならない。

撃退してしまった時点で最早引き返せない道にある。少なくともこいつらの注目を俺に集めるのが一番いい。

うろたえ少年は口で挑発出来るけど、三角巾娘どうやって気を引くか。

やっぱりあれが一番怒らせるのに一番いいか。

「そんなこと言うはずないだろう！」

「つまりある程度予想は出来てるってことだな？ ほれ言っちゃまえよ、全部ぶつ倒すから」

「はんつ！ あんな折れて不格好な剣を使っ……！」

言い切らせる前に、俺は腕を伸ばし鉄格子にすがつていたうろたえ野郎の首をつかむ。

皮膚をつまみねじり込むように回すことで圧迫感を強くした。

「あが、が、ぐ、う……！」

「なんだお前、ぶっ叩くの頭にして欲しかったのか？」

「もひゅ、ね、あ、の、え……！」

サウザナの一撃を受けてもそう言えるのなら大したものだ。これはしつかりと武器としてのサウザナの魅力を教えてやるしかない。

今は手で勘弁して欲しいが、代わりに丁寧に落ととしてあげよう。

うろたえ野郎の首を掴んだまま、俺はもう片方の手にタンクルを集めた瞬間、三角巾娘が口を開いた。

「……剣の一族の遺産。それが我々の目的だ。ある筋から、あの洞窟にそれがあるとい

う噂を聞いて訪れた」

「！・ ネムレス殿、もう良いのです、ですから手を」

アーリイのか細い手が俺の手を止めようとしていたことに気づき、うろたえ少年の手を離す。ユカリスは目を丸くしながら首を左右に振らし何もできないでいた。

「……げ、っほ！ お、お前……」

「申し訳ありません。少し、お休みを」

意識はあつたか。ある程度鍛えてはいるみたいだ。

うろたえ少年は背中を強烈にぶつけるほどの勢いで後ずさり、恐怖や悔しさ、無力な自分への怒りなど色々な感情に満ちた瞳で俺を見据えている。

だがそれも一瞬のこと。すぐさまアーリイが手をかざすと、そこから漏れるタンクルの光がうろたえ少年に当てられて気を失った。

寝息が聞こえるのを見ると、相手を眠らせるツギハギのようだ。正直助かる。

そしてうろたえ少年が発した感情以上に、けれど静かで氷のように冷たい怒気を孕んだ視線が飛んでくる。良いタイミングで三角巾娘の気が引けたな。

チリチリする肌の感触は、それを察知したユカリスが撫でて和らげてくれる。……別に怖いわけではないが、ここはユカリスの世話を受け入れておくか。

「そう睨むなよ。誰だつて大事なものの一個二個千個くらいあるだろ？ こいつはそれ

を侮辱した。怒るのは当然って話なもんよ」

「それは他人にも適応される、ということとは知っている?」

「当然。でも、おかげで喋ってくれただろ?」

「挑発のために彼を苦しめたの?」

「それは偶然。選択肢の一つだったけど、愛剣をけなされたからちよいどいいやと思つて実行しただけさ」

「……………殺しかねない雰囲気を感じたが」

「アーリイ、ところで剣の一族ってのは?」

三角巾娘をスルーしてアーリイに目を向けると、一つ頷き翻訳してくれた。

「剣の一族とは、遡ること五百年ほど前。剣都ルオの前身となつた無名の国に仕えていたとされる一族のことです。かの国は一時期混乱を迎えており、その中で建国の王の遺志を守護していたとされる者が王から受け継いだ遺産と共に失踪し、世界に散つたとされています。その者と縁者はこの五百年の間、各地で目覚ましい活躍を見せ、彼らの手にはすべからく王の遺産である特別な剣を携えていた……ということからそう呼ばれておりますな」

（ちなみに無名の国ってのは私達の国のことだから。なーんで無名なのかはまあ、人間の作る歴史って奴）



俺らの国かよ！ つまり剣都って俺達の国が発展して生まれた場所なのか。

名前消えてるのも驚きだけど、剣の一族なんて居たか？ そんな名称知らんぞ。

声には出さず、(イメージボイス)でサウザナに詳しいことを聞く。すると、予想外の答えが返ってきた。

(それ私。色んな剣になつて各地を巡つたつて話はしたでしょう？ 出身語つた覚えは

ないけど、噂が噂を呼んで剣の一族なんて呼ばれてるの)

(ご本人、じゃなくてご本剣かよ。今回の出来事において大体お前が関わつてんのな)

(召喚のツギハギ覚えてからは、貴方と会うことに専念してなかつただけだね。あーでも、協力してくれたあの子達が剣の一族つてことになるのかしら?)

物思いに耽るサウザナ。

俺の知らない、サウザナの物語。それは果たして、どんなものだったのだろうか。

そんな俺とサウザナの脳内会話をよそに、アーリイは説明を続けてくれる。

「剣の一族は剣都ルオとは無干渉を貫いているといえ、様々な確執があると聞き及んでおります」

(あー、まるで関係ない事で難癖つけて狙ってくる奴らいたわー。手を出すデメリツトのほうが大きいって覚えさせてからはピタリと止まったけど、強欲ねえ)

剣都からすれば剣の一族の持つ剣は自国のものである、なんて思ってるんだろうな。

サウザナと関係なく独自の歴史を紡いでいるのなら、積み重ねてきたものを大事にすればいいものを。

「よくご存知で。やはりただの子供ではないようだ」

「恐縮です。数十年ほど前ですが、歴史上始めて生み出されたとされる飛空戦艦隊を投下したあの戦いも、それらの因縁から発生したもの……という噂ですな」

「つまりこいつらは剣都ルオの軍人で、持ち逃げされた技術を回収する任務を請け負っている。そんな中、あの洞窟の中に剣の一族の遺産があると踏んで、それを暴こうとしているアーリイに目をつけたと」

「あくまで可能性ですが。剣都ルオでなくとも、剣の一族の遺産を求める者は多い。彼女らの正確な背景はわかりませぬが……〈理に潜む理〉を使うというだけで、その国の出自かどうかは判断できません」

『あくまで国が発祥つてだけで、よそに流れない理由にはならないからね』

国家技法とあっても、言ってはしまえばそれはツギハギ的な名産品らしい。

主流として使われているのがその国なだけで、他国が独自に開発ないし使い手が別の場所に所属している、という可能性だつてあるそうだ。

あるいは、こいつらが剣の一族で遺産の守り人ということだつて考えられる。そこまですごくなんでも成り立つ妄想の域なので、素直に遺産を狙う何者か、と仮定しておこ

う。

「実際アーリイだって探してたわけだもんな」

「赴く理由は明かしてはいないはずなのですが。そもそも、あの洞窟にあるものが劍の一族の遺産であることすら知りませんでした」

「……我々は」

言葉を強く、短めに。だからこそ唐突に語りだした三角巾娘の声に耳を傾ける。

「劍の一族の遺産を見つけてしまったのなら、何をしてもし手に入れる。例えそのつもりがなくても」

「なるほどね」

情報の裏を探ろうと思考する。もう少し引き出せるか？

「今の状況、見つけたって扱いになるのか？」

「部下に怪我人が出ただけなら誤魔化した。でも、私を捕縛しツギハギの封印という技術を見せてしまった。我々の体にはあるツギハギが刻まれ、自身の体調やかけられたツギハギやその効果が術者へ逐一記録されている」

遠隔操作で体調に加えて、かけられたツギハギの構成を把握出来るツギハギ？

話が真実ならば、ツギハギを封印された時点でその機能を停止しているはずだが……「それが突然途絶えたとなれば、死亡か何らかの要因と判断される可能性が高い。その

場合私の身柄確認なし回収のため新たに部隊が派遣される。そこで私の生存を知ってしまえば、その彼女が何らかの未知の技術を手にしたと判断されるだろう」

そう言い切り、三角巾娘は自分を戒める手錠の鎖を鳴らす。実際はサウザナのツギハギの上にかけているだけなのだが、紋具であるのは見てわかるから勘違いしているのだろう。

「私達は街で過ごしている中、突然洞窟に飛ばされた。装備もおさなりにね。早く行けってことだったんだだろうけど、結果はこの始末。脱出もさせてくれないってことは、見捨てられたかこの紋具が強いのか……」

洞窟探索に似つかない格好なのはそういうわけか。サウザナから転移反応の報告はないし、おそらく前者が正解なのだろう。

しかし予想外に喋ってくれる。

心臓は強いのに尋問に弱いタイプだったか？ と訝しげに見れば、その理由を説明してくれた。

「元々、ここに来たのは色々なしがらみ故に僻地に飛ばされただけ。……アンネの街の近辺にある剣の一族の遺産を見つける任務を受け渡された」

「えらく素直だな」

「誤魔化しは不可能だと思っただけ。剣獣はないし、手に入れた技術の中に自白を強要

するものもある可能性が高い。なら、さっさとこちらの目的を明かしたほうがいい」

あるのか？ とアーリイに目を向けてみるが彼女はきよとんと俺の顔を見上げるだけ。ややあつて頷いてくれたが、なんとなく俺とアーリイの考えていることが違いそう  
な気がした。

そんな心中など知る由もなく、三角巾娘は続ける。

「正直、期待なんて微塵もしてなかつたし今日まではその通りだと思つていた。あの洞窟には何も無いし、ここら一带はどちらかと言えば五領国の領分だから、あの国が剣の一族の遺産を調べていないはずがない。報告らしい報告は、小さな賢者という子供の存在だけ。私達からすれば、流刑のようなものだった」

五領国……アンネの街は、その国の領地つてことか。

この子の口ぶりから、この国も剣の一族の遺産を狙つていそうだ。

「でも、彼女が開発したのは主に水関連の技術。お風呂に水道処理、確かにここら一带では革新的なものであるが、うちの技術者や世界で見ればそう貴重なものではない。もちろん、それを成した年齢は驚くべきものだけだ」

「照れますね」

「もう少し照れた顔をしよう」

すまし顔で言われてもまるでそう思えんぞ、アーリイ。

「少し話はそれたけど、私達を残しておくことで発生する事態はそんなところ。面倒なことになった」

「お前自身は今回の件に乗り気じゃなかったのか」

「叶うならここに骨を埋めるくらいには。住居もあつて食事も美味しいし、お風呂も気持ちいい。衣食住が揃つていて不満なんてないわ」

「じゃあなんでアーリイを追つかけてたんだよ」

「仕事だから」

そりゃ大人として素晴らしい意見だ。

俺はここで彼女が少年の声がする方向へ向いているのを見やる。その表情は少年を慈しむようでありながら、堪えきれないような震えが見える。

脳裏に閃くのは、少年への暴力によつて口を開いた彼女の姿。うろたえ少年はどうやら、彼女にとつて大事な人物であるようだ。

「そいつのためか？」

「……………」

首でうろたえ少年を示すと、先程までと打つて変わつて沈黙する三角巾娘。態度は言葉以上に真実を語っている。これ以上彼について聞いても、たとえ彼女自身何をされても出てくることはないだろう。そもそも無理に知ろうとも思わない。

と　りあえず、ダルメンへの誤解だけは解いておこう。

「そういえば、だけどな。お前らの部下を襲ったのがダルメンだと思ってるようだけど、あれ先に仕掛けたのは俺だ。ダルメンはその後を通りかかっただけでな。つまりお前らは無実の男を問答無用で襲いかかったわけだ」

「……………なに？」

「俺はその時、近くに居たんだよ。それで、監視してるお前らに気づいて不意打ちした。〈理に潜む理〉で姿を消してる相手に配慮をしろつてのが無理な話だぞ。それが馬車で移動中の子供の尻を追っかけるような奴らなら尚更だ」

「あいつらは別に部下じゃないから、むしろすつとした」

属す場所は同じでも、指揮系統が一本ではない、と。

ダルメンの誤解を解くための会話から思わぬ情報を拾う。

三角巾娘とうろたえ少年と、俺やダルメンがふっ飛ばしたというグループはまた別のようだ。それでも同じ目的を持って行動しているということは、雇われ先の問題だろう。

正直有象無象はどうでもいいが、三角巾娘を要する背景の組織は気になる。

やはり剣都ルオっていう所の軍人って考えたほうがいいかな……

「じゃあ最後。あの洞窟で遭遇した時、お前らはほぼ手ぶらだった。報告はルオからだ

としても、あの装備は準備もなく突然飛ばされたように思える。それをしたのは誰だ？」

アーリイを監視していたというのなら、今回の探索だって空振りで終わる可能性が高いと思うはずだ。

なのに、まるで俺達が隠し通路を見つけたと同時にその動きを察知したようにも思える。で、ありながら武器らしい武器は剣獣だけという始末。目的と動きに関して、色々な食い違いがそこに見える。

と、ここに来て三角巾娘は沈黙した。これは、当たりか？

「その情報源を持つ、ということ自体色々絞れると思われます。案外、剣の一族自体が彼女らの協力者なのかもしれないませぬ」

(はい、タンクルに反応ありー)

アーリイ、ナイス援護。

「そりやおかしいだろ。剣の一族が協力者なら、こいつらはもう目的のものを手に入れていたはずだ」

「私と同じく、開ける方法を知らなかったのでは？」

「つまり『元』剣の一族？」

頷くアーリイ。



そういうことなら、情報を持っていてもおかしくはない。

「サウザナ。剣の一族って裏切り者が出るような作りか？」

「うーん、私が一緒だった頃はそんなことなかったけど、暇を出した子が縁者を増やしてその子に諸々話したのなら可能性はある、かな。覚えた剣の数だけ一族はいるし」

（抜剣できるのは何本あるんだ？）

（さあ？ 今度正確に数えてみようかな。でもネムレス、そんなの考えてたらきりないよ？ 剣の一族を襲って得た情報を持つ者、とかも言えちゃう）

おっと、考え混んでしまうのは悪い癖だな。

……しばらく無言の空気が続く。これに関してはわからない、というより言えないということか。どちらにせよ、これ以上は無理だな。

「ま、色々情報ありがとう。で、今後アーリイに手を出さないってのは誓えそうか？」

「私は、ね」

「何日くらいで来る？」

「派遣される上次第だけど、普通なら明日。慎重派なら二日後」

早ければ当日に来る事もあるのか、とんだけ拙速……いや、近くに拠点とかありそうだな。

「ああそうだ、もう遺産は隠さなくてもいいわ。やるだけ無駄」

「……その心は？」

「遺産が見つかっていない、なんて嘘はもう通用してない。本当に見つけてないのなら、まず開け方を遠回しに聞くはず。私達はそれの答えを持つていないけど……それが質問に含まれてないのなら、すでに見つけている、もしくは開ける手段を確保していると思つたまでだ。わざわざ背景を聞いてきたのが良い証拠」

「……わざわざ相手に質問の余地を与えてしまうとは迂闊俺。あ、ユカリスやめて今慰められると泣きそう。」

ユカリスの抱擁めいた頬への突進に目を細めていると、話は終わりだ、と言わんばかりに三角巾娘は横に転がる。

「……どちらにせよ私達にはどうすることも出来ない」

確かに、もう良い塩梅と言ったところか。

そう思っていると、アーリイが何か思いついたように両手を叩く。なんかわざとらしい。

「ああそうだ。貴方のお連れさんの荷物《・・》、下ろせば協力してもらえそうですね？」  
そう言つて、自分の服の裾に手を入れて体をまさぐる仕草をするアーリイ。一体何をしているのか、三角巾娘も目を丸くしている。

「……………え？」

「一応ここは私の工房です。心はともかく体の隠し事は出来ないと思っていただいて結構ですよ」

「……………アーリイ？」

意味がわからず、目を下げて真意を探ってみるが彼女の目は三角巾娘を定めたままだ。ここは大人しく敬意を見守るほうがいいか。

(気になるなら見ておくから、ネムレス達はゆつくりしてていいよ。あとは私がやつとくから)

呑気なサウザナの声に頷き、俺はアーリイに戻ろうかと促す。

アーリイはまだ何か言おうとしたが、それを言葉に出すことなく頷いてくれた。

尋問を終え戻ろうとする俺の背に、三角巾娘の小さなつぶやきが漏れる。

「……………今日の飯は何かしら」

サウザナのおかげで、その声は俺に届いてしまう。

思ったより呑気だなこいつと思いつつながら、俺はアーリイとユカリスを連れて地上へと戻っていった。

## 14. その後の一幕

皆が寝静まった夜、俺は家の外に身を隠していた。これから来るであろう来客の様子を伺うためだ。

『ネムレスー、起きてるー？ おねむれすになつたりしてないー？』

「なんだそれは。一徹くらい余裕だつての」

『牢屋の会話、中継したほうがいい？』

「出来るのか？」

『拾うだけなら。こつちからリアクションしない限り問題ないわ』

「じゃあ頼む」

未だ地下の甲冑騎士の剣になり変わったサウザナを中継点として、俺は三角巾娘達の会話を逃さぬよう耳をすます。

「ミュン、まだ封印は解けないのか？」

「……これほどのものとなると、やはり剣の一族の遺産を用いた可能性は高い。紋具だとしてもこれほどのものならベルソーアにまで使う理由がないし、何らかの素材から得たツギハギ、という可能性が高いと思う」

「僕達はその実験相手かよ」

三角巾娘、名前はミュンと言うらしい。するとベルソーアと呼ばれたのはうろたえ少年のほうか。

「一体どうやってあの洞窟の部屋にたどり着いたのよ。あのアーリイという子が、私達の予想以上の……」

「いや、どつちかと言えばあのネムレスとかつていう奴のほうが可能が高い。僕は気絶していたから知らないけど、かなりのアバターだったんだらう？」

「……………ええ。悔しいけど、すぐく余力を残していた。あれは他の二人の援護に徹していただけで、一対一だったとしても勝てるイメージが湧かない。こう、なんというか底は浅いように見えるのに、覗いたら奈落に通じる穴だったというか……」

「あいつ自身、剣の一族って可能性はありそうだな。だって、今回始めて見た奴だし。あの子供が連れてきた途端に進展があったんだ。僕達の話もすつとぼけて聞いていた可能性は高い」

「そうでなくても、あの隠し部屋をすぐに暴けるほどの何かを持っている。正直敵に回したくはない」

押し黙るミュン。

何やら勘違いされてるようだが、剣の一族どころか創始者であるサウザナが居るので

あながち間違いではないのが困ったところだ。

しかしベルソー少年はうるさい子供というイメージしかなかったのだが、あの中で拾える情報から取捨選択して答えを出せる能力は優れている。ミュンと共に居るだけの何かは持っているということか。

「何より、この封印の厄介なところはタンクルを使うおうとするたびに強制的に拡散するところ。どこか別の場所へ吸い上げられている気さえする」

「なんだよそれ、まるでリアクターみたいな……」

「そう。これは、ある意味簡易リアクターなのかもしれない」

　　そういえばリアクターっておおまかには聞いたけど、詳しい説明受けてないな。

「サウザナ、リアクターってなんなんだ？」

（そだね、そろそろ具体的に言つところか。リアクターっていうのは、ツギハギを安全に使うための装置。アリユフーレイインが張り巡らされてからは、この世界では迂闊に大きなツギハギが使えなくなったのよ）

「なんだそりゃ？」

（アリユフーレイインは世界融合以降に張られた、世界と世界の間張られた壁とも言える存在よ。その境界線の向こうに、融合された呪紋世界が存在するの。世界の裏側つてやつね。んで、ツギハギの使用はその壁を刺激する行為。あまり使い過ぎると普段は

塞がれてる壁が崩れて、アリユフーレインの向こう側から一気に世界の一部分が流れ込んでくるってわけ)

正確には今立ってるのが現実世界、その間に俺が居たという境界領域、そして呪紋世界と三つに分けられているらしい。

(おっぱいで説明すると、赤ん坊がこの世界。母乳がタンクル。母親が呪紋世界でね。赤ん坊が生きてくために母乳を飲む事は必要だけど、吸い過ぎても受け入れられず零しちゃうでしょう? その溢れた)

「突然そんな例えで説明されたくなかった」

(なんで? おっぱい好きでしょ?)

「嫌いな奴いるの? でもそれだけじゃ、って違う。真面目な時にそんな会話されても萎えるから。そんな気分じゃないから。それ以前に生命の神秘に下世話な考えを浮かべちゃいけません」

(じゃあもう少し真面目にね)

最初からそうしてくれ。

(世界融合を果たしたと言っても、この世界には異世界を受け入れるだけの余裕はなかった。けど、奇跡的とも言えるバランスで崩壊を免れて世界は均衡を保っている。でもそれが崩れると——世界の一部分が流れ込むと、スピリット・カウンターと呼ばれる現

象が起きるわ)

「そいつはどういう被害があるんだ？」

(世界融合以降、呪紋世界はほとんどこつちに吸収されて肉体を分解された魂達が漂っているだけの墓場と言い換えていい。でも、過度なツギハギの行使によつてこちらの世界と繋がつて溢れたそれらは、世界から零れた者達——カケラオチとして、理性のない化物としてただひたすらに世界を蹂躪する。その現象が、スピリット・カウンターと呼ばれているわ)

〈死者の反撃 《スピリット・カウンター》〉つてか。

昔も今も、化物に悩まされるのは変わっていないようだ。

『それが穏やかな眠りを妨げられた怒りなのか、はたまた肉体を求めて彷徨う死者の妄執、生者へと嫉妬なのかはわからない。でも、スピリット・カウンターによつて生まれたカケラオチは、己の生命力が尽きるまで世界を破壊する』

「そう考えるとこええなこの世界」

(こ)で話が戻つて、それをさせないための装置がリアクターつてわけ。リアクターはタンクルによる世界の刺激を調律し、緩やかに拡散する効果を持つてね。たとえば規模なタンクルが発生させたとしても、それをアリユフーレイインへ送つて世界中に拡散する)



「あくまで負荷がかかると穴が空いてしまうから、可能な限り負荷を少なくしたのか」  
（そうすることで人々は、安全にツギハギや紋具を取り入れた生活を送れるようになってたってわけ）

「使わなきゃいいのに」

（ネムレスだってお風呂堪能してたじゃない。それに、なんだかんだ言つてツギハギつてのは便利なものなのよ。デメリットを極力抑えて使用したいってのはごく自然に湧き出る意見だわ。それに、リアクターが開発されたおかげで、世界から大規模な戦争もなくなつたしね）

「そうか、戦争なんてのはツギハギの大盤振る舞いだもんな」

（歴史にして四百年前、世界融合以降始めて行われた戦争があつてね。当然というかなんというか、両国ともにツギハギをふんだんに使用した結果、スピリット・カウンターが発生。お互い国を半分割る大惨事と化したわ）

国の半分以上つて、そりゃあ戦争に負けるよかやばいな……

（もちろん人間は馬鹿だから、リアクターが開発されてからも戦争を起こした事はある。スピリット・カウンターが発生するほどの規模はまだないけどね）

「アーリイが言つてた、飛空戦艦隊つてのは？」

（ああ。あれが今のところ歴史上最後の戦争ね。と言つてもあれは——ネムレス、来た）

サウザナに言われ、俺もまたツギハギ——〈理に潜む理〉を使い、その身を隠す。

ミュンが俺にかけた時から構成を探ったのだ。覚えてたてのツギハギを使うのに躊躇はあるが、サウザナが補佐をしてくれるので問題なく使う。

そのおかげか、俺の〈理に潜む理〉は自分以外のタンクルの持ち主、つまり侵入者に気付かれることなく我が身を隠した。

〈理に潜む理〉同士でも相手を感知することは出来ない。となると、侵入者達は何らかの方法でお互いを知る方法を持っていると考えたほうがいい。

そも、あちらのほうが原点なのだから覚えてたての俺より使い方の幅が拾いのは当然か。

（しかし、待ちぼうけにならずにすんで良かった。来なければ来ないでツギハギの修行してたけど）

早ければ当日と言っていたが本当に即日とは。

侵入者達はまっすぐ地下へ向かっていく。迷いのない動きは、監視する上でアーリー不在の間に屋敷を調べていたのだと推測する。

まず生死を確認してからあわよくば遺産を狙うと言ったところか。だが年端もいかない少女達の寝室に踏み込む輩であれば容赦なくサウザナで鉄槌を下す。

そうじゃなくても下すのだが。

(サウザナ)

(はい)

合図と同時に、侵入者達が沈む。

先頭の奴は突然の襲撃に〈理に潜む理〉を解除して異常を呼びかけようと思ったが、屋敷に入った時点ですでに詰んでいた。

サウザナが言うには、今使っているツギハギも〈理に潜む理〉の応用だそうだが……正直〈理に潜む理〉を使いこなしていないからか、サウザナの技量が高すぎるのか何らかのツギハギを使われているということしかわからない。

そもそも〈理に潜む理〉は姿とタンクルを消すツギハギだと思っていたのだが、サウザナが嘘をつくとも思えないし俺が思っている効果は副産物という可能性もありそう  
だ。

姿とタンクルを消すのが副産物って本来の効果はどんなツギハギだよ……

これでもツギハギを見抜く目には自信があったが、サウザナの前ではそんなものないにも等しいようだ。悔しい。

(思ったより抵抗ないわね)

いや、思い切り抵抗してたぞ？ 蟻が海に落とされたと言わんばかりの差があるだけ

で、俺から見てもミュン程ではないがツギハギの制御に長けた連中だ。

同じことを俺がされたら、ツギハギを使われるまで自分が沈んでいることに気づけなかつただろう。

ますます差が広がってる。悲しい。

「俺、居る意味あつたか？」

（まあまあいいじゃない。尋問もこつちでやつておくから、ネムレスはもう休んでいいわよ。遠慮する理由もないから、ちゃんど絞つておくわ）

サウザナに声をかけたのも、俺が今から行くぜ、よろしく頼むぜ、みたいなニュアンスだ。だが真意は届かず彼女一人でなんとかしてしまった。

愛剣が頼もしすぎて俺いらぬ。

「……もうちよつと特訓してる」

（そお？　もう夜遅いし、明日に響かない程度にしときなさいよ！）

まるで母親のような台詞と共に、サウザナの通信が切れる。

おんぶに抱つことというわけにもいかな。あいつを使うのに相応しいよう、せめてゲイズと戦つた時の力くらいは取り戻しておかないと。

ひとまずサウザナに頼らなくても安定して（理に潜む理）を使いこなせるように、改めて姿とタンクルを消した俺の背後に、急に気配が生まれた。

右手にタンクルブレードを展開しながら振り向きざまに背面斬り。当たらない。

左手から〈ツインケル〉で周囲に風を吹かすが、もう標的に足を掴まれていた。

〈理に潜む理〉を展開する前に気配は察知できなかった。でもこいつは使つてからも正確に俺の位置を把握している……地面か！

引きずり込まれると理解し〈理に潜む理〉を解除、全身を媒介に俺に干渉するタンクルに介入。〈共有〉の〈素材〉で無理やり割り込み、共に地中の中へと埋もれていく。

足から〈威力〉よりも確実性を重視して〈追尾〉を込めたタンクル弾を放つ。襲撃者は咄嗟に避けたようだが、〈追尾〉による攻撃で敵の位置は把握出来た。

土の海に光はない。

即座に〈マップピング〉で周囲を検索すると、襲撃者はすでに俺に殺到していた。即座に〈土操作〉〈適応〉〈距離〉〈光量〉で体を覆い、地面の中でも動けるように体を馴染ませる。具体的に、俺の動きに合わせて周辺の土を操作して動きを阻害させないツギハギだ。

ある方角に右手を横に振りながら、タンクルブレードを投擲する。土の中にも関わらず、襲撃者は最小限の動きでそれを避けた。

さらにもう一本。距離が近かったからか、威力を察したのか襲撃者は振るつた右手でブレードごと俺を両断せんと振り下ろす。

だが二度目のタンクルブレードの後、俺は〈雷道〉で加速していた。作る道は襲撃者

の腕。わざわざ動きを指定してくれてるなら、合わせて相殺してやればいい。

思い浮かべるのはナツキの剣閃。

〈雷道〉による加速が生んだ攻撃力を思い描きながら、俺は襲撃者に合わせるように右手を振るい——瞬時にその手に握られていたサウザナと相手の右手がぶつかり合う。

ガキン、と重々しい音が耳をつく。見れば、襲撃者のへし折れた腕があらぬ方角へと曲がっていた。

「抜剣——」

サウザナの折れた刀身を補うように、タンクルの刃が展開する。

ウインズノアや洞窟で見せたラシンのような強力なものでなく、サウザナを俺のタンクルで補った簡易なもの。

けれど使い慣れた長さとなったそれを、右手が折れてもなお迫る襲撃者の胸元へ押し込む。

鮮血が土の中に染み込む。赤い飛沫が舞ったのは俺の首元だった。

体の鈍りを嘆きつつ即座に〈治癒〉を首に打ち込んで止血しながら、心臓を貫いているサウザナを襲撃者のから引き抜いた。

それでも相手は止まらない。

右手が折れ、心臓を失っても動く存在に顔を訝しめた。

(こいつ、まさか——)

閃きと同時に〈ストレッド〉で相手を拘束。襲撃者はものともせず引き千切ろうとするが、その一瞬の意識の分散で十分。

〈ストレッド〉が無効化された時には、俺の右手は穿たれた胸元へ侵入していた。

「〈プログラムギアス〉」

それが終わりの合図。

ツギハギが襲撃者に〈付与〉されると、糸の切れた人形のように相手の体が崩れ落ちる。

それなりの構成だったが、特に問題なく支配出来た。

戦闘が終わり、ひとまず地上へ戻る。敵対者は目の前の奴しかないようで、特に妨害されることなく瞳月の光の下へと上がる事が出来た。

『ネムレス、首は大丈夫?』

「ああ。サウザナもありがとな、手を出さないでくれて」

『体は出したけどね』

「剣として専念してただけさ」

にひひ、と嬉しそうに笑うサウザナ。

「こちらも嬉しくなってくる、気持ちのよい声だった。」

戦闘の途中で右手を振ったのは、すでに介入しようとしていたサウザナに待ての合図だった。頼る前に、自分一人でもやれるというのをこいつに見せてあげたかったからだ。

妥協としてただの剣としてのサウザナは使ったが、それは問題ない。

『念のため』

サウザナのツギハギで止血した首の傷跡が消えるのを実感しながら、俺は襲撃者——ツギハギ人形を見やる。

使用者のツギハギによる遠隔操作式の人形。このタイプは昔よく見た。

全身を黒衣で覆っているが、剥いで見ると金属製の装甲で覆われている。このタイプはあまり見ない。

『鉄海と合わせたタイプねえ。起動紋は……消失してる。むむ、相手も中々ね』

「ああ。制御が自分の手を離れた瞬間に痕跡が消えた。やり手だよ」

少なくとも直に触れた時に得た情報は微々たるもの。相手を特定するのも難しい。威力偵察なのか、兵を送ってから本命を後から投入とはやりおる。

『どうする？ 〈復元〉してお返しに使う？』

「アーリイに渡すのも面白そうだけど、今はいいや。サウザナが処理してくれ」  
『おうえい』



謎の返事になんとも言えず、代わりにサウザナを鞆に収める。そのまま離れる気がないのはさらなる襲撃を警戒してか。

心配性だなあと思いながらも、俺は当初の予定通りツギハギの訓練を続けるのだった。

## 15. 町長への挨拶

翌日、俺は屋敷の地下牢にミュン達を放り込んだことをアンネの町長へその報告をするために、アーリイを伴って街で役所へやってきていた。

簡単なお土産を買っておいたが、初対面なので当たり障りのなく楽しめそうにワインを選んでおくのも忘れない。

アーリイには昨夜の一見を報告済みだ。

すると彼女は深刻な表情をして、俺に屋敷で待つよう言付けて地下牢の元へ向かった。

結構な時間の後に戻ってくると、町長に話をしに行くと言って俺を伴ってお出かけた。地下で何を話していたのかは、後で言うと言って教えてはくれなかった。

ちなみにナツキは朝早くから体を動かしていた。後で付き合うと言ったので、今日も相手を頑張らないと。

ダルメンは俺達が先日泊まった食堂へ出かけている。あの店が出す食事はよほど美味いんだな。

朝は過ぎたが昼にはまだ早い町並みを、ユカリスとアーリイを伴って歩く。

アンネ自体がそう大きい街ではないが、それでも役所は行政機関というだけあって五階建の建物は街の中でも結構大きい。

アーリイはもはや顔パスのような扱いを受けており、唐突な話だというのに問題なく町長の元へ案内されている。

たった三年で最早顔役と言わんばかりの姿を見せるアーリイに、早熟や天才という言葉では片付けられない何かを感じていた。

「どうかされましたか？」

視線に気づいたのか、アーリイが俺を見上げてくる。こうして見れば十歳前後にしか見えない子供だ。

「いや、アーリイの能力が高いと言ってもよく街の人たちは納得してるな、って」

「リアクターがなければツギハギはおろか生活用の紋具を安心して使用できません。元々このアンネの街には小さなりアクターしかなく、紋具もそれほど普及されていなかった」

「供給と管理がアーリイにしか出来ない以上、こうなるのは必然か」

「町長殿は野心という言葉から縁遠く、安寧という名の守勢の方です。日常を平穩無事に過ごし老死したいと常々言っておられます故、騒ぎさえ起こさなければ大抵のことは納得してくれますよ」

「どう考えても騒ぎの予感しかない問題をこれから報告しに行くんだけど」  
「こればかりはどうしようもありません」

そう語るアーリーの横顔は何の気兼ねも見受けられない。何をどう言われても自分の好きにやるし、ここに来たのも単に義務でしかないのだろう。

あいつらの処遇は彼女にかかっているが、相手が言う通りの性格ならあのまま地下牢暮らしを続けそうな気がする。

後で何か差し入れでもしてやろうかな、と考えていると肩に乗ったユカリスが滑り台のように俺の腕を伝い、肘の間接の上に乗る。ちよつと不満そうな顔だ。

ユカリスを再び肩に乗せ、今度は腕をびんと伸ばす。

すると予想通りユカリスは俺の腕を伝いすーっと掌に落ちてくる。

俺はユカリスが落ちてきた動きを利用し、その反動で彼女をアーリーの頭の上に放つた。

ユカリスは宙を舞いながらも顔はとつても笑顔だ。何か喋っているが、俺にはわからないので多分きやーと楽しそうな声を上げているのだろう。

ぼて、とアーリーの上に着地するユカリス。

重さがほとんどないのか、アーリーのバランス感覚が優れているのか、一切の体のブレを見せぬままアーリーは目を上に向け、次いで俺を見た。

「花の識世、でしたか。何の品種かはわかりませぬが、こうも人に気を許す性格の子も珍しい。どこで出会ったのです?」

「ここから北にある山に住んでた。あそこへ登った時に出会ってな」

「ほう。ではその話は食事の時に楽しみにしております」

猫を抱えるように両手で頭の上のユカリスを抱え、俺に差し出してくる。

少し背をかがめ、ユカリスが改めて肩に乗ったのを見計らったかのように、前を歩く女性がこちらへ振り向いた。

「着きました。ここが町長のお部屋でございます」

「ありがとうございます。ではネムレス殿、参りましょう」

案内をしてくれた女性に一礼し、アーリイがその部屋の扉をノックする。ややあつて入室の許可をもらい、俺達はその扉をくぐった。

飾り気のない部屋は華やかさに欠けており、質実剛健と言えるほど必要最低限の物しか置かれていない。

とても町を預かる人間の部屋とも思えないが、事前に聞いていた安寧の人という言葉でそれに納得する。

「おはよう、アーリイさん。今日は何用でしょうか?」

そう言ったのはこの街の町長である壮年の男性。

垂れた目ややや小太りの体を椅子に預け、やや警戒を帯びた雰囲気だ。アーリイが来たからなのか、持ち込んだ案件を察したのか。

それでも子供であるアーリイに敬語を使う辺り、力関係が窺える気がした。

「はい。実は昨日、私を襲ってきた正体不明の何者かを拘束しまして。今は私の家の地下牢に入れております」

言った瞬間、喉を詰まらせるように体を震わせる町長。額からは汗が滲み出て、見るからに嫌そうな顔を浮かべている。

「あまり聞きたくないのだが、私に何を求めているのでしょうか？」

「私に出来ないことです。しばらく……余裕を持って十日ほど、リアクターに負荷をかけますので、急ぎツギハギないし紋具の制限をお願いしたい」

「制限、ですか。ということは大規模なツギハギを行使するおつもりで？」

「はい。何分未知の領分へ手を突っ込もうとしておりますので、保険は少ないに越したことはない。最悪、スピリット・カウンターが発生するやも」

「そ、そんな嘘な！」

アーリイの報告に、当然のように絶叫する町長。

穏やかに過ごしたいという目的を持って生きている人からすれば、今の宣告は死刑にも等しい事に聞こえたのかもしれない。

しかしアーリイは一体何をやる気だ？ ミュン達との会話が関わってるのは間違いないだろうが、かなり大事のようだ。

「あくまで『最悪』です。でもそれは、町長が根回しを怠らなければ防げる事実ではあるかと思われませう」

「どう足掻いても穏便ではないとしか聞こえないのですが！」

ああこの人、苦勞してるんだな……

今のアーリイとのやり取りで力関係を改めて知る。

「言い方を変えましょう。放置すればアンネが消えるやもしれない所を、街の生活を少し節約することで防げるのです。しかも深夜ですから、混乱は小さいはず。本当に緊急用のものだけに備えておけば、貴方の安寧は守られる」

「うぐぐ……この街の外、どこか遠い地でその作業を行えないのですか？」

「リアクターのない場所で使えば、それこそスピリット・カウンターが起こってしまいます。私がよく向かった洞窟も、おかげで崩れてしまいましたからね？」

「は？」

「周囲で一番安心出来ると言えば五領国のエスタンプルでしょうが、流石に五領国へ持つていく案件としては爆弾すぎます。それこそ、町長の平穩が消えてしまわれませうが？」

「おおぅ……わ、わかりました。スピリット・カウンターの発生となれば皆も了承してくださるでしょう。憂いなくお仕事出来るよう根回ししておきます」

「ありがとうございます、ミスター。今度、胃に優しいものをお渡します」

「多少心が和らぎますが、そんな配慮が出来るなら胃を刺激しないで欲しい……」

そう言つて胃をさする町長。彼に必要なのは胃薬じゃないだろうか。

「しかしその犯人というのはどう処理するおつもりで？ 街に危害を加えていない以上、私としましてはアーレイさんに一任という形になるのですが」

「はい、考えがありますのでお任せください」

「あいつらの処遇考えてたのか？」

「ええ。知り合いにこういう荒事に強い方がおりますので、押し付けようかと。その間、迷惑代として色々とお手伝いをしていただきます」

「ミュンはともかくベルソーアはどうだろう」

「ベルソーア殿と話をしてみれば、性格はともかく知力には見張るものがありました。少なくとも損得が考え、実行できる力が見受けられます。本来なら貴方やサウザン殿に聞くのが一番ですが、まずは自分達で挑戦するのが筋でありましょう」

なら媚を売る必要なかったんじゃないか。でも、二人の会話は聞いてみたかったな。

したり顔で頷く俺に、町長が目を向けてくる。今まではアーレイだけがればいい話



「題だったが、ここから俺が必要になるのかな？」

「その、君は一体……」

「ネムレス・ノーバディという方です。話題の何者かの捕縛と、アンネの街をさらに盛り上げるきっかけを作ってくださった方です」

「ん？ 今何か言い方が……」

「ほう、アンネの？」

「はい。私が以前より訪れていた洞窟には、ある技術の資料が隠されておりました。それを使えば、アンネはさらなる発展を遂げるでしょう」

「私は必要以上の発展はせずとも良いのですが……リアクターや水源を様々な用途として名産に仕立て、貧困に近いこの街を豊かにしていただいたのは感謝致します。とはいえ、必要以上の技術の底上げは人を呼びこむもその正負は選べませんので……」

「ですが、人が増えるということは経済の活発化も見込まれます。貴方の『趣味』も広くなるやもしれませんぞ？」

「ごくり……いい、いや、我が身のためにそんなことは。最悪エプラッツの店に入り浸れば」

「むむむと悩み始めた町長。これは戻るのに時間がかかるかなと思いきや、アールイイに気になったことを聞いてみる。」

「アーリイ、エブラッツつて？」

「二昨日ネムレス殿達が宿泊していた店の店主の名前です。我々に対応してくれた、エインさんの父君でもあります」

「ああ、あの店の子か。今考えても、いくら直るからといっても店を半壊させたのに怒らなかつたのか器が広い」

「は、半壊？」

俺のつぶやきに町長が焦った声を出す。入り浸るつて言つてたし、知り合いか単にあの店をよく利用しているのかもしれない。

「いえ、もう無事に元通りですのでご安心を。町長の楽しみを奪つてはおりませんよ」

「ほっ、良かった」

「町長は食事が趣味なのですか？」

「恥ずかしながら、この体型を見ればお分かりかと思いますが食べ歩きが趣味です。街はもちろん、外国へ赴くさいにも。仕事の後、あるいは休日。そんな時に美味しい食べ物を口に入れることのなんと素晴らしいことか……………」

今まで食べたものを想像しているのか、悦に浸る町長。ちよつと和む。

と、ここで買っておいたお土産を渡す。食べ物でなくて恐縮ですが、と言うと町長は破顔しながらワインも好きですと言ってそれを受け取つた。

「話を戻します。町長にはもう一つお願いがあるのですが、こちらのネムレス殿が何かお願いをすることがありましたら、なるべくそれを叶えてあげて欲しいのです」

いきなり変なことを言い出すアーリイに、俺は怪訝な目を向ける。

どういうことだ、と聞いてみると彼女は一つ頷き、俺と町長へ理由を説明した。

「捕縛に協力してくれたのは先ほど申した通りです。私はそちらの対処に当たりあまり動けなくなりますので、もし何らかの問題が発生したら私ではなく彼に頼っていただきたいのです」

「それ、問題が発生する、という風にしか聞こえないのですが」  
「気のせいです」

俺も感じてるから気のせいじゃないと思うよ、町長。なんか親しみ湧いてくるなこの人。

しかし、俺が手伝うことって決まってるの？ とアーリイに聞けば、こんな言葉が返ってきた。

「昨日媚びたじゃないですか」

「了承した覚えはないし、あれで全面協力とか言い出したらどんだ俺はちよろいんだよ」

「冗談です。……ただ、私としましてはせめてこの件が終わるまではネムレス殿に手

伝っていたきたいのです。その後はまた私が頑張つて協力を取り付けられるよう働きましょう。具体的には、私のできる範囲でネムレス殿の願いは最優先で引き受けます」

「今回の件は気になると言えば気になるけど……」

アーリイに協力した理由、店の半壊の修繕という意味では昨日の護衛と洞窟の隠し部屋で達成はしている。

しいて言えば資料の詳しい中身が気になるくらいだが、それでもアーリイという将来有望な少女と仲良くするのはこれからを考えると悪くはない。

彼女自身、俺の願いを聞くという形でメリットを提示している。なら、ここは素直に頷いておくのも手か。

「ま、元々そのつもりだったし問題ないさ。けど、町長は良いんですか？ いち旅人にそんな権利を与えるなんて」

「普通に考えればありえないのでしようが、アーリイさんの頼みですからね。貴方というより、アーリイさんを信用して同意します。……どうせ断つても行き着く先は同じなので」

「苦勞、されてるんですね」

「わかつていただけですか」

どれだけの無茶振りをしたのか、アーリイは。

「一体何したんだよ、アーリイは」

「彼女のような幼い子が大事を成すという事実を客観的に見てください……」

「ああ、つまり有象無象がわらわらと」

困い込みや取り込み、将来有望な若者というだけでそれは価値のあるものだからな。

「はい。飛び火が多く……」

「鎮火したのは町長の見事なお手前かと。流石湖の街の代表であります」

「火いつけてるのアーリイだからな？」

「ご迷惑をかけたお詫びの利益は生み出しました」

「否定はしませんが、私は日々仕事をして時折の休日にはただ食べ歩きが出来るだけで満足なのです。豪華でなくていい。ただ、普通に美味しい食事があれば良いのです」

趣味に生きて健やかに生活している町長の顔はとても穏やかに見える。人生に満足して心に余裕があるのだろう。……アーリイと出会うまでは。

でも、あの資料を手にしたことでアーリイが元々この街に来た目的は果たしたはずだ。ならばその解説を果たされた時に、町長の安らぎの日が戻ってくるのかもしれない。

「何もなければいいとは考えてますが、何かあつたらよろしく願います。なるべく

街に迷惑かけないように動くつもりですが、どうしても必要な時は手を借りたく」

「はい、ネムレスさん。その時が来ないことを切実に願いながら、せめて三日くらいは無事で居させてください」

それ、遠回りに絶対何か起きるって確信してるよね？

アーリイがお願いに来る、ということですので彼の中では確定事項になっているのだろうか。だとしたら不憫なので今度差し入れでも持つていつてあげようかな。

アーリイより上といえ、外見で言えば子供でしかない俺にも一個人として接してくれるこの町長を、俺は好ましいと思った。

「では、私達はこれで失礼しますね」

アーリイが一礼し、俺もそれに習って頭を下げる。町長は汗を垂らしながらも必死で笑顔を作り、それに応えた。

帰り際、アーリイはそのまま屋敷に戻るそうなので俺は一度エインの所でダルメンに挨拶でもしてくと行って別れる。

だが別れようとした矢先、アーリイが俺を呼び止めた。

「ネムレス殿。ダルメン殿の所に行かれる前に、これを」

そう言って渡されたのは、先日預けた剣獣だ。

中身の〈幻獣〉の件について調べていたそうだが、返すということはもう済んだとい

うことか。

「中の〈幻獣〉が消えたせいか、完全に抜け殻になっておりました。ですが、機能自体は死んでおりません。新たに『中身』を入れれば、武器としてまた使用できるでしょう」

「ダルメンのアバターをこっちに入れろって？」

「話が早くて助かります。それを決めるのはダルメン殿ですが」

「ミュンに返さなくていいのか？」

「あげる、と言われてしまいました。ひとまず監視の対価として貰い受けました」

「ふーん。まあダルメンも樽以外は拳だけだったみたいだし、武器として渡すのもありかもしれないな」

「よろしくお願いいたします。では、またのちほど」

頭を下げ、今度こそ屋敷へと向かっていった。

頼れる年下と別れ、先程までの話を退屈そうに聞いていたユカリスが、サウザナの柄の上に座る。つと、そういうや昨日からずっと寝てんなこいつ。

「サウザナ、起きてるか？」

『んー？ 起きてない』

「起きてない奴はそんなこと言いません。昨日の件で疲れたか？」

『疲れたっていうか心地良い気分浸ってた、かな』

「なんだよそれ」

『やー、またネムレスと一緒に色々やれてるなーって』

「あー……うん。そうだな」

面と向かって言われるのも気恥ずかしい。いくら武器、いや識世の外見といえ言葉に乗った感情はダイレクトに俺の心へ届いているのだ。

「情報はどうだ？」

『だいたい終わってる。今から話す？』

「いや、ダルメンと話すから後で。今はまだ寝てていいぞ。必要になったら起こす」

『じゃあお言葉に甘えて〜』

それきり、サウザナからの応答が途絶える。

色々張り切っていたようだし、俺に言わないだけで結構疲れている可能性だってある。休める時に休んでおいたほうがいい。

ユカリスの頬を軽く小突いてその柔らかさを堪能しながらアンネで最初に来た宿、エインの店へと到着する。正式な名はエプラッツの宿というらしい。俺は改めてその扉をくぐった。



## 16. 折れた理由

「あ、すみませーん開店はもう少し……っ！」

俺を見るなりエインがびくりと体を震わせる。表情こそ客を歓迎するような笑顔ではあるが、肌の一部が赤く染まっていた。

何かしたか、と思いつ返しほぼ半裸の姿をこの子に見せていたことを思い出し即座に頭を下げた。

「その節はお見苦しいものを……」

「い、い、いいえ。あの時は悲鳴を聞いて駆けつけてくれたのですし、その、えっと」「お互い気にしないようにしましょう」

こくこくと顔を俯かせたまます承するエイン。

熱気を覚ますためか、一度奥に引つ込み俺とユカリスの水を入れたコップを用意してくれたエインの好意に甘えて、テーブルに座る。

大きさが子供用以下のはずだが、ちゃんとユカリスの小さな小さな口に合わせられたサイズだ。その気配りに感謝しながら、俺はエインへ改めて挨拶を交わす。

「そういえば自己紹介してなかったな。俺はネムレス、よろしくなエインちゃん」

「はい。もつと気軽にエインと呼んでくださって大丈夫ですよ。ネムレスさん、はお食事ですか？」

「いや、ダルメンに会いに来た。あいつはいるか？」

「ダルメンさんならさつき出かけましたよ。アーリイちゃんのお屋敷に行つたのかと思いましたが」

そう、ダルメンはアーリイの屋敷で宿泊しているのではなく、この店に寝床にしていた。

ナツキの料理は美味かったぞ、と言えばそれに関しては否定せず、どうも民宿という空気が気に入ったとのことだった。

「いや、俺はちよつと役所へ行つてね。そうなるとすれ違いだったか」

「ダルメンさんに何か御用で？」

「直接渡したいものがあつてね。ついでに、ちよつと話でもしようと思つただけさ」

「あんなことがあつたのに、随分仲良くなつたんですね」

くすくすと笑うエイン。人を和ませる柔らかな笑顔は、人好きするような魅力があつた。

「エインはもうダルメンのこと平気なんだな」

「はい。なんだかんだでよくお話してます。確かに樽を被つてるなんてちよつとびつく

りしましたが……」

「そりやああれにすぐ慣れろっていうのは難しいだろうな」

苦笑しながら水をあおる。うん、やはり安酒なんかよりずっと美味しい。

「ダルメンさんは食事を取ることが多く、うちに泊まつてるから閉店後でも会話をする時間を取れるだけですけど。それでも食事時や寝ようとする時までお樽を取らないのはびつくりしましたが」

「よく話を続ける気になつたな」

「最初はびつくりしましたけど、接客していると色んな人が来られるので特に気にならなくなつてますね。それに私、手が空いた時に色んな人の話を聞くのも趣味なんです。接客の時の話の種にもなりますし」

ちやつかりしてるな。

でもダルメンのあれを気にしないって、どんだけ変人が来店する店なんだ。それとも俺が知らないだけで、食堂ってのはそういうものなのか？

「あと、ダルメンさんはネムレスさんのことすごい人だとは仰つてましたよ。全力でやつて勝てるかわからない相手は初めてだつて」

「俺、そんな敵意持たれてた？」

「敵意、ではなく素直な感想かと」

「ダルメンは強いし、ちょっと仲良くしておこうと良心に従って動いたままでのに」  
「下心あるなら、良心じゃなくて利用心ってやつですか？」

上手い事言うな。」

「下心抱えてたら駄目か」

「それを言ったら話の種を増やしたいって私も下心なのかも……」

「はは、理由付けなんていくらでも作れるから、考えるだけ無駄かもな」

そんな風に欠いたを楽しみながら、軽く軽食を注文しておく。エインは別にいいと言ったが、何もしないよりは利益として還元するのが良い。

苦笑しながらサンドイッチを入れたバスケットを用意してくれたエインに改めて礼を言つて、俺はアーリーの屋敷へ戻る。

すると、ちょうど帰りがけだったのか屋敷への道からエプラッツの宿へ戻ってくるダルメンと遭遇した。

「あれ、屋敷に行つてたのか」

「ああ。サウザン様やネムレス君に話したいこともあつたからね」

「すれ違いだったか。まあちようどいい、せっかくだからどうだ」

エインから買い受けたバスケットを掲げると、ダルメンは頷くように樽を揺らした。

どうせなら、ということとでダルメンには二度手間だがアーリーの屋敷への道を少し進

む。彼女の家はアンネの街を一望出来るような高台の上に存在しているので、食事をするには良い景色が確保できるのだ。

「シート欲しいか？」

「良い具合の石があるから、それでいいだろう」

昼食として買い込んだサンドイッチを広げながら、まずたまごサンドを一口。うまー。

花の識世であるユカリスにもサンドイッチの切れ端を与えたが、問題なく食せるようだ。

「忘れちゃうかもしれないから、今渡しておくな」

言いながら、俺はアーリーイから受け取った剣獣を出す。

過去にあった銃に似た外見をしたその武器を見て首を傾げるダルメンに、その意図を説明する。

「これはタンクルを吸収して弾を撃ち出すものみたいなんだが、その吸収量がちよつと桁違いだな。これ持ってツギハギ使おうとしてみてくれ」

剣獣を受取り、素直にツギハギを使おうとするダルメン。

使おうとしたのは〈穿つ羽〉だったようで、一瞬だけ風がそよめき髪を揺らすか……地面を穿つほどの竜巻を発生させることもなく、その構成ごと剣獣に吸い取られていく

のが俺には見える。

ダルメンもそれを実感しているのか、樽越してもわかる困惑の感情を見せていた。

「これは……」

「どうもとんだ腹ペコらしくてな。普通のツギハギ使い……アバターやアクターの何十倍はあるタンクルをぱくりと食ってなお余裕がある。けど、逆に満足させてしまえば強力な武装になる」

アーリイと話し合い、加工して装飾品にしてみてもというアイデアもあったが、この剣獣自体が相当の紋具らしく下手に分解して『機嫌』を損ねたくないと言うアーリイの言葉に従い、素直に渡すという結論に落ち着いた。

「俺にはサウザナがいるから必要ないし、アーリイだってあの洞窟で見つけた技術がある。キラビヤカはナツキに渡してるし、ダルメンもせっかくだから受け取っておいたらどうだ？」

「これはあの襲撃者からの戦利品なのだろう？ 使わないから返してもいいのではないかね」

「監視の対価ってことでアーリイに渡されて、あいつもいらならしいからお鉢が回ってきたってことさ」

「残飯処理でも、料理が美味ければ構わないさ」

それは何より、とポテトサラダ入りのサンドイッチをひとつまみ。この芋美味しいな。次いで焼いた鶏肉を挟んだものも一緒に喉へ流しこむ。

口がパサパサしてきたので、バスケットの中に一緒に入れてあつたマグカップにツギハギで水と氷を入れて自分とダルメンの分を用意し、片方を差し出す。

ユカリスには指の腹に浮かばせた大きめの水滴を寄せると、両手で指ごと抱えられて水をすすっている。なんだか指を舐められているようでこそばい。

しかし昼食はもつと何か買ってくるんだつたな。いや、屋敷に戻ればナツキが居るはずだし、昼食頼めば作ってくれるかな。

「ここは良い街だ」

「どうした、突然」

「ふと、そう思っただけさ」

「ふうん。まあ風呂とか贅沢に使えるしメシも上手いし、好きになる理由のほうが多いな」

「リアクターもアーリイ君のおかげで問題ないからね。一体、何者なのやら」

「年下の天才なんてのは世の中たくさん居るんじゃないか？　ダルメンもナツキも同じようなタイプだろ」

「では、エイン君は普通かな？」

「あの子は年の割に大人びた、っていうか社交性高そうだ。一日二日でダルメンとまともに話せるのを考えると、普通と言えば普通だけど、一般的な子供とはちよつと違うかも」

「けなされているかな？」

「鏡見ようぜ」

「ユカリス君も識世にしては珍しいタイプで、普通がないね」

「ん、あー、そうだな」

「普通じゃないと言えば、ネムレス君も男なのに髪が長めだ、珍しい。首が暑そうだ」

何か話したいことでもあるのか？

本命に繋げるために会話を広げようしているのはわかるが、どんどん話題を変えてしまふのは一人喋りと大差ないぞ。

ダルメンは事に対して常に余裕を持っていたので、はぐらかすような会話をしてくるなんて珍しい。

つつつくのは簡単だが、もう少し様子を見よう。

「髪は首元で縛って流してるから思ってるより暑くはない。俺からすればダルメンのほうが暑く見えるぞ」

「そうかい？ でもこの街は、一年中涼しそうだ」



「避暑地としても案外外から来る人多いかもな」

そんなことを考えながら、俺達は景色を眺めながら至極どうでもいい話をしていた。言ってしまうえば中身がなく明日の記憶に残らないような会話だ。けど、今はダルメンとそういう話が出来たというだけで十分な成果だろう。

「——良い時間だな。俺は屋敷に戻るけどダルメンはどうする？」

結局本題を切り出してこなかったの、諦めてこつちから話題を振る。

「夕飯はナツキ君の料理をいただこう。その後、少し時間をもらつていいもいかな？」  
「わかった、何の話かわからないがあげとこう」

先延ばしつてことは、よほど大事な要件なのか？ なんて思いながら屋敷へ戻る途中、食材の詰まった袋を抱えたナツキの背中を見つけた。

奇遇だな、と思いつながら俺はその背中に声をかける。

「よつ、買い出しの帰りか」

「あ、ネムレスさん。用事はもう終わったんですか？」

「ああ、ダルメンともちよつと話してきた。ついでにそれ持つてやろうか？」

「んー……うん、そう言つてくれるなら断るのも悪いし、お願いします」

「ほいほい」

ナツキの歩幅に合わせながら、渡された袋を受け取る。昼食か夕食の材料どちらかは

わからないが、胃の中に入るなら大事にしないと。

ちらりと中身に目を向ければ、野菜が多く目立つが魚の姿も見える。昨日作ってくれた揚げた豚肉が美味かったのでそれを期待していたが、毎日そればかりというわけにはいかないのだろう。

そんな風の中身を物色している俺の横で、ナツキが指を口元に当てて俺を見上げていた。何かおかしいなと言ったかと考えていると、かすかなつぶやきがナツキの唇から漏れる。

「こういうの、私が女だからしてくれるんですか？」

「何が？」

「袋を持ってあげるーって。おじいちゃんもおばあちゃんと買い物した時に同じことしてたし、男の人ってそういう生き物なんでしょうか」

別に普通だろ、と思うがナツキはそういう返事を期待しているわけではなさそうだ。ここは少し理由つけて言っておこう。

「んー、そうだなあ。まあ、一言では説明できないけど、やっぱり男だから、つてのが一番かもな」

「下心とかあったりするんです？」

「うっせ、調子のんな。でもまあ、これが夕飯になるって言うからそのお礼代わりとも言

えるな」

そこまで言った後、急に会話が途切れる。不自然に空いた間を埋めようと会話を続けたようになると、ナツキが先にそれをした。

「やっぱり、おばあちゃんの言った通り」

「ナツキのお婆さんは何か言ったのか？」

「男つてのはいつでも子供で言い訳しながら自分をよく見せるから、それを理解して察してやるのも良い女だよって。人によりけりではあるけど、大半はそうだって」

「そりゃあいいお婆さんだ。若い頃はさぞかしモテたんだろうな」

空気の読める女性は貴重だからな。

基本的に男は我が強いので、わきまえている女性というのは魅力的に映る。エインもその分類に入るだろう。

ナツキやアーリイを見れば未来は私の強い少女も多そうではあるが。

サウザナ？ あれは別枠。

「かもしれない。でもおばあちゃん一途だからおじいちゃん一筋なんです。おじいちゃんにも言えるけど」

「相思相愛ってことか」

「本当、私も憧れます」

「候補が傍にいるぞ?」

「うっせ、調子のんな」

指を立てて自分を指すが、一拍の間を置いて軽やかに流される。

断られるつもりで言ったので当然だが、冗談を交えるやりとりで笑いつつ気持ちが悪くなる。会話が軽妙に進むというのは良い気分だ。さっきのように、いずれ敬語を抜いて接してくれば嬉しい。

そうやって個人的に楽しみながら帰宅し、台所へ行くナツキと別れて自室へと戻った所でまどろみを残す声が響く。

『ふあああ……』

「ん、起きたか」

思案する俺の傍に立ってかけたサウザナを引き抜く。昼ごろから眠っていたサウザナであったが、早い昼寝から目覚めたようだ。せつかくだし、夕飯まではこいつと何か話しているのでしょうか。

「おはよう、サウザナ」

『もうお昼過ぎみたいだけど、おはよ。んーよく寝た』

「識世つてのは、外見以外はほとんど人間みたいなものなんだな」

『そりゃねえ。ネムレスと過ごしたり、抜剣《ブレイド》を身につけるに当たって人の中

で過ごすことが多いから自然とそういうサイクルになったものだし』

「抜剣（ブレイド）って言えば、お前は誰に手伝ってもらったんだ？ 生きてるなら挨拶したいけど」

『はあー？ 私がネムレス以外に使われることなんてそうそうないですよー。ネムレスが使えっていうならあとでたっぷりお返しを求める代わりに渋々々々やるけど』

「悪い悪い。じゃあ喋って勝手に動く剣として動いてたのか？ よく退治されなかったな」

『そこは私の人柄ってやつよ』

「剣だろ」

『いいのいいの、抜剣はおまけなんだから。一番欲しかったのは貴方を呼び出すための召喚のツギハギが欲しかっただけだし』

召喚、という言葉に俺はふと考える。

過去でも召喚術と呼ばれるツギハギを使う者は存在した。

でも使い手は限られた、というか一人しか知らなかったし、サウザナがこうも習得に苦労したというのなら未来でも難易度は高いままなのだろう。

同時に、そいつはもういないんだと察する。生きていれば、サウザナは真つ先に教えを請うだろうから。

でも、俺も覚えることが出来たらひよつとして……

『言つとくけど、狙つて何かを呼びだそうと考えているなら無理だと思つたほうがいいわ』

内心を射抜かれ、息を止める。

『私がネムレスを呼び出せたのは、それこそ悔しすぎるけどあいつあつてこそなのよ。本当、借りるのすら億劫だったけど』

「あいつ……?」

『神劍つて呼ばれてた奴』

サウザナの不満そうな声に、思わず心臓が跳ねる。それは、今まさに俺が考えていたことを指摘されたからだ。

内心をおくびにも出さず、努めて平静そのものを装いながらサウザナに尋ねる。

「ん、ちよつと待て。あの劍の力を借りるつて、あいつ傍に居るのか?」

『違う違う、私が折れちやた時に力の残滓みたいなのが残つてたのよ。必死にそれを解読して解明して解決したつて話。素直に領けないけど、私がツギハギを覚えたのだつてその成果とも言えるし。……ネムレスこそ、あいつは持つてないの?』

「あ、ああ。る……ゲイズに突き刺したような、気はした。手元にはそういうことだろうからな。それに、俺は気づいたらサウザナに呼び出された所だったからな……」

『なら、今も境界領域に漂ってるのかもね』

「……………」

だったたら、なんとしても召喚のツギハギは覚えるべきだろう。それは、サウザナにとって絶対に必要なことだと思うから。

だが、そんな俺の決意はほかならぬサウザナによって挫かれる。

『でも、突き刺したまま境界領域に居るなら下手に探すのも厄介かもね。遺骸ごと呼んでしまいかもしれないし、下手をすればあいつが抑えてるだけでまだゲイズは生きてるかもしれない』

「———そう、か」

瞳月の明かりが、世界に満ちていく夕闇の空を見下ろす。

瞳のような形をした、太陽の光を受けて輝く瞳月と呼ばれる夜を照らす存在。そこから一滴の雫のように垂れてきた何かの形を成した怪物、今はゲイズと呼ばれるもの。

何の前触れもなく現れたそいつに世界は混乱に陥った。紆余曲折を経て退治へ赴き、今こうしてゲイズの脅威にさらされていらない世界を見ればきつと討伐は成功した、と思う。

けどサウザナの言葉が真実なら、あいつは今も境界領域で俺と同じように漂っているのではないか？ という疑問が浮かぶ。

『ま、あいつを刺したなら問題ないんじゃないの？ スペックだけは認めたくないけど三界一だろうし』

本当に悔しそうな声音を滲ませるサウザナの感情は、俺をやるせない気持ちにさせるのは十分だった。

何故なら俺は、ゲイズ討伐の折にサウザナを置いて神剣を手に取ったのだから。今まで俺の剣として共に居たサウザナからすれば、連れて行つて欲しかったに違いない。

けれどその願いは叶わない。

共に行くことを願ったサウザナを、神剣が砕いたからだ。

より正確に言えば神剣の力をサウザナに与えて強くしようとした結果、負担に耐え切れず自壊したというのが真実だ。

彼女からすれば、一合の打ち合わせすらなく敗北したに等しい。そうして折れた彼女を置いて、俺はゲイズの討伐に向かったのだ。

——サウザナを強くしようとした結果、彼女を壊しかけた罪悪感から逃げるように。『今でこそ整理はついてるけど、当時は悔しかったし嫉妬もしたし、他ならぬ自分を恨みただけどさー。振り返ってみれば当たり前だなんて思ったわけよ。私の剣としての性能なんてたかが知れてて、抜剣だってあいつの力あってこそだもん。あ、でも習ったのは基礎だけで発展は私だからね？ 勘違いしないように』



「ああ、わかつてる。サウザナは強い」

『強くなった、でね』

そこから俺達の会話が途切れる。互いに何を思っているのかはある程度把握出来るが、詳細に読み取れないので迂闊なことが言えなかった。神剣の話題は俺がサウザナを引き離れた心の弱さを浮き彫りにさせてしまうから。

彼女は五百年の時をかけてその問題を克服し、俺と再会するべく生きてきたというのに。担い手である俺がサウザナを信頼出来て居なかったのだからお笑い種だ。

それでも、漏れてしまう胸中は吐露されて言葉へと乗せられる。

「俺達には国がある。だから戻って来るまでに運営が出来る奴も必要だ」

『……それで、私は国に残った』

「そうして、俺はお前を置いてった」

『だから私はしばらく国の運営に関わった。護国の鋼、王剣と讃えられてたけど貴方達を直接知る人が少なくなるにつれて、国を任せられないって意見も多かった。国のトツプが鉄の塊つてのが、受け入れられなかったんだらうね。当時は識世も道具としての扱いが大半だったもの』

「お前には、そういう苦しみを味あわせちゃったんだよな……ごめん」

『でも、ネムレスはあの時ゲイズの討伐なんておまけで、あいつらの戻る場所を守らな

きやつて』

「あの時は生きて戻る気もあつたし、早く帰つてお前を安心させたいつて気持ちもあつた。でも、そんな耳障りの良い言葉でお前と離れたのは変わらないよ」

結果としてサウザナを五百年も置き去りにしたのだ。その事実を変えられないし、目を背けてはいけない。

『はー、気にしすぎだつてば。本人が良いつて言ってるのに、それ以上何か言うのは逆に怒るよ?』

「まだ目覚めて一週間経つてないんだ、心の整理つける時間には早いよ」

『んー、そだなー。なら、今後は私を離さないこと! 昨日とかみたいに一時的に離れるのは良いとして、一日も欠かさず私を帯びててね』

「そんな当たり前のことですか?」

『そんなのでいいんですー。感情を得たと言つても根本は剣だもの、それが一番』  
「ずっと私だけ使つて、とは言わないんだな」

『ネムレスだつて切れ味を足したタンクフルブレードとかよく使うでしょ? そこに目くら立っているみたいでなんか嫌なのよね、その言い方。それに昨日みたいに別行動する時だつてあるもの、それくらいで僻んでりしませんよー』

本当に心の余裕が違ふな。

大人になるって奴なのか……いや、五百年も過ぎればそりや良くも悪くも変化は起きる。サウザナは良い成長をしてくれたからいいが、これで恨み辛みで生き続けていたら恐ろしいものである。

まあどんなのになってもサウザナなら受け入れるけど。

『そうだ、ダルメンやアーリイはともかく、ナツキの面倒見るのはなんか理由あるの?』  
「あー?」

急な話題転換だが、一区切りもついていたので俺はそれに付き合うことにする。

『ダルメンは豊富なタンクルだけでも他と一線を画しているし、アーリイはあの年で有能な紋具職人。二人と縁を繋ぐのはわかるけど、ナツキは何かあるの? 言っちゃああれだけど、若くて才能のある子って意味ならミュンって子のほうが上だったじゃない』  
「ナツキの剣技は参考になるからな。純粋な剣の技量なら上だったろ」

『そうだけど、戦いになればそれだけじゃ』

「根本は剣なんだろ? だったら、剣の腕が上がればその分お前を上手く扱える。ナツキとの特訓はそれを向上させる良い機会なんだよ。そうじゃなくても、仲良くならない理由は無いんじゃないか?」

『んー、そういう嬉しいことなら何も言えないわね』

実際あいつの技術をサウザナで活かせばこいつもきつと喜ぶだろう。

戦闘という点で遅れを取る気は毛頭ないが、剣術という面で見れば俺より上に位置していることに違いはない。

離れた時間を埋めるように会話を続けていると、夕焼けの光が目映る。もう夕飯時のようだ。

ダルメンは来ると言っていたし、アーリイを呼びにでも行くか。

## 17. 技術の扱い

そうしてアーリーの部屋に向かつて入室すると、彼女は解読のために資料と机へ交互に目を向けて紙にペンを走らせている。……文字が読めん。

『へりーでいんぐぐ』

サウザナが何か言うと、文字の意味がわかるようになる。

どうやらツギハギで翻訳をしてくれたようで、サウザナ様々だ。

「アーリー、ちよつと良いか?」

反応はない。よほど集中しているのだろう。

ならば、と俺は資料を取り上げた。そうして始めてアーリーは顔を上げ、俺が部屋に入ってきたことに気づいた。

「ああつ、ネムレス殿。一体何をなさるので」

「呼んでも無視するからだろ」

「……そうでしたか、失敬。それで、何用でしょう?」

「そろそろ夕飯時だから呼びに来た」

「私は別に抜いても」

「じゃあナツキに直接言ってくれ」

「わかりました」

と言いながら、アーリイは机から離れる気はなく、再び資料に目を向け始めた。

どうしたものかと頭をかいていると、珍しくサウザナのほうからアーリイに話しかけた。

『アーリイ、アンネってどれくらいまでタンクル使える？ 特訓にツギハギ使うけど、ダ

ルメンを相手にするならある程度漏れも覚悟しておかないと』

「確かに、ダルメン殿ほどのタンクルならば内容次第で許容量を超えるかもしれませんが、  
ですが、街のほうでツギハギを使うのは極力避けては欲しいですが」

『街の中で戦うなんてよくあることでしょうに。大技を使うつもりはないから、そっちは安心して』

「許容量？」

「……………？ ええ。町長の所でも少し申しましたが、タンクルの一日の使用量が各家庭や建物ごとに決められています。使用したタンクルを数値化出来る紋具なども設置し、それを超えたら罰金やタンクルの使用制限といったものを敷いています。紋具を大量に置かれている場所はその分、お金を多く取られますね」

『その分のお金は街の維持費、リアクターの管理費として使われるの。もちろん、アー

リイのお給金も含まれているだろうけどね』

便利になった分面倒なこともあるんだな。

強くなるためには良い環境が必要なことに変わりはないが、上質なリアクターやお金に恵まれないければ埋もれた才能が開花することも出来ないとは。

加えてリアクターのない土地でそんな原石が居たらスピリット・カウンターの発生率が高まり、それによって死亡ないし排斥される、といった可能性も今は多そうだな。

世界融合による、全てがご破産になる終わりの代償と思えば少ないと思うべきだろう。

「剣都を除けば、リアクターのある場所ならどこでも聞く話かと思いましたが……ネムレス殿の所にはそういうのはなかったのですか？」

「俺はリアクターと無縁の場所で暮らしてたからな」

「よく過ごしていましたね」

「サウザナのおかげさ」

「なるほど、納得です」

困った時のサウザナである。

「と言つても、街の皆さんは基本的に過ごしていれば上限の半分も行きません。例えば家の中を常に光で照らすほどのタンクルや調理器具に使う紋具を一日中使い続けたとし

ても何の問題ありません。なにせ、私の屋敷が基準ですから」

「それなのに使用量を決めてるのか」

「念のためとは良い言葉と思いませんか。私のように仕事でタンクルを使う場所にも余裕を持たせておりますし、リアクターの機能拡張をすることでスピリット・カウンターの危惧はゼロに等しいです。……外からの乱入がなければ、ですが」

「ミュン達のことか」

「それ以外もですがね。街でツギハギを使う争い事したら犯罪ですし」

「その節はどうも……」

「今にして言いますが、普通の人ならば私は貴方がたを逮捕していたでしょう。で予想通り貴方達は普通ではなかった。なので、もみ消しをしてでもあの場は治めたかったですよ。本命はダルメン殿でしたが、ネムレス殿という大穴が出てきたのは嬉しい誤算です」

「どうやらあの一連の流れはアーリイからすれば特別な処置だったらしい。」

「まあ普通に考えて店でツギハギを使って暴れて何もなし、というのも変な話だ。」

「むしろここは、所見で俺達の異質さを見抜いたアーリイを褒めるべきだろう。」

「旅人が寄ったとしてもスピリット・カウンターの警戒でやはり盛大にタンクルを使うことも少ない。ですが、あの方ほどのタンクルがひとたび使われると怖いものがありま



すね。いの一番に懸念すべき事項であるのに、失念してしまいました」

「アーリイはそつちに夢中だったからな」

資料のメモを手に取り、視線を向ける。

サウザナの翻訳によるとあの洞窟から持ち込んだ資料は、ツギハギではなく物からも〈素材〉を抽出する技術に関連したものらしい。

簡潔に言えば、石から〈素材〉をもらって使えば石と同じ硬さのものが出来上がる、という寸法だ。

そりゃあ世界を一転させる技術になるな……

「しかし、街のリアクターを預かる者としては……」

「知ってるのは俺達だけだし、事故が起きてないなら今後気をつければいいさ。それで、資料はどこまで解明した？」

「二通りは。与えるのではなく引き出すタイプなので、一種の自己強化の類ですな。数日のうちに目処を立たせる予定ですので、ぜひ検証にお付き合いたいと思います」

「アーリイが使うんだろ？ 俺に言う必要なんてないだろ」

「ネムレス殿とサウザナ殿がいなければ、手に入らなかったものではありませんか」

「共用なんて考えてないさ。そもそもアーリイがあそこを調べてなかったら知りもしなかった。三年前から調べてるって言うなら、それを手に入れたのは紛れも無くアーリイ

の地道な努力が結んだ結果だよ」

だから存分に使うといい、と言ってやる。

(いいよな、サウザナ?)

(私のもでもないから別にいいんじゃない? むしろこれは後期開発の類かしら。元を真似て復元したんでしようね)

(あー、それで見覚えはないのか)

資料を眺めていると、そのやり方は俺の知っているものと異なっている。

俺が知るの強い力を取り込んで、状況に応じて引き出す剣獣タイプだ。よそから力を持つてくる、という時点で俺達のものとは異なる。

でも実現すれば街の住人ですら兵と化す。もちろん才能や経験に大きく左右はされるが、戦場は大きく変化することだろう。

「でも、ある程度試行錯誤は必要だろうな。あてはあるのか?」

「ネムレス殿は……」

「構わんが、いつもってわけには行かないぞ。ナツキやダルメンに使う時間もあるしな」

「そうおっしゃると思いましたが、彼らを使います」

「……………案外えげつないのな」

彼ら——つまりミュン達の事だと察する。捕虜ではあるがある程度人道的に扱って

欲しいものだが。

「私を何だと思っているのですか。多少の協力はしてもらいますが、彼らにとつても必要なことですよ。何せ、ベルソーア殿のほうは体の中にちよつとしたものが仕込まれておりますので」

「ちよつとしたもの?」

「はい。どうやら彼の中には鉄海《マシン》混じりの紋具が仕掛けられているようです」  
またわからない単語が出てきたな。

そんな時は頼れるサウザンさんである。

(今は適当に答えといて。またいずれ教えるから)

了解と念じながら、俺はさも知っていた当然と思えるように振る舞いながらアーリイに応じる。

「混じり?」

「簡単に言えば爆弾です。威力は発言を控えさせていただきますが、アンネの街から人を追い出すには十分なものとなりましょう」

「なるほど。あの時の『荷物』はそういうことだったのか」

ベルソーアが実力的にミュンの傍に居るのがおかしいと思つたが、どうも自爆要員として期待されていたようだ。速攻で気絶させておいて正解だったな。

そうになると、一晚経つても使っていないのを見ると、色々腑に落ちないこともある。「あいつ、素直に自爆する性格じゃないだろ。それがわからないはずないだろうし、遠隔操作されたりしないのか?」

「私もその可能性を考えておりました。彼らを監視する存在が居るのなら、例えば地下で爆発されても、街に被害が行かないようにしなければなりませんので」

淡々と爆撃を受けた時に起こる被害について語るアーリイ。

逆に言えば、アーリイは威力の規模がわからない爆弾を起動されても無事で居られる自信があるのだろう。ツギハギか紋具かはわからないが、彼女も彼女で色々多くの秘密を持っていてそうだ。

「リアクターの制限をしたのも?」

「彼の中にある鉄海を外すためですね」

「医術も嗜んでいるのか、すごいな」

『ハイスペックお子様だねー。今後のためにもツバつけときなさいよ?』

「そーですねー」

「お褒めの言葉は嬉しいですが、流石に人の体は専門外です。ですがせつかくなので資料にあった技術を使おうと思っております。あれさえあれば、苦労はすると思いますが被害なく鉄海を取り出すことも可能でしょう」

「じゃあ、二人のことはアーリイに任せておいていいわけか」

「はい。おそらくですが、ベルソーア殿のことをなんとかすればミュン殿もこちらに協力的になってくれるのでは、と考えております。ですので、ネムレス殿が懸念すべきはそれ以外の動きでありましょう」

それ以外。

つまり、ミュン達を監視しているという背後の存在か。

「この資料がどこまで重要視されているかによるな。剣都でも見ない技術なんだろう？」

「世間一般には少なくとも広まっております。これを発表したら一躍時の人になるのは違うない」

「なりたい？」

「私自身はあまり。ですが、そうは言えない理由があります」

「内情は知らんけど、つまりこの技術を広めるってことでいいんだな」

「話が早いのは嬉しいですが、もう少し会話の機微というものが……」

「ナツキならともかくアーリイもか？」

「ナツキ殿にしているなら、私にもそうしてください」

心なし怒っているようなアーリイ。大人びた、というか小さな大人というつもりで接していたがこういう癩癩を見るとやはり子供なんだなあと口が緩む。

アーリイが望むのなら、応えとしますか。

『ナツキといい、年下趣味だったの？ だから……』

（それ以上言ったら今日は無視する）

『なんでもないです』

今は重要そうな話してるんだから、しばらく黙っていてくれ。

「小さな賢者、だと不足なのか？」

「……私がアンネの街で行ったのは街の生活を豊かにはしましたが、求めるものとは異なります。そのため、私は独自に研究をしながら藁をもつかむ思いであの洞窟を調べていたのです」

「その藁がロープどころか頑丈なワイヤーだったわけだ」

「道具というより、人の良い方が直接飛び込んで来てくれたのですがね」

あつはつは。ナツキは人が良いからな。

「広める上でのデメリットがあるとすれば、剣の一族に目を付けられるってくらいだが」

「むしろ、それを望んでおりますね」

「あやかりたいものでもあるのか？」

「ごくごく、個人的な事です」

そう言いながら目を伏せるアーリイ。その表情は子供が見せるにはありえない、老人

を感じさせるような長年の憂いを秘めていた。

「媚を売るとか言っておいて、そこは俺を頼らないのか？」

「こればかりは、私自身がしなければならぬこと。少なくとも、そう思っております」

「利用するだけ利用してポイ？」

「ネムレス殿の目には、私はそんな風に見えるのですか？」

「悪い悪い、アーリイみたいな子を見るとからかいたくなつて」

「意地悪なお人……」

呆れるような咎めるような、色んな感情を含めたジト目でアーリイは俺を見上げる。  
普段落ち着いている奴ほど慌てさせたいと思うのは俺だけだろうか。

でも劍の一族に会いたいとは。アーリイには何か明確な目的がありそうだ。

（サウザナ、ひよつとしたらお前が知ってる奴かもしれないし、色々聞いてみるか？）

『んー……今をそれぞれに過ごしている子達に変に干渉するのはちよつと。ネムレスだつて、建国したからつて劍都に行つてでかい顔したいわけじゃないでしょう？ 距離感つてのは大事よ』

（そう言われると確かに下手に顔出したくないな）

どんな肩書きがあつても自分は過去の人間、現代の視点から見れば死者のようなものだ。国レベルでの大きな干渉は控えるべきである。

アーリイに限って言えば個人の願望なので、サウザナが剣の一族に関わっていると言えど語ってくれるかもしれないが……当の本剣が不干涉を貫いているのなら俺もそれに習うべきだ。

それに、今しがたアーリイはダルメンと違うから回りくどくしてくれと言われたばかりだ。

別に教えない理由はないが、教える理由もない。本人も自分で頑張ると言っているし、ならばここは大人しく見守ってやるのが良い大人というやつだろう。

最初から正解を提示してしまえば、答えを求め考える力が発達しないしな。

決してバレた時の姿を想像して楽しんでるわけではない。

「で、広めるアテはあるのか？ その資料の効果なら、荒事に関して使うのが一番良い使い方だろうが」

「居るではありませんか。格好の相手が。それはネムレス殿にも説明しましたよ？」

「……………お前、まさか」

脳裏によぎるのは三角巾娘ことミュン達の姿。その背景。

「お互いにメリットがあることです」

「街に被害を出したらどうするんだ」

「させませんよ。私だって自分の欲望のために街の人々を巻き込む真似は致しません」



「ほー。つまり、きちんとまっとうできる手段があると」

「当然です。というか、そんなことしたらネムレス殿に見放されますので」  
に？

そんなことしたら当然協力する気もなくすが、俺よりもダルメンのほうがやばくないか？

エインのこと気に入ってるようだし、彼女に害が及ぶならあいつ怒るだろうに。

「自分で言うのもあれだけど、別に俺が居なくてもいいだろ」

「おや、お気づきではありませんか？ 貴方を引き止めればサウザン殿やナツキ殿、ダルメン殿すらここに残るのですよ？ お二人は共に才気溢れた方々であり、サウザン殿は世界融合以前より生きる識世とのこと。どれも心強いです」

「うーん、それは過大評価って気がするぞ。てか、やっぱり利用する気満々じゃないか」  
「考え過ぎです。相応の見返りは考えておりますよ」

「例えば？」

「少なくとも、ネムレス殿の必要とする物を作ったり揃えるくらいには。それが何なのかはわかりませんが、ネムレス殿のあらゆる要望に私はこの身この術の全てをかけて全力で応えると約束します」

現時点での技術、将来性を対価と来たか。やっぱりサウザンの力はそれだけ魅力的と

いうことだろう。

『受けない理由あるの？ 少なくとも、今後の人脈を築くチャンスじゃない』

(んー、まあそうなんだけど。……サウザナは良いのか？ 目的は俺じゃなくてお前だぞ)

『私はネムレスの剣だもの、貴方の判断に従うわ。仮に何か秘め事があつたとしても、私がいるから安心なさい。どんなことがあつても私がなんとかしてあげる』

なんとも頼もしい。が、それはそれ。

アーリイがただの紋具職人であるならこの場で受けたし、能力の有無に関わらずこの子は力を貸してやりたいと感じる。

でもリアクターの開発者といえ、未だに関わっているのならアーリイは一つの街を預かる責任者。

ならば、その責任を押しして私欲を通せるほどかどうかをまず判断する必要がある。

つまりやることやっていれば問題ない、というわけだ。

やることがやれなければ、悪いがリアクター整備のほうに専念してもらおうほうがいい。

「悪いが今は答えられん。今回の件が終わつたら言うよ」

「畏まりました。私の願いが叶えば嬉しいですが、そうでなくとも良縁となれるよう努

めましょう。最も、貴方達なら、私の助けなどいららない気もしますが……」

「手伝って欲しいのかそうじゃないのかどっちだよ」

「すみません。あまりにも順調だったもので」

「そこまで手詰まりだったのか？」

「はい。あの先に何かあることはわかっていますが、どうしても私にそれを解き明かすことが出来ませんでした。本に囲まれているのに、文字がわからないという有様です」

アーリイの目線で見れば、俺たちと知り合った途端に行き詰まった研究が進み発展を迎えたばかりかさらに協力に応じてくれたわけだ。

つまり、考えが上手く行き過ぎて不安になっているのか。

「そんなこと気にするな。その辺は子供っぽく楽観的に良いことだけ考えてればいいんだよ。あの資料だって自分のしたいことに役立つ何かなんだろう？ 何が不安だっけ？ 言うんだ？」

「……ネムレス殿のことではなく、何故この資料があ程度の扉の先にあつたのか気になるのです」

返ってきた返事は、俺の予想とは違っていた。

「扉って言っても隠し扉自体は解除しただろ」

「言葉が足りませんでした。隠し扉の次にあったタンクルプレート製の扉のことです。普通、あれだけの構成を使って隠蔽するのならもう少し強固な、それこそギガンティアレベルの物理的な妨害もあつて然るべきではありませんか？」

「ナツキの剣術が上回っていただけじゃ？」

「ナツキ殿を否定するわけではありませんが、あの扉を作るタンクルプレートは確かに強固なもの。ですが、あのくらいで切り開けるのであれば、私だけでも解錠できました。でもそうなると、あまりにも最初だけが難解なのです」

ナツキが見せた斬鉄をあのくらいと言いつ切るか。

割と自信家なアーリーの発言に苦笑しつつ、考えすぎじゃないのかと思いつつながらあるいは、と他の予想を伝える。

「剣の一族からすればどうでもいいレベルの資料だったか、己の技術に絶対的な自信があつたのか、だな。後者なら入口隠した奴はかなりの自信家で慢心持ちだ。自分のツギハギが解除されるはずがない、つてな」

「価値を感じていない、ですか」

アーリーはどうやら前者が気になる様子。

今の世界において未知の技術であるそれを、価値なしと判断されたらそう考えるのは当然か。

「それか、隠し扉のあれが入口で、二つ目のあれは単なるドアだったんだろ。家の玄関に鍵はかけても、部屋のドアに施錠なんてしないしな」

「そう言われてみれば……つまり、あそこは小さな家である、と?」

「さて。どちらにせよ俺達が出るのは想像でしかないさ。……で、一応聞かせてもらおうか? お前が今回の件でどんな計画を考えているのか」

「ええ。それはもちろん」

そうして語られるアーリイの考えに、俺は素直に驚き目を見開いた。

聞いた話が本当なら、この街においてアーリイが大きな権力を持つことは当然であるし、例えば彼らが軍勢を率いて来たとしても迎撃が可能だと予測出来るからだ。

が、話だけでは納得いかないのは当然のこと。現物を見せてもらおうべく、アーリイは外へ参りますと行って部屋を出ていく。

その小さな背を追いながら、俺はアーリイの語る切り札の元へと足を運んでいった。

## 18. ダルメンの秘密

ナツキの美味しい夕飯を食べた後、俺はダルメンと共にアーリイから用意された最上階の客室へとやってきていた。

お偉いさんをもてなす時に使う部屋、このことで俺が借りている部屋と比べると一段も二段も質が違った。

スイートルームだねーとサウザナがよくわからないことを言っているが、豪華なことに変わりはないようだ。

「それでダルメン、話ってなんだ？」

「かなり大事な話でね。だから——」

ダルメンの提案により、俺達は風呂へと入浴していた。

露天風呂とも言わなければならない場所に位置したこの風呂場は、夜なことも合わせて瞳月を見ながら楽しめる風情のあるものとなっている。

だがダルメンは誰にも秘密にしたい、ということ部屋に備え付けられたスイッチを押して露天風呂にも関わらず屋根を閉じてしまった。

そのことを残念に思う気持ちをお湯で洗い流しながら、風呂の中でも樽を被るダルメ

ンに改めて向き直る。

頭は相変わらず樽でわからないが、首から下は鍛えられた肉厚の筋肉に覆われた体だ。

樽のようだというのは簡単だが、その全てが一寸の無駄のないもので覆われているのを見ると、どれだけのパワーがその体躯に込められているのやら。

俺の体も鍛えてないわけではないので、だらしないうわけではない。でも、タオルも身につけずに風呂に入る豪快さは同じ男として精神的に負けた気分にはなる。

性格も悪くなく、人付き合いも良い。顔が樽なのを気にしないなら、さぞかしモテることだろう。

でもこいつ……とお湯越しにダルメンの下部を見てみると、それを無視して話を切り出してくる。

「実は、わたしの秘密を明かしたい」

……こつん、と風呂桶が当たる。

それを浴槽とした、頭にタオルを巻いたユカリスが俺を不思議そうな目で見上げている。

俺は同じくお湯に浸かるサウザナを見る。こちらのお話を聞いているのかいないのか、リラックスした雰囲気だけが伝わってきた。

「秘密って?」

「簡単だよ、わたしの姿を見てもらいたい」

少しだけ言葉を失うが、遅れて意味を噛みしめる。

つまり、樽を脱いで顔を見せてくれるってことか。

「気になってたから見たいと言えば見たいけど、どうして今になって?」

「捜し物をする上で、ここは色々と多くの縁が集いそうだからさ。これからお世話になる人に、隠し事というのはあまりよくないしね」

「それは間違ってるいな。アーリイはこれから手広くやるようだし、剣の一族にも接点作ろうとしてるみたいだ。けど、暫定的だけど剣都を敵に回す可能性もあるぞ?」

「それは問題ない。むしろ、相手が大きければ捜し物も捗る。とはいえわたし一人では難しいだろうから、協力を求めたいんだ」

「……言っちゃあれだが、それを見せるだけで手伝うと思ってるのか? 無償でするなんて思っちゃいけないだろう?」

お互いが相応にメリットを持っていれば、対価が一方的なものにならず気兼ねがなくなるからだ。

捜し物が何かは知らないが、旅をしていたというダルメンが見つけれられないというも



のを、素顔を見せるだけで手伝ってくれる、なんて思っているわけではないはずだ。

本当に素顔を見せるだけで手伝ってくれる、と考えているのなら多少話をする必要がある。

実際は素顔なんて見せなくても、俺のレベルアップのためにツギハギ面での手合わせを了承してくれたら手伝うが、どうしてダルメンがそう思ったのかが気になって尋ねてみる。

「ん？ 手合わせ以外にも何か必要だったかい。アクターの利用に關しても特に制限する気はないが……わたしの資産も欲しいのかね？」

「ん？」

「ん？」

何か、噛み合っていない気がする。

「えーっと、ダルメンに手合わせのことって言ったっけ」

「サウザナ様から聞いたよ。ナツキ君からは剣術を取り入れ、わたしからはツギハギのリハビリに使いたいんだろう？ わたしはそれに了承し、君に付いていく対価とした。

素顔を見せるのは、自己紹介を兼ねたまでだよ」

「おい、どういふことだよサウザナ」

『んー？』

ダルメンと話をしていたなんて一言の連絡もなかった我が愛剣は、お湯を裂きながらこちらへ寄ってくる。

「お前いつの間にダルメンと話つけてたんだ?」

『ネムレスがレベルアップのためにナツキ達とつるむつて言った時。私は手回ししただけよう。だって、別に理由付けなんてしなくても引き受けたでしよう?』

「まあ、そうだけど」

「なんだ、わたしは試されていたのか」

「協力するっていうなら、お互いにメリツトあるほうがずっと健全だろ」

「違う、と穏やかに告げるダルメン。」

会話の先手を取られてしまったのが気恥ずかしくなり、俺は動揺を隠すように催促する。

「それより、ダルメンが見せたいものつてのを見せてくれよ」

「では、少し失礼させてもらおうでしょう」

そう言つて、ダルメンは俺の予想通り手を樽に——つけず、何故か腰のほうへ添える。そしておもむろに掴んだ腰ごと、上半身（・・・）を引き抜いた。

「おおああああああああああああああああ!!」

何の前フリだと思つて眺めていた俺は、度肝を抜かれて絶叫した。

目の前で座っていたはずのダルメンの体が、上半身と下半身で分割されたのだ。まるで、ダルメンそのものが蓋だったかのように――

『へえ』

相変わらずのんきなサウザナの声。

長い髪をタオルで包んだユカリスは、ぼーっとそれを、ダルメンの中身（・・・）を見ている。

「お、おま、おあ、あ、ああ、あー？」

「人前で見せるのは初めてだが、これがわたしの隠し事だよ」

ダルメンの声は耳に入っていたが、頭に残らない。ただ口を呆けて開閉を繰り返していた。

それを察したのか察していないのか、上半身だけのダルメンは箱の中身を取り出すかのように、自分の中に入っていったそれを二の句を継げない俺に手渡してくる。

それは、俺と同年代くらいの女の子だった。

腰まで届く薄紫の長い髪は手入れが届いているのか、肌の柔らかさと共にサラサラな感触を手の中に残す。

風呂に入るために着替えさせたのか、透度の低い湯浴み着を着込んだ彼女は瞳を閉じたまま俺の手に抱かれている。

湯浴み着を押し上げる胸は規則正しく上下……して、いなかった。

頭はともかく体は落ち着いていたのか、試しに左手で頭を支えようとするが、手に加わるはずの重さを感じない。異様なまでの軽さだ。

口元に右手を近づける。立てた指を唇に添えてみたものの、人間ならば聞こえてくるはずの息遣いは微塵も感じなかった。

「これ、死体、か？」

違う、と口にしておきながら否定する。少しずつ、理性が戻ってきていた。

重さのない少女の体はお湯の熱さではなく、確かな人の温もりを感じる。

念のために胸に手を当ててみる。心臓は、動いていなかった。

最後に使うのは、ツギハギによる〈感知〉。瞳から得る肉体情報からタンクルによる情報の捜査へと切り替えた結果、俺は大きく目を見開いた。

彼女は、まるでツギハギだった。

少女を構成全てが、タンクルから出来ている。単純に〈具現化〉の〈素材〉を使ったものではない、もつと細かで微小な、砂粒よりも小さいのではないかと思える情報が詰まった、ツギハギの体。

それが、俺の手に抱えられた少女だった。

言葉を失う俺の肩を、ダルメンの大きな手が叩く。

そこでようやく俺は我に返った。が、三日とない付き合いながら上半身と下半身が別れたダルメンを見るのは視覚的に辛かった。

「わたしは元々ただの樽でね。けれど三年ほど前かな、突如その子がわたしに詰められて、海に放出された」

「……色々聞きたいことがあるけど、ダルメンは識世だったのか」

「気づかれていないのなら、わたしも中々人間に慣れたものだね。けれど今、こうしてネムレス君と話しているわたしは、識世として目覚めた自分なのか、その子の性格から来るものなのか、いまいちわからぬ」

人身売買による密輸……それなら海に流す理由は……事故？ 死体遺棄に利用され、海に放流された、という考えもある。

物騒な考えが多いのは、少女の状態を例えるなら死体が一番近かったからだ。

けど、この子は生きているわけではないが、死んでもいない。

その身に宿した膨大なタンクルと、幾つも散りばめられた〈素材〉がそういう『ツギハギ』だと、俺に訴えている。

「〈幻獣〉……」

「そうだね、わたしとその子は剣獣のようなものだ。樽の中に封じられた〈幻獣〉がこの子とも言い換えられる」

「じゃあこの子も?」

「わからない。だから、それを求めるためにこの子を知る者を探している」

「確かに、それは難しい」

どう答えたものかと思案していると、上半身だけが湯に浮かぶ、子供が見たら大泣きしそうなダルメンの腕が少女に伸びる。その手には、白く泡立つ何か——液状石鹼を浸したタオルが握られている。

「あーダルメン、この子を洗うのか?」

「? そりゃあそうさ。人間ではないかもしれないが、外見が外見だし綺麗にしておくのは紳士の嗜みだろう? 今までだってそうしてきた」

「一人ならともかく、それを客観的に見る俺の気持ちも知って欲しいなあ」

『だからって、手を出す気ならともかくその気のない女の子の裸を見るのは駄目よ』

「そもそも出す気はねえよ!?!…:サウザナ、ユカリス、お願い出来るか? ダルメン、すまんが二人に洗わせてもらっていいかな」

「わたしは彼女が綺麗になるなら構わないよ。お二人とも、よろしくお願いします」

『おーけいー』

特にユカリスにわかるように、俺はタオルで自分の体を拭く仕事をしてから少女を示す。同じことをして欲しい、というジェスチャーだ。

風呂桶から立ち上がり、タオルで体を隠すユカリスも任せて！　と言わんばかりに胸を軽く叩く。

元が草花なのに人語を理解するこの子も謎だが、言葉でなく感情で理解してくれていると強引に自分を納得させる。

サウザナがツギハギで少女の体を固定し、ユカリスが少しづつ体を洗っていく。重さはないに等しいので、小さな小さなユカリスの負担も少ないだろう。

「あとダルメン、悪いけど体を元に戻してくれ。いくら識世と言っても人の外見だから、胴体を両断されてるみたいで気にするなっけがが無理になる」

「心得た。サウザナ様が居るのに、人の識世に出会うのは初めてかい？」

上半身と下半身を元に戻りながら、以外そうな声でダルマンは言う。

「ユカリスが人型って言えば人型だろうけど、ダルメンのそれはちよつとインパクトでかすぎる」

「本体が樽だからね、この体は化粧のようなものと思えばいい」

「随分な厚化粧だ」

「一応、彼女を覆い隠せる程度の肉体を選んだつもりだよ」

「頭を樽にしなきゃ駄目なんですかねえ」

思わず敬語で言ってしまった。

あの子を隠す収納を目的とした体だけなら、頭をアレにする必要はないだろうに。

「識世になる時、外見を選べるのか？」

「そうだね、基本的に人間の外見が生まれで決まるように識世も例に漏れないのだが、わたしはこの少女の影響もあって多少の選択権があつたのさ。女性の外見を選ぶことも出来たが、この子を丸ごと覆う肉体なら男性のほうが確だった」

識世から人型になるさいのプロセスが気にはなるが、ツギハギで変身しているのかな。

そう言えばサウザナはダルメンが常時アクターを使っていると聞いていたが、この外見こそ彼のアクターということだろう。

とすれば、やはり本体はあの子なんだろうか？

「つと、話が流れたな。それでダルメンはその子の身元を探す旅をしていたってことだけど……サウザナ、その子に覚えはあるか？」

『んー、流石にないなあ。ただ、その子の本体はここじゃない別にあるわね。今ネムレス達が見えている女の子は、いわば実体を持つ幻よ』

「実体を持つ……」

「幻？」

サウザナの考察に、その意味を考える。



「この子が幻？ どこかから投影されてここに映っているってことか？」

『ぎっくばらんに言っちゃえば、肉体と精神が離れてる状態。この子にとつての肉体と  
言うべき存在が世界のどこかにいるはずよ。ただ、この子の構成に手が入ってるし、こ  
れを弄れるとなるとかなり大きい組織が関わってるわね。ルオ、五領国、レビーハ、ス  
メイキュード。それか剣の一族。あるいはそれ以外』

「疑い出すとキリがないぞ」

「いえ、助かりました。そういう権力に関係する場所であるのなら、まだ探りようはあり  
ます。……残念ながらスピリット・カウンターという脅威があつてもなお、ツギハギに  
よる人体実験は多い。だが実体を持った幻、というものなら色々と探れましょう」

『あとで色々追記してまとめて渡すわね』

「助かります」

「じゃあダルメンはそれを探るために、アンネから出ていくのか？」

「そう言うと、じつとダルメンが俺を見つめてくる。」

表情なんてわかるはずもないが、どことなく拗ねているような、寂しそうな……俺を  
非難しているようにも思えた。

「そう邪険にしないでくれ、これだけの情報をもらったのならわたしも君についていく  
よ」

「邪険じゃなくて、優先順位の問題だろ」

「そこは大丈夫、わたしにはツテもあるしね。まずはそちらで探り、見つかるまではネムレス君に協力するつもりだよ」

「ダルメンがいつて言うなら構わないけど。俺も助かるしな。……でもダルメンがサウザナに様をつけたりどこか上の相手に接してるようだったのは、識世だったからなのか」

「ああ。サウザナ様は隠居しているつもりだが、識世の中では彼女は有名だからね。同じ識世なら、すぐわかる」

「そりゃ鼻が高い」

『おう、ずがたかーい』

「はいはい、すごいすごい。話に通っていたのか、そういうことか。いつから事情を聞いててんだ？」

『最初』

『は？』

『最初にダルメンを抑えた時に、全部聞いた。あとはタイミングだけだったってわけ。だってネムレス、あの時はアーリーの件があったし、落ち着いてから言おうと思ってたのよ』

「そのための今というわけさ。しかし、こんなにすぐ進展があるとは思わなかった。彼女がツギハギのようなもの、ということはおわたしもわかったのだが、それがどういふものなのかがさっぱりでね」

「進展があつたなら何よりだ」

洗淨が終わつたらしく、ユカリスが頭に手を置きながら息をつく。

お疲れ様の意味を込めてほつぺを撫でてやりながら、俺は少女の名前を尋ねた。

「面白いや、その子に名前はあるのか？」

「ないよ。勝手に名付けるのも悪いしね」

「つけてあげたほうがいいと思うけどな」

『うんうん。誰かに呼ばれるのはいい事』

ダルメンは元が樽だったせいか、そこまで名前に拘つてはいないようだ。

「でも、樽を樽と表現出来るのは名前あつてのことだ。ダルメンもダルメンって名前のおかげで、他と区別が出来てるだろ？ だからこの子にもちゃんとした名前があつたほうがいいと思う」

「ふーむ、そう言われてみれば。今まで誰にも話したことがなかったし、やはり相談相手が居るといふのは恵まれたことだ」

改めて考えてみるよ、と綺麗になつた少女を担ぎ、再び分割した自分の中に入れるダ

ルメン。

中身はちよつと子供には見せられない光景が詰まっているのではと思つたが、彼の体の中は白だつた。本来見えるべきはずの臓器や骨もなく、本当にただ人間の外見を取つているだけなのだとよくわかる。

聞くべきことも聞いた俺達は、そのままアンネのお湯を堪能する。

酒は流石に持ち込まなかつたが、隠す必要がなくなつたことで開かれた露天風呂から見える絶景にしばし心身ともに清められていく。

十分に体も温まり、風呂から出た先で着替えながら、俺は先に出ていくダルメンの背中に声をかけた。

「ダルメン、今後誰かと風呂に入るなら、下をもう少し凝つておいたほうがいいぞ」  
人間の見かけを模倣して作つた故に、ダルメンのダルメンが白いことをぼかして伝える。

健全な大人か青少年でもあの白さは流石にね。

首を傾げるダルメンとユカリスをよそに、サウザナから頭を剣の腹で叩かれる。

だつてタオル巻かないならその辺の配慮も痛い！連続は痛い！

## 19. きな臭い話

『いやー掘り出し物だよ掘り出し物！　アーリイもダルメンも掘り出し物！』  
「人をモノ扱いするなつての」

一夜明けても高いテンションを維持するサウザナに苦言しながら、備え付けのタオルを手に取る。

洗面台にある紋具を使えば水やお湯を自由に使えるそうだが、ツギハギ制御の一環として自分でそれを用意する。

小さなタオルを手に〈水〉に〈熱〉を与えるだけだが、ユカリスがびつくりしない程度に抑えるのも忘れない。

媚を売る——というにはお粗末だったが——アーリイを真似て世話を焼く面も見せたことのあるユカリスだが、朝はその限りではないようだ。

暖かなタオルに包まれてほっこりしているユカリスの顔を満足気に眺めながら、俺は昨日の光景を思い返す。

アーリイが見せてくれた切り札は予想以上のものだった。  
防衛という意味なら、これ以上ないというくらい最適なものだろう。

しいて言えば火力が不足しているくらいだが、その辺りは発掘した資料次第でなんともなる。

ダルメンが隠していた秘密も、それに値するものだった。

ツギハギで出来た人間……どこに出してもどんな意味でも注目を集めそうなものだ。

最初の出会いのせいでバレたといえ、この調子で彼女に対して良い意味で興味を持たない相手を探すのもまた大事になってくるだろう。

そんなことを考えながら朝の支度を整え、目が覚めたユカリスとサウザナを連れて部屋を出る。

朝食を取るべく食堂へ向かうその途中、食事を乗せたトレイを持ったナツキとぼったり会う。

柔らかなそうなパンに、湯気を立てる野菜入りスープの匂いが鼻をくすぐる。どうやら地下の面々への朝食らしい。……あの樽被った奴らって飯食べられるのかな。

「わざわざ朝食作ってきたのか？ 面倒見良いな」

「捕虜だからってぞんざいなものを渡すのも。作れる時は作っておかないと、腕が鈍りますし」

朝風呂にでも入ったのか、隣を歩くナツキからは料理とは違う良い匂いが漂ってくる。濡羽色の髪のが波打ち、歩く動きに沿って揺れる動きはなんとなく目を奪う。

流石に朝から帯剣してはいないが、薄手の白いシャツとショートパンツ姿のナツキは、年齢不相応の発育もあいまって健康的な色気を醸し出している。

今も将来もその気になれば男に困ることはなさそうだが、優秀らしいお爺ちゃんつ子のナツキの基準は高そうだ。

『若い子は足を出すわねー』

(なんか年寄りの台詞だぞ)

『私は相当年寄りよ』

(そっぴやそっぴや)

おっと、ぶしつけに視線を送るのはナツキに悪いから控えておかないと。

「一ついいか？」

「別に用意してあるから我慢してください」

話しながらパンを一つつまみ食いしようとするが、すげなく嗜められた。

確かに少しの我慢かもしれないが、目の前に美味しそうな食事があるのに食べられないのはなかなか辛い。だからユカリス、その手を引つ込めなさい。

こっそりナツキの反対側に移動して朝食に手をつけようとしていたユカリスをつまみ、肩の上に乗せた。ユカリスは不満顔だが、一緒に我慢しようなどと自制させる。

「お二人の分もちやんと用意してますので、そちらを食べてくださいよ」

「そうしとこう。それ、ミュン達に届けるなら俺もついていいか？」

なんとなく、くらしいの気持ちだったのだが、ナツキは何故か少しだけ目を細めた。気に障ることもしたか？

「……………名前聞けたんですか？ 私が聞いても言ってくれなかったのに」

「そつちか。それはサウザナのおかげでな」

「色々謎ですね。あそこまで強い識世、そうそう見ませんよ」

「そうなのか？」

『そうなのよ』

(お前じゃない)

ちようどいい、サウザナ視点ではなく世界を旅したというナツキ目線からの識世について色々聞いてみよう。

「俺はサウザナとユカリスしか知らないけど、他の識世ってどうなのなんだ？ こんな風に喋ったり、感情表現するんじゃないのか？」

流石にダルメンのことは、彼自身がナツキに言うまで俺が暴露するわけにはいきまない。

「いやー、流石にこの二人は珍しいと思いますよ？」

「ほー。じゃあ喋ることは出来るのか」



「それなりの年齢を生きていけば自然と成る、つてのはおじいちゃん言葉でした。でも、サウザナさんはまるで人間みたいだし元と違う形の識世を見たのはユカリスが始めてです。その子、何かの花なんですよね？」

「ああ。ここから……結構距離はあるけど、そこに生えてた花から生まれた奴らしい。俺の会う奴に識世が多いけど、そんなにありふれてるのか？」

「識世候補ならそこいらに居ますよ？ 私が調理に使っているキッチンだったり、湯船を満たすために使っている紋具……言っちゃえばあれも識世になりかけですし」

「マジか！……ナツキ、識世に見られてるのに風呂入って平気なのか？」

「ネムレスさんは石に欲情しますか？」

「はあ？ そんな奇癖持ってないつての」

「それと同じですよ。識世が人にそういう感情を持つことはないそうなので」

『ええー？ ほんとにー？』

ほんとにー。

「識世以外には興味ないんですか？ 識世しか知らないなら、アイゼンダイトとか見てみたいって思ったりするのが普通なのに」

「アイゼンダイト？」

「……ご存知ない？」

「ああ。聞いたことないな」

そもそも識世を知ったのが数日前だし、人間以外の種族が他にもいるということに驚きだ。世界は本当に色々変わったんだな。

怪訝そうな目で見ていたが、良い子のナツキはそれでもちやんと説明をしてくれる。

「あの国の人達は外に出ると肌を隠す人もいるいから珍しいから、なくはないのかな」

「それよりアイゼンダイトってなんだ？」

「あ、ごめんなさい。アイゼンダイトっていうのは生まれた時から体の一部に金属の肌を持った特殊な人種なんです」

生まれた時から体の一部が金属？

そりやまた面妖……って言うത്そいつらに失礼か。

驚きに目を瞬かせていると、疑問を感じ取ったのはナツキが補足する。

「しつくり来ませんか？ 最初におじいちゃんから聞いた時は私も驚いたけど、話してみると人間とそうそう変わりありません。全身が鉄になった人も居たけど、鎧を着込んだ人みたいなものですし」

『ちなみにそれは鉄海のパーツがよく発掘される国で生まれることが多いわね。多分、呪文世界にあったそういうものがタンクルに溶け込んで、胎児に影響を与えたんじゃないかって言われてる』

さらなる補足に、世界融合の影響というものを感じざるを得ない。

識世といい鉄の人間といい、ただ涙月……ゲイズという脅威を退けるために動いただけなのに世界がこうも変化するなんて妙な気持ちだ。

「俺は識世以外知らなかったよ。アイゼンダイトねえ。他にもそういう、人と異なるような種族がいたりするのかな？」

『それは——』

「後で話しますので、今はあいつの所に行きましょう？ 朝ごはん冷めちやいます」

ナツキに言われ、朝食のお届けの途中だったことを思い出す。

そんなに時間が経っていないと思うが、出来たての食事が冷めてしまうのは作ってくれたナツキにも悪い。

反省しつつ向かった地下室では、意外にもベルソーアが先に起きており、ミュンはまだぐっすりと眠っていた。

「ごはん、持ってきたわよ」

「……ありがとう。感謝する」

「なんだ、お礼言えるんだな」

「捕虜に対しての待遇としては上等だしな。それに悔しいが、美味しい」

食事を受け渡すために作られた小さな穴から料理を乗せたトレイを押ししていくナツ

キ。その間に何かしないか目を光らせるが、特に何もまま二人への配膳は終了する。

肩透かしと思わなくもないが、大人しいのは良いことだ。

食事を届けたことだし、俺達も戻ろうかとナツキに言おうとした所で、ベルソーアの口から咀嚼以外の音が漏れる。

「——伝えたいことがある」

「アーリイにか？ それなら」

「あんたにだ。俺の中にある鉄海の除去手術中、絶対に妨害が入る」

それは、今までのベルソーアへの印象を覆すような言葉だった。

年相応の少年の瞳には見たことのない知性の輝きが見えた気がする。

「何を知っている？」

「あれは簡易ながら『召喚』の紋具としての機能もある。撤去された途端、何かを呼ぶ。昨日あの子供にも伝えただけ、何も心配いらないうて言うだけでまともにとりあつてくれなかったからな……」

「言葉通りじゃないのか？」

「そのツギハギは製作者以外が触れたら発動するんだ。取り外そうとすること自体がツギハギの使用条件になってしまう」

「つまり——」

「ネムレスさんネムレスさん、一体なんの話ですか？」

ナツキが口を挟んでくる。そう言えば伝えていなかったか？

俺は推測を交えた事情を説明し、ナツキは腕を組んで首肯する。

思い悩むナツキを安心させるように、アーリイはきつと全部わかつてしていると話す。

「むしろそれを狙っているふしがあるぞ、あいつ」

「……何考えてやがる」

「世界をひっくり返そうとか？」

なんてねー、なんて笑うナツキだが、俺はそれを全て冗談と受け止めることができなかった。

アーリイがああ洞窟で手に入れた技術は、世界でも有名な剣都にもないものだと言った。

それを広めるといふことの影響を、あの聡い子供が理解していないはずがない。

そして、それを踏まえても成し遂げたいことがあるのだろう。

『だいじよぶだいじよぶ、仮に何かあってもネムレスは私が守るから』

(どーもありがとう)

守られるより守りたい派なのでサウザナの献身に軽く応じつつ、俺はベルソーアに口

を開く。

「それはいい。けど、急にどうしたんだ。やけに協力的じゃないか」

「僕の中にある奴は、かなり面倒だったからな……それを外してくれるっていうなら話は別だ」

「きな臭い話か？」

「きな臭い話だよ」

「軍人なら珍しくはないな」

「僕の場合は自爆みたいなものなんだが……どこかのお人好しがそれに巻き込まれているからな」

軍人という単語はスルーされてしまったが、少しでも声に変化があった。

名前こそ口にしていないが、その裏に親しみを感じた俺は隣の牢を見る。

そこには静かな寝息を立てるミュンが見える。きつと、そういうことなんだと思う。まったく思春期らしい。

鼻を鳴らして微笑んでいると、にゅつと伸びたナツキの手が俺の頬を引つ張った。

「はにふる」

「女性の寝顔を見てニヤニヤするのはマナー違反です」

「ひへーよ、はんひはいは」

どうやら寝ているミュンを見て笑みを浮かべたと勘違いされたらしい。断じて違  
ぞ。

加減されていたので痛みはないが、喋りづらいのでナツキの手を払う。

「こいつがミュンのこと大好きって話を微笑ましくなっただけだよ」

「え、そうな『そんなこと少しも言っていないだろうが！』」

「大方、出世とかすごい紋具をくれるとか言っただけで、飛びついたら実験台にされて、そのいざこざにその子がとばっちりを受けたってところか？」

「……………勝手に話を作るな」

「その間はなんだよ」

「知らん！ お前なんか知らん！ とにかく僕は伝えたぞ！ せいぜい周りに注意して  
おけ！」

そう叫んでベッドに潜り込むベルソーア。子供の照れ隠しそのものである。

改めて朝食の話題ネタを拾ったことに領きながら、俺とナツキはその場を後にした。

## 20. その力は誰が為に

「この後、早速作業を行おうと思います」

色々と不安を抱えながらも、ベルソーアの鉄海除去の手術はほどなく実行されることとなる。

当然、ベルソーアの懸念事項もアリーイに伝えたのだが、どうも絶対の自信を持っているようで彼女は忠告を受け入れたものの取りやめるといふことはしなかった。

数日ですっかり屋敷の台所の主と化したナツキの料理に舌鼓を打った後、その内容を尋ねる。今日はダルメンも呼ばれていた。

「俺達は何かすることあるのか？」

「ネムレス殿は万々に備え待機をお願いします。基本的には私だけで行うつもりですが、貴方が近くに居てくれたほうが心強い」

アリーイが町長に打診して前準備をしていたものの、俺自身がすることは特になく洞窟の資料の事もほとんど聞いていない。

なのに傍に居て欲しいとか、なんだろうなこの無条件に近い信頼は。

俺も知らないサウザナの力を見抜いている、とも思えない謎だ。



「そういうことなら、ナツキ。ユカリス預かっててくれ。流石にアーリーの作業場には入れられないだろうし」

ガーン、と言葉にしそうな表情で俺を見上げてくるユカリス。そんな顔しても駄目。何か言っているが言葉のわからない俺なりに翻訳するなら、迷惑はかけないから、と言ったところか。

けどただの仕事ではなく人間の身体から物を取り除くという作業を、この無垢な識世に見せたくはない。

よってユカリスのわがままは却下だ。

「私は子守なんですか？」

「頼んだぜ、お母さん」

「私まだ十三歳ですが」

「頼んだぜ、お母さん」

「訂正する気ない！」

屋敷全般の家事を仕切ってるから仕方ない。

それともお姉さんとかお嬢さんのほうが良かったかな？

頬にくつつくユカリスを剥がしてナツキに預けると、頬を食事中のリスのように膨らませてお冠を示している。

それをなるべく目に入れないようにして、俺はナツキに軽い礼を言った。  
「悪いね」

「まあ、いいですけど。終わったら特訓とかに付き合ってくださいね?」

「そうするよ。ダルメン……」

「ミュン嬢達のほうへ行くよ。ついでに彼らの様子を見て来よう」

「……そういやあの樽、なんだ? ミュンとベルソーア以外の奴ら、全然樽を取る気配ないんだけど」

「わたしの頼もしい同胞になったということだね」

「支配ですか? 洗脳ですか?」

あの樽を被るとどんな影響が出ると言うんだ、怖いぞダルメン。

「いやいや、そんな強制効果はないよ。ただ、あの樽を被っている間はネムレス君のヘク  
ロツシング」のようにわたしと彼らの間に繋がりが出来るだけさ」

「……それ、ダルメンのツギハギの影響受けるよな?」

「そうだね、被っている間は汗で蒸れることもないし、気温変化にも対応してるし、基本的にかぶり心地の良い樽になるよ。彼らも好んでいるようだ」

「意思疎通出来るのか?」

「もちろん。言葉ではないだけで、ユカリス君のように感情を通じてコミュニケーショ

ンだって取れる」

「ひとつことも話してなかったですけどね……」

ナヅキがユカリスを宥めながらぼつりと漏らす。

彼らは人間に戻る日は来るのだろうか。

気を取り直そう、これ以上関わるのはまずい気がする。

「それじゃあアーリイ、早速やろう」

「はい。それでは参りましょう」

二人に別れを告げ、食事の後片付けを任せて俺達は作業のために作業場へと向かう。

たどり着いた地下の作業場では、すでに上半身を脱いだ半裸のベルソーアがベッドにも似た四方形の作業台に寝転がっていた。

「いつの間に。でも、どうせならミュンって子の半裸のほうが目の保養になるんだが」

「子供の前でそういうこと言うなよお前ドスケベだな、良識持てよ。……朝食を食べる後に移動させられたんだよ。おかげであいつはまだ寝てる」

「……えらく寝坊助だな」

「オンオフが激しいのさ。で、僕はどうすりやいいんだ？」

「そのまま寝ていて結構ですよ。外科手術のように体を切り開くわけではないので、痛みはないですが……どの道、ベルソーア殿がこれから行うことを見ることはありません

ん。ですので、寝ていても構いませんよ？」

脅してるのか安心させているのかわからないアリーの物言いに顔をしかめながら、  
「そのままでもいい」

と答えた。……意外と覚悟決まってるな。

「なんだ、実は騙していたとか警戒しないのか？ もう少し駄々こねると思ってたが」  
「もうそんな時期じゃないだろうが。お前らが僕を口封じする気がないのはわかってるし、むしろ鉄海から背後を洗おうとしているんだろう？ 僕としてもこれを取って欲しいから万々歳なのさ」

「そうなのか、アリー」

「私は鉄海についてはそう造詣が深くありませんからね。リアクターに何か使えるやもしれません」

『ちなみに私は鉄海産の剣にもなれるわよ。正確にはその機能と外見をツギハギで再現したのだけ』

こいつに出来ないことってなんだろう……

『努力しましたので』

「そっか、そりゃすごい」

そうとしか言えない。

が、正確に心を読むのは心臓に悪いのでよして欲しい。

「それでは始めるとしましょう。ベルソーア殿、どうか気を楽に。声を上げても構いませんが極力動かぬようお願いします」

頷くベルソーア。

同時に、アーリイの指先に赤い光が灯る。

アーリイはそれをベルソーアの胸……心臓部分に添える。すると光は波紋のように揺らぎ、ベルソーアの全身へと伝わっていく。

波を打つ光が収まると、寝ているベルソーアの姿を投影するように光が浮かび上がる。それは、ベルソーアの外見を模した形を作っていた。

「これは……」

「仮想設計図。骨組みの部分でタンクルに頼ることで素材の簡略化に繋げる、私が使う建築技術の一つなのですが、これはその人体版ですな」

聞き慣れない単語だ。だがエブラッツの宿で似た言葉を聞いた気がする。

さらにその投影図は、心臓部分に歪な塊のようなものも示していた。

『なるほど、この子の状態をトレースしているのね。病人に対するカルテのように、今の光……呪紋の中にはこの子の全ての情報が詰まっているのよ』

「この光は呪紋なのか。そして、この心臓部のやつが鉄海」

「流石です。ベルソーア殿、お気分は？」

「……………すごい、な」

言葉を失い、つぶやくように漏らすベルソーア。

同様に初見の技術なのだろうが、過去の人間である俺と違い現代を生きるベルソーアが絶句するその様は、アーリーの技術が特異であることを示しているようだった。

「つまり、これを見ながら鉄海を取り外していくってことか？」

「半分は」

「半分？」

「ええ。今までの私なら、ネムレス殿の言う通り目の前の情報を頼りに鉄海を取り外したことでしよう。ですが今回は……………」

アーリーが息を整え、緊張を浮かべた険しい顔を作りながら意を決したようにその小さな手を投影された鉄海の塊へ伸ばす。

光の中に差し込んだアーリーの手に、俺とベルソーアは目を見開く。

アーリーの手は手首から先が光の情報体……………呪紋へと変化していたのだ。

呪紋とは構成の繭であり、内包されたタンクルが描く模様。

つまりは。

（自身をタンクルに変えたツギハギ化？……………ダルメンが隠している女の子のそれと同

じ、なのか?)

そんな俺達を気にかけることなく彼女は作業を続ける。

中央に浮かんだ呪紋の手が突如分解され。そして分解された部分を構成していた呪紋は鉄海へ次々と集まり、包み込むように中へ入り込んでいく。

その異様極まる光景はさらに続き、アーリイはもう片方の手も呪紋へと作り変える。

そうして両の手を呪紋化させたアーリイの目は、仮想設計図に記された鉄海に対して何かアプローチを仕掛けているようだった。

「一体何をしているんだ?」

『呪紋……タンクルに刻まれた情報をリアルタイムで作り変えてるのよ、アーリイは』

「え?」

『仮想設計図……この場合は魂とも表現すべきかしら。あの子の体には鉄海なんて埋め込まれていない、っていう情報を継ぎ足して、事実を覆い隠す……ううん、根本から書き換えているの』

「はあ?」

『けど、精神は時折肉体にも影響を及ぼすことがある。それを極限まで高めて、まるで催眠のように認識させるんでしょうね。異なるのは、それが誤魔化しではなく本当に事実として変わること』

「……つまりアーリイは、設計図では異常ないんだから本体も問題なし、ってなすりつけにも近い強引な理屈を押し付けているってことか？」

『うん、その表現いいわね。刃物が刺さったんだから血を流して死ねってくらい当然かつ理不尽な勢い好きよ』

「名前をつけるなら、〈夢の名残<sup>リトルムード</sup>〉ってとこ、ですわね」

妙に誇らしげに、アーリイはそのツギハギの名を語る。

「でも待て、それって……」

人間を、作り変えているとも言えないか？

サウザナは呑気そうだが、俺は違った。

背筋が凍るような感覚が襲う。ダルメンの中の少女がああなった理由に、アーリイが使っている技術が関わっている、のか？

感じた悪寒に従うように俺はベルソーアを見る。

先程まで俺と一緒に仮想設計図の展開に驚いていたはずの少年は、ぐつたりと首を横に倒して眠って、いや気絶していた。

鉄海を取り出した負荷なのか、はたまた別の影響か。アーリイが言っていた見ることが叶わないという言葉を証明していた。

ならあの仮想設計図とは仮想とは名ばかりの、対象をツギハギ化させてその全てを浮



き彫りにする……といったものではないだろうか。

そして、ツギハギ化した己を介入手段としてそこに紛れ込ませる。

後は簡単だ。相手のツギハギに干渉し、己のものとする。俺もそうやってナツキの〈雷道〉を使った。

が、それはあくまでツギハギだからできたこと。人体にそれを行うなど考えたこともなかった。

アリユフーレラインという、タンクルの通り道が世界中に繋がっているおかげか。

世界融合の影響で、人がタンクルの海から生まれたからツギハギ化なんてことが出来るのだろうか。

あくまで予想だ。

サウザナの言うように肉体へ影響を及ぼす催眠という可能性も否定しきれない。

しかし、もし仮想ではなく本当に魂をツギハギ化して実体として出力させることが出来るのなら……

『あ、作業済んだみたいよ』

止まらない思考の中、アーリーの作業は終わりを迎えたようだ。

ベルソーアの形をした呪紋は残ったままだが、心臓部にあった鉄海は消去……いや、手の形となった呪紋の上に移動している。

考察に気を取られて少し見逃してしまったことを悔やんでいると、まるで抜け殻にも  
のを入れるように呪紋をベルソーアの肉体に重ねた。

呪紋の光が消失する。

風に描かれた絵の具を剥がすようにそれらは元の肌を取り戻し、最後に残ったア  
リーの手の上には精密な細工の施された黒い何か握られていた。

あれが鉄海、なのだろう。

アーリーがそれを認めると、途端に深く息をついて滝のような汗を垂らし始めた。

いや、元々汗は垂れていたのだろう。ただ、俺が「夢の名残」に気を取られ過ぎてい  
ただけで、アーリーは必死で作業をしていたのだ。

ぐらりと揺れる体を咄嗟に支える。

俺のお腹ぐらいままでしかない小さな女の子。それが、息を荒げ空気を欲さんと喘いで  
いる。

支えるために触れた肩は、掌で包めそうなほど細く華奢なものだった。

(だからと言って、こんなの見ちゃったら放置はできんか)

最初はリアクターの管理者としての責任能力を確かめるだけだったが、それすらも小  
さく思えるほどの奇跡。

あの洞窟にあった技術をアーリーは引き出すツギハギ、自己強化と俺に説明した。

なるほど、鉄海という異物を引き出すという意味では正しい。自己強化も、聞き方によつてはなくはない。

だが決して正しくもなく、使い方を一つ間違えればとんでもないことになる技術になるのは疑いようがない。

それ以上に、ツギハギで作られた彼女の体とこの技術が無関係とは到底思えなかつた。

『難しく考えるみたいだけど、気にすることないと思うわ。だって、アーリイが行つたのは紛れもなく人命救助の一環だもの。ただ、アプローチの仕方が普通と違うだけの話だから、怖がらないであげたほうがいいんじゃない?』

「……アーリイがしたのは、体の中の異物を取り出すという作業を、ツギハギで行つた。そういうことか」

『そうそう。似た事例があるからって、頭から疑つてかかるのはよしなさいな』  
俺もまた、意識を切り替えるように深く息をつく。

アーリイは別に人体改造とかおぞましいことをしたわけではない。

ただ、俺の思考が物騒な方向へ向かつてしまっただけのことだ。

いかな、過去の人間だからって頭まで化石になっていたのか。

俺ももう少し頭柔らかくしないと……

『ツギハギを覚えるために素材を持つ必要があるでしょう？ あれだつて魂に情報として刻むようなものだし、自分でするか他人がするかの違いでしかないわ。私の抜剣だつて自己改造の領域よ？』

「それはお前が識世だから出来ることだろうが」

『まー確かに、体の構造から色々と柔い、ましてや子供が使うには負担の大きいものなのは否定しないわね』

言われて、俺は少女の小ささを感じる。

腕の中にすっぽりと収まるアーリイは、先程の光景が夢のように思えるほどか弱い女の子に見えた。

この子が成し遂げた事實は、たしかに認めるべきことだ。

同時にその危うさも。

この子は、目的のためなら手段を選ばぬ意志を秘めているような気がするのだ。

信用を得たいからと言って、出会つて数日もない俺達にこんなモノを見せてしまうようなら尚更だ。俺達がこの技術を盗んで悪用するとか考えないのか？

いくら俺が過去の人間で未来の技術が発達していると言っても、己のツギハギ化を使う人間が普通とは到底思えない。

「とにかく手術が終わったのなら、アーリイを休ませないと」

まずはその小さな両手に握られた鉄海を回収しようと手を伸ばした、その時だった。鉄海を構成する黒い外郭に呪紋が浮かぶ。

反射的にその素材を調べるが、目に刻まれた情報には俺に知り得ぬ素材が込められていた。

〈起爆〉〈距離〉〈範囲〉〈——〉なんだ、読めない？　こんなことが——いやそれよりも〈起爆〉はまずい！

即座に解体のためのツギハギを生み出し、叩きつけようとしたが鉄海から溢れる突風の圧力に思わず体が止まる。

咄嗟にアーリイを庇い体勢を崩したせいで一手遅れた。圧力に踏ん張って耐えきつた時には、鉄海に仕込まれていた自爆のツギハギが作動する寸前だった。

せめて、とベルソーアとアーリイを庇うように立ち位置を変えようとした矢先、サウザナの声が俺の動きを止める。

『大丈夫。アーリイのリアクターが機能してるから』

「え？」

サウザナの言葉を証明するように、呪紋の明滅を繰り返していた鉄海からタンクルと衝撃が溢れようとした瞬間、鉄海が光の軌跡を残したまま消え去った。

まるで爆発の代わりに消失したかのような、説明の難しい現象だ。

『驚くことないわ。アーリーのリアクターが機能しただけよ。昨日説明受けたでしょう？』

「あー……：そーいやそーうか」

昨日聞いたアーリーからの『切り札』の説明。

その一つが、指定した位置からのテレポート……強制退出機能である。

大規模なタンクルなどが発生したさい、せめて街中での被害を起さぬようアンネの街から離れた場所へ空間を超えて飛ばすという、防衛としては文句のない切り札。

アーリーは今回の作業を行う前に、この部屋での異常なタンクル抽出と同時にその排出を機能するよう設定していたのだろう。

つくづく細かい気配りの出来るリアクターだと感心する俺だったが、そんな安堵を笑うかのようにサウザナがぼつりつつぶやいた。

『あ、これ……：やばいかも』

「あー？」

『気になるから転移先に意識を飛ばして追いかけたんだけど……：送り先爆発した』

「そーうなのか？ その割には街に音はないようだけど……：まさか、よその街だったとか？」

『うーん。アンネから遠かったし周りに何もなから被害はないんだけど』

「なんだよ、早く言え」

『そだね。……えーつと、爆発した先つてネムレスを召喚した場所だね。そのせいでアリユフーレイラインが緩んだのか、スピリット・カウンター発生してる』

急かす俺に、サウザナはなんでもなさげに爆弾発言をかましてくれた。

◇

世界が割れる。

星を覆い尽くす呪紋世界の内殻を壊すように空間を捻じ曲がり、タンクルによつて包まれる境界線の一部が崩れていく。

それによつて、外からの侵入を防いでいた守りが瓦解し……『世界』が流出する。

呪紋世界に漂うナニカ——カケラオチと呼ばれる、異形の存在。

割れた空間の先からうごめく暗黒の中から、勢いよくカケラオチが飛び出そうとして——崩れてもなお膜を張るアリユフーレイラインによつて阻まれた。

けれどそれは細かい力によつて支えられる現状でしかなく、弛むタンクルの糸は今にも千切れそうに声なき悲鳴を上げ続ける。

カケラオチの習性は単純明快。

この世界の生物へ襲いかかり、蹂躪する。それだけだ。

そして、スピリット・カウンター発生地より最も近い場所は——アンネの街である。

## 21. スピリット・カウンター

『鉄海は即座に壊しておくべきだったわね。撒き餌の機能でもあったのか、よそに目を向けずにまっすぐアンネに向かつてる』

サウザナがアーリイにツギハギを使って強制的に意識を戻した後、彼女の目がもたらした情報に小さな賢者は愕然とした表情を作る。

腕の中にある小さな肩はかすかな震えを起こしていた。

「あの鉄海に、そこまでの機能が……」

ここで初めて、俺はアーリイが狼狽える様を見る。

今まで超然とした少女の雰囲気をつけていたアーリイは、見た目相応に幼い少女に見える。

本当に、この事態は彼女の予想外の出来事であるのだろう。

さしものアーリイも、あの鉄海がスピリット・カウンターを引き起こすものだとは予測がつかなかったようだ。

あの自信っぷりから、自分のリアクターをすり抜けてスピリット・カウンターを発生させたことが悔しいのかもしれない。



実際、自信はあったのだろう。ただ、運が悪かった。

俺が過去から召喚された……というのはいけないとサウザナに釘を押される。間が悪い、と自分を納得させながら俺はアーリイを落ち着かせる。

「俺も多少厄介でも、ただの爆弾と思つていたからな。アーリイが気にすることじゃない」

「で、ですが、私が……………」

「アーリイがしたのは人命救助。それでいいんだよ。俺達がすることは、今後の対策だ。

つてわけでサウザナ、案をくれ」

『うん。幸か不幸か、私が人払いに張った結界が防衛線として機能してて、スピリット・カウンター発生まで猶予がある。そこが勝負どころね。カケラオチは溢れたら一直線にアンネに来るって所もポイント』

「被害予測は？」

『街は消滅、少なくとも生命は完全に。あとはこつちに落ちてきたカケラオチが力尽きるまで被害拡大ってところかな。あの規模だと……五領国に行く可能性高い』

最近少しづつ覚えた拙い現世の知識を照らし合わせる。

五領国は隣国ということだが、もし発生したスピリット・カウンターによつて被害を与えてしまったらアンネの街に五領国の手が伸びる。

原因の鉄海はすでに爆散して証拠がないが、アーリイのリアクターを調べたらそれが原因だと判明することはずだ。

だがそれは、あの魂改さんのツギハギも白日の下へさらされることになる。

アーリイがいかにかに自制してモラルに沿った使い方をしたとしても、使い方が広まってしまうとそれ以外の使い方になるのは時間の問題だ。

だとすれば、一番穩便に済ませる方法はたった一つ。

「サウザナ、穴を埋める手段はあるのか？」

『大丈夫。けど、カケラオチの対処はどうする？ 作業している間に鎮圧だと穴を塞ぐスピードが落ちるわ』

「ふむ。……アーリイ、リアクターの範囲って広げられるか？」

「え？」

「どこまで伸ばせられる？」

「いい、一体何を」

「呪紋世界の落とし子って言っても、カケラオチってのは極論すればタンクルの塊だろ？ なら、リアクターで抑えられないわけじゃないはずだ」

「え……えええええっ!？」

さつきからアーリイの初めて見る顔が増えていく。

余裕の欠片もない少女の絶叫を聞きながら、俺はアーリイを立たせると少し屈んで彼女の双眸を見据える。

息を飲むアーリイの蒼い瞳に、俺の姿が映る。

「スピリット・カウンターは起きる。サウザナが言うなら間違いないだろう。なら、当然止めなきやならん。それはわかるな？」

「は、はい！」

「でも、俺はスピリット・カウンターを体験するのは初めてだ。だからリアクターにも詳しくはない。概要だけでアイデアが浮かんだだけだ。理屈として正しいかどうかはわからない。……アーリイから見て、俺が言ったカケラオチをリアクターで世界に還元する案は可能か？」

「わ、わかりません。ですが……やってみる価値はあるかと思われます。元々スピリット・カウンターが暴走するのは、タンクルの枯渇からの取り込み……食事のようなものであると言われています。ですがリアクターによって安定したタンクルの供給が行われるのであれば……」

「よし。可能性があるなら善は急げだ。俺はナツキ達を呼びに行くけど……アーリイ、この街でスピリット・カウンターに対しても動けそうな知り合いはいるか？」

「……アンネは水が名産というくらいで、気風や住む人々も穏やかです。ですので……」

「俺とサウザナにナツキ、ダルメンとミュン達か。まあいい、ものはやりようだ」  
アーリイを腕から離し、その背中を軽く叩く。

ひやつ、と可愛らしい声を上げるアーリイに苦笑しつつ、俺は宣言した。

「さ、忙しくなるぞ。動け動け！ サウザナ、まずは——」

◇

アンネの北にある、小さな……小さかった山。

特に名もない無銘の山であり、俺が最初にこの世界に呼ばれた場所であり、ユカリスの故郷。

そうであつたはずの山は今、剣の群れに囲まれその中におびただしい数の異形——カケラオチ達の住処へと成り代わつていた。

遠目から見えるだけでも剣獣から解放された〈幻獣〉のような竜種や、人間をゆうに超える翼をはためかせる青い巨鳥といった巨大な獣をはじめ、人間の上半身を持つ蜘蛛や緑黄色に彩られた体躯を持つ一本角の巨人。

虎の顔と人間の四肢を持ちながら、手足の先は狼のような混じりもの。全身を黒で染める大蛇といったバリエーション豊かな相手が揃っている。

最早あれは山がある、というよりカケラオチで出来た山のような錯覚すら覚えた。

それらは皆、体の一部にどこか欠損を抱えていた。あるいはその体躯が溶けるように

禿げ上がり、血のように滴るタンクルが大地を汚く染めている。

「なんだか不思議な気分です。スピリット・カウンターって発生したら終わりっていうイメージあったんですが」

「今回はサウザナが遅らせたってのもあるけど、ナツキが知ってるのは、層の薄いところから発生したんだろうな」

その様子を眺めながら、ナツキ達は山のふもとまでやってきていた。俺はその光景を、ナツキ達にかけたヘクロツシングからの視界共有で会得している。

現場に向かったのはナツキとダルメン、そして拘束から解放されたミュンの三人だった。

リアクターによるカケラオチの鎮魂作業のため、俺は戻ってきたサウザナはアーリイの傍で待機してる。

アンネの街を守るリアクターは湖の中に存在しており、湖の上で展開された呪紋に乗った俺達は、湖の中の異空間——ツギハギによって作られた部屋——へと訪れている。

そんなリアクターの形は一見すれば卵のようだった。

外見を構築する殻には一つ一つに呪紋が書き込まれ、歯車のように回転を繰り返す他のブロックと連結して鳴動している。

卵と一言で語れば簡単だが、その大きさはアーリーの屋敷にも匹敵する。この大ききの紋具を作るには多大な労力が必要のはずだ。それをアーリーは三年前に作ったという。

リアクターとは形も効果も作る者によって違うそうだが、アーリーの場合はアンネの名産である水を使い、かつ一望できる距離に作りたかつたから、だそうだ。

リアクターの誕生秘話も気になるが、今はこの窮地をなんとかするほうが先か。

「いいか、カケラオチの位置情報は俺が逐一報告する。三人は相手を倒す必要はないが、それなりに重傷を負わせてくれればいい。ナツキ、キラビヤカの扱いはどうだ？」

「使ってるうちに慣れます」

「良い返事。でも難しそうなら大型はダルメンとミュンに任せて、お前は小型のカケラオチを相手にすればいい。スピードで言えばその中で一番だしな」

「連携、というにはいささか不安もあるが、狙いをつけずに撃てばいいのなら気は楽だね」

「ミュンは二人の撃ち漏らしを担当。ナツキとダルメンの間の距離の確保大事にな」

「ええ。ベルソーアの鉄海を外してくれたのは礼を言う。だから、その恩返しはさせてもらおうね」

「スピリット・カウンターが発生してるが、塞ぐ手段は用意してあるから、遠慮なく全力

「でやってくれ」

了解、と静かな意志を込めた言葉が届く。

町娘のような格好ではなく、パンツルツクに黒いジャケット、腕に箆手をつけた装備をしている。

箆手に何やらギミックが仕込まれているようだが、そこは戦いのさいに明かされるのを期待しておこう。

「そう言えば、スピリット・カウンターはタンクルを持った存在に惹かれるってことです  
が、攻撃のツギハギにもタンクルが使われては利用されませんか？」

『良い質問ね。けど彼らはあくまで何にも染まっていない、純粋なタンクルを求めているよ。攻撃用に変換されたツギハギには「素材」が多く使われている。それらはカケラオチにとって不純物のようなもの。ようは喉が渴いているから水を飲もうとしたのに、その水は泥や石が詰まった、とても飲料水とは呼べない代物になっているってこと。だから遠慮なく攻撃して問題ないわ』

「なるほど、勉強になります」

ほんと勉強になります。

そんな風に各々が戦闘準備を整える中、サウザナが言う。

『それじゃあアーリイ、リアクターをツギハギ化しなさい』

「……………あの、本当に？ 失敗すればリアクターが消えてしまう可能性も……………」  
「そんな危険なのをベルソーアにやったの!？」

いやほんと、自分のことじゃないけどごめんと謝りたくなる事後報告だった。  
知らなかったんです、ほんと。知ってたらやめるよう言った。

だからユカリス、そのジト目はやめなさい。人を疑うような子に育てた覚えはないけど信じて欲しい。

「だいじよぶだいじよぶ、ネムレスにお任せ。スペック自体の底上げは可能なんですよ?？」

「は、はい。ただ時間の問題が……………」

『ネムレスがフォローするから、全面的に任せなさい。でもメインはアーリイだから、ア  
ンネが減ぶかどうかは貴女の手腕にかかっている』

「プレッシャーかけんなかけんな」

『アーリイにはこれくらいの方がいいでしょう?』

「……………ええ、何の憂いもなく作品に打ち込めるといふのは紋具職人にとつて是非も  
ない」

冷や汗を垂らしながらも、笑みを作るアーリイの頼もしさよ。

一応、事前に町長に話を通して街中のタンクルの使用しないで欲しいという通達をし



たものの、あの時の焦りようを考えると申し訳なく思う。

避難先へ向かう住民も多く、旅行者以外はアンネにとどまる者が多かった。

スピリット・カウンターが発生している以上どうにもならないという考えと、アールイに託すという考えが半々なを知ると、本当に彼女は良い管理者なのだと思う。

国の危機に關しても一方的な非難と悲しみを振りまくでもなく、信じて託してくれるというのは素晴らしいことである。

町長の胃に關しては、後日サウザナから良い薬でも聞いて作ってあげよう。

俺はユカリスの手足に〈吸着〉を〈付与〉させる。これで俺にしがみついたら、どんなスピードで動こうが離れないはずだ。

街のみんなと居るのではなく、ここに残ることを選んだのならきちんと保護しておかないと。

「さあ、行くぞアールイ」

アールイは頷き、〈夢の名残〉と共にリアクターに触れる。

途端、その小さな手に触れた外殻が呪紋へと分解されていく。

連鎖的に崩れていく外殻と同時に、俺はつぶやく。

「抜剣。リアクター」

折れた刀身に、呪紋化したリアクターが集っていく。外装としてリアクター自身にな

ることでその改造を手伝わせているのだ。

あくまで折れた刀身部分の補強なら自分を弄られないし、サウザナも問題ないとして  
いる。

同時に俺は足元にサウザナを突き刺す。剣先から生まれた紋陣が一重から二重、三重  
へと次々に波紋のように広がっていく。

「準備完了！ そっちは——」

「こっちも来た！」

まるで待ち構えていたかのように、カケラオチの軍勢がなだれ込んでくる。

剣の壁はこれ以上なく有効な足止めをしてくれた。

そのままスピリット・カウンターを永遠に閉じ込めることが出来れば良かったが、流  
石にそれは不可能だ。けど、それを補うためにあの三人が居る。

「では、盛大な撒き餌になるとしよう！」

先手はダルメン。

すでに中身のない剣獣を構え、引き金を押し込む。

通常であれば〈幻獣〉からのエネルギーを撃ち出す機能を持ったそれは、ダルメンの有  
り余るタンクルを射出する機構と化している。

〈拡大〉〈距離〉〈威力〉の単純な三構成から生まれたタンクル弾はカケラオチ達に着弾、

その勢いを大地ごと削いでいく。

「遠慮はしない」

砲撃は終わらない。

一度目に続き、続けて十連。次々に装填されていくエネルギーから繰り出される一撃はシンプルながら多大な戦果を上げていた。

津波のような軍勢の勢いに穴が空く。

けれど数の差は如何ともしがたい。止まることなく、カケラオチ達はアンネに向かって進撃する。

遠距離砲撃による削りもその速さに対応できず、やがて詰められた距離のアドバンテージはなくなっていた。

「おまけだ、へ揺れる空籠（プレヴィス）」

使われたのは、ナヅキと特訓していた時に使ったツギハギ。

呪紋による円陣の範囲内に含まれていたカケラオチ達が強制的に空へ浮かばされたとすれば、その体が螺旋のようにねじ曲がりその体を小さくさせていく。とどめとばかりに陣ごと爆砕されるおまけつき。

強制拘束からの空間歪曲と爆砕、殺意に満ち溢れたツギハギ。この過剰すぎる火力を見れば、特訓で使わなかったのはダルメンの理性がうかがえる。

「カケラオチがタンクルで出来てるなら、こっちのペース」

どこか楽しげに、ダルメンの後に備えていたミュンは〈連なる雷〉を発動する。

相手のタンクルを雷へと変化させ、己の力とするこのツギハギはカケラオチ相手に相性がいい。

しかも俺と違つて制御を奪われる心配もなく、いわゆるぶつ放しができるというのは気分が良さげだ。

生み出された雷球がカケラオチの一体にぶつかると、雷はそのまま周りのタンクルを飲み込んで肥大化していく。

「裂っ！」

ぐつと拳を握つたミュンが叫ぶと、文字通り雷球は破裂し被害を拡大させるように拡散していく。

その合間にミュンは箆手を携えた右手をカケラオチに向ける。

すると箆手の外装が変化し、腕を覆っていた金属が弓のように展開された。

そのギミックに目を奪われていると、ミュンは新たなツギハギを駆使していく。

「〈輝弓（ライトアタク）〉」

弓となった箆手に、ツギハギの矢が生まれる。

それはダルメンのタンクル砲に負けない密を秘めており、さらに貫通性を〈付与〉さ

せた構成だった。

ダルメンに負けじと装填されては発射を繰り返す光の矢雨がカケラオチ達に降り注ぐ。これを洞窟でやられていたら面倒だったな。

「みなさん派手なあつ！ 負けるかあー！」

ついにカケラオチがナツキ達に迫る。けれど彼女は逃げることなく、真つ先に先陣を切った。

《雷道》でゼロからトップスピードに加速したナツキがカケラオチ達に突っ込んでいく。キラビヤカはナツキの意識に応じてその刃を伸ばし輝かせ、《雷道》による移動が大型のカケラオチの両断を可能にしていく。

けどここで無理はさせず、一撃入れては次の敵へとターゲットを変えていくナツキ。ヒット・アンド・アウェイながら決して浅くない傷を負わせていくナツキは流石だ。

俺が指摘した《雷道》の欠点を補うように、直角直線にしか動かないなりに決して止まることなくフェイントを入れ混ぜ、空で絶え間なく使うことで擬似的な飛行も可能にしカケラオチの攻撃を避けている。

ジグザグな動きではあるが、どちらかと言えば鈍重なカケラオチ相手には無類の強さを発揮していた。あれなら直撃を受けることはないだろう。

基本的には三人が優勢だ。けれど物量は容易くそれを覆す。

現に、一番狙われやすいナツキが大型のカケラオチに囲まれる。すでに〈雷道〉による逃げ場は物理的に塞がれていた。

もし一人ならば、ナツキはここでカケラオチに吞まれて終わっていたかもしれない。けれど、この場は一人じゃない。

頼もしい仲間が存在しているのだ。

「ダルメン、そこから左、威力より速さで。ナツキ、右に穴出来るから備えてくれ」

「承知！」

「はい！」

言下、ダルメンのタンクル砲が空を貫く。

指示通り威力よりも速さを追求したそれは、ナツキを囲い込むカケラオチの一部に直撃して小さな穴を開ける。

だが、ナツキのサイズならばそれで十分。同時に〈雷道〉によつてスムーズな脱出を成し遂げていた。

「ミュン、地雷型のタンクル弾をナツキの後ろに設置。〈踊る炎雲（ビートクラウド）〉もおまけしといてくれ」

「効果あるの？」

「今はなくても後々効果があるはずだ。今回は殲滅じゃなくて、あくまでカケラオチが

自壊する程度でいいからな」

「そもそもリアクターでカケラオチを抑え込むってのが……」

「力押し以外で他に何かあるか？」

「……………」

「はい、それじゃあこの話は終わりっ」

不安なのはわかるが、すでに作戦は始まっているので異論は受け付けません。

「ナツキ、無事か？」

「はいいいい」

「なんだその間延びした声」

「〈雷道〉でちよっと、加速しすぎたので。んし、今は大丈夫！」

「被弾を真つ先に避けるよ。無理をする必要はないからな」

「でも、もう何匹もそっちに……」

「こっちはこっちで対処する。生き延びることを第一に考えろ！ あと、少し目を離す

けどピンチになったら誰でもいいから連絡くれ、頼むぞ」

ひとまずの指示を終え、俺はサウザン達に向き直る。

分解されたリアクターは光の刀身となり、地面を伝って波紋を広げたままだ。

リアクターを呪紋化して刀身に取り込んでいる作業をするアーリーの顔からは滝の

ような汗が流れている。

ユカリスが懸命にそれを逐一拭き取っているが、一向に手が足りてないように思えた。〈乾燥〉を〈付与〉させたタオルをユカリスに渡しながら、俺もハンカチでさつとアーリーの額の汗を拭った。

「あ、すみません……」

「変に喋らなくていい」

「……………」

頷き、アーリーは無言で作業を繰り返す。

少し、遅れているか。

そうと決まれば即行動、俺はアーリーの反対側へと移動しすでに三分の一が呪紋化したりアクターへ触れる。

俺がすることは簡単だ。アーリーと同じことをする——わけではない。

一度見ただけで同じことが出来るのは難度低いツギハギや〈素材〉を使ったものだ。リアクターのような〈素材〉と技術の塊を一見しただけで模倣出来るのはおそらくサウザナくらいだろう。

俺が誇れるのはツギハギの速さと制御力。サポートでそれを発揮するのは、アーリーの負担を減らすというただ一点。



〈支配〉からの〈同調〉、そうしてアーリーのツギハギに介入した俺は、彼女の負担が大きい部分のみを補うのだ。

ようは作業の分担だ。メインはアーリー、俺はサポート。

物質を呪紋化させる作業はアーリーに任せ、それをサウザナへ送り込むのを俺が担当するというだけだ。

こつちが担当するのは材料を運ぶ道を用意することだけで、荷物自体を作るアーリーの負担が大きいことに変わりはないが、それでも作業スピードに明確な違いはあった。

分担作業に気づいたのか、アーリーが大きく目を見開いて俺を見ている。

黙って首を横に振り、俺は作業に集中する。アーリーも意を汲んで、黙々とリアクターの呪紋化を続ける。

その合間にもナツキ達の戦いは続いている。

少し目を離している間に、ダルメンを除く二人は軽傷を負っていた。

直撃を受けたわけではなく、ツギハギの被害やカケラオチ達の攻撃の余波による切り傷と擦過傷だ。

それでも動き続ける体と出血が体力を奪っているのか、最初に比べて動きに精細が欠け始めている。

カケラオチ達は最初よりも目に見えて減っているが、それでも元の数が圧倒的のため

終わりが未だに見えていない。

サウザナの〈目〉が視点を切り替える。

第一波とも言うべきカケラオチ達がアンネの目と鼻の先に近づいている。

入口近くの住民はとつくに避難しているが、それでも街の中核への被害は避けられそうにない。

作業を中断して飛び出すか——と判断した瞬間、〈目〉が新たな戦力を捉えた。

「はっ！ 僕らを忘れてたんじゃないだろうな！」

ベルソーアだ。

未だ体に包帯を巻いており、体もふらふらで顔も青白い。

目に見えて倒れる寸前だと言うのに、彼は入口に立っていた。——何やら色んな模様が追加された、三つの樽人間を従えて。

「ふ、頼るべきは同胞だな」

事前に聞いていたといえ、状況に相応しいとは到底思えない光景だ。

そんな俺に、ダルメンの得意げな声で返してくる。決して見れないがドヤ顔を作っているのが目に浮かぶ。

ベルソーアと共に居たのは、ダルメンの樽によって拘束されたはずのミュンの部隊の人間……だったものだ。

種族的にまだ人間だと思うが、あれからずっと樽を被ったままで意思疎通もダルメンとしかしていなかった。

人間と見るのを、少し疑わしくなってしまうのもやむなしとして欲しい。

ともかく彼らは何の感情も浮かばないように直立している。それをベルソーアが率いているのは間違いないの、だが……一体なんだこれは!? どういうことなんだよ!

「つてえー!」

ベルソーアの号令の下、俺が適当にイツタル、ニタル、サンタルと名付けた彼らは、おそらく目に該当するであろう模様が輝きを帯びる。

何をする気だ、と思つた瞬間、彼らの瞳から光線が発射された。

三対六つの光は真つ直ぐ入口に迫つていたカケラオチへ殺到し、直撃。その動きを止めていた。

「よしっ!」

「よしっ! じゃなくて、なんだよあれ!」

「知らん! 僕は知らん! 今は勢いで行動しているだけだ!」

「自分を客観視出来るならもつと落ち着けるだろ!」

「戦力があるんだ、それでいいだろいいと言ええええええええええ!」

どうやらベルソーアもかなりテンションが振り切つているようだ。

吹っ切ればとも言うべきか。

よく見れば目がぐるぐると渦巻いているようにも見える。

「やはり彼に頼んだのは正解のようだ」

ダルメンさん？

「ネムレス君、最終防衛線は無事機能していると、君達のほうはどうなんだ？」

「あ。はい」

『もうネムレス、並行作業して苦しいのはわかるけど現実逃避しないでよね？』

何故かサウザナに怒られた。

戦況と状況を一時忘れて突っ込んでしまった俺は悪くないはず。

そんな俺の目の端に浮かんだ汗を、アーレイとの間を飛び回るユカリスが優しく拭ってくれる。

……ユカリス。俺、頑張るよ。

極力入口の光景を無視し、作業を優先した結果と言うにはあまり褒められたものではないが、俺達はついにサウザナの抜剣リアクターを完成へと届かせる。

『準備、完了！』

「外に出るぞ！」

ふらつくアーレイを抱えながら、俺はサウザナを右手にユカリスを肩に乗せ異空間か

ら湖の上へと跳躍する。

眼下に見えるのは、アンネの北方の緑を赤黒く染めるカケラオチの軍勢。

その中で小さな光が幾つかきらめいて見える。いまだ、向こうでの戦闘も終わっていないようだ。

左手に抱えたアーリーの腰をぐつと強く握る。身じろぎ、呻くような声をあげるアーリーだったがすぐにその声も晴れると信じて湖の上にサウザナを突き立てた。

『アーリー、貴女のリアクターをちゃんと見ときなさい!』

水面が震え、突き刺したサウザナから光が溢れる。

光の刀身から黄金の粒子が周囲に満ちていく。

徐々に集束していくそれは一対の翼を想起させる形を作り、舞い散る羽根は街を包み込むように広がっていく。

「……………あ」

アーリーが小さく言葉にならない声をあげる。

元が自分の創作物であることへの驚愕か、それともサウザナが見せる抜剣の性能への興味か。

わかっているのは、この小さな少女の双眸は今、黄金に負けない輝きを帯びているということだった。

羽化とも言うべき形に展開した黄金は翼をはためかせ、薙いだ。身を倒す激しい風ではない。

頬を撫でるような、そよ風のような息吹だった。

ただ、優しかった。

その風にかケラオチが触れる。途端、彼らは絶叫を上げることなく、粛々と静かに朽ちていく。

風以外の音を許さぬような静寂。

鎮魂の風は止むことなくナヅキ達の戦場へ吹き結ぶ。

「え……………？」

それは誰の声だったか。

呆然とした声音だけがつぶやきを許された。

戦場を埋め尽くしていたかケラオチ達が次々と倒れ、土と同化していくように消えていく。

リアクターによるかケラオチ対策はバツチリ成功したようだ。

「ほら、アーリイ」

そろそろ立てるかと思いい俺はアーリイの腰から手を離す。

すると、重力に従ってアーリイは湖の中へと沈んでいった。

「つておい、アーリイ!」

咄嗟に抱え直したおかげで沈むことはなかったが、それでもアーリイの全身は水浸しになってしまった。

湖の上は特別な紋具か足場を作るツギハギを使用しなければならぬと言つてた本人が、それを忘れつほど自失していたようだ。

「えほ、ごほ、ごほ、えう」

咳き込むアーリイの肩を叩き、落ち着いたところで改めて少女の手を取つてサウザナの柄を握らせる。

少しサウザナが震えたが、その辺は大目に見て欲しい。

「ほら、アーリイのリアクターが街を救つたんだ。この光景、ちゃんと見とけ」

返事はない。

ユカリスが心配そうにアーリイに近寄るが、それを制して自由にさせる。

彼女は今、己の後悔やら成果やらで色々と頭の中がこんがらがつているはずだ。少し、心の整理をする時間も必要だろう。

そんな気持ちを込めて唇に指を当てると、ユカリスも同じ仕草を取つた。意思疎通が出来ていると思いたい。

さて、アーリイはここに置いてナツキ達を迎えに行くか……と視線を彼女らに向けた

その時だった。

(ネムレス。まだ終わってない)

「サウザナ?」

『急いで! ナツキ達の傍!』

急かすサウザナに応えて向けて目線の先。

カケラオチ達が消えていく戦場の中で、一つの異物を見つけた。

まるでリアクターの風から逃れるように、幾つものカケラオチ達が一箇所に集まっているのだ。

本能でもない。反射でもない。何者かに命令を受けているかのような動きだった。それを認め、俺は即座に行動を開始していた。

「アーリイ、後は自分で立ってくれ!」

強引にアーリイの手からサウザナを取る。すでにサウザナは行動を終えていた。

『抜剣。ウインズノア』

外装をまとうのと同時に跳躍。新緑の剣へと変化したサウザナの刀身が足の裏に置かれる。

ウインズノアの上に乗った俺は、風と同化するかのような速さで異変の元凶地へと疾駆する。



ここからでもわかる、あのカケラオチ達に紛れ込む〈素材〉。

〈威力〉〈威力〉〈威力〉〈威力〉〈威力〉〈威力〉〈威力〉〈威力〉〈威力〉  
 〈威力〉〈威力〉〈威力〉〈威力〉〈威力〉〈威力〉〈威力〉〈威力〉〈威力〉  
 〈威力〉〈威力〉〈威力〉〈威力〉〈威力〉〈威力〉〈威力〉〈威力〉〈威力〉  
 〈威力〉〈威力〉〈威力〉〈威力〉〈威力〉〈威力〉〈威力〉〈威力〉……  
 カケラオチ達が自身を攻撃力に変えている。いや、変えられている。

爆破すれば地図が書き換わるレベルのツギハギ。明らかに第三者の手が入れられたツギハギは、アーリーのリアクターの許容量を超えていた。

さらに――

「何、こいつ!?!」

「邪魔者は蹴られろ、とな」

「そんな事言ってる場合ですかあ!」

爆弾と化したカケラオチとは別の、もう一つの集合体。

それは騎手のいない黒い馬だった。ただし、サイズが山にほど匹敵するかのような巨大さを持ったものである。

前足を振り抜いてダルメンを蹴り飛ばし、背後の尾の人薙ぎがミュンを地面へ叩きつける。

そしてその口蓋は、ナツキの体へと迫っていた。

「ぐ、うああああああああああああああああ!!」

逃げ切れないと悟ったナツキはあえて〈雷道〉で口の中へと侵入し、キラビヤカの刀身を押し込んだ。

〈雷道〉の加速と刀身を構成するタンクルにできうる限りに強化し最大威力を込めたキラビヤカだったのだろう。それは口の中に針を突き刺したかのような痛みを巨馬のカケラオチに与えていた。

けれど、それだけ。

痛みはあっても止まることはない。口内を切り裂くことで咀嚼されること阻止しようとしたナツキの決死の行動はしかし、死に対しての少しの遅延しか生まなかった。

「おじい、ちゃん、なら……!」

想像した末路を切り捨てるように、己を鼓舞するようなナツキの声。〈雷道〉の加速で真下へ重力を生み出し、噛み千切られることを懸命に阻止している。

でも現実残酷で、このままでは間に合ったとしても、ナツキを救出することは不可能。

それらを認めてもなお、俺の心は平静だった。

ナツキの頑張りは無駄じゃない。何の対策も打てず喰われるのではなく、自分に出来

る限りの行動で足掻いてくれている。

何より、頼れる愛剣がやるべきことをしているからだ。

『ネムレス、見える？』

「ああ、ぼつちりとな」

肉眼では捉えることの出来ない存在が、この戦場に来ていた。

ミュンの使う〈へ理に潜む理〉と同質のものだった。見えただけで、確実に存在している何者かが俺達を観察している。

だから、引きずり出して尻ぬぐいしてもらおうとしよう。

『抜剣——』

到着と同時にサウザナの新たな外装を抜き放たれ、その性能が俺の脳裏に送られてくる。

空中で体勢を入れ替え、両手で変化したサウザナを握りしめたまま、俺は何もない空間に向かって大上段に振りかぶる。

「——天剣ルシフェヴ」

サウザナの言葉を引き継ぎ、抜剣する。

掲げられた剣は天の頂へと上り詰めるかのように剣身が伸びる。伸びる。伸びる。

雲を裂き空へ届く先で、青が割れる。

ルシフェヴが天空に突き刺さったのだ。

正確には、現世を貫き境界領域へと刀身を届かせた。

手応えに残る重々しい感触。

世界を超えたルシフェヴが突き刺さったそれを、俺は思い切り振り下ろす！

硝子の破砕音にも似た、世界の悲鳴じみた絶叫が鼓膜を震わせる。

空間の割れ目から引きずり下ろしたのは、白い船のような何かだった。

先鋭化したフォルムからそれを想像したもの、すぐにどうでもいいと頭の片隅に置いておく。

どのみち、もう見られないのだから。

「式刃抜剣《セカン・ブレイド》——リ・アルフェヴ！」

天剣ルシフェヴにリアクターの性能を持たせた融合抜剣。

ルシフェヴが天へ登りつけるほどの射程を持つ剣、ということを理解した俺はすぐに二つの抜剣をかけ合わせた。

サウザナだけでは無理だが、そこに俺が合わされば話は別。

ツギハギというのは素材と素材の掛け合わせ。素材をツギハギに置き換えて合体させるのは俺には慣れた作業だった。

ただでさえ種類の多いサウザナの抜剣を、さらに昇華させた俺だけの、俺とサウザナ

だけの力。

アーリーのの手によって自己改造され一時的に性能を伸ばしたりアクターは、謎の船という燃料を手にとさらなる拡張を果たす。

その効果範囲はカケラオチ達が合わさった巨馬と呪紋爆弾の威力を包み込むほどに膨れ上がり——ハンマーのように叩きつけられた船は、カケラオチ達と共に粉微塵となつて消失する。

抜剣をウインズノアへ戻し、空高く浮かび上がっていた俺は食べられずに済んだナツキを空で抱きとめ、風の力でゆつくりと降下する。

呆然としながらこちらを見据えるナツキに、俺は満面の笑みで答えた。

「お疲れ、全部終わったぞ」

「……ありがとうございます！　そして説明しろおー！」

直後にナツキからの熱烈なツツコミを受けながら、締まらないなあと俺は曖昧に笑うのだった。

## 2.2. これからの目的

アンネの街で起きたスピリット・カウンター事件はこうして幕を閉じた。

結果的に見れば大した被害もなく、世界融合以降で最も被害が軽微なスピリット・カウンターではないかと噂されている。

その立役者の一人である俺と言えば、アーリーの屋敷にある与えられた客室でのんびりしていた。

説明を求められた後、まずはリアクターを戻すのが先だと街へ戻り、無事に湖の中に卵リアクターを収め直した。

疲労と安堵からかアーリーはすぐさま倒れてしまったので、俺が代わりにリアクターを戻しておいた。

勝手にやって怒られないか不安だが、緊急処置として納得してもらいたい。

〈夢の名残〉によるリアクターのツギハギ化は少女の体には負担が大きかったのだろう、疲労困憊ということでも今もベッドの上でぐっすり寝入っている頃だろう。

ダルメンは特に疲労などなかったようで、エプラッツの宿に籠って何かしているようだ。アーリーと同じくベッドの住人となったナツギがぐったりなので昼食をエインの

店に食べにいったとき、帰ってからずっと部屋に居ると聞く。

ミュンとベルソーアは一度故郷へ戻ると言つてアンネの街から出ていった。

ベルソーアは自分の中の異物が消えて自由になったというのに、ミュンが出ていくと知つて渋々それに従つている。

素直になれないお年頃なのか、一人別れても何もすることがないからかは、彼の心だけが知つている。

イツタル・ニタル・サンタルの三人？ 三体？ のうちイツタルは連絡のためにこの街に残つている。普段はダルメンの所に居るそうだが、普段何をしているのかは知らない。知りたくないとも言う。

昼間からの惰眠も考えたが、ベッドではユカリスが一仕事終えたかのようなやりきつた顔で寝入つている。つまり、絶賛暇だった。

街の混乱は町長が胃を痛めながらも治めているようなので、することがない。

剣術やツギハギの自主練も考えたが、それよりサウザナに聞きたいことがあった。

「結局あの船はなんだつたんだ？ 境界領域に出入りしてたようだけど」

『あれはツギハギによる異空間航行ね。正確には、本来の使い方をしている（理に潜む理）。あれは元々へ異次元<sup>ク</sup>に消える実体<sup>ロ</sup>つていう、境界領域及び呪紋世界へ赴くためのツギハギなの』

軽い言葉と共に放たれた衝撃を、俺は昼食帰りに買ってきた果実水をつぎハギで冷やしながらゆつくりと流し込んでいく。

オレンジの甘さを胃に染み込ませながら、軽く鼻を鳴らした。

『始めはスピリット・カウンターへの対抗策として、実際に異世界へ行ってみようっていう計画から始まった。途中で頓挫したそれを、一人のアバターが成し遂げたって言われているわね』

「言われてる、って。お前が作ったんじゃないのか？」

『私はその頃は自分を鍛えてる時だったからね。ただ、その時の研究者と知り合いだったってだけでよ。っと、話が逸れた。基本的に〈異次元に消える実体〉単独で扱えるアバターなんてそうそう居ない。——でも、そのツギハギ自体に意志を持たせることが出来たなら？』

この時、俺の脳裏にはダルメンの子が浮かんだ。

『あの船は無人だった。船の材質もタンクルで出来てたしね。あれくらいならアーリイにだって作れる。大事なのは、〈異次元に消える実体〉のほうだし』

「無人、だって？」

『ダルメンが隠してるあの女の子とは別よ。あれはもつと高度だったもん。あの船に乗ってたのは、簡単な指示に受け答え出来るくらいの意志しかなかった』



「わかるのか」

『鎮圧した時に情報をちよちよいと』

「こいつ頼もしすぎる。」

『と言つても、向こうもそれを警戒してたのか抜き取れた情報はそう多くないけどね』

「わかつた情報は？」

『あのうろたえっ子の鉄海の爆発が、あの船を呼ぶ汽笛やら灯台みたいな役割も兼ねていたつてことくらい』

「どちらにせよ今回の件は裏があつて、高確率で剣都つてところが怪しい、と」

一連の事件には剣都が絡んでいると断言する。

なぜなら、ミュンは街を出ていく直前に、自分達は剣都の軍人の一部隊であることを明かしてくれたからだ。

そもそも監視していたのはあの船の奴じゃないかと尋ねれば、神妙な顔で礼を言つて、知りたいことが出来たと街を発つた。

ベルソーアは置いて言つてもいいと思つたが、彼女はむしろ避難のためにベルソーアを別の場所へ置いていこうとしているような気がした。

『少なくとも（異次元に消える実体）の使い手を使い捨てだなんて贅沢な使い方してるわね。なんとも大きくなつちやつて』

「元々俺らの国だなんて信じがたいな」

『で、元王様として今回の件はどう判断する?』

「どうするもこうするもないさ。スピリット・カウンターは被害なく鎮圧。今回はそれで終わりだよ」

『そう。ネムレスがそう言うなら、私からは何も言わないわ』

「気にならないと言えば嘘になるが、少なくともこの件を追求して剣都へ行く気はない。い。

今は、だが。

それよりも、俺がすべきことはもつと他にたくさんあるのだ。

「境界領域の探索、か」

『……………どしたの?』

「スピリット・カウンターは、世界融合からはみ出された魂の墓場なんだよな?」

『うん、概ねその認識で合ってる』

「ならば、俺の仲間もそこに漂ってる可能性あるんじゃないか? 国には帰って来なかったんだらう?」

『……………』

「だって、あいつらがゲイズなんかにやられるわけないしな」

覚えのないけど、と苦笑する。

部下でも上司でもない、かつての自分が田舎から出た時に出会った頼もしい同胞。仲間達は俺なんかよりずっと強かった。

俺が、俺達があいつらの強さについていけなかったから国の留守を預かっていただけで、本来は王様だつてあいつらの誰かがなるべきだった。

でもサウザナも国に帰つたあいつらを見ていないっていうなら、それは俺と同じく世界融合に吞まれて境界領域に投げ出されたかもしれない。

『……ごめん。私は、ネムレスのことしか考えてなかった。だからあの子達のことはい切わからないわ。ただ、はみ出された魂っていうのは、基本的に境界領域や呪紋世界の住人よ。あの子達が帰つて来なかったことはつまり、その時にそのどちらかに居た可能性はあると思う』

「だろ？ まだこの世界のことはよくわからないし、スピリット・カウンターの全てを把握してるわけじゃない。けど、今回の件みたいにもし誰かに介入されて起こしてるなら、そうさせたくない。あいつらを見つけて、埋葬してやりたいんだ」

飯に生きていた寿命を迎えていたとしても、子孫やあいつらの残した足跡が現代にも残っているかもしれない。

あるいは、俺のように境界領域で漂ってるかもしれない。

(なら——)

その先は言葉にしない。口に出す時は、実際に誰かを見つけた時だ。

もちろん、口で言うほど容易くはない。

それでも夢をもう一度を果たすためにも、俺は今の世界を色々知るべきだろう。

必然的にこれからも俺はサウザナに頼っていく。そのためにも、こいつを振るうのに

相応しい自分でいないとな。

鞘からサウザナを抜く。

折れた刃が、窓から差し込む光に反射して天然の輝きを帯びている。

「だから、これからもよろしく頼むな。お前がいないと、どうすりゃいいかわからん」

『……………んふふ、もちろん。改めて言わなくてそのつもり』

にじみ出る喜びを隠しきれない、嬉々としたサウザナの声。

刀身に映る俺の顔に応えるように、彼女は宣言した。

『私は貴方の武器なんだもの！』

## 第二章

## 23. 美人さん

「エプラッツのお酒に紅茶、アーリイ特製の胃薬にナツキのサンドイッチ、あとは……」  
 メモに記されたものを袋に詰め込みながら、俺は役所への差し入れの食料を準備して  
 いた。

一週間前に起きたスピリット・カウンター。アンネの街が被害なくほぼ無傷で凌いだ  
 ことは以前逃げ出した旅人や貴族を経由に広まっており、実際に街の入口程度にしか被  
 害のないアンネを見て爆発的にその真実が普及されていた。

そのため五領国ごりょうこくや諸外国からの説明を求める声に応じる対談や、資料作成に死に物狂  
 いで働いている役所の人々への差し入れを持つていこうと考えてのことだ。

元を辿れば鉄海マシを埋め込んだ剣都ルオが悪いのだが、それを言葉にしても真実が隠蔽され  
 るのは目に見えている。

かつての仲間達の足跡探しや弔いをするという目標が出来た俺にそちらへ意識を向  
 ける余裕はないので、彼らのためせめてもの慰めを用意するしかない。

「これでよし、と」

ツギハギによる空間収納をサウザナから教えてもらったおかげで、よりスムーズかつタンクルの消費を少なく使えるようになった。

昔のやり方を現代風にアレンジして、より良いものになる、というのはなんだか感慨深い。おかげで役所の人間全員分の差し入れを手軽に持ち運べるようになったのは良いことだ。

サウザナは余裕でアーリーの屋敷を収納出来るそうだが、比較するのは馬鹿らしいので考えないことにした。

部屋で日光浴をしていたサウザナとユカリスに役所へ行くことを伝えると、二人共それを止めて着いてくることになった。

特に止める理由もないので、俺はサウザナを腰にユカリスを肩に置いて早速役所へと向かう。

アンネの街並みは普段と変わらない……はずもなく、人が前より多くなった気がする。

スピリット・カウンターを無事にやり過ごした街というだけで、泊というものがつくらしい。

『真の立役者がここにいますよー』

「やめろやめろ」

柄を撫でてサウザナをたしなめる。

本当にその気ならもつと大声、ではなく有無を言わせないやり方で実行するはずなので、冗談のやり取りだ。

「サウザナは隠居してゐるって割に識世界限では有名らしいからな。しばらく抜剣は控えたほうが……」

『ダルメンに關しては直接干渉したからバレただけよ。抜剣と言っても、あの融合剣を使わなきゃ何ら問題ないでしょうね。他の抜剣なら強力なアクターとしか見られないでしょうね。もちろん、知名度高い剣は省くけど』

「有名すぎるのも考えものだな」

スピリット・カウンターを単独で止める剣、それがサウザナだ。

今の世の中において、それこそあの遺跡で見つけた<sup>リトルムード</sup>名残を公表するよりもずっと簡単に、明確に世界を動かさうる可能性を持った存在だろう。

だからこの力を教えるのは、今はごく少数のほうがいい。

下手に広告すれば、その力を求めて有象無象が集まってくるのは目に見えてわかる。だからしばらく、せめてアンネの街の騒ぎが収まるまでは自制したほうが懸命だ。

「剣だけにな」

『つまらない』

俺もそう思う。

言葉に出して見ると一層笑えなくなった気がした。

『私はネムレスの剣であるならそれでいいんだけどねー』

「嬉しいことを言ってくれるな、こやつめ」

そう口に出すと、ユカリスがこやつめー、と言うようにサウザナの柄に乗って揺らす。

やっぱこの子完全に俺の言葉理解してる気がする。

普通に話したいものだが、言葉だけがコミュニケーションじゃない。目と目で、雰囲気で察すのもユカリスとの接し方だろう。

「抜剣化と普通のツギハギだと、やっぱり性能落ちるのか？」

『そうね、アクターという区分だから同じ過程でも抜剣化して起こした現象のほうが強いわ。器に入れた水と手ですくった水じゃ、汲める量に差があるようなものよ』

「俺もアクター覚えられるかな」

『私がアクターみたいなものよ』

それもそうか、と笑いながら人を避けて歩いていると、急にその流れが途切れた。

さつきまで手を伸ばせば他の人に当たるくらいに狭まった道は、穴が空いたようにぼつかりと空白が生まれている。

何事だと思う俺の前に、一人の女性が佇んでいた。



(うわつ、すごい美人さん)

サウザナが声に出さずに評価する。ユカリスもほけーつとした表情ながら、女性に目を奪われているようだった。

陽光を受けてさらに輝く黄金の髪に、琥珀色の双眸。

貴婦人のような高貴な見た目でありながら、血に濡れた獣のような近寄りがたさも放つ怪しい雰囲気を持った女性だ。

ひと目見て良い生地を使っているとわかるドレスは舞踏会に着ていくような着飾るものではなく、どこか機能的にも思える動きやすさを備えている。どこかのパーティー会場から抜け出てきた、というわけでもなさそうだ。

女性が俺に振り返る。

年の頃は以前の俺と同じか少し下程度か。

十人に聞けば全員が美人と答えるであろう容姿は、どこか憂いを含んだ感情を帯びている。だが、その嘆きさえも絵になる美貌であった。

はつきり言って、俺の人生の中でもこれほどの美人はそうお目にかかったことがない。

アンネに来て接する女性が年下ばかりだったので、どこか新鮮な気分だ。

周囲に人が少ない原因も察する。

彼女のあまりの美しさと怪しさに、人々は声をかけることも近寄ることもできず、結果として道が分かれてしまったということに。

「お嬢さん、何かお悩みですか？」

まるで女性の通る道を遮ることを許さない、と言わんばかりの現状だが、雰囲気がいしい美人が居るといふ理由だけで臆する俺じゃない。

目の保養も合わせて、美人に優しくするのは男の義務と言えよう。

(いやーお手が早い)

(しばらく黙ってな)

「……………」

俺の下心を見抜いたのか、美人さんは目を向けてくるものの言葉を発することは無い。

黄金の瞳が、不躰な男を値踏みするかのように細められる。一種の威嚇にも思えるそれは、飢えた肉食動物の前に立った錯覚さえ覚えた。

その辺の男ならこれだけで威圧感を覚えて後ずさるか、適当に口を濁して退散しそうな空気を放っている。

けれども自慢ではないが俺はただの男ではない。強すぎる仲間や現在進行系で頼もしすぎる剣の力を見ているこちらからすれば、そよ風のようなものである。

美人さんの視線の圧が強まる。訂正、嵐くらいはあった。それでも俺の声は止まらない。  
い。

「申し訳ない、俺も最近この街に来たものでして。小さな賢者の下でお世話になっている者です。貴女のような方は見慣れず、佇んでいるのはお困りではないかと、外来者のよしみで声をかけさせていただきました」

丁寧言葉を選びながら女性の不信感を和らげていく。

実際に不安が解消されるかはさておき、何も知らない相手から有名であるアーリーの異名と最近街に来た者としての自分を紹介した。

お眼鏡に叶ったのか、それとも気にする必要がないと判断したのか。女性はようやく口を開いた。

「そういうことでしたの。警戒して申し訳ありません。お察しの通り、私もつい先程この街へ訪れた者です。ある場所を探しておりますの」

男を、というより性別を問わず人を惑わすような蠱惑的な声音。

ツギハギを使っている様子もなく、天然でその声帯を持っているのか女性の言葉は脳を痺れさせるような魔性に満ちていた。

随分とまたすごい人もいるもんだ、と思いながら俺は笑みを浮かべる。

「何をお探でしょう？ 良ければ案内しますよ」

「でも、どこかへ行く予定があるのでなくてはなくて？」

抱えた袋を指す美人さん。

差し入れ自体約束や予約を入れているわけではないので、基本的にいつ訪ねても問題ない。なので、こちらの美人さんを案内しても一切の問題はないのだ。

（そーですな問題ないですな〜）

（うるさいよ、黙っていなさい）

茶々を入れるサウザナに一括して、美人さんに笑みを浮かべる。

怪しいと思われるかもしれないが、それでも会話に笑顔は欠かせないのだ。

「いえ、こちらは差し入れみたいなのなので、特に予定があるってわけじゃないです。だから問題ありませんよ」

「そう……」

美人さんの値踏みは続く。

断られても残念と思うだけで問題ないが、困っているなら助けてやりたいとは思う。数秒、いや数十秒は経つただろうか。視線の圧は嵐に加えて雷まで鳴り響きそうなくらいに成長を遂げている。

周りに集まった人々は、そんな美人さんの視線に入らぬよう俺達を遠目にひそひそと雑談を交わしている。針の筵とは言われないが変に注目を集めるのもくすぐったい。

黙っていられても困るので再び話しかけようとする前に、美人さんが口元を怪しく緩めた。

「それなら、好意に甘えさせていただきますわ」

「どういたしまして。それで、どこへ行く予定ですか？」

「この街の町長さんの所へ」

「なら俺と行き先が同じですね。改めて案内しますよ」

そう言つて、美人さんと並ぶように歩き役所へと向かう。

移動することで雑踏の中に紛れ込む……ことはできなかつた。

王の通り道だと言わんばかりに、女性が足を向ける先に誰も入つて来ない。

流石に家屋や店など、建物は例外とするが遠巻きに住民達に驚きと好奇の視線が俺達に刺さつてくる。

そこまで不安がるようなものか？ と美人さんの横顔を眺める。

最初に見た時と同じく憂いを帯びた横顔だが、今はどこか口元が緩んでいる気がした。

その理由は――

「ふふ、可愛い子」

それは、美人さんの前にユカリスが浮いているからだつた。

ユカリスは気難しげな美人さんを見るなり、彼女に積極的に話しかけたのだ。やはり言葉を理解することはできなかつたようだが、花咲く笑みを向けられている彼女は悪い様子ではない。

周囲を旋回するユカリスに合わせて美人さんの顔が動くたびに、背中に流れた金髪が合わせるように浮かぶ。

金糸の束が流れて目に入るたび、その動きに目を奪われる。その動揺を隠しながら、ユカリスのことを紹介した。

「ユカリスっていう、草花の識世ですよ。何の花かは知りませんが、ちよつとした出会いがあつて、それ以来一緒にいるんです」

「羨ましいわね。こういう子が傍に居れば雰囲気華やかなものになるでしょう」

「貴女もその華やかな一面では？」

「お上手ね。でも、手に取つたら怪我をしたり目に見えぬ毒で体を壊してしまふ花も世の中にありますわ」

暗に自分に踏み込むな、と言っている美人さん。

一種の警告とも取れる言葉だが、俺には特に気にする理由はなかつた。

なぜなら、白いレースの手袋に包まれた細い指の上にユカリスを乗せて微笑む彼女を、悪い相手だとは思えなかつたからだ。

人によってはその笑みさえも怪しいと感じるかもしれない。でも俺の直感が外れていたとしても、ユカリスが話しかけるといふのなら相応に根が善性なのだと思える。

「それは掴み方が下手だっただけでしよう。それに、時に毒は薬にもなる。一件有害そうに見えても、それは活かし方を知らないだけではないですか？」

「若いのに口がお上手いなだね」

「貴女も俺と同じくらいには思えないくらいに風格がありますよ」

つといかん、今の俺は十五歳くらいだった。初対面で自分と同じ子供、という言葉は少し迂闊だった。

慌てて謝罪しようとするが、その言葉は喉で止まる。止められる。

心まで見通すような錯覚を引き起こす、その黄金の眼が俺を見ていたからだ。

怒らせてしまったか、と伺ってみるがその瞳に宿す感情は怒りよりも戸惑いが見て取れた。……戸惑い？

「私と貴方が同年代、と？」

「申し訳ありません。つい言葉にしてしまいました……」

「……………いえ、構いません。そう、同年代、ね」

ぷいと横を向いてしまう美人さん。

怒ってはいないようだが、言った俺としては何の影響を与えてしまったのかと不安に

なる。

「ちなみに貴方はいくつ？」

「えーっと……十五歳、です」

「そう」

それきり押し黙ってしまふ美人さん。

仕切り直しのための言葉はしかし、役所への到着を持って止められる。

時間切れか、と無念に思いながら俺は美人さんに目的地へ着いたことを告げる。

共に入口をくぐれば、目につく役員の全員が忙しなく動いている。アンネは僻地であるにも関わらず、よほどスピリット・カウンターの影響が大きいようだ。

「ここが役所です」

「ありがとうございます。おかげで助かりました」

優雅に一礼する美人さんに手を振って答え、俺は受付の女性に声をかけた。

「すみません、アーリーからの使いですが……これ差し入れです。良ければ皆さんでどうぞ。あと、こちらの方が町長に話があるそうなので対処していただけたら」

「いつもありがとうございます、ネムレスく……!？」

目を見開いて美人さんを凝視する受付。人目を引きすぎる容姿ではあるが、そのリアクションは過剰ではなからうか。



とりあえず用も済んだので、屋敷に帰るとしよう。残つても邪魔になるだけだしな。

「ユカリス、帰るぞ」

美人さんに寄っていたユカリスが俺の肩に止まる。

名残惜しいが、縁があればまた会えるはずだ。

そう思つて入口へ戻ろうとする俺達の背に、美人さんの声がかげられた。

「ネムレスつて言うのね」

「ええ、ネムレス・ノーバディつて言う——」

振り返つた俺は、言葉を失う。

口元がつり上がったそれは、一般的に笑みと言える形だ。

だが俺には、獲物に目をつけた狩人のそれに感じられた。

「私はリザーベル・スロットワーク・クレイドル。また会いましょう」

そう言つて踵を返す美人さん——リザーベルの姿が、俺の目に強烈に焼き付いていった。

## 24. 意外と乙女なアーリイ

美人さんを案内した後、屋敷へ帰ってきた俺はアーリイに今後の計画を話していた。境界領域に眠っているかもしれない仲間、あるいは死後の軌跡を探るというものだ。

前者ならスピリット・カウンターに利用されないため。後者はきちんとした墓参りをしたい、というものである。

自身が過去の人間であり死人や亡霊みたいなものだ。サウザナが居ればいいと思っていたが、仲間達の足跡を追いかけるために生まれ変わったとも言える。

そのために必要なのは情報だ。

アーリイが今後手広く活動を広げていくのなら、俺はそれに協力しつつ隠れ蓑になつてもらつて自分の目的を成し遂げたい。

自分が過去の人間ということは隠し、サウザナのかつての仲間に会いに行きたいという設定で俺はアーリイに内容を語る。

「隠れ蓑、ですか」

自分で淹れた紅茶を口に含みながら、アーリイはその紫色の瞳を開閉する。

カップを受け皿に置くと、その水面に少女の銀の髪が写り波紋によって歪む。

ユカリスは同じ銀髪に興味を持ったのか、俺の長い髪をうなじの辺りで縛る髪留めを解いては結ぶという微妙に気になる遊びを繰り返している。

「ああ。名声とかはいらなから、必要な時にアーリィのコネとかを借りれるようになりたい」

『面倒事はアーリィに押し付けて、その権力で自由にやりたいってそれだけ聞くとダメ男だよ』

「だまらっしゃい」

「それは構いませんが、ある程度はネムレス殿にも名声があつて損はないかと思われますよ」

「それは理解してるんだけど、足かせになるのはいらななんだ」

『ようは行動を邪魔されない権利が欲しいだけだもの。私がゴリ押ししてもいいけど、メリットよりデメリットのほうが大きいだろうしね。だからアーリィには代わりに出世してもらつて、代理者くらいの扱いを求めるのです』

身も蓋もない言い方だが、結論としてはこれに尽きる。

「俺達の探し者とアーリィの目的は一致してるんだろ？ ならお互いにメリットのあることさ。なんだつたら俺のほうでもアーリィの探してる人を……」

「ですが私は——その方の名前が、わからないのです」

目に見えてわかるように、沈んだ表情で目蓋を下げるアーリイ。彼女の目的は、言ってしまうえば人探しだった。

ただし、夢の中に出て来る、というロマン溢れるというか乙女らしいというかアーリイの意外なものを見たというか……

呆ける俺に、アーリイはどこか拗ねるように口を尖らせる。

「いえいえ、私でもどうかと思っておりますよ。ネムレス殿がそうお考えになるのも当然でしょう。世の中を知らない小娘と内心であざ笑っているのかもしれませんが、私にはその人がどうしても気になってしまうのです」

「いや、そこまで言っていないから。でもなんで何一つわからない人物なのに、剣の一族を探すって話になったんだ？」

「私の知り合いに、剣の一族の中には夢の内容を読み取り、映像化するといったツギハギの使い手もいるそうです。その使い手はすでに寿命で亡くなったそうですが、あの洞窟にヒントがある、という言葉を通じて探しておりました」

そして三年かけた結果、〈夢の名残〉<sup>リトルムード</sup>を習得した、と。

そうなるその後継者のようなものは存在せず、あの資料だけが残された技術の全てだったということかな。

ベルソーアの鉄海の除去作業の時はぶっつけ本番であったが、最近折を見て技術を

調整しているらしい。

サウザナの手助けもあり、今では成功率も七割を超えるそうだ。……三割失敗するというのも怖いが、新技術が一発成功後も延々と続くはずもないから仕方ないことだろう。

『〈夢の名残〉は物質をツギハギ化するもの。その実体は〈抽出〉の極み。なるほど、アーリーはあの隠し部屋の持ち主がその人物だつて予想してるのね』

『はい。ですので、技術を持ち逃げかつ洞窟ごと部屋を壊してしまつた私が言うのもなんですが、まずは自分を売り込めるくらいに価値を高めようと思ひます』

『そうなるよ〈夢の名残〉つてむしろ喧嘩売ることにならないか？ 盗んだ技術で有名になるつてことだし』

『とはいえ、使えるのは実質私しかいない、はずですよ。なら利用価値も生まれましょう』

『盗つ人猛々しいというべきかふてぶてしいというべきか』

『いんやー、こういう割り切つてる子ほど頼りになるわよ』

『お褒め頂き恐悦至極です』

うーん、褒めてるのかなこれ。褒めてるか。

『同じ使い手がいたとしても成長性も合わせてアーリーのほうが有用つて示してやれば、血統主義でもなければ認めてもらえるでしょう』

(他人事だな……)

(他人事ですもの)

仮にも剣の一族は俺を探す時の協力者ないしその子孫だというのなら、多少は情があつても良いような気もする。

少なくとも俺の仲間達に子孫が居れば、よしみで手伝つてやりたくなるのが人情というものではなからうか。

本体は剣と言つても識世として自我を得たのだし、その辺を融通してやつても……

(仲間だから、で全部許せるのは個人までよ。隠居してたけど少し困つてる、とかなら助けてあげるわ。でも一族とか呼ばれる組織単位まで膨れ上がったのなら、後はそいつらの問題よ。私が面倒見るのはネムレス一人で十分)

手厳しく突き放すようにも聞こえる意見だが、ある意味では正しい。

俺も代理で国を納めていたが、血の繋がりがや情で仕事が出来るほど人間は万能じゃない。

識世もまた、感情を持てば人間と同じということか。

「それじゃあ今後、リアクターの件についても情報全部明かすのか？」

「いえ、そこは慎重に選びましょう。ひとまず五領国から使者が来ると思われますので、その方を見定めて思案すると致します」

「そういうやアンネは五領国預かりの街なんだっけ。自治権とか得られないのか？」

「得ても管理出来ません。町長は事なかれ主義で、水の名産と言つてもその活かし方は私に来るまで広がりはなかった。何より、リアクターが設置されておりませんので。おかげで僻地のアンネは、ツギハギもあまり使えない上にカケラオチ一体でもかなり大騒ぎになるほどのものですし」

「一体で大騒ぎつて……」

「そこは私がリアクターを設置して以来、カケラオチが近寄ることはなくなりました。仮に出ても私が鎮圧することもありましたので」

わあ、頼もしい。

アーリイが戦う様子は見たことがないが、カケラオチ相手に街を守る程度には優秀らしい。

「アーリイ自身は五領国から誘いは受けていないのか？」

「お話はありましたが、断つておりました。あの洞窟の件がありましたので。五領国からも懸念をなくそうと人手を出してあの洞窟を調べてくれたこともありましたな」

『結果はお察しね』

「はい。むしろ断るための方便と思われたのか、外見も相まって子供の戯れ言と一蹴されてしまいましたか」

「まあ、あれを見つけるのは中々な」

「ネムレス殿とサウザナ殿には改めて感謝を」

俺達の国の技術が使われたあの部屋の持ち主が剣の一族というのは、奇妙な縁が繋がっているな。

「所詮子供と侮った方もおりましたが、色々と話し合いをした結果私を取り込む旨味がないとお伝えして、ようやく引いてくれましたね」

「色々、ねえ」

「ふふ、頼もしい味方がおられたのです。付き合い方に少々難がありますが、それをクリアしてしまえば五領国の中でも極めて優秀かつ話がわかる方です」

アーリイが極めて優秀と評するなら、本当にそうなんだろう。

今後の足跡探しにおいても頼もしい協力者になってくれるかもしれないし、機会があれば聞いてみるでしょう。

「では、ネムレス殿達は私の立ち上げる事業の社員ということだ」

「代表が子供なのは侮られるし、ダルメンは樽で顔を隠した不審者だし、ナツキは交渉にはそこまで向いてないしで大丈夫か？」

「そこを先の頼もしいお方に頼みます。表向きは彼女が代表の商会と言ったところでしょうか。実質名前だけを借りて動こうと思います」



「……………そこまで引き受けてくれるのか？」

「メリットがあるなら、必ず。五領国での発言力をさらに増やせることでしようし」

『当然のようにナツキとダルメンを取り込んでるけど、いいの？』

「話せばわかる、はず。駄目なら俺とサウザナにユカリス、アーリィの四人でやっとう。あ、でも俺達の裏向きは荒事担当、みたいな感じで行きたいんだが」

『ナツキ達を誘うのも、それが理由だしね。裏でこそそそきたいのよ、私達』

俺の目的は仲間の足跡を見つけることと、スピリット・カウンターとして利用されないことだ。

墓があればその場所にリアクターを設置する。境界領域に漂っているのなら、サウザナがしてくれたように絶対に見つけてみせる。

広域に捜査するにも権力は必須だが、有名になりすぎて身動きが取れなくなっても困る。なので、裏方を主に担当して時々自由行動で目的を果たしてみせる。

「それじゃあまず、アーリィがその五領国の使者との話し合いを成功させるのが先か」

「町長によれば、五領国を出発した使者殿が到着するのは三日後とのことです。その時に話す計画を練ると至しましょう」

『プレゼンテーションねー。〈夢の名残〉も惜しみなく説明しちゃうの？』

「それは五領国に赴いてから、と言いたいところですが、使者殿の反応次第ではそれも明

かすとしましよう」

『いざとなれば私も手助けするから、ひとまずアーリイが出来る限りやつちやいなさいな』

「頼もしいお言葉に感謝を」

本当に頼もしいから、詰まった時にでも頼ってやってくれ。

「ナツキとダルメンに話を通していかないとな……」

『じゃあ私とアーリイはもう少し話を詰めましよう』

手を首に伸ばして、まだ髪で遊んでいたユカリスを掴む。

何か言っているようだが、相変わらず俺にはわからない言葉だ。けれど残念、みたいな表情をしているのを見れば遊びの時間は終わりと理解しているのだろう。

手の平に乗せたユカリスをアーリイに預けて、俺はまずナツキに話を通すべく彼女の部屋へと向かった。

## 25. ナツキとの特訓～上手な剣の付き合い方～

少女の苦悶の声が荒々しい息遣いと共に吐き出される。

汗塗れの体が地に沈むことで恵体が土に染まり、その白く綺麗な肌が汚されていく。それらを冷たく見据えながら、俺は右指を立てた。

習うように少女、ナツキの体が上空へと引つ張り上げられる。誰かの手を借りることなく空へ舞い上がるナツキの可愛らしい顔は、悔しさを堪えきれない渋面に満ちていた。

〈雷道らいどう〉による加速の道。決められた射程距離の中を雷のごとき速さを求めて移動するそれを、俺はナツキの上に向けて作つたのだ。

そうすることで強制的に彼女は空へ飛ばされる。道は何も左右や東西南北だけでなく、上下にだって対応される。

急激な重力と方向転換に三半規管を揺らされるナツキの目は、それでも意志を損なわない。どうか一矢……いや打倒さんとする意気込みが伺えた。

けど、それだけじゃ俺には届かない。

「ほい、十本目。今日のメインはツギハギな」

「んああああああああああああああああ！」

べしやりと急降下。

大の字に倒れるナツキは〈雷道〉がもたらす下方の圧力から立ち上がることができず、うめき声をあげるだけ。

「キラビヤカ使えよ。それでツギハギを斬るか無効かするんだって」

「そ、そんなこと言われましても……」

「剣の性能にこだわらないって考えがまだ残ってるのか？ 悪いことじゃないし、心意気は買うけどこないだみたいなのが起きたら、ただの剣じゃ対処できないだろ？ その時のための訓練なんだよ、これは。相手によつて変えればいい」

今後の計画を話し合い、ナツキにも協力してもらおうと部屋を訪ねた結果、彼女と特訓を再開することになった。

先日から打ち上げられた魚のように体を跳ねて無力感アピールをしていたナツキ。息抜きをしてから話したほうがいいと判断したのだ。

あの時のナツキに足りなかった攻撃力と移動手段を徹底して欲しい、という縋り付きを快く請け負い、今に至るのだが……

「ツギハギが苦手だからつてしない理由にはならんぞ。今みたいに拘束された時の手段に弱い。〈雷道〉はそれなりに使いこなしてるのに、どうして他が駄目なんだか」

「普通、拘束されたら動けません……」

「それをなんとかするのがアバターやアクターさ。第一、剣がないからって戦力にならないじゃお話にならないだろ」

自分が望むルートのまま強くなれるなんてそうそうない。

むしろ、ナヅキはキラビヤカという手段を得たことが幸運なことなのだが、それを理解していないほど抜けてるとは思えない。

だからナヅキと十本勝負して、勝ったら剣術とツギハギ、どちらを重視した訓練かにするという賭けをしたのだが、結果はこの通りだ。

「むー、体術だつてネムレスさんに負けてないのに」

「それは認める。おおよそ接近戦でツギハギなしなら俺は負けるしな。でも、俺だつて負けっぱなしじゃいられない、ぜー！」

「ほつと」

不意をつくように木剣で突くが、先程まで打ちのめされていたと思えない俊敏な反応でナヅキが反撃してくる。

先日よりもキレがかかった防御をかくぐる斬撃によって、木刀が俺の体を打ちのめす。痛みに歯を鳴らしながらも、咄嗟に顔を狙う刺突を木剣でそらす。

「上手くい——」

「残念、 匣です」

木剣の持ち手にナツキの手が添えられる。

まずい、と思つた瞬間腹部に鈍痛。木剣の柄が腹にめりこんでいた。

されたのは単純、持つている木剣をナツキに押されただけだ。ただ、絶妙な間合いによつて行われたそれに、一瞬だけ動きを止めてしまった。

その躊躇の間に、ナツキの木刀が首に添えられる。勝負、ありだ。

「くっはー、俺だけの技量じゃまだ遠いな」

「エインのとこだと、サウザナさんの助けがあつたんですか？」

「剣戟したかつたらしい。主導は俺だけど、補助にサウザナの動きがあつたのは否定しない」

「確かに、こんなあつさり一本取れるくらいですしね。ちよつと胸がすきました。それでも、ツギハギ合わせると逆転されるんですけどね」

「試合とかならともかく、ナツキは実戦でそれを貫けるほど強いわけじゃないしな」

「うぬう、否定したいのにできない」

木刀を俺の首から離し、苦虫を噛み潰すような表情を作るナツキ。理解しているが、納得はしたくないといった具合か。

そういうのが許されるのは、サウザナのように理不尽とも言える強さを持った奴ら

だ。

あいつ、いくつ抜剣出来るか知らないけど大抵の奴なら一撃で倒せそうだし。

頼もしい反面、持ち手の俺がいらぬ子にならないために、こうしてナヅキとの特訓で剣技を磨かないと。

俺がツギハギで一本、ナヅキが剣技で一本と最近の勝負は交互に勝利を重ねている。数えてはいないが、大体勝率は五分五分だ。

ナヅキから言わせれば俺が縛りを設けているから全敗だそうだが、向上心が高いのは何よりである。

「よし、それじゃあ前のおさらいな。とりあえず適当にツギハギを作ってみろ」

「はい」

以前馬車の中で説明したこともあり、基本骨子となるタンクルの円がナヅキの掌の上に浮かぶ。

ここまではタンクルを扱えるなら誰でも出来ること。ここから素材の組み合わせが十人十色のツギハギとして作られていくのだ。

適当というだけあって、ナヅキのツギハギはすぐにできた。

「ネムレスさんネムレスさん、こんな感じ？」

「どれどれ、見てやろう」

子犬のようにこちらへ寄ってくるナツキが作ったツギハギの詳細を調べて、俺は絶句する。

二の句が継げない俺の目に浮かんだナツキの構成は、そのすごく彼女らしかったのだ。

〈すごいパワー〉へまあまあ伸びる〉へどかーん！〉という三つによるツギハギで、遠距離攻撃を可能とするタンクル弾でも作ろうとしたのだろうが、素材にどう突っ込めばいいのか悩む。

〈威力〉〈射程〉……〈爆発〉ないし〈起爆〉だろうか。とにかく吹っ飛ぶことをイメージして作られているようだ。

自分と他人じゃ作り方も感じ方も違うといえ、ツギハギに関しては語彙力がぐんと下がっている。

「ナツキってこんな緩い子だったのか」

「ネムレスさーん、どうなんですか？」

「あー、まあうん。個性的で良い具合」

「ホント？　へへ、褒められちゃった」

嬉しそうに笑うナツキになんとも言えず、俺は笑顔で彼女のツギハギを褒め称えた。

何かを教える時には褒めることはとっても大事なのだ。



「とりあえずそれを俺に撃つてみてくれ」

「はい」

言われて、生み出したタンクル弾が俺に放たれた……のだが、一部がによいーンと棒のように細長く伸びて迫ってきた。

速度もそんなに早くないし、ゆっくりと向かってくるさまはいつそ笑いすら浮かぶ。

おそらく「まあまあ伸びる」が文字通り伸びてしまっているのだ。

今の感情を努めて顔に出さないようにしながら、俺は「威力」「爆発」「相殺」のタンクル弾を伸びる棒に投げた。

ぱんつと泡が破裂するような音を立ててタンクル弾が互いを消していく。一応、「すごいパワー」と「どこカーン！」の素材は当たっていたようだ。

確認を終え、ナツキのツギハギを評価する。

「まあまあ伸びる」が文字通り伸びてくるとは思わなかったけど、他は及第点だな。いや、発想力って点ではいいセンスだ」

「ほんとはですか？ お爺ちゃんは笑うだけで具体的なこと言ってもらえなかったの、褒めてもらえて嬉しいです！」

お爺ちゃん……「雷道」教えるのも苦労したんだろうな。

「でも「距離」……つまりツギハギの射程範囲に関しては基本的なことも覚えような。せ

めて〈速度〉を入れておかないと、あんなの避けるまでもない」

「確かにあれは遅かったですね。歩くほうが、とまでは行きませんが普通に斬りかかったほうがずっと早いです」

「〈雷道〉はちゃんと〈距離〉が使われているはずだろ？　どうしてタンクル弾だけこんな風になってるんだ」

「〈雷道〉はなんとというか、自分の足で動いてるってイメージ強いので、駆け抜ける！　っ  
て気持ちでやってるんですよ」

「ツギハギに関しては極度に感覚派なんだな。剣術は割と技巧派なのに」

「アリユフーレラインから素材を自分に落とし込む、つてのがすでに感覚的なんですけど……」

「そうか？」

「ネムレスさんのやり方は媒介を全く必要としてません。むしろよくそのやり方であんなたくさんのツギハギ覚えられましたね……」

「まだ過去と未来という感覚のズレが残っているようで、俺のツギハギ習得法にナツキは感心と興味を抱いていた。」

「ナツキの興味に関してはいいつももの言い訳を使う。」

「サウザナからそう教わったからな。ナツキは違うのか？」

「はい。お爺ちゃんが〈雷道〉の構成を教えてくださいましたので素材とかそういうのはあんまり意識してませんでした」

ダルメンに〈穿つ羽ツインケル〉を教えた時のように、今の時代は直接渡す方法が主流のようだ。便利になった反面、今のナツキのように独自に覚える場合は苦労しそうだな。

〈まあまあ伸びる〉は俺からすれば〈伸縮〉になるのだが、タンクル弾に棒をつけるようなナツキのあれは、鈍器として使えなくもない。

「でも可能な限りパワーを入れ込んだはずなのに、あっさり消されちゃいました」

「タンクル量はナツキより俺のほうが多いからな。コップと樽なら、どっちがより多く入るかなんて聞かなくてもわかるだろ？」

よほどタンクルと技量に差がなければ相手の攻撃は〈相殺〉の単一で効果を打ち消す事はできない。

そのため普通にツギハギを使うアバターからすれば、相手の構成を把握するのは非常に重要なことと言える。

何せ一つでも見落としていれば、〈相殺〉出来ずに自身を襲ってくるのだから。

ただ、ツギハギの暴発を起こすという点なら〈相殺〉で構成を見出して自壊させればいいので、戦闘において〈相殺〉の使い勝手は良い。

「そ、そんなに私とネムレスさんのタンクルに差があるんですか……」

「今のは例えであってナツキのタンクルはコップほど小さくはないさ。一般的なツギハギ使いの相場は知らんけど、〈雷道〉を連発出来るんだし思っているほど少ないない」  
ナツキとて〈雷道〉を使いこなしているのだから、ツギハギが苦手ということは決して無い。

感覚派ということも合わせると、単に他に興味がないだけかお爺ちゃん直伝の〈雷道〉に特別なこだわりがある、ということだ。

「さっきのタンクル弾作りもだけど、ツギハギの構成を勉強するってことは応用に繋げるための基本だ。さっきのタンクル弾を〈雷道〉で加速させてやれば十分凶悪だしな。ってか『速さ』を得るってのは限りない万能だぞ。今のナツキは剣だけを〈雷道〉で加速させてるけど、腕や腰、足捌きなんかにも細かく使えばもつともつと強くなる」

「う、腕とかもですか？」

「関節部分から噴射させるようなイメージだな。その状態で〈雷道〉の突きをしたらどうなる？」

「元々の速さに加えて、ツギハギとしての効果が加わる……」

「その通り。そういった細かな制御力の特訓でもあるんだよ、こういう基礎的なやつは」  
「はー、そう言われるとツギハギって大事ですね」

「どこか他人事のようにだが、納得してくれるならまあいいか。」

その後も基本を重点的に置きながらツギハギの解説と実践を行い、ナツキのタンクルが尽きた所で休憩となった。

息を荒らげるナツキにタオルを渡しながら、一緒に持ってきた水を渡す。

アンネの良質な水は疲れた喉を潤し、普段よりも旨味を感じて胃に送られた。

「はあ、これじゃお爺ちゃんに届くのはいつになるか」

「そう言えば、ナツキがこうして特訓してるのって、そのお爺ちゃんを超えたいから、ってことか？」

「はい。あの人の剣に魅せられたってこともありますが……そうですね、ただの『私』として、お爺ちゃんに並びたいんです」

「その『私』ってのが、キラビヤカを使わない理由か？」

「うっ……………」

「どーせ自分の力じゃないから追いついたと思えないとか、そんなこと考えてるんだな」  
押し黙るナツキ。どうやら凶星のようだ。

キラビヤカを手に入れた時から言っているが、こいつの考えは合っているけど見当違いでもある。

「そもそも相手は何十年も自分を磨いて強くなってるんだろ？ そんな相手に並びたいとナツキは思うわけだ」

「はい。私の人生の目標と言ってもいいです」

「まだ十年ちよつとしか生きてないナツキが普通は追いつけるはずがない。ならその経験値を埋めるために、色んな手段を試すのは悪くないぞ。持っているのに使わない、なんて贅沢出来るほど恵まれているのか？」

「それは、わかつています。キラビヤカを使えば私の力になるというのはわかつています。おぎなりににはしていません。ただ、私は……」

「お前の考えは立派だよ。けど現実には理想通りにはいかないんだから、色んな手を使つて目的にたどり着くんだけ。それは別に恥ずかしいことじゃない。それを卑劣とか言う奴がいたら俺がぶつ飛ばしてやる」

口を開閉させるナツキだが、続く言葉は出てこない。

ナツキ本人はその理屈がわからないわけじゃないだろう。何やら込み入った事情がありそうだ。

「依存してしまうか、不安なのか？」

「その辺の割り切りはできます」

「じゃあどうして」

ナツキはたつぷりと時間をかけて、爆弾発言を落とした。

「だって、キラビヤカを選んだら恋人として見なきゃいけないじゃないですか」

「……………は？」

「私には目標があるし、そういうのはまだいいかなって」

「待った待って待とう」

衝撃発言に動揺しながら、俺はひとまずナツキの両肩を掴んでじつと目を見つめる。

ナツキの黒い瞳は、俺の行動に驚いたように丸くしている。驚くのはこっちだよ。

「なんで、キラビヤカを使うことが恋人に繋がる」

「剣には愛情を持つて接するものでしょう？ キラビヤカみたいな武器はいずれ識世に

なると思いますし、そういう接し方しないと力を発揮しないのでは？ 現にネムレスさ

んとの特訓やカケラオチ相手ではタンクフルブレードとしての性能しか発揮出来ません

でした」

「俺に分かる言葉で話してくれない？」

「共通語喋ってますよ」

「そうじゃなくて、どうしてその理屈でキラビヤカを使うんだ！」

「お爺ちゃんが……」

「その先はいい、察した」

俺の中のナツキのお爺ちゃんが、古強者で貫禄のある老人からボケ老人になってしま  
う。

ナツキはまだ子供だし、お爺ちゃんお婆ちゃんつ子でもある。

尊敬する人物からの教えに一切の疑いを持っていないのは、これまでのことでよくわかってる。

「武器に愛情を持つて使うというのはよくわかる。俺だつてサウザナを大事にしているしな」

でも、そういう見方はまた違う。ナツキが今までキラビヤカを使った時、恋人に触れるような大事さで使っていたのかと聞かれたら首を傾げる。

「いえ、あれは友人と遊ぶようなもので。本格的に付き合うとなるとまた違うじゃないですか」

「言い方はあれだが、ナツキにとつて剣術つてのは遊びなのか？」

「そうですね。コミュニケーションの一種、みたいなものだと思います。ネムレスさんとの遊び特訓でその人となりも少しずつわかってきたとも。けど、お爺ちゃん相手に余人を交えるとなるとどうしても気持ち分散してしまつて」

「……………つまり、ナツキは武器の一つ一つを生物、いや存在として認知して接しているということか。」

世界融合による識世の台頭が生んだ考えなのか、お爺ちゃんとやらの教育の賜物なのかは不明だが、ナツキが武器に対してそういう考えで接しているということはわかつ



た。

「ちなみにキラビヤカはどういう感じだ？」

「誰とでも合わせられて、広く浅くの付き合いをしている剣ですね。まだお互いに深く触れ合ったことがないのではないのでしょうか」

「その細剣や木刀は？」

「共に育った家族のような存在です。細剣は傍にいて一緒に安心できる剣で、木刀は私の無茶を引き受ける頼もしい剣です」

剣を使った人格占いみたいなことを言い出すナヅキ。

まだ識世にも至っていない武器に対して恐ろしい予測である。

……上昇志向は強いが、掃除洗濯などの家事万能でどこへ行っても安心できるまともな少女だと思っていたナヅキはもうそこにいなかった。

キラビヤカを使えばそれは自分の力ではない、というのは本心だと思う。

でもキラビヤカを手に入れた時の言葉は建前で、本当は自分が使い込むに相応しい武器ではないと思っていたから、中々使おうとしなかったというのには真実だろう。

逆に言えば、ナヅキは識世でなくとも意志を持った存在として武器に接している。

道具を大事に使うという意味では間違っていないはずなのに、どこか違うと言いたくなる。

「つまり、お爺ちゃんに追いつくためには自分だけの武器、共に連れ添い信頼できるパートナーじゃなければ一緒に強くなれないってことか？」

「すごい！ この話をしてきちんと理解してくれたの、ネムレスさんが初めてです！ やっぱり識世を相棒にする人は視点が違うんですね！」

なんか理想が高くて行き遅れになりそうな思考だな、とは言わない。

子供だからこそ見れるものだってあるだろうと、悟りの笑みでナツキの肩を叩いた。怪訝そうな顔をするナツキだが、何も言わないで欲しい。

「空を飛ぶ相手と並びたいからって、自分が空を飛ぶ必要はないさ。空を飛べる手段を用意してやれば自然と同じ結果になる」

「空を飛ぶんじゃないかって、飛ぶ手段？」

「人間には鳥みたいな翼がないから空は飛べないけど、ツギハギとか紋具とかを使えば空を飛ぶことも出来る。だからナツキの考えは、人間が鳥になりたいって言うようなものなんだ。コミュニケーションっていうなら、やり方に固執しちゃ伝わらないぞ？」

「……………お爺ちゃんは、どう思うかな。違う手段で私が近づいたら」

「ナツキの大好きなお爺ちゃんは、自分を慕う孫が一生懸命頑張った結果を拒否したり一蹴して無意味とかって言う性格か？ 同じことをして、同じ結果を出さないと認めないほど狭量なのか？」

「違いますー！」

「なら後はナツキの心構え次第さ。えてして理想は届かないから、少しでも現実で頑張つて近寄るんだ。だからナツキは同じやり方じゃなくて、ナツキ独自のやり方で追つていけばいい。異なる歩みでお爺ちゃんに並べたその時は、二人が納得できる結論に至るって思う」

「ネムレスさん……」

「しまった。理想に届かない、とか未来ある若者に言う言葉でもなかった。

少し気恥ずかしくなつて手を叩いて気を紛らわせる。

そのことを察したのか、ナツキは苦笑を浮かべて俺を眺めていた。

ええい話題変更っ！

「ちよつと試したいツギハギがあるんだけど、使つていいか？」

「別に構いませんけど、別に私に許可を取る必要ないので？」

「あるんだな、これが。それで、どうだ？」

「別に構いませんが……」

許可は取れたので、俺は早速それを行使する。

素材は〈威力〉〈変化〉〈色彩〉〈支配〉の四つ。

そうして生まれたタンクルは人の形へ変えていき、やがてナツキと同じ外見を模した

ツギハギとして生まれ落ちる。

呆然とするナツキに、俺は胸を張って答えた。

「……………え？」

「ツギハギでナツキを作って、分身として扱うんだ。動きを覚えさせて影にすれば、成長を実感できるだろう？」

その分精密な操作が要求される。

同じ動きをする分身は簡単で、別々に動く分身を作るのは至難だ。相手の動きを模倣となるとその難度は極難と言える。

制御と速さに自信のある俺でも、手動で動かすのは大変だ。自動かつ学習を促進させる素材があれば別だが、そんなものはそこらに転がってはいないだろう。

(一動作だけを繰り返すだけなら、いけるかな?)

やはり繰り返しによる比較が一番か。

そんな風にナツキを模したツギハギの利用方法を思案していると、呆けていた彼女は自分そっくりのツギハギを見て己の体を抱きしめて怯えたような声を出す。

「ツ、ツギハギだからって私に何する気ですか!？」

やだ、この子妄想力高すぎる。

わざわざ修行に使おうとしているのに、真っ先に浮かぶのがそっちかよ。



「できるぞ。人型に比べりゃ簡単だし」

「では、その剣型にしたそれを、私の技量で振るうというのは」

「俺がナツキの動きを完璧に再現出来れば、可能だろうな」

「数を増やせますか？ もちろん、同じ動きを維持したまま」

「人型に比べればタンクル量の節約になるけど、同時となると制御力の問題になるな。」

「ようは一人で複数の剣を動かすってことだろ？」

「はい。そして出来なくはない、と？」

「ああ。タンクル弾の同時制御をさらに難しくしたようなもんだ」

「そう言って、顎に手を当てて黙り込む。」

ナツキが何を思っているのかわからないが、目的を以て尋ねているのは確かだ。

「けど複数の剣を動かす、か。」

「数多くある抜剣ブレイドを性能そのままに同時起動とかロマンがあるな。」

「融合させることは出来たのだし、並列行動による剣軍……動かせる数に限りがあるから剣隊つてところか。」

「それを常時起動させて対多数における戦術として考えてみるのもありか。」

「考えればみれば中々良い案に思えた。」

スピリット・カウンターの噂が収まる時間がかかるだろうし、その事前訓練として取

り入れてみようかな。

「ネムレスさん」

「なあ、ナツキ」

同時に言葉が紡がれる。そこに特訓の疲れは微塵も感じさせない。

目が合い、軽く笑いながら俺は先んじて言った。

「試しで一本作ってみよう。それと打ち合ってもらつていいか？」

「打ち合うだけなんて生易しいですね。叩き折つてあげましょう」

ほう、サウザナのことで剣が折れるなんてものを許さないと自負している俺にそんなことを言うとは流石の自信だ。

剣術だけなら圧倒的白旗宣言であるが、ツギハギがありならそう簡単に負けてはやらん。

「でも、ネムレスさんがここまでやってくれるなら私も覚悟を決めないと、ですね」

普段の細剣とは別に腰に帯びたキラピヤカを抜き放つナツキ。

彼女のタンクルによって作られた刀身が展開され、挑むような目つきで俺を射抜いてくる。

タンクルの扱いに対して意欲的になつていようで何よりだが、あの持論が根底にあると思うと素直に賞賛できなくなるのは気のせいか。

「付き合う覚悟を決めたのか？」

「……少なくとも、私のわがままを聞いてもらっているうちはこちらもそれをするのが礼儀かと」

「広く浅くとは言うけど、逆に言えばそれはナツキ次第でナツキだけの武器になる可能性を秘めてるってことだ。簡単なようで割とじやじや馬だと思うから、しつかり付き合っていくといい」

「そうなたら、使わない理由はなさそうです」

ナツキの分身の形を変えて一本の剣……元のサウザナを想起させるイメージのタンクルブレードを生み出す。

構成は〈威力〉〈変化〉〈耐久〉〈射程〉の四つ。

威力を与え、剣の形に整え、折れぬために補強し遠隔操作のための射程範囲を取り付ける。

細かな補強は打ち合いながらも追加していけばいい。

「慣れたらすぐに追加していいですから」

「ああ。そうさせてもらう」

「では……ネムレスさん、よろしくお願いします！」

笑みを浮かべていると、ナツキが笑顔で礼を言い——即座に〈雷道〉による加速の乗っ



た一撃が放たれる。

ナヅキの〈雷道〉に干渉して俺にも視認出来る速さに減速させたキラビヤカをタンク  
ルブレードで迎え討ち、試作の特訓が開始されるのであった。

## 26. 欠片文字（ピース・サイン）

ナツキとの特訓は、体力の続く限り一日中続けられた。結局今後の話が出来ず仕舞いである。

翌日も元気に朝から俺の部屋に強襲して特訓をせがむナツキ。この体力お化けめ。

残念ながら今日は用事があると告げた俺は、サウザナにナツキへ今後の話をするよう言付けてユカリスと共にダルメンが泊まるエプラッツの宿を訪ねていた。

サウザナの協力でちよつとしたお土産を用意したので、気に入ってもらえると嬉しい。

食堂は相変わらず盛況で、エインやその他の従業員の元気な声が木霊する。惜しいが目的はこちらではないので、俺は裏口から宿へ入る。

他の従業員にダルメンのことを告げて案内してもらい、一室に到着する。

ごゆつくり、と頭を下げる従業員に礼を言つて、俺は部屋の扉をノックした。

「ダルメン、俺だ。ネムレス」

「ネムレス君か、今開けるよ」

重低音で張りのある声が扉越しから聞こえてくる。

ドアを開くと、俺よりも頭一つは高い大男が姿を現した。

普通ならその体型に驚くところだが、彼の驚く面はそれだけではない、というか圧倒的な一つが全ての興味を集中させている。

「ん、少し模様変えたか？」

「化粧というやつさ。エイン君が施してくれた」

「少し書き足しただけっぽいけどな」

それは、樽。

そう、ダルメンという男は頭に樽を被っているのだ。ツギハギでも使っているのか、言葉は遮られることなくその声を耳に届かせる。

初見では不審者にしか見えない彼だが、接してみればその実穩やかな性格でジョークも嗜む紳士的な男。第一印象さえ突破してしまえば、比較的良い奴なのである。

俺は改めて入室して鍵を掛けると、備え付けの椅子に座った。

「それで、本日は何用かな？」

「あの子のことが少し気になってな。この宿が悪いってわけじゃないけど、秘密を隠すならアーリーの屋敷に来たらどうだ？ あいつなら喜んで部屋貸してくれると思うけど」

俺が部屋を訪ねた理由は、ダルメンが持つ秘密のことだ。

とある秘密を抱えたダルメンは、その解明のために旅を続けてこのアンネの街へ流れ  
てきた。

到着と同時に起きたハプニングのせいで色々あったが、それでこうして知り合えたと思えば良縁と言えよう。

「言葉はありがたいが、わたしはここで構わないよ。最初に迷惑をかけてしまったのはわたし自身だからね。多少お金を入れてでもお返しはしたい」

「律儀だな。まあこれは建前で、今日は仕事の話とへ理に潜む理<sup>フアレント</sup>を教えに来たんだよ。あの子の特性を考えれば、ほぼ一日中でも維持できるだろう？」

「仕事？」

「こそ。でもまずはへ理に潜む理<sup>ム</sup>だな。ダルメンとしてはそっちのほうが大事だし」  
「それはありがたいと言えはありがたいが、いいのかい？」

「俺としても見過ごすわけにはいかないからな」

「そうか、嫁入り前の少女の体を弄んだ罪悪感というわけか」  
「そういうこと言うのやめてくれない!？」

嘆きの絶叫を笑いで返すダルメン。こいつ、割と遠慮がなくなってきたな。

それだけ慣れてきたと思えば嬉しいものだが、こういうからかい方は勘弁して欲しいものだ。

何せ真実はともかく事実として俺はダルメンの言うことに心当たりがあるのだから。

「生きているのか確認しただけだろうが」

「死んでいるのか確認しただけでもある」

そう言つて、ダルメンは己の体を割った。

正確には、上半身と下半身に分かれた。

切断されたわけでもなく、蓋をするようにダルメンの体は中が空洞となつているのだ。

なぜなら彼は識世。一般的に無機物が自我を持ち新たな生態として世界に誕生した新種族。人ではなく、樽から人格を得た存在なのだ、

「ここから、あの子を出すなら事前に言つてくれ。びつくりする」

「ネムレス君なら一発で慣れると思つたのだが」

「外見がなまじ人なんだから、人体分離ショーをそう簡単に慣れてたまるか」

軽口を交わしながら、ダルメンが中に入っていたもの——薄紫の髪をした、十代半ばと伺える少女を俺に手渡す。

風呂場で出会つた時と違い、きちんと服を着せられているのは目に優しい。

両腕の中に抱えた少女の体重はない。

まるで空気が形を作っているかのような軽さでありながら、確かな人肌の感触が腕を

通して伝わってくる。

これがダルメンの秘密。

樽時代の時に突如中に入れられたという、正体不明の少女。

サウザナの推測ではツギハギで作られた、実体のある幻という彼女の正体は未だ明かされていない。

「進展はあったのか？」

「報告待ちと言ったところか。闇雲から指向性が定まっただけかなりの前進さ」

俺は少女を横抱きにしたまま、そのか細い右手に触れる。

これから行う作業は、ツギハギの受け渡し……というより〈付与〉のようなものだ。

彼女の体がツギハギで構成されているのなら、効果を与えてやれば自然と作用するのではないか。

実験の意味もあるが、成功すれば彼女の安全性もより高まることだろう。

「ちよつとベッド貸してくれ。地面や空とかと違って雑に出来ないからな、集中してやりたい」

言つて、少女を抱えてベッドに寝かせる。

椅子を借りてから彼女の手の平を持ち上げ、指先から発するツギハギの光を這わせていく。

文字を記すように、〈理に潜む理〉の効果を持つ呪紋を描いているのだ。丸が二重になつた簡易なものであるが、その中心に少女を示すマークを記していく。

「おお、大した技術だ。そんなものを一体どこで」

「昔、仲間に教えてもらったんだよ。サウザナみたいに凄い奴らばつかでな。俺は教わるばかりで着いていくのに精一杯だったよ」

最終的には追いつけなかつたんだけどな、と苦笑しながら少女の手に呪紋を刻んでいく。

かつては単純に〈強化〉や〈鋭敏〉など五感や肉体の強化に使っていたが、文字を刻むという行動はそれだけで汎用性が高い。

欠片文字（ピース・サイン）と名付けられたそれを、俺は消耗の問題で最大限に使いこなすことは出来なかつたが、この子のタンクルなら問題なく機能するはずだ。

〈穿つ羽（ツインケル）〉をダルメンの譲渡するさいはアーリイに介入してもらつたが、俺が仲間からツギハギを受け取る時はこの方法が多かつた。……自力でツギハギを覚えるのが難しかったとも言うが。

俺はこれをよく設置罫として使っていたが、ツギハギそのものと言える少女なら消えることなく取得することが出来るだろう。

「本当は〈理に潜む理〉みたいな高度なツギハギを一文で描けるほど高性能じゃないんだ

けど、そこはサウザナが調整してくれてな。その効果を発揮する〈欠片文字〉を開発してくれた」

「わたしは初めてその存在を知ったよ。流石はサウザナ様だ」  
(今の時代はあれが基本で俺のやり方はもう使われていないのかもな)

紋具(メダリオン)も発達しているし、もっと簡易で強いツギハギだって開発されているはずだ。いわゆる時代遅れの方法だろう。

寂寥感を胸に閉じ込めながら、〈欠片文字〉の執筆を終える。

同じ模様をダルメンの手にも刻み、連動して起動出来るようにしてひとまず作業を終える。

「よし、試してみれくれ」

「わかった。〈理に潜む理〉」

ダルメンの右の手の平が淡い光を灯す。

同時に、ベッドの上で眠る少女の体が徐々に透けていき、やがて完全に見ることができなくなった。

ふう、と長い息をつく。久々だったが、上手くいって安心した。

効果を確認したのでツギハギを解除し、少女の姿が再び現れる。

「凄まじいものだね……」



「これはあくまで使えるようにしただけで完全じゃない。時間が経てば消えるかもしれないから、これから構成として定着させなきゃな」

「紋具のようなものだね。アーリイ君に手伝ってもらえばいいのでは？」

「おっと、そのアーリイ絡みで話がある」

俺は今後の計画をダルメンに打ち明ける。

自分は裏方として動くので、表向きダルメンやナツキがアーリイに従って色々動いて欲しい、と。

するとダルメンは実にあつさりと了承してくれた。

「コネを広げるといふのは、わたしにとっても無駄ではないからね。探す範囲が広がるなら歓迎こそすれ否定することはないさ」

「なら歓迎するぜ。話を戻すけど、ダルメンはアーリイにこの子のことを話すのは賛成なのか？」

「構わないよ。アーリイ君の〈夢の名残〉と彼女の現状。その元々の使い手の痕跡を探すというのは、わたしにとっても有用かもしれない」

「危ない目に会うかもしれないぞ」

「いざとなったら君達に任せよう」

「おいおい、責任転嫁しないでくれよ」

「いざとなれば、さ。可能な限りわたしは自分でやるが、どうしようも出来ない時は素直に頼らせてもらおう」

「はは、良い性格だ。……それじゃあ最低限、俺に出来る限りの処置をしようかね」

アーリーのような専門家には及ばないが〈欠片文字〉で出来る限りはしておこう。改修を投げっぱなしとも言うが、一度自分がしたのに途中で投げ出すのも彼女に悪い。

作業を再開しようとする、ユカリスが興味深そうに少女を眺めていることに気づく。同時に、ユカリスの体に刻まれた紋様にも。

（そう言えば、ユカリスのこれも〈欠片文字〉か？ 俺以外に使い手がいる……いや待て、この子は識世で、あの山はサウザナが結界を張って人を寄せ付けないと言っていた。……どうということだ？）

唐突に生まれた疑問に、俺は思わず手を止める。

そこにダルメンの不思議そうな声がかかった。

「どうかしたかい？」

「ユカリスのことを少し考えてた。この子も〈欠片文字〉が刻まれてるんだなって」  
きよんとするユカリスをそっと持ち上げ、白い服の上に透明な衣をまとうユカリスの部分的にはだけた肩から覗く紋様に注目する。

肩から胸……おそらく腰にまで到達しているであろう模様が不思議と気になる。

この子の作業が済んだら、調べて見るのも面白いかも。

「ネムレス君。良ければ〈クロツシング〉も刻んではもらえないか?」

「と、いうと?」

「いざという時に連絡や視界の共有が出来るというのは、とても頼もしいからね。オンオフはわたしの自由に来るなら、プライベートも保証される」

「ダルメンの口からプライベートって聞くとなんか不思議だな……」

「わたしにだって個人の時間くらいあるよ?」

「食事だろ」

「食事だね」

美味しいものを食べて心を豊かにするのは良いことだ。

例えどうやって食べているのかとか気になるが気にしてもいけない。きっと少女のエネルギーとして蓄えられているんだ。

「じゃあ一緒に書き込んじゃうか。ダルメンはあくまでスイッチの切り替えだけで、ツギハギを刻むのは全部この子にする」

「仮に〈クロツシング〉を彼女に刻んだとして、使えるのかい? わたしの化粧(からだ)で見えなくなるのでは」

「〈クロツシング〉は物理的に防ぐものじゃないから大丈夫。いざとなればサウザナを仲

介すれば変なジャミングが入ることもないだろうし」

「それなら安心だ」

その台詞には、サウザナへの絶対的信頼が伺える。

愛剣が尊敬されているのは気分が良い。

「いや少し待つて欲しい。仮にわたしがその子を置いたまま別行動を取ったときにも、  
〈クロツシング〉は起動するのだろうか？」

「……ダルメンのツギハギがこの子のタンクルを使っていたのなら、多分〈穿つ羽〉も合わせてこの子の中に素材が使ってるんだと思う。一応検証してみようか。ついでに〈イ  
メージボイス〉も書き込んでおく」

「よろしく頼む」

そうやって時間をかけて、新たに〈クロツシング〉の〈欠片文字〉を刻んでいく。

寝入る少女に悪戯をしているような気分になってくるが、妙な気持ちは抑えろ抑え  
ろ。

「それじゃあテストしてみるか。ダルメン、使ってくれ」

宣言と同時に、俺の網膜に簡易なデザインとなったダルメンと少女が表示される。

俺の〈クロツシング〉はサウザナが現代風にアレンジにしたと言っていたから、わかりやすくしたつもりだが、ダルメンはどうだろう？

「一旦扉の外へ……声、届いてるか？」

(ああ、問題ない)

無事に〈イメージボイス〉も機能しているようで何よりだ。

「よし、それじゃあ適当に外で過ごしてくれ。持続時間や効果範囲が問題ないか調べよう」

(思わぬ時間が生まれてしまったな……それなら、アーリイ君に話を通しにいつてくるよ)

「わかった、ダルメンが決めたなら俺も問題ない」

(ではネムレス君、その子を頼む。調べるなら、お手柔らかにね。少なくとも、年頃の少女のようだし)

「さっさと行け」

怒鳴りたかったが、部屋の中で叫ぶと無人のダルメンの部屋に居ることがバレてしまうので声をひそめる。

ダルメンの奴、良いからかいネタが出来たと思ってないだろうな。

初対面の印象が強すぎたせいで、異性への気遣いが吹き飛んでしまったのは悪いと思うが、切羽詰まった状況なら男女は関係ないと思って欲しいものだ。

ため息をつきながら〈クロッシング〉でダルメンの視界情報を共有する。

今はエインに挨拶を交わし、アーリーの屋敷へと向かっていた。

そこは街の人々が話しかけてきたので、〈ヘイメージボイス〉を強めて集音機能を高める。

『おやダルメンさん、お出かけかい?』

「アーリー君の屋敷にね。また寄らせてもらうから、その時は美味しい野菜を頼むよ」

『こつちもいいお酒入ってるよ。また買いに来てね』

「今度はわたしの友人達も連れて来よう」

『ダルメンさんダルメンさん……』

部屋に引きこもってこの子のことを調べているのかと思つたが、予想以上にダルメンは外に出ていたようだ。

意外と言つてはなんだが、ダルメンは比較的街の住人に受け入れられていた。

見た目こそ怪しいが、社交性の高い性格とスピリット・カウンターから街を守つた実績が合わさつて大体の人と打ち解けているようだ。

良い意味でも悪い意味でも目立つと思つていたが、街の危機を救つた英雄というフィルターが良い意味で作用して何よりだ。

やがてアーリーの屋敷にたどり着くダルメンだが、突然その足を止めた。

「どうした、何かあつたか?」

「知らない相手が屋敷に居る」

## 27. 訪れた男

ダルメンの視界を共有してみれば、屋敷の入口には一人の少年が佇んでいた。

俺もダルメンも見知らぬ相手ということは、アーリイを訪ねて来た、ということか。

「ん？」

少年が金髪を揺らしながら振り返る。

年の頃は十代後半程度と伺える、中々顔立ちの整った少年だ。

外套を羽織った外見以外に特筆することはないが、車輪つきのバッグを持っているのを見るとやはり旅人というのが濃厚だろう。

ダルメンを見た少年は、その顔に警戒の色を浮かばせた。当然と言えば当然であり、慣れ親しんでいる俺が見る新鮮な反応とも言えた。

「なんだお前。一体何者だ？」

普通に考えれば、樽男という異様な存在に対しての警戒。だが俺は少年が普通の旅人でないことを悟る。

両手に集うタンクル反応、加えて接敵に対する警戒。その行動への速さといい、明らかに戦闘を知る者の動き。『普通』では習得出来ないものばかりだ。



「劍都の軍人か？」

（わからないが、もしそうなら参るね、彼女をネムレス君に預けているから普段のような力押しが難しい）

「まだ敵かはわからないし、話を続けてみよう。例の五領国の使者つて可能性もある」（了解だ）

ダルメンはそう言つて両手を上げる降参のポーズを作る。

少し呆気に取りられた少年だが、警戒は解いていない。

「見た目で警戒するのは当然だと思うが、少し話しても構わないかな？ わたし達にはせつかく口がついて言葉が交わせるのだから」

「お前口なんてねーだろー！」

「もつとも。」

「だが喋れるよ？」

「なんなんだよ、お前は……」

「わたしはダルメン。先日この街に来た旅人さ。この屋敷に住むアーリイ君、小さな賢者に会いに来た。そういう君は？」

「……………俺も同じだ。少し話を聞きたくて訪ねて来た」

好戦的ではなかったようで、警戒は解かないもののタンクルの気配は収まった。

胡乱な目をする少年に、ダルメンは子供に言い聞かせるような優しい声を発する。

「街中でツギハギを使うのはご法度だと思うよ」

「お前みたいなのを相手にしたら自然だろうが」

「悲しいことだ」

「だつたら頭のそれを取れ」

「残念だがわたしのアイデンティティのようなもので、そればかりは無理なんだ」

「だつたら毎回苦労すりゃあいい」

「毎回苦労している。……それで、入らないのかな？」

「どっかの樽に邪魔されたんだよ」

いちいち雰囲気刺々しい少年である。

警戒するなどは言えないが、少し過剰な反応にも思える。

ダルメンはそれらをそよ風のように感じているのか、相手にせず屋敷の入口のドアをノックした。

ややあつて扉が開かれると、小さな賢者ことアーリイが姿を現す。

少年がアーリイを見て少し目を丸くしているのを見ると、予想以上の幼さにびっくりしているのかもしれない。

「おや、ダルメン殿、こんにちは。そして貴方は……？」

「失礼。俺はツオカと言う者です。スピリット・カウンター事件について少しお聞きしたいことがあって参りました」

本当に知り合いだったのかと驚いていた少年、ツオカは先程までダルメンと接していた態度から一転、流暢な敬語でアーリイに用件を告げる。

子供といえ女性には真摯なのか、小さな賢者という名に對してのものなのか。どちらにせよ、何らかの目的を持ってアーリイを訪ねてきたと見える。

五領国の使者ではないってことは、別口か。いや、使者は三日後に到着するってことだし、国の代表ならもう少し礼儀正しいから違っていて当然か。

内容を聞き届けたアーリイは注意していなければ気づかない程度に、眉尻を下げた。

「ここ最近、ずっと同じ説明を繰り返しているせいか何度目かの質問に辟易しているのかも知れない。」

「そちらに関しての資料と詳細は役所へ赴けば手に入りますが……」

「訪ねたいのは、別のことです。……人払いはお願いできますか?」

「ふむ、邪魔になるならわたしは席を外すが……」

「いえ、申し訳ありませんが彼はわたし個人にも親しくさせていたでいます。誰かに内容を話すということもありませんので、同席を願いたい。この条件が飲めなければお引き取りを」

アーリイはダルメンの傍に寄ると、ぎゅつとその右手を握りしめた。突然のことに困惑するダルメン。

当然だろう、親しくないわけではないが、手を握るといった積極的な行動を取ること是一切なかつたのだから。

樽を被っているおかげで動揺が顔に出ることはなかつたが、一体どういふことかとアーリイを見ている。

俺もどうしたことだと、突然アーリイの声が部屋に割り込んだ。

(ネムレス殿、聞いておられるのでしょうか？ 何故ヘクロツシングでダルメン殿と情報共有しておられるかわかりませんが、良ければこの話に付き合っていただけませんか？)

その提案に息を呑む。

ひと目見ただけでダルメンと俺の繋がりを見破つたのもそうだが、それに安々と割り込んで構成に介入してきた技量に対しても驚きの一言だ。

アーリイは小さな賢者という二つ名をいただくに相応しいツギハギ使いであると、改めて理解する。

(あ、ああ。構わないぞ。ところでサウザナは？)

(ナツキ殿に話があるということ、ネムレス殿の部屋で何かお話中かと)

(伝言頼んだから、その件か)

(あと特訓について何か話していたような)

(そっちもか)

実際、師匠という面でも戦闘力という面でもきつとサウザナのほうがナツキには合っているような気がする。

剣術ではナツキの上を行くはずだし、ツギハギに關しても言うに及ばず。

俺自身の特訓を含んでいなければ、そうしたほうがきつとナツキのためになる。それが、少し悔しくもあり寂しくもあった。

そんな俺の頬に、ユカリスが全身を使って体をぶつけてくる。そのままひしつと掴んで離してくれないが、なんとなく慰めてくれているように思えた。

「ユカリスは人の感情の機微に聡いんだな」

苦笑しながら、ユカリスをそつと掴み逆にほつぺをつついてやる。

じたばたと暴れるユカリスだが、体格による力の差は如何ともしがたい。されるがままのユカリスに、胸に湧いた負の感情は綺麗に掃除されていた。

(———ネムレス君?)

「ん、ああ。すまん。少しぼーつとしてた」

(それは構わないが、あの子のことはしっかり見ておいてくれよ?)

言われて、少女のことを少し意識から外していたことを知る。

少し躊躇いながらも、俺は彼女の右手を両手でしっかりと握った。これで、仮に何か起きてもすぐに察知することが出来るはず。

「悪い。それで今はどうなってる？」

（提案を受けても人払いを頼んだツオカ君のお願いを聞いて、アーリイ君は客間へと向かったよ。ただ、わたしのヘクロツシングに招待したから、きつと——）

（——繋げました。ネムレス殿、視界はいかがですか？）

目の中に新たに二つの画面が生まれる。

一つ目は俺が居るダルメンの部屋、二つ目はアーリイの屋敷の玄関。そして三つ目はツオカを案内した客間である。

アーリイの介入によってヘクロツシングがさらに派生したようだ。紋具職人《マイスター》なのだからツギハギに詳しくないはずはないが、こうもあつさり干渉されるとそれはそれで己の挟持が揺らぐ。

しかも招待ということから、ダルメンがその手引をしたとも取れる。技術的なものはアーリイにしか目を向けていなかったが、ダルメンもダルメンで侮れないツギハギの使い手だと再確認する。

（わたしのツギハギの支配があつさり奪われた時も、同じ気持ちを抱いたよ）

「自分がやられると、結構くるな」

だからと言ってやめる気はないが。

(しばらくわたしは控えよう。アーリー君達の話に注意してやるといい)

「いいのか？」

(重要度で言えばそちらを優先すべきだろう。何、元より歩き回るのが今回の仕事だ。こちらはこちらで対処するので、アーリー君を見てあげてくれ。少し、あの少年のことも気になる)

「同感だ。一応、サウザナとナツキに声かけておいてもらっていいか？ 覗き見る必要はないけど、近くに居てくれて」

承った、と言ってダルメンは移動を開始する。後は任せておけばいいだろう。

俺は問題のアーリーへと意識を傾ける。

客間へ案内されたツオカは、案内されたソファアに座っていた。

紅茶を用意しようとするアーリーの手を止めたのを見ると、一刻も早く質問したいという空気を放っている。

アーリーの顔も少し訝しげだ。果たして、ツオカは何を持ち込んで来たのやら。

「それで、お話とは？」

「スピリット・カウンターは本当に貴方のリアクターで鎮圧したのですか？」

「ええ。それは事実です」

牽制のような質問。青い瞳が小さな少女を射抜く。

真実は俺がサウザナとアーリーのリアクターを融合させた剣で鎮めたが、それを知るのはあの場に居た面々だけだ。

実際アーリーのリアクターも使っているの、確かに事実である。

「つまりカケラオチを全て無効化することが出来るリアクターを作る技術を持っている、と?」

「いえ、全ては不可能です。それがまかり通るなら、スピリット・カウンターがアンネに迫ることはあっても、街の破壊を行うことは出来ません。先程のダルメンさんや他の協力者のおかげでカケラオチの勢いを削いでくれたおかげで、我々はアンネを守ることが出来ました」

「なるほど。——では、これが何なのかおわかりになりますか?」

そう言つてツオカはバッグの中から取り出したのは、細長い四角い金属の塊だった。箱のようにも見えるが、アーリーの指よりも小さい極薄のそれは何かを詰められるとは思えない。

「これは劣化リアクターですね。鉄海を基盤に呪紋で補強した紋具のようなものです」

「劣化……?」



「タンクルの集束と拡散がリアクターの主な機能ですが、そのうち拡散の機能が搭載されていない廃棄品とでも申しましようか。タンクルを集めるだけ集めて破裂させるというものです」

一瞥しただけで、アーリイはそれを劣化リアクターと評した。

驚きに目を丸くする俺とツオカ。

そんな俺達に理解させるように、アーリイは穏やかな声音で説明してくれる。

「リアクターにはチップと呼ばれるものが使われるのですが、それは前時代的な異物、一昔前に使われていたリアクターの部品です。もう一つ、集束を司る部品としての紋具と合わせた使い方をするのですが……」

こんな小さなものが、あのリアクターの根幹部分？

俺が知っているリアクターはアーリイの作品だけだが、それでも高さで言えば五ビヨンくらい大きかった。

その根つことも言うべきものがこんな小さいもので出来てるなんて……でも、そんなもの一体何に使うんだ？

「これは使う者が上手く使えば、人為的にスピリット・カウンターを発生させることができます」

胸中を読むように解説を入れるアーリイ。

故意にスピリット・カウンターを発生？

先日の自然に発生したものでじやない。なら、これはその関わりを示すものではなからうか。

「いわゆる〈ダイバー〉がよく使うものです。ハイリターンの極みなのにあの仕事がないのは、同じだけのリターンをもたらすからでしょうね」

アーリーの補足に悲しいことだ、とつぶやくツオカは本当に嘆いている。

正義感なのかモラルかのはわからないが、少なくとも善性の性根ではあるようだ。にしても〈ダイバー〉ねえ。

「わざとスピリット・カウンターを発生させて呪紋世界の技術を発掘し、成功した恩恵は計り知れないものもあります。鉄海も元はそこから知られたものですし。大半がカケラオチの群れを呼び寄せるとしても、自身に被害なく遺失なる物質を獲得出来るとなれば、特に権力者がこぞって群がるには十分です」

なるほど、あのカケラオチ達以外にも得るものが……って、俺か？

サウザナが召喚した俺も、ある意味でその成功の証みたいなものか。

……でもそんな仕事があるのなら、仲間達がもし境界領域に居たら探索がさらに困難になるな。諦めてはやらんが、苦勞しそうだ。

「〈ダイバー〉は横の広がりがなく情報もあまり回って来ないはずですが、お詳しい」

「技術屋の界限では割と聞く話です。詳しく知りたいのなら、もっと大きな都市の紋具職人に訪ねるのが良いでしょう」

「それはまたいずれ」

「……それで、貴方が本当に知りたいのは何でしょう。今の私はいつまでも前振りの話を聞くほど時間が空いているわけではないのですが」

「失礼。……先日のスピリット・カウンターにおいて、こちらの少女が『発掘』されませんでしたか？」

そう言つてツオカが見せてきたのは、四角い紙に記された美麗な絵画だった。リアルすぎて絵とは思えない。映像を直接切り取つて記しているほど鮮明だ。

「この写真は？」

「ヴァーナ、という名で私が探している人物です。アンネに來たのも、今回の発掘品を調べるためでもありました」

「ここでのスピリット・カウンターはカケラオチしか落ちて来ませんでした……失敬」  
断りを入れて写真と呼ばれる絵画を手取るアーリイ。

俺も彼女の目を通してその人物を見やり――

「……………つ!?!」

声が出なかつた自分を褒めてやりたい。

ツオカが差し出した写真に描かれていた人物——ヴァーナという少女は、今まさに俺が手を取っている、ツギハギ体の彼女のことだったからだ。

「こちらの女性は？」

「俺の親友の姉です」

「……それが何故、発掘、と？」

「貴女もリアクターを作る職人ならば、境界領域というもんをご存知でしょう？」

「はい。この世界と呪紋世界の間にあるという、狭間の世界のことですね」

「彼女は、とある事情に巻き込まれてそちらに飛ばされた可能性があるので。俺は動けない親友の代わりに、彼女を探すべく放浪をしています」

少し興奮しているのか、一息に語るツオカ。

彼の言葉が全て真実ならば、ヴァーナは俺と同じく境界領域からの帰還者ということになる。

それがどうしてダルメンの樽に入れられたのか……発掘、って言ったか。

カケラオチの群れと共に現れ、一層された後に彼女を見つけたが死体として扱われて、廃棄処分として海に流された……？

いや、死体ならわざわざ樽に入れなくても火葬なり何なり……駄目だ、過程を妄想で補うばかりで大事な情報が足りない。

「アーリイ、すまないがもう少し情報を引き出せるか？」

（それは構いませんが……）

「大事な話になりそうなんだ。頼んだ」

上手く話してくれよと思いつながら、次にダルメンへ「クロツシング」を飛ばす。

「ダルメン、緊急事態だ。さっきのツオカつて奴がお前の中に居た子の情報を持っている」

「なんだつて？」

返事は即座に帰ってきた。

俺はすぐさま事情を説明してアーリイの視界をダルメンに共有するよう言うと、彼もまたヴァーナの写真を確認したのか唸り声を上げ始めた。

「今からアーリイに頼んで情報を多く話してもらおう予定だけど、ダルメンも傍に控えていてくれ。いざとなったらヴァーナのことも話して、協力してもらおう」

「仮にヴァーナにとつての敵とも言える存在であるなら……」

「そこはダルメンに任せる。放置するなりイツタル達みたいに取り込むなり、そつちで判断してくれ」

「わかった。願わくば協力者になってくれることを——」

敵か味方かで区別するのは悲しいことだが、何もわからないことだらけな現状ではま

「ずそうやって区切りをつけるしかない。」

「そうしているうちに、アーリーは俺のお願い通りに話を引き出すべく舌を滑らせる。事情は理解しました。残念ながら彼女を見たことはありません。……ですがその一度境界領域に落とたというのなら、貴方がしていることは……」

「わかつています。それでも、諦めきれない。そうする理由がある」

「恋人だったのですか？」

「ん、ん、……違います」

少し動揺を見せるツォカ。

恋人同士ではないが、満更でもない感情を抱いていたのかな？

「親友のため、です」

「友情、それは素敵なことですね。ですがアンネにやってきたということは、このヴァーナさんという方は五領国出身なのでしょう。あの国でスピリット・カウンターが起きたことはいはざですが……」

「……………境界領域に国の境目は関係ありません」

「場所に関係なく、世界中のどこにでもカケラオチとして出る可能性がある、と？」

「〈ハイパー〉を調べたところ、自国で消失した遺物が別の国で見つかったという資料もあります。俺も調べ回りましたが、流れた可能性が高い」

境界領域は時間すら止まった世界だが、海のように流れるパターンもあるようだ。

そして、ツオカは今自国と言ったな？

ヴァーナの故郷を知るには良い機会だ、少しつついてもらおう。

「アーリイ、ツオカの国を探ってもらえるか？」

「（わかりました）……ちなみにツオカ殿の国はどちらに？」

「……スメイキュードです」

「ここから遙か東方にある大国ですね。よくぞここまで……いえ、貴方がたの国なら、移動手段は豊富でしたか」

「流石に鉄海を旅に持ち出せるほどではありません」

「ですがスメイキュード出身ならスピリット・カウンターや〈ダイバー〉に詳しいのは察せられるというもの。小言やもしれませんが、世界で最もスピリット・カウンターを起す国のほうが、件の彼女を見つけられる可能性が高いのでは？」

「三年間、探しても見つかることはなかった。だから国は親友に任せて、俺は外回りを担当しているのです」

アーリイがスメイキュードという言葉を引き出してくれたのを見計らい、俺はダルメーンに判断を聞いてみる。

「ツオカはスメイキュードつて国の出身。そこで消えたヴァーナを追って世界中を放浪

している、というのがここまでの情報だけど、ダルメンとしてはどう思う?」

(嘘は言っていないと思う。純粹に友の姉を想う気持ちが伝わってくるよ。……ただ、彼女を持ち帰った後が怖いな)

「体がツギハギになって帰って来ました、なんて研究対象にならないはずがないもんな」  
スメイキュードという国はよく知らないが、アーリイが大国というのなら相應の領土を持った国なのだろう。

そんな国が世界でも類を見ない体となったヴァーナを引き取る。どうポジティブに考えてもろくな予想が出来ない。

「なるほど、お話は理解しました。ですが申し訳ありません、今回のスピリット・カウンターにおける戦利品は一切ありません。私のリアクターは被害をなくす代わりに、カケラオチの残骸すら消してしまうので……」

「それは、また。いや街の住人からすれば素晴らしいものだろう」

そもそもカケラオチ達は何かを落とす、ということすら知らない俺からすれば、鎮圧して消えるのが自然だと思っていたよ。

「しかし……ここまで話を伺った以上、見て見ぬふりをするのも心が重い。少し私のツテを当たってみるとしましょう。この写真、いただいても?」

「……あ、ああ! 複製だから問題ない。ありがとう……感謝する」



ソファアーに身を沈めながらも、ツオカは顔を俯かせて体を震わせる。

成果こそなかったが、新たな繋がりが出来たということに無駄骨でなかったことが嬉しいのだろう。

「ツオカ殿はしばらくアンネに滞在されますか？ 情報は数日のうちに持って来れると思われれます。良ければ、知り合いの宿を紹介しますが」

「そうだな、せっかくの小さな賢者殿の好意に甘えるところでしょう」

「わかりました、では案内を……」

「いや、地図は買ってあるから場所を教えてもらえればいい」

「畏まりました……はい、こちらの場所です。湯浴みに関してはこちらですね。食べ物やお酒などの嗜好品は揃っておりますので、しばらく旅の疲れをお癒やしくください」

「感謝する。それじゃあ……」

一礼して、ツオカは退室しアーリイもまた客を見送るべく屋敷の入口へ向かう。

アーリイが示したのは俺の居るエプラッツの宿だったので、ここから接触するなり放置するなりは任せるという気遣いを感じる。

「ダルメン、ツオカにヴァーナのことを話すか？」

（ああ。わたし自身彼と直接話して確かめてみるよ）

「なら、一度宿に戻ってツオカを食事に誘うといい」

(そうしよう。……まさか、こうまでスムーズに物事が運ぶとは思わなかった。本当に、ありがとう)

「いやいや、お礼はツオカに言うべきだろう。俺は何もしてないし」

(機会は紛れもなく君からだ。一度そっちに戻る)

了解、と告げて今度はツオカを見送っているアーリイへと言葉を投げた。

## 28. ツギハギ少女の異変

「アーリイ、急な話でも対応してくれて助かったよ」

（私は構いませんが……ツォカ殿が何か？）

「あの写真の子、実はダルメンが保護してるんだ」

（なんと……）

「でも、事情があつてあいつが敵か味方かを判断する必要があつたんだ。ダルメンはこれから直接話して人柄を確かめるつて言つてたけど、アーリイも直接顔を合わせた感触としてはどうだ？」

私見も含みますが、とアーリイは前置きする。

構わないと言つてやれば、彼女はそれではと続けた。

（個人で信頼出来たとしても、もしミュン殿達のように何者かの指示によつて動いているのなら厳しいかと思われます。スメイキユードは剣都に次ぐ大国故、そんなところから探されている、など良い考えは浮かびません。国の王族が行方不明なら私の耳にも入るでしょうが、今のスメイキユードでそういったことは聞きませんからね）

「ちなみにスメイキユードつてどんな国なんだ？ 世界で一番スピリット・カウンター

が発生する国ってことだけだ……」

（言葉通りです。劣化リアクターを用いて人為的にスピリット・カウンターを引き起こすことを国家運営で行っているのです。何せ鉄海を最初に発見して流用した国ですからね。あの国はスピリット・カウンターによって成り立っていると云っても過言ではありません。そのためカケラオチの駆逐も完全には至らず、逃した者達が独自に縄張りを持っている唯一の国でもあります。批判と恩恵も多い、中々に難儀な国ですよ）

最初に鉄海を発掘してその有用性を示した国、か。

詳細を聞けば、最初のスピリット・カウンターによって大量のカケラオチが国になだれ込み、鉄で出来た海によって国が沈んだという。

しかしそんな中でもたくましく復旧した国は、鉄の海から発掘した遺物……鉄海《マシン》が紋具のように機能を持った道具であることに気づいた。

復旧と同時に鉄海を選別し調べつくしてその技術の一部を再現するなど、その恩恵を大いに活用しているらしい。

（剣獣《ゴレム》も元は彼の国が作った兵器の一つ。今では《幻獣》《スペルゴースト》やカケラオチのような生物を鉄海によって再現する技術力を有しているとか。鉄海の技術や知識に関しては、剣都を遥かに上回る世界有数の国です。空を飛ぶ船も鉄海から引き取った、とされておりすな）

「ツオカがただの一般人なら何ら問題ない話なんだが……アーリーの目にはどう映った？」

（戦いの訓練を積んだ『騎士』の雰囲気を感じました。国に仕えているのか、元がつく退役騎士かはわかりませんが、仮に私があそこでツギハギを使つてもすぐに対処出来たでしょう）

「同感。佇まいに隙がなかったしな。少なくともアーリーの屋敷へ行ける時点で、ツギハギに心得はあるってことだ。国の騎士だとしたら……やっぱり上の指示で探してることだよなあ。カケラオチが常に徘徊してるなら、強そうなのを国が放っておく理由なんてないし」

（ヴァーナ殿がどういう方なのかは、存じておられるので？）

「いや、ダルメンも拾っただけで正体を探っていたところだ。早速判明するとは思わなかったみたいだな」

（彼女がただの一般人で、ツオカ殿もただの騎士であることを期待……というのは夢の見すぎですかな）

「信じたいけど、なあ」

行方不明の親友の姉を探してやってきた、という単純な話なら素直に祝福出来た。

ヴァーナ自身が普通の少女であつたなら、本人の口から直接聞いて俺はツオカに彼女

を引き渡すようダルメンに言っただろう。

だが、違うのだ。

ヴァーナという少女は『ただの』女の子ではない。

言葉を発さず静かに眠る、体がツギハギで構成された〈幻獣〉に親しい少女である。そんな子を探す大国の人間……考えを巡らせるなどというほうが難しい。

(ネムレス殿、もし良ければ私に――)

台詞の途中で、アーリーの言葉が途切れる。

何かあったかと声をかけても、帰ってくる声はなかった。

どうしたんだと思っていると、頬に何かがぶつかつた。ユカリスがいきなり抱きついてきたのだ。

今度は何だと思えば、紡いだ糸が断ち切られるように〈クロツシング〉が解除されていた。

「……………え？」

疑念はすぐに晴れる。いや、強制的に晴らされる。

先程ユカリスが体に乗っていたはずのツギハギの少女、ヴァーナがその双眸を見開き俺を見上げていた。ユカリスは彼女に驚いて俺に助けを求めてきたということか。

その深淵を直接覗くような虚無の瞳に動揺するが、それ以上に彼女が目を開いたとい

う事実が恐怖を上書きする。

「お前……いやヴァーナ。起きた、のか？ どうしてこのタイミングで？」

返事はない。

ただ、開いた目と俺の目が会う。

繋いだ手を離そうとするが、離れない。

遮るものなどないというのに、見えない鎖でがんじがらめにされているかのよう、俺の手は不動だった。

「くっ、なんだこれ……おい、離してくれ！」

力が強いわけではない。ツギハギを使っている様子もない。なのに、振り払うことが出来なかった。

どうしてこうなった？ きっかけがわからない。ヴァーナがこうなる要素なんて覚えがない。

けれどそれを考えるのは後、今はとにかくこの手を解いてダルメンの元へ行くべきだ。

ツオカもこの宿へ向かっている。騒ぎを起こせば、確認をする前に見つかってしまう。

「痛っ………っつておいおいおい！」

痛む場所に目を向けてみると、動揺が最高潮を迎えた。

握られた手から激痛が走ったかと思えば、彼女と重なっていた手が肌と肌を縫い付けるように俺と一体化を始めているのだ。

それ以上に暴力的なタンクルが俺の体に入り込んでくる。肉体的な接触ではなく、タンクルからの干渉も合わせて物理と精神二つの要素が絡まった融合とも言える現象。

しかも、俺がヴァーナと合体するのではなく、ヴァーナに俺が取り込まれるような感覚だ。

このままでは逆ダルメン現象、ヴァーナの中に俺が居るという結果になってしまうかもしれない。

それを察したのか、痛がる俺を心配したのかユカリスが接地面をなんとか剥がそうと小さな小さな体に力を込めているが、蟻が巨岩を押しているかの如く当然のようにびくともしない。

「ユカリス、やめろ！ お前まで巻き込まれる！」

ユカリスや自分のことも心配だが、溢れ出るタンクルがかつてなく街のリアクターを刺激する。

一週間と経たずに二度目のスピリット・カウンターが発生するなんてごめんだ。

少し強引だが、力づくで引き離すしかない。



だから俺は即座にツギハギでヴァーナと自分を引き剥がそうとして……その絶望的なまでの難易度にほんの少し白目を剥きそうになった。

例えるなら、海の水をコップで少しずつ出して量を減らすようなもの、と言えればいいか。

彼女を構成するタンクルの密度に、俺のツギハギ解体の速度が一向に間に合っていない。

様々な考えが浮かんでは消え、やがて一つの単語だけが浮かんだ。

俺は躊躇なくその単語——愛剣の名を叫んだ。

「サウ、ザナア！」

『はい』

〈クロツシング〉もない状況で、ただ感情の赴くままに叫んだ名前は、呑気な声と共に応えられた。

ユカリスの前に呪紋が浮かび上がり、彼女の姿が消え失せる。入れ替わるようにそこから折れた刃先……サウザナが飛び出し、俺とヴァーナの重なっていた手に突き刺さった。

折れているといえ剣が刺さったというのに、その箇所には痛みはない。

むしろ負担が軽くなったように……って、剥がれた！

その勢いでベッドが軋み、そこに眠っていたヴァーナもころんと床に転がった。

重さはないので音を響かせることはなかったが、代わりに俺の荒い息遣いが部室中を支配していた。

『やつほうネムレス。なんかおかしなことになってるみたいね』

「あ、ああ……助かったよ、サウザナ。でも、どうしてここに？」

『ネムレスの体にかけてたツギハギが消えたからどうしたものかと思ってたんだけどね。ユカリスと一緒に居るだろうから、彼女を座標の起点にして場所を入れ替えたの。ユカリスのことはナツキに頼んでるから安心して』

本当に頼りになる愛剣である。

入れ替えとはいえ空間転移まで可能にする辺り、こいつに出来ないことのほうが少ないな。

『あーでも、すぐこの辺のヒビは直しておかないとね。また境界領域に繋がっちゃうわ』  
ふわりと浮かび上がったサウザナは、部屋の中空で止まったかと思えば青白い光を発して何やらツギハギを使っている。

一瞥しただけではわからない、複雑な構成のものだ。ヒビを塞ぐという言葉からして、先程のリアクターの許容量に迫るタンクル漏れを修繕しているのだと察する。

『それで、一体何があったの？』

「この子、ヴァーナが目を開けたんだ。そして……俺を、取り込もうとした」  
『へえ』

サウザナは簡潔につぶやく。

空返事のようにも聞こえるその二文字の中に凝縮された感情が詰まっているのを感じながら、サウザナの柄を撫でてやる。

「気にするなどは言わんが、抑えてくれ。まだ何もわからない状態だからな。故意だったその時は謝らせればいい」

『今すぐ起こせばいいかしら』

「出来るのか？」

『この子が正常に起きるかは保証しないとけどね』

「ならやめてくれ。あと同じこと起きたら頼んだ」

残念、と本当に惜しそうなサウザナに呆れながら、床に転がったヴァーナをベッドに戻すべく持ち上げる。

あの一体化現象は起こらない。そのことに安堵し、彼女を再びベッドへと戻した。

『ちよつと！ 見ててハラハラするんですけど？』

「サウザナならなんとかしてくるって信頼だよ」

『悔しいわ、怒るべきなのに嬉しくなっちゃう！』

「でも実際、ヴァーナに何が起きているのかは把握しないと駄目だ。特に、今はツオカもいるしな」

原因は不明だが、彼女は俺を取り込もうとしていた。

食料としてみなしたのか、単純に吸収しようとしていたのか。どちらにせよ、ツオカに渡せない理由が増えた。

今のままでと、どっちでもろくなことにはならない。

『とりあえず原因を探してみましよう』

「心当たりはないんだが……」

「突然ってことは、ヴァーナに何かしたってことよ。ネムレスは今日、この子に何をしたの？」

「……思い返せば、ダルメンを仲介せずに直接〈欠片文字〉で〈理に潜む理〉と〈クロツシング〉を刻んだ」

『思い切り心当たりあるんじゃない』

ぐうの音も出なかった。

『まさかツギハギを使うだけで影響を受けるなんてね』

「せっかく〈理に潜む理〉を文字化してもらったのに、悪い」

『いやーこれは予想出来ないって』

「お前にもか?」

『神様じゃないんだから、そりや私にだってわからないことはあるわよ。興味ないことは調べなかつたもん』

少し意外な気もするが、全能というわけでないことに少しだけ気持ちが楽になる。

本当に完璧なら、俺が持つてる意味なんて何一つないからな。

自分が持つなら、何かしらサウザナの助けになりたいというのが持ち手のプライドだ。

「アーリイにも意見を求めよう。サウザナ、屋敷までさっきの転移みたいなことできるか?」

『出来なくはないけど、やめたほうがいいんじゃない? 〈欠片文字〉の影響を受けたのなら、ツギハギを使ってこの子を運ぼうとしたら同じことの繰り返しになるかも』

「……担いでいくしかないのか。そうなるとダルメン待ちだな。今にして思えば、あいつが識世化したのって本当にこの子のため、って気がするな」

タンクルの影響を受けずに体を隠し、なおかつ自律的に自分を守る盾にして鎧——壁にして樽かな?——となるダルメンの存在は、彼女の特性を知った今なくてはならないものだ。

となると、ダルメンを識世にしたのはヴァーナ、ということになるのだろうか?

『考えても仕方ないって。今はダルメンを待ちましょう』

「そうだな。ツオカを見定めに行くとは言ってたけど、ヘクロツシンググが切れてるから一度部屋には来るはずだ。それまで見張りを兼ねて部屋で待機だな」

『私も念のためここにいるわね。タンクルを使わずに調べるのは不便だけど、構成の把握くらいはしておきましょう』

「助かる。この子の構成、海みたいにかいからな」

そうして俺達はヴァーナの監視と調査を行いながらダルメンの帰宅を待ち続けた。

だが俺達の希望もむなしく、ダルメンは夜になっても部屋に戻ってくることはなかった。

## 29. 月下双刃

遅い、と言葉にするのは何度目のことか。

あれから日も暮れて夜の帳が下つてもダルメンが部屋に戻ることはなかった。

話が盛り上がっているのかと食堂へ向かつてもひと目見てわかる樽男の姿を見つめることは出来ず、ツオカの姿も確認できなかった。

〈クロツシング〉が切れているのでこちらからの連絡も無理だ。

やむなくサウザナに頼んで分身体を作ってもらい、それを目として飛ばしてもらったのだが、まだ見つかっていない。一体どこをほつつき歩いているのやら。

サウザナがヴァーナの構成を調べる傍ら、俺はナツキの件をふと思い出した。

「サウザナは分身体で誰かの動きって出来るか？」

『というところ？』

「ナツキとの訓練で改めて考えたんだけど、ナツキの技量を再現した剣の分身を作ってるんだ。剣の軍勢とまではいかないけど、三つ四つの規模でもあいつの剣術が再現出来るならかなりの戦力になると思ってな」

『出来なくはないけど、抜剣すれば済むしナツキが四人いようが十人いようが意味ない

わよ?』

「それに繋げるためだよ。ウインズノアとあのラシンってやつとか、ルシフェヴとか、色々な抜剣を同時に起動させるための前準備みたいなものだ」

『ネムレスがやってくれた融合剣じゃ駄目なの?』

「手数を求める場合はな。スピリット・カウンター相手ならそういうの欲しいだろ。防衛戦ならともかく、目的を考えれば外に出た時の対処が欲しい」

『リ・アルフェヴは実物あつてこそだものね。でも言っちゃあれだけど、スピリット・カウンターをしのぐだけなら現状でも問題ないわよ。先日あれだつて、ラシンを使えば問題なかったわ』

とんだだけだよ。

『一応あれ、硬くて強いっていう汎用性を突き詰めた形態だからね。街を守るとか、そういうのでなければ気を回す必要ないって』

「……制御をもっと上達させるためには続けるよ」

『まあまあ拗ねない拗ねない。ネムレスが言った、いわゆる達人の技量を持った分身は作れるかつて答えならイエス。でも今のネムレスじゃ厳しいと思う。あくまで操るのはネムレスだもの。剣術じゃあナツキのほうが上だし、むしろそのツギハギはナツキに覚えさせたほうが強いわ』



「普通に考えれば、ナツキが五人くらいに増えるようなものだしな」

『そそ。だから剣の隊列を作りたいって案なら、抜剣の同時起動後はただその力を振るうだけで強いわ。そこに至高の剣技は必要ない。いわゆるぶっばってやつよ』

「昔は同じ技量型なのに、いつの間にかパワー型になったんだな」

『お互い足りない部分を補える、最高の関係じゃない?』

「そういうことにしておく」

『そーゆーことなんです』

ひとしきり笑い、気持ち切り替える。

念のためサウザナにもう一つ分身体を作ってもらい、それを屋敷へ飛ばしてもらおう。

ここまで来たらナツキ達にも協力を要請しよう。

二人にもダルメンを探してもらうか、ヴァーナを隠せるものでも持つて来てもらい――

「ダルメンさん、いらっしやいますか?」

突然、部屋の扉がノックされる。

即座にヴァーナの近くに移動しつつ、まずは居留守を試みた。

「ダルメンさん、エインです。夕飯をどうするか伺いに来たのですが……」

どうやら来客はエインのようだ。

ダルメンの食事の有無はこうして確認されているのか、と一つ覚えながら居留守を続

行すると、部屋にいないと察したのか沈黙が続く。

ひとまず息をついて安堵するが、なんと鍵穴に鍵が差し込まれる音がした。

俺は即座にサウザナに目を配り、動いた。

「失礼しまーす。今のうちに明かりの交換を……って、窓開けっ放し。ダルメンさんにしては珍しいなあ。今日の夕飯時に明かりの交換で部屋に入るって言ったの忘れたのかなあ。それとも、来るから任せておこうとも思ったのかも」

辛くもヴァーナを抱えて屋根の上へと避難すると、そんな台詞が部屋の中から聞こえてきた。

どうも事前に入室来ることが決められていたようで、俺にとっては不幸な情報の行き違いである。

「サウザナ、シートか何かあるか？ 夜といえ、今日は瞳月も見開きに近いから見える奴には見える」

『ほいほい。あとネムレス、貴方もちよつとこれ着ておいて』

言われて、フード付きの外套を渡される。

顔を隠して少女を運ぶとか不審者みたいだな、と思いながら俺はその外套を着込む。もちろんヴァーナにも忘れない。

屋根の上に佇んでいると、空気の涼しさと人気のなさを覚える。

特に人気のなさは異様なほどだ。

普段は食堂から聞こえてくるであろう賑やかな声も今は途絶えており、気のせいかもしれない。少しも少ないように見えた。

まるでゴーストタウンの装いとなっているアンネに、戸惑いを隠せないでいた。

「どういうことだ……？」

『ああ、瞳月も見開きに近いもんね。ネムレス、世界融合の影響で夜には人は出歩かないようになってきているの』

「なんだと？」

『ゲイズの呪いとも言われててね。今の世界は、夜になると蒼い月光が注ぐようになってね。それを浴び続けると、体に変質して人間ではなくなってしまうのよ』

「はあ!？」

初耳も初耳、そんな恐ろしい情報初めてきいたぞ!？」

気をつけて見てみれば、うつすらと光の中に蒼さが混じっているような……

『肌を隠せば問題ないわ。ただ、直射月光を浴び続けると、まず肌が硬化して鱗のように変質していく。終いにはカケラオチのように、完全なる人外へと遂げてしまう。けど、その分体は強くなってタンクルも増すから、当然のように一部の権力者に目をつけられた』

ため息をつくように、呆れる声のサウザナ。

『肉体だけが変貌しても思考は残つちやうから、奴隷とかをそういう風に変えて己の兵にする権力者もたくさんいた。もちろん、そういうのに対する反抗行組織も同じくらい居るけどね』

突然すぎるカミングアウトに驚きを通り超えて呆れてしまう。

目覚めて一ヶ月経っていないといえ、そういうのはもつと早めに教えて欲しい。

『逆にそれが月の恩恵とか抜かす輩もいて、あえて月光を浴びて変身するのも多いわね。もちろん、変質のデメリットをなんとか解消しようとする学者も多かったみたいだけども』

「いやサウザナ、説明はありがたいけどその辺でいい。外に出てしまった以上、人気もななことだしこのままアーリーの所へ行こう」

『おつとごめんさい。知らないことが多いし、わからないことがあつたら逐一説明するつもりでいたから』

「今は最低限でいいさ。優先事項は、ヴァーナのほうが先だしな」

音を経て屋根の上を伝って走る。

屋根が途切れれば、ウインズノア化したサウザナへ乗ってヴァーナを両腕に抱え直す。

夜空を切り裂く剣は屋敷へと疾走しそう時間も経たずにたどり着く——はずだった。異変を感じたのは、屋敷が立つ湖の手前まで来たところだった。

サウザナが音もなく飛行を止め、俺も習うようにヴァーナを左手に抱えて右手はサウザナを握った。

足裏にツギハギによる足場をへ付与させて水面に立ち上がる。

青い月光が降り注ぐ夜の下、俺は目の前に佇む人物を睨めつけた。

「

言葉を口にしようとして、それが音を立てないことに目を見開く。

明らかに異常な無音。タンクルを感知してみれば、周囲にツギハギによる結界が敷かれていることに気づいた。

即座にサウザナは独自に動くよう指示。ヴァーナを抱えている以上、俺だけでこの異常事態を切り抜けられるとは思えない。

先に居る何者かは、それほどの強さを持っていた。

瞬間、飛来した何かとサウザナがぶつかり合う。

金属同士が触れ合い火花が散ると同時、湖を割る水飛沫が上がる。しかしそこに音はなく、何の異常も周辺に伝えることをしない。

吹き飛ばされた俺にダメージはない。サウザナが全て勢いを殺しているのだ。

『この子強い。手慣れた相手よ』

少し声の硬いサウザナが相手の脅威を伝える。

サウザナをして強いと言わしめる相手を見ようとしますが、霧がかかったように相手の姿を認識することが出来ない。

顔を隠した様子はないというのに、対象を目の中に映せなかった。

(この結界、認識阻害のツギハギも兼ねているようね。まずこっちから——)

サウザナの言葉が止められる。

勝手に動く俺の右手が何かの迎撃を続けている。

ナツキの剣を超える速度と威力を秘めているであろう連撃を、サウザナは巧みに捌き続けながら俺に念を飛ばした。

(ネムレス、結界破壊をお願い。私はちよつとこっちで手一杯になりそう)

(わかった)

下手に攻めることも出来ない現状、何よりこの結界に使われるタンクルがヴァーナに悪影響を及ぼす可能性もあった。

ならばその懸念をなくすことが先け——

(飛ぶわよ!)

(つとお!?)

ぐんつ、と右手が空へと持ち上がる。

ウインズノア化による影響で空へと舞い上がったのだ。

咄嗟に姿勢を直すが敵の攻撃は止まらない。

時折ヴァーナ狙いの一撃もあるが、サウザナはそれすらも上手く防いでくれた。

今のうちにっ！

まずは結界の構成を把握したい。

(サウザナ、風を飛ばしてくれ。威力より範囲広めで壁に当たったら跳ね返すように)

(りょーかい！)

(一緒に〈プログラムギアス〉！)

振るわれる右手から颯風が吹き結ぶ。

一瞬だけ相手の攻撃が止んだのを見ると、手を止めることに成功したらしい。

その怯みを狙い、俺は風を通して敵の結界を知覚する。

結界に跳ね返って反響する風は、音波による〈マツピング〉の風版と言ったところか。

壁に当たっては跳ね返り縦横無尽に結界内に吹く風は、俺に結界の広さと場所を教え

てくれる。

(サウザナ、そこから後方。そこが一番近い)

(お任せっ！)

ウインズノアによる高速移動で結界の壁へ殺到する。

ヴァーナを抱えているので行儀が悪いが、蹴つて壁に足をつけた。

(……〈距離〉〈範囲〉〈沈黙〉〈誤認〉……使われている素材の割に高性能。これは相手の技量を示す。けど、ただスベックで押しているだけなら——俺とサウザナに解けないはずもない)

俺の意図を察し、サウザナがひととき巨大な竜巻を生み出す。

ダルメンに渡した〈穿つ羽〉を飲み込めるほどに巨大な竜巻は、湖の水を巻き上げ正体不明の敵も飲み込んでいく。

その合間を狙い、俺はサウザナに〈相殺〉の素材を与えて結界に刃を突き刺した。

ビシ、と結界に亀裂が生じる。

(おまけにもいつちよ！)

〈相殺〉によつて相手のツギハギを打ち消す効果を得たサウザナは、さらにウインズノアによる竜巻をもう一つ発生させる。

こうすることで、亀裂の入った壁を無理やり押し広げるのだ。

「……だっ！」

結界を構成していたタンクルが霧散する。

それを証明するように、声を出すことが出来た。



これで相手の姿も見え——

「つつお!」

振り向いた先より、光る小さな何かが飛来する。

それはウインズノアが起こした風によって全て払われたが、空隙を縫うように喉元へ鈍い光を放つ刃が迫っていた。

それをサウザナが剣の腹で防ぐ。

ここで初めて、俺は襲撃者の顔を拝むことが出来た。

「——女の子?」

月光を浴びているせいか、蒼銀に煌めく髪が揺れる。

真紅の瞳に感情は移しておらず、虚無を感じさせるような双眸はただ相手への無関心を伺わせていた。

闇夜に溶け込むような黒い衣の胸元を大きく押し上げる膨らみは女性の体軀を示しており、先程まで俺達を攻撃していたであろう武器はその手に何も握られていない。

（無手? なら、今サウザナが罅迫り合いをしているのは……）」

少女の背に細かな光が宿る。

それは翼。

片翼のみで、羽根の一つ一つが金属片で出来ている特異な翼。

その羽先が、サウザナと押し合いをしている武器の正体だった。羽根が揺れる。

俺には視認出来ないスピードで迫るそれを、サウザナが弾くのを見やり守備は問題ないと悟る。

だが攻撃にも転じられない。ヴァーナを抱えているうえに彼女にタンクルを触れさせてはいけない以上、サウザナは防ぐので手一杯になる。

それでもサウザナならヴァーナも合わせて守りきつてくれると信じて、俺は少女に殺到した。

代わりに攻撃する俺にも動揺を見せず、少女は迎撃の構えを見せる。

生み出されたタンクル弾、その数およそ三十を展開し俺に向けられる。武器一辺倒じゃないんだな、と思いつながら俺は同数のタンクル弾を展開、その全てを相殺させる。

威力が足りないかと判断したのか、今度は翼から羽根を複数射出する。手始めに〈雷道〉を加えたタンクル弾で羽根を撃ち落とそうとするが、逆に貫かれて意味をなさない。

真正面からは無理だと判断した俺はさっきの倍、六十ほどのタンクル弾を生成。その全てを羽根の横から軌道をずらすように叩きつける。

射出された羽根は六つだが、こちらはその十倍の数を以て直撃を避けられた。

性能は単純計算十倍かとぞつとしながらも、正面からのツギハギは即座に諦める、

間合いが近づいたことで、今度は翼刃で仕留めようとしてくるがそれは全てサウザナが対処。

そうして少女の眼前までたどり着いた俺は水の上を歩く足場に〈爆発〉〈範囲〉を〈付与〉し、思い切り水面を踏み込んだ。

応じるように足元から水柱が立ち上がり少女の視界を塞ぐ。

湖の一部を吹き飛ばし、生まれた穴の中へ〈雷道〉で移動、水が戻る頃には俺達は湖の中へと潜り込む。

〈水操作〉〈空気作成〉〈範囲〉の素材で作った膜を体にまとわせ、水中での行動を可能にする。ヴァーナの周辺には彼女に〈付与〉させないよう気をつけながら、空気の入った泡を展開して保護した。

自由になった体で水の底へとたどり着き、〈マッピング〉を展開しながらサウザナを一度折れた剣へと戻す。

「抜剣、ザイレーン」

サウザナのアクターが刀身を包み込む。

エメラルドグリーンを想起させる翡翠の刀身で上書きされたサウザナを握りしめ、〈マッピング〉で位置を掴んだ少女へ目掛けてその力を解放する。

湖の一部が盛り上がり、包み込むように少女を捕える。水の牢獄と言つても差し支え

ないそれは表面に呪紋の網が刻まれ、拘束の強化を施していた。

今回の抜剣は水の操作に優れた剣だ。

氷も同様に操れるので、言うなれば冷剣ザイレーンと言ったところか。

ウインズノアのように元素を司るほどの上等なものではないが、強すぎるとヴァーナへの影響も考えてられる。

しかしサウザナのアバターだけあって、その辺の紋具が裸足で逃げ出す性能を秘めている抜剣だ。

少女の拘束を確認すると、俺はゆっくりと湖面へ浮かぶ。

水上へたどり着いて俺とヴァーナへかけたツギハギを解くと、ザイレーンをその牢獄へ刺す。扉に鍵をかけるように、水牢は最早脱出不可能の檻となる。

サウザナで補強されたなら、それはダルメンでも力づくで破るのは難しい。

戦闘の終わりを示すように水面は穏やかに揺れて風の音を響かせる。

油断なく構えながら、俺はゆっくりと息を吐いた。

「まったく、一体何者だこいつ。また剣都の軍人か？」

『さてね。それはこれからじっくり考えればいいわよ』

「それもそうか。とりあえず俺はヴァーナを屋敷へ連れて行くから、その間……」

『!? ネムレス、私を早く取って!』

脳が言葉を理解するより早く、手がサウザナを握った。

瞬時にサウザナは刀身を構える。まるで、攻撃から身を守るように——ぐっ！

サウザナを通して伝わる衝撃が俺の体を吹き飛ばす。

なんとか体勢を整えて水面に立つと、脱出不可能と断じた水牢から羽先が伸びていった。

……マジかよ、あれを破ったのか？

胸中に答えるように、翼がもがくように水牢を軋ませ、やがて一部が崩れ落ちた。

ゆつくりとそこから出てくる片翼の少女。

だが、そこには薄ら笑いを浮かべるように口元を歪めていた。

「貴方、すごい」

第一声は、何の変哲もないただの少女の声だった。

ややダウナー気味ではあるものの、リザーベルのように魔性の声を持っているわけでもなく声そのものが優れているわけでもない。

だというのに、その気怠げに聞こえる声は俺の耳元でささやかれているように強烈な印象を残す。

「もつと、けろっ」

その宣言は、遊びを心待ちにするようなひどく幼気で、純粋な喜びに満ちている。

先の攻防全てが、少女にとつては遊びのようでいて、今は新しいおもちゃに喜ぶ子供のような歓喜がそこにあった。

『体はともかく頭を隠してないのに変貌してないってことは、月光の力を取り入れているのかしら。だとすれば水牢が破られたのも納得』

「そんな手段あるのか？」

『確立させたんでしょね。あの翼が怪しいけど……』

少女の顔はフードかマスクといったもので隠されておらず、その名のある彫刻家になられたような整った容姿を映し出している。

もちろん月光を浴びてすぐに変質するのではないのだろうが、それでも隠す素振りすら見せないということは、隠す必要がないと伺える。

方法はわからないが、その月光のデメリットが彼女には適用されていないのだろう。そして加減から解放された少女の相手をするということは、屋敷への到着を不可能と  
していた。

『今のザイレーンじゃ抑えるのは無理ね。もう少し強いのは使えばいけそうだけど』

「ラシンとかここで使ったら被害がやばすぎる。ヴァーナも居るし、もう攻撃は無理だ。……直前まで来て惜しいけど、一度ヴァーナをどこかに隠さないと」

とはいえ、眼前の少女がそれを容易く許してくれるとは思えない。

少女の戦力は未来で出会った中では一番の強さだ。

ダルメンよりもおそろく上。水牢を破ったのがその証明だ。

無手といえ攻撃手段が翼しか持っていない、ということもないだろう。タンクル弾を使うということは他のツギハギにも覚えがあるということ。

アクターかアバターか、それとも剣獣でも持つているのか、別の何か加わるはずだ。ヴァーナを手放さない限り、彼女に対処する方法はない。

かといってヴァーナを見捨てるつもりもないので、ある意味で手詰まりだ。ならばひとまず引くのが一番だが、それも難しそうだ。

少女の発するタンクルが高まる。

ツギハギが来るか、とサウザナを構えてヴァーナを抱え直した。

呼応するように少女が水上を走って迫り——その姿をかき消した。

「へ理に潜む理」か!？」

咄嗟にへストレッドを全方位に展開。

いくら消えようがそこに居るとわかって以上、この包囲網で消えた部分に存在するのは隠せない。

水面と空中に蜘蛛の巣のようなタンクルの糸を練り上げ、来るべき攻撃に備える俺達だったが……いつまで経っても少女からの攻撃は来なかった。

どういふことだ、と眉をひそめる俺に背後から声がかけられた。

「ネムレス殿、ご無事ですか!？」

声の主はアーリイだった。

全身に外套を羽織り、蒼い光への対策をして外へ出ていた彼女は俺を見るなり慌てた様子で駆け寄ってきた。

「アーリイ?」

「外でネムレス殿が戦っていることに気づき、見守っていたのですが……あの水の檻から抜けた所、相当に危険な相手と思いリアクターで相手を飛ばしました」

「ああ、そっか。ベルソーアの鉄海を取り出したあの機能……」

「はい。街の外になってしまいましたが、見たところ見知らぬお方を抱えておられたので、仕切り直しの時間は必要かと思ひ……勝手な判断を申し訳ありません」

「いやいや、謝る必要なんて全くない。助かった」

「そう言っていただけなら、恐縮です」

ひとまず、あの少女は街の外へと飛ばされた、か。

あの楽しい表情を思い出し、おあずけを食らった子供の相手は面倒なことになりそうだと顔をしかめながら、俺達はアーリイと共に屋敷へと歩いていった。